昭和二年八月一日發行（毎月一回一日發行）

THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

第四十二年　第八號　第四百七十五號

[illegible]華々しく開店致しましたが、サーヴ[illegible]の白眉と御評判を賜つて居ります。又最[illegible]東洋一の称を頂き、東京の一名所として[illegible]に必ず一度は御来店下さいます有様で御座います。

こ[illegible]られた大理石は鏡のやうに麗々しく、一階から八階に[illegible]にもあり、大天井から日光の流込む五色のステ[illegible]ねばならない程で、東洋一の名に背かぬもので[illegible]います。

こ[illegible]国的に吉例の為め右の大ホールをパッ[illegible]います。構図の面白さと人物の気品には[illegible]四寸五分、長さ四尺八寸と云ふ長形[illegible]恐らく我国ポースター界の一革命と自[illegible]ります。



石龍子著

性相講話

（参版）
圖面五枚入
四六判總布函入
定價貳圓
郵税十錢

『人は見かけに由らぬ』と言ふのは其術を心得ないからの事で、『人は見かけ通りのもの』人の正邪、賢愚、雅俗、生涯の運不運等は悉く其容貌、肢體に顯はれてゐるとは觀相家の言ふ所である。古來支那日本では觀相術として西洋ではフレノロジーとして其學は綿々傳はつて今日は既に其科學的價値が着々實證せられてゐる。此書は本邦斯學の權威石龍子先生の自ら言はるゝ『何人にもわかる種あかし』である。また附錄として德川時代の名著に先生の解説を加へたる『骨法秘訣疏釋』がある。

・全・三・卷・完・成

獨逸
ショーペンハウヱル著
增富平藏譯

宇宙及人生

本書は獨逸の大哲學者ショーペンハウエルの主著『意思及び心識としての世界』の逐字的口語譯である、原著はニィチヱも『一週日の間、一時に寢ね、六時に起きて一千ページを讀破した』といつた位深淵の思想と無限の興味とを兼ね具ふる點に於て有ゆる哲學書中の白眉を以て目さるゝ世界的名著である。

全三卷、紙數二千五百二十餘頁、四六判九ポイント組、總布製、函入

上卷　四圓五十錢
中下卷　各四圓
郵税　各十八錢

著者　譯者　同前

新刊 **因果論**（原名「根據の原理」）貳圓參拾錢 郵税十錢

八版 **處世哲學** 貳圓八拾錢 郵税十二錢

三版 **人世達觀** 貳圓七拾錢 郵税十二錢

三版 **ショーペンハウエル隨想錄** 貳圓六拾錢 郵税十二錢

東京本郷西片町
玄黃社
電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

岩波文庫

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

古今東西の典籍

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇稱する全集がその編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し、從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多きこの事業に敢て當らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうるはしき協同を期待する。

◇自由選擇の普及版

第一回發表刊行書目（二十一種 三十部）

新訓 萬葉集	佐佐木信綱編	★★★★★★
こゝろ	夏目漱石著	★★
プラトン ソクラテスの辯明 クリトン	久保勉・阿部次郎譯	★
カント 實踐理性批判	波多野精一・宮本和吉譯	★★
古事記	幸田成友校訂	★
藤村詩抄	島崎藤村自選	★★
スミス 國富論 上卷	氣賀勘重譯	★★★★★
にごりえ たけくらべ	樋口一葉著	★
國性爺合戰 鑓の權三重帷子	近松門左衛門作 和田萬吉校訂	★
戰爭と平和（第一卷）	トルストイ作 米川正夫譯	★★★★★
芭蕉七部集	伊藤松宇校訂	★★★
五重塔	幸田露伴著	★
病牀六尺	正岡子規著	★★
父	ストリントベルク作 小宮豐隆譯	★
出家とその弟子	倉田百三著	★★
愛の國	[illegible]	★
幸福者	武者小路實篤著	★★
號外（全六號）	國木田獨歩著	★
科學の價値	ポアンカレ作 田邊元譯	★★
認識の對象	リッケルト作 山內得立譯	★★★
おらが春 我春集	一茶作 荻原井泉水校訂	★
北村透谷集	島崎藤村編	★★
賢者ナータン	レッシング作 大庭米治郎譯	★★
春の目ざめ	ヴェデキント作 野上豐一郎譯	★
令孃ユリエ	ストリントベルク作 茅野蕭々譯	★
曾我會稽山 心中天の網島	近松門左衛門作 和田萬吉校訂	★
闇の力	トルストイ作 米川正夫譯	★
仰臥漫錄	正岡子規著	★★
科學と方法	ポアンカレ著 吉田洋一譯	★★★
伯父ワーニャ	チエーホフ作 米川正夫譯	★
生ける屍	トルストイ作 米川正夫譯	★

□此文庫は普及を第一義として發行する廉價版です。
□內容の嚴選 裝釘の優美 購求の自由が此文庫の使命です。
□携帶に至便、常にポケットに收め、車中に繙き寸暇に閲することが出來ます。
□大いさは菊半截判、假綴（平綴百頁實價裝幀）で、八ポイント活字を使用しました。
□約百頁を單位として星一つでそれをあらはし、★一つ毎に二十錢の定價です。
□便宜上★★以上★★★★★迄（稀に★六つ、六百頁迄）を一冊の本に纏め、百頁宛の分册ではありません。
□送料（及定價）は左表によります。

	定價	送料
★	二十錢	二錢
★★	四十錢	四錢
★★★	六十錢	
★★★★	八十錢	六錢
★★★★★	一圓	
★★★★★★	一圓二十錢	八錢
★★★★★★★	一圓四十錢	

近刊書目

カント 純粹理性批判
澤選集
福田德三 日本經濟史論
網島梁川集

ダーウィン 種の起原
上原六四郎 俗樂旋律考
古今集
西鶴 好色一代男

芭蕉 奧の細道
上田敏詩抄
幸田露伴 一口劍
幸田露伴 風流佛

森鷗外 うたかたの記
森鷗外譯 ふた夜
プーシキン オネーギン
ゴーゴリ 檢察官

ストリントベルク 稻妻
ロマン・ロラン 愛と死との戯れ
アナトール・フランス エピクロスの園
バルフィンチ 傳說の時代

（以下續刊）

岩波文庫の現品は全國各地の書店にて御覽を乞ふ

東京神田神保町 電話九段(33)二一〇八番 二一〇九番
振替東京二六二四〇番

岩波書店


SALOMETHYL
Analgesic and Counter Irritant
Sole Distributors
TANABE & Co Ltd
サロメチール
痛みある患部に塗擦して即効ある
外用鎮痛藥
單に患部に塗擦するのみにて、上皮より直ちに吸收され、快き溫熱感を與へ、劇甚なる疼痛は極めて愉快に消失す。
その効力頗る迅速、注射又は劇藥にあらずしてサロメチールの如く即効ある鎮痛藥は他に殆んど類例を有せず。
ロイマチス
神經痛
肩凝・腰痛
打撲・筋痛
二五瓦……一圓
七五瓦……二圓五十錢
各地藥店にあり
株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町



磨けば光る歯ご心
學理上…實驗上
歯の爲に一番よい
クラブ歯磨



夏の夕

森田恒友筆


ヱビス
サッポロ
アサヒ
ビール
清涼飲料
リボン・シトロン
御婦人御子様向
ナポリン
大日本麥酒株式會社

[illegible]を志して来た[illegible]せざるは何故か

永年の喫煙家も忽ち禁煙家となれる

簡易な禁煙方法を知らぬからだ

驚くべき「カロット」の効力

煙草が如何に健康に害を及ぼすかは百も承知の事であるから別に此處にくどくどと説述る必要もない。

而し煙草をやめて損をしたと云ふ人はないが煙草を廢めた爲に金が増し長生をしたと云ふ事は儘耳にする事實である。

しかし煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものではない。

所が玆に面白い一つの禁煙方法がある。『カロット』を口にすれば煙草を用ふるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく、藥品の加味人參の精氣を含んで居るから、口氣をよくすると同時に温雅な香氣と忘れ難き精凉な甘味は輕い刺戟と快感を長く口中に殘して之れを口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣にはなれない、殊に口中の惡臭又は食後や夜中に口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も全治する効力がある。但しこれは眞劍に煙草をやめようとする人でなければお勸め出來ない。何故なら、再び煙草がまづくて吸ふ氣になれないからである。これは實業之日本社あたりでも實驗して

[illegible]に置いて[illegible]

[illegible]つゝ[illegible]

[illegible]時、[illegible]、[illegible]での[illegible]した

ら[illegible]度[illegible]り[illegible]つて来ると感じてゐるかは、是非之の『カロクト』を試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との[illegible]の[illegible]なども面白い一例である。


マツダ
内面からの艶消で特に明るく汚れない
新マツダランプ
新マツダ瓦斯入電球
マツダランプの新マツダ
小さいかはいゝお月様
おへやのお花をあかくした
わたしのおべゞを金にした
—懸賞一等當選童話—
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市



昭和二年

中央公論

八月一日發行

八月號

第四十二年第八號

第四百七十五號

首相の無力か時勢の進歩か

川崎造船所救済問題の行悩みを観て首相の無力を説くものがある。故の原敬の様な人だつたら関係に文句を云はせず世間の非難などはうはの空に聞き流して既定の方針で押し通したらうにと云ふのだ。成る程原敬は素敵に強い人であつた。田中総裁は彼に比すればやゝ利口過ぎるの感がある。併し今日彼が救済問題で躓いたのは果して閣僚統率の威力に缺くる所あるが爲めだらうか。私は必しもさうとは思はない。よし原敬をして今日に在らしめても、原はこの際も例の通り思ふ様横車を推し切り得たであらうかを私は疑ふ。何となれば原の全盛期と今日とは丸で時代が違ふからである。予輩をして思ふ所を腹蔵なく云はしむるなら、田中必しも力足らざるに非ず時勢の進歩が遂に政友会内閣をして思ふ所を爲さしめなかつたのだと断言するに憚らない。

時勢といふものは怖しい。緩漫ながら絶えず進歩して熄まざるものの様だ。十年前五年前にやす〳〵と出来た事で今日斯くまで輿論の排撃を受くべしとは、流石の政友会の達士も豫期しなかつたのであらう。尤も彼等は自ら何等か心中に不安を感じたと見え、川崎救済問題の處理に付ては始めからやゝ臆病であつたやうだ。この點はよしんば鈴木喜三郎君が大蔵大臣であつても同じ事であつたらう。

川崎造船所と政友会との多年の腐れ縁に付ては今更説明する迄でもなからう。散々喰ひ散し踏み倒した揚句のことだ、今更あの窮状を見殺しにも出来まいではないか。川崎側とて、困つた時の救済を期待したればこそ、一にも二にも言ふ事を聴いては過分に政友会の便宜を謀つたのであらう。故に従来通りの形勢の許に於ての話なら、政友会内閣は全然無條件に彼を救済したに相違ない。現に川崎と云はず此種の会社に對しては数年前まではドン〳〵之を敢てして、一方には恩を売り一方にはその威力を示してゐたではないか。併し最早今日はそれが出来にくくなつたのだ。故に當初は救済するとかせぬとか多少ごた付いた様であるが、結局三千萬圓を限るといふことで世間の賛同を僥倖し得べしと考へたものらしい。之でも一般市民には了解の出来ぬことなのだが、せめて金額でも限つたら幾分世上の攻撃を緩和し得べしと期したのも怪むには足らぬ。所が之にも異議を唱ふるものが澤山あらはれ、殊に内閣の内部にも意外の故障が起つて、遂に昨今見るが如き不始末となつた

のである。其中に大合同から憤激が這入る。之ではとても三千萬では何の足しにもならぬと分つたら、さうなつても、やつと三千萬で天下の反對をなだめんとしたのだから、今更もう少し増額してとも云へず、遂に萬策盡きて政府は全然本問題から手を引くことになつてしまつた。即ち政友會は德義上から云つても利害の打算上から云つても川崎を救濟してやりたくて堪らないのだが、流石に輿論の排擊を恐れて遂に全然手を引かねばならぬことになつたわけである。斯く流石の政友會をして遂にその意に反する態度に出でざるを得ざらしめたのも、一に時勢の力であることを私共は忘れてはならない。

故に私は川崎融資問題の行惱みを見てつく〴〵時勢の進歩に感謝したいと思ふ。時勢が進んで居たればこそ、あの無禁な預金部貸出や責任支出を阻んで世論は國庫を謂れなき損失から救つたのである。加之この行惱みに依て受くる國民の利益は、實は單に右の損失から免かれたといふことばかりではない。之に依て將來必ずや再び同じ事の繰り返されぬに至るべきを思ふとき、我々は更に一層感謝の念を深うせずには居れぬのである。思ふに今度の様なことは從來屢々行はれたことなのだらう。政友會は散々會社の金をしぼる。會社は之を緣に困つたとき政府の救濟をあてにする。否困らなくとも政權の偏庇に恃んで徒に不當の利益をせしめる。之が可能であつた間は政黨は實に王侯の威力を以て實業界に臨むことが出來たのだ。けれども社會の風潮一たび變り、窮時の救濟必しも恃むべからずとなつたら、何を苦んで彼等は平素政黨の飽くなき貪婪に應ずるの愚を爲さう。果して遂に斯の如くならん乎、私は思ふ、我國の實業界も爰に始めて政權の腐れ緣を離れて獨立の發達を爲すの端を開くべく、政界も亦自ら醜汚なる誘惑から脱するを得るに至るであらうと。

更に之に關連してモ一つ朝野の注意を喚起したい大問題がある。政府は國防問題や社會問題に藉口して一度は川崎救濟の忽にせざる可からざるを說き觸らした。所謂國防問題や社會問題やは、此際川崎救濟の重大理由とならざるは云ふまでもないが、併し川崎の始末がとう付かうと問題それ自身の依然として殘るの事實には疑ない。加之川崎一件の例に續いて今後政權金權の醜關係が整理さるるの勢に伴れて所謂國防問題社會問題は一層頻繁に起ることであらう。「だから國庫を擧げて救濟に力を注げ」といふ論は固より當らぬが、その以外に於て、我々が近き將來に備ふる爲め今より銳意之が一般的對策を講ずるの必要は大にある。政友會中にも一二具眼の士があつたなら、一川崎の救濟に狂態百出を演ずる前に、早く既に這の根本問題に付て深重なる攻究を遂ぐべき筈であつた。川崎問題に關連して國民の最も注意すべき大問題は蓋しこの外にはないのである。

中央公論



第四十二年第八號
八月號
第四百七十五號

世界的ファッシズムと日本の現勢

藤井悌

一 反動全盛

反動思想、反動運動は今や全世界を風靡してゐる。イタリアではファッシスティの獨裁によつて一切の社會運動は無慘に押し潰されてしまひ、ドイツには種々の國粹主義的團體が、跋扈跳梁して、曾ては全世界の社會民主主義運動の總帥で

あつたドイツ社會民主黨も旗色甚だ振はない。ロシア革命後いちはやく之に倣つてソヴエート共和國を建てたハンガリーは、今や鐵の如き反動的獨裁政治の下に呻吟してゐる。サンディカリズムの發祥地であつたフランスは、今やポーランド、チェコ・スロヴァキア、ユゴー・スラヴィア等の衛星國に取卷かれ、これらを極度に反動化してロシアに對する防壁としその内でふんぞり返つてゐる。勞働運動の本場であり、近く一たび勞働黨が政柄を乘つたイギリスでさへも、保守黨殊に其の内の『不死身(ダイハード)』派が全權を握つて、この反動の勢に乘じて一擧に『勞働』側の根城を粉碎しやうと大馬力をかけてゐる。アメリカは愈々資本主義萬々歲を高唱し、反動的新チュートン民族主義をさへ作り出しつゝある。一方革命派の守本尊ロシアでは、新經濟政策につぐに新々經濟政策と次第次第に右方逆轉をして、狂崇的共產主義者の意氣を削ぐと同時に反動者流をして鼻をうごめかさしめその支配者團の內部では現實派が勝を占めて焦燥苛辣な世界革命宣傳派は足場を失つた。

見來れば世界は今や反動全盛である。わづかに七八年前、ロシアの革命に次いでドイツの革命、ハンガリーの赤化、イタリア勞働者の工場占領、嵐のやうな第三インタナショナルの宣傳、各國勞働組合の急激な大膨脹、ヨーロッパ大陸諸國に於ける產業經濟の絕望的混亂と空前の大インフレーション、街頭に投げ出された巨大なる失業者群、一切の事象は今にも全世界に亘つて社會革命が來たるかと思はしめた。全世界は革命的昂奮に顫へてゐた、無產者は其の期待に、權力階級は其の恐怖に。これに比べてみると今日の情勢は殆んど夢のやうである。歷史は十年の間に魔術の如くひつくり返つたのである。

然しながら歷史に夢や魔術はない。辿らなければならない必然の過程中の、短い一斷面が今我等の眼前にあるだけである。一世紀前フランス革命の直後には、全ヨーロッパに亘つて獰猛な反動の風が吹きめくつた。『神聖同盟』は有らゆる自由主義運動を彈壓して剩すところがなかつた。然しながら半世紀の後には、ヨーロッパの殆んど總ての國には、いつのまにか封建的專制が仆れて立憲政治が布かれてゐた。彼等は歷史の進行の過程について多少の技術的モディフィケーション

を加へることはできた(これは多くの場合可能でもあり且つ時として必要でもある)、然し其の結論を拒否することはできなかつたのだ

大激動の後には必らず大反動がある。今は正に近代史上第二回の世界的反動の時である。この時を諸國民は如何に乘り切るであらうか。

我國に於ても近來反動の空氣は次第に濃厚になりつゝある。數年前に一時ウィルソンが我が自由主義的新青年の尊崇の的であつたやうに、今やムッソリーニは我が無邪氣で感傷性なる青年の狂崇の的になつてゐる「ユダヤ禍」警戒とファッシズム謳歌との宣傳は、軍隊に農村に洪水の如く溢れてゐる。而も此の宣傳は豐富な資金を以て組織的に行はれてゐるやうに見える。ファッシスト・レジムの現出を夢みる民間團體も所在に擡頭して來さうである。資本家及び支配階級の一部にも、竊かに之に期望を繋いでゐる向きがないでもない。然し果して我國にもファッシスト運動が起るであらうか、また起るとすれば其れは成功するであらうか。私はこの問題に對して何等かの暗示を得るために、ヨーロッパに於けるファッシスト運動の勃興の條件を檢討して見よう。

二 イタリアのファッシスティ

ファッシズムは今日我國の謳歌者たちからは殆んど神秘化されてゐる。然しながらファッシズムもやはり其の根本を糺せば、經濟的原因から生じた極めて散文的な一現象に過ぎない。その運動の途中に現れた、ロマンティックな愛國的復古的色彩は、要するに鍍金に過ぎない。個々の追隨者の感情は、その運動の歴史的使命には殆んど參與するところがないのだ。この意味に於いてファッシズムは、戰後世界の經濟的混亂及び經濟的勢力の中心の變更等の諸事情が、世界各國に於て略々共通である限り、世界的現象たるの可能性が十分にあるといふべきである。

然しながら一面に於て、丁度あゝいふ形に於けるファッシスト運動は、イタリアの國情から生れたものであり、この見事な成功はイタリアの國情によつて遂げられたものである。今日各國の反動派は躍起になつて其の眞似をしてゐるが、運動そのものは一應成立するとしても、その成功の見込は甚だ乏しい。實はイタリア自身に於てさへも、單に過渡期に於ける一時の眩惑的現象であつて、到底長く其の生命を保つものではないのである。

現在のファッシズムは何等纏まつた主義や理想を有するものでなく、單に一個の實行形式に過ぎない。主義理想の方面から見ると、その追隨者の中には王黨もあれば共和派もあり、極端な資本主義的自由主義者からサンディカリストまでをも含んでゐる。これらを孰れも包容し得たのは、元來『國民第一』といふ内容不明な、從うて包容力の最も多い標語以外には何等の定まつた目標を掲げなかつたがためであつて、そこに面白味もあれば同時に其の解體を促す危險素もある。更にまた、主義や理想はどうでも宜い、利權さへ得られれば赤でも白でも選ぶところでないといふ無骨勇敢なる一團が、有力な要素として加はつてゐる。これらは一層直接な危險分子である。

とにかく此の分つたやうな分らないやうな、中世的英雄的な假面を被つた現代經濟の一産物を解剖するには、一先づイタリアの國情を明かにしなければならぬ。

（イ）ファッシスティ前史——サンディカリストとしてのムッソリーニ

一

ローマ帝國滅亡後のイタリアは、長い間單に地理的名稱に過ぎなかつた。即ち古くから幾多の小邦に分裂して互に嫉視し、國力甚だ振はずして常に隣國オーストリーの壓迫の下に苦んで來た。それ故其の統一は詩人や政治家の多年の夢であつたが、それが實現したのは漸く今から五十餘年前一八七〇年のことであつた。であるから今日のイタリアは新しい國

である。古ローマの傳統からは遠くの昔に絶ち切られた極めて若い生々しい國なのである。この點を見逃すと、あの突飛なファシスティの核心を掴むことはできない。

一八四八年から一八七〇年に至る間のイタリア統一運動は、イタリア人の間に激しい劇詩的英雄的の氣風を植えつけた。その血は一たび澱んだけれども、世界大戰によつて再び湧きたつたのである。統一戰爭の英雄ガリバルディは今なほイタリア人の崇拜の的となつてゐるが、この心がやがてイタリアの青年をして『新しい愛國者』ムッソリーニを讃美せしめる心であるのだ。

右述べたやうに、とにかくイタリヤは形式上統一されたけれども、事實に於ては尙ほ地方的の偏見や猜疑によつて分れてゐた。そして一般の教育程度は極めて低かつたので、一國民としての自覺に乏しく、統一的の民族生活といふものは容易に實現されなかつた。『吾人はイタリア國を作つた、今やイタリア人を作らなければならない』といふのは、先覺者たちの一齊に發した叫びであつた。加ふるにローマ教會と新王國との間は不和であり、人口は過剩であるに拘はらず移民は困難であり、また外にはオーストリーが虎視眈々としてゐたのである。

かやうな事情の下に新イタリアの建設者は戰ひ續けねばならなかつた。即ち第一には從來互に反目してゐた地方的人民を統一的國民に練り固め、第二には從來他國に壓迫され支配されてきた隷屬民を自由民に籍なほさなければならない。『統一』と『自由』（對外的意味に於ての）は多年イタリア國民的モットーとなつてゐたので、ファッシスト運動が、勞働資本の爭鬪に直接の交渉を持たない謂はゆる『公衆』たる國民の間に、案外速かに受け容れられた素地の一つはこゝにある。

しかしながら、興奮と熱狂的努力との創業時代が過ぎて、內部建設の時期が來るに及んでは、どこの國でもさうであるやうにイタリアに於ても國民的弛緩が現れてきた。最近半世紀の間傑出した指導者は一人もなく、政治は理想を失つて單

に政權の爭奪のみとなり、經濟も行政も、教育も、一切をあげてだらけきつてゐた。（この點は或は現代今日に至るまでの日本に似てゐる。）そして當時における政界の事情を見ると、急進派と民主派とは唯空論を弄してゐるだけで實意がなく、指導者顏をした煽動的利己主義者に過ぎなかつたし、モデラティ即ち穩和派は、自分達の利益の擁護にのみ急であつて何等の理想をも持たなかつた。

このだらだらした空氣の中へ社會主義が侵入して來た。それは大工業が勃興し始めたことの當然の結果であるが、教養のある青年の頭腦は新しい唯物史觀に甚だしく刺戟せられて、この思想は忽ち知識階級の間に擴がつたのである。一體イタリア人は日本人と同じく非常に理論好きである、何等かの哲學がなければ決して實際運動は起らない代りに、新しい哲學がはひつて來ると直ぐ實社會に運動を與へるのである。

イタリアの社會主義は始めから極端急進に流れる傾向を有してゐた。それは一つは燥急にして熱狂し易く、かつ純理に向つて猪突しやうとする其の國民性に依るのであるが、一つは産業がまだ貧弱であつて、勞働組合運動が發達し得なかつたためである。

二

か〻る間に一九一四年の世界大戰爭となつた。當時イタリアが同盟側と協商側との双方から引つぱり凧になつて、長い間逡巡してゐたことは世人の記憶に尙ほ新たなところであるが、これ偶々當時イタリアが、防禦的見地からも經濟的理由からも、必ずしも參戰しなければならない理由がなかつた（少くとも其れを見出すことができなかつた）ことを物語るものである。然るに一方に於て、あの大戰をイタリア勃興の唯一最大の機會と考へる有力な一傾向があつた。イタリアが國際的の大勢力となることを常に妨げてゐたのはオーストリーである。アドリア海の主權を握り、多年の宿望たる Italia（イタリア） Irredenta（イルレデンタ）（回復されざるイタリア）の回復を成し遂げ、『イタリア人の住む土地はイタリヤ領ならざるべからず』の理想を

達するのは、正に此の機會である。これを逸すればイタリアは永久にうだつが上らなくなるのである。かやうな見地からアンリコ・コラディニ等の國民黨一派や、文豪ダヌンチオなどは熱烈に參戰論を唱へた。然るに社會黨は純理に從つて飽くまで非戰論を唱へた。交戰各國の社會黨が孰れも平素の國際主義を裏切つて戰費豫算を協贊したにも拘はらず、ひとりイタリアの社會黨は斷じて理論乃至傳統を棄てなかつたのである。こゝに於て社會黨左翼の領袖たり機關新聞『アヴァンティ』の主筆たるベニト・ムッソリーニは、同志に背いて敢然主戰論を唱へ、遂に社會黨から除名されてしまつた。一種の空想家野心家たる彼は、當時無批判に謂はゆるリソルヂメント文書(上記のイタリア獨立運動時代の、及び之に關する文書)を讀んで之を受入れ、トリエストとフィーメを併合しさへすれば、イタリアは一切の幸福が來ると思ひこんだのである。これは少くとも彼をして主戰論者たらしめた有力な心理的原因であつたらう。かくして猛烈なサンディカリストは一轉して極端反動團を創設するに至つたのである。

ムッソリーニの傳記を述べることは徒らに紙面を多く取るから止めて置かう。また一面に於て彼の傳記は無數の英雄物語的エピソードに滿ちてゐる。それは大部分彼の執權後に語られたもので、彼は生きながら古英雄や宗教の開祖のやうな神秘的な圓光を冠つてしまつたのである。彼の執政後數年の間に、彼を凡人化したり彼の思想行動の矛盾や利己的方面やを暴露したりするやうな一切の文書は、よしあつたとしても、埋沒されてしまつたであらう。言論と文書は今やイタリアに於て絕對且つ周密なる官憲のコントロールの下にあるのだ。

然しながらここに必要なのは、彼は早くから社會黨の青年闘士ではあつたが、マルクシストでなくて寧ろサンディカリストであつたことである。彼は理論的方面に於ては比較的單純た、獨斷的演繹的な傾向の頭腦の持主であるらしい。加ふるに彼は早くからブランキやソレルの影響を蒙り、且つイタリアの新理想派哲學者たるクローチェやヂェンティーレに共鳴してゐた。サンディカリストたる彼は始めから「暴力の神聖」を信じてゐたのである。サンディカリストであつたが故

に、同じく衝動的直接行動派たるファッシストに變じ得たのである。

とにかく彼は參戰論を唱へると共に、自ら一兵卒として戰線に立つた。そして負傷してミラノに退き、そこで『ポポロ・ディタリア』新聞を編輯して盛んに戰闘的熱情を煽つた。この新聞は政府の戰爭宣傳基金からの補助によつて創刊されたものであつた。後に彼の四天王の一人として知られるやうになつたチェザーレ・ロッシーや、社會黨の左翼から參戰論者に鞍替へしたビアンキーなどの徒も、當時彼と共に同新聞に働いてゐた。この間に於て彼は政府、軍閥、重工業資本閥等凡そ戰爭に利益を持つものとの間に良好な關係を作つたのである。

かゝる間に戰爭は終つた。そしてイタリアは戰勝國の側には立つたが、實際はあらゆる創痍を蒙つただけで何の利するところもなかつた。幻滅による打撃はイタリアに於ては最も早く且つ最も急劇にやつて來た。前にも述べたやうに元來イタリアの參戰は、國民的利己主義から自ら進んでやつたものであつた。自衛上已むを得なかつたためではなく、進んで或る物を獲得せんがためであつた。その期待の大きかつただけ其れだけ、期待の裏切られた曉に於ける絶望は痛烈だつたのである。その結果として、戰爭そのものは勿論、戰爭と結びついた一切の事物は憎惡と侮蔑との的となつた。彼等は聯合國を憎んだ、參戰論者を憤つた、歸還軍人を嘲笑した。

ムッソリーニの生活の基礎たる『ポポロ・ディタリア』の補助金は停止された。參戰論者ムッソリーニの聲名は忽ち地に墮ちた。彼の受難の時が來たのだ。彼は財政的に手も足も出なくなつたばかりでなく、その社會的生命は全然破滅してしまつたやうに思はれた。彼が曾て傲然として見棄て去つた社會黨は、今や全盛を誇つてゐる。彼が裏切つた昔日の同志は今や白眼に彼を見下してゐる。彼は何等かの方法を以て、否如何なる手段を以てしても局面を打開しなければならぬ。かくて彼は社會黨の敵であるところの一切の要素、換言すれば地主的、資本家的、軍閥的、國粹主義的、反動的の要素を結合することに於て其の活路を見出したのである。

（ロ）イタリア社會黨

一

こゝでイタリアに於ける社會主義運動を一瞥しよう。ファッシスティ成功の一大動因は、イタリア社會黨の失敗にあるからである。若しイタリアに於て、ボルシェヴィズムが一時あんなに無結果な跳梁を恣まゝにしなかつたならば、ファッシズムもあれまでお手柄に成功することはできなかつたであらう。

一九一七年以來の世界的赤色昂奮の時代に於て、別して末梢神經の尖つたイタリア人が、どうして其の刺戟に應へずにゐよう。社會黨は忽ちにして膨脹した。極度の不滿と破壞的憤激とにはち切れさうになつた勞働者が社會黨内になだれ込んで來てみると、その黨の態度は革命的方向に決定されざるを得なかつた。「動員解除」、「大赦」、「政治的自由」等の標語は矢繼早に放たれた。モスクワは神秘的な憧れの都となつた。愛國心や忠誠は單に嘲笑すべきものになつた。

そこで社會黨右翼の領袖たるツラーティ一派は、已むを得ず、この革命的昂奮の時に於て早くも分解運動を始めた。彼等は『民主的綱領』及び『實際政策』を強調し、『野蠻なるロシア式』を排斥した。然しながらいきり立つた勞働者を背景とする左翼、セラッティ一派のマキシマリストは、かゝる微温的政策を容れる筈はなかつた。『我々はもはや瞬時も所有者の爲めに働くことはできない』――いきり立つた勞働者は斷乎として斯う言つた。かくして社會黨は、この歷史的に偉大なる局面に於て、左右兩翼の猛烈な爭鬪に終始し、一九二一年のリウォルノ會議に於て最左翼が共産黨として分離し去つてから後も、なほ黨内に於けるマキシマリストと改良派との軋轢は絶えず、この數年間を通じて、勞働階級の運動を統一的に有効に指導すべき有らゆる機會を空過し去り、次いでファッシスティの勢力を自ら育成したのである。

二

然しながら元來イタリア社會黨は、形式上は理論的急進的であつたけれども、實質に於ては右翼派の指導力が強くて大體實際的改良的であつた。現存國家の權力と巧みに妥協して、一方には無產階級の利益を政治を通じて防衛して行くと同時に、他方には政府の『暗默の承認』によつて比較的急速に社會主義を普及させ、黨勢を擴張し、且つ勞働組合を發達させて來たのである。そして政府も亦、この社會黨との妥協によつて多年小康を保つてゐたのである。

イタリアに於ける工業資本主義は、西ヨーロッパ諸國に比べると遙かに低い程度に在る。産業の發達は北部地方に限られ、中部及び南部は殆んど農業地方であつて、北部に於てさへも農業の勢力は侮るべからざるものがある。そして政府は主として此の農業的舊勢力の支持の下にあつたのである。それゆゑ大戰勃發の當初に於て、北部の工業資本團は、今こそ企業の大發展のため、從つて又工業團が政治上の支配權を得るための絶好機會であると考へて、極力參戰を主張した。後のファッシスティの指導者等は、此の時からして此の工業團の道具として、盛んに參戰熱を煽つたのである。

ところが前述の通り休戰後の昂奮時代に於て、社會黨へは猛烈な『流入』があつた。一九一四年に僅かに五萬八千人を數へた黨員は、一九二〇年には二十一萬六千人になつた。そして其の新流入は極度に無雜なものであつた。それは有らゆる種類の不平家群であつて、その中には何等の政治的訓練を有せず、加ふるに數年に亙る戰場生活に於て、冒險と暴行と流血とに馴らされた、性急にして亂を好む人々が多かつた。彼等はロシアの先例を何等の批判なしに即刻模倣しようとした。社會黨は忽ちにしてマキシマリストの支配するところとなり、改良派は今や少數派として、徒らに弱々しく人氣のない宣言や綱領を發表する外には、手も足も出せなくなつたのである。

かくして社會黨は俄然として名實共に政府の正面の敵となつた。彼等は民衆の革命的精神に對して過度の信賴を拂ふと共に、自己の無組織、無準備を忘れてしまつた。社會黨と政府との乖離は、結局に於て双方を弱めてしまつた。國力其物も麻痺せしめられた。それでも社會黨が、積弱の政府に取つて代るだけの組織と準備を整へるやうに努力したならば、あ

の嵐のやうな時代に於ては、マキシマリストの理論上の豫定のやうな新國家のできる望みは絶無ではなかつたかも知れない。而も彼等のコムミュニズムは、後に云ふやうに『文句のボルシェヴィズム』であり、無聯絡な地方的暴動や局部的ストライキや、中流の民衆に對する威嚇や厭がらせのボルシェヴィズムに過ぎなかつた。

政府は頼るべきものを失つて、餘儀なく反社會的勢力との相互支持に轉じた。始めには工業資本閥の傭兵であつて、政府や地主其の他の舊勢力の敵であつたファッシスティは、今度はボルシェヴィズムを共同の敵として、反社會黨的の一切の勢力を背景として立つに至つた。かくして今度はファッシスティが、曾て社會黨がさうであつた如く、政府の『暗默の承認』の下に大手を振つて育つて行つたのである。

三

前述の如く、社會黨の内爭は絶えず、その新秩序の負擔者としての内部の組織と準備とは一向整はなかつたけれども、外部に對する社會黨の行動は散漫ながらも極めて活潑であつた。休戰後に於ける左黨共産派の跋扈は實に目覺ましいものがあつた。彼等はモスクワの區處を受けて、急進的勞働者を動かして絶えまなくストライキや騷擾を繰り返した。北部イタリアでは土地は到るところ農業勞働者に占領され、その諸都市は大部分社會黨の占領するところとなつた。一例を擧げれば、イタリア第一の商工都市たるミラノの市廳には、三色旗が却されて二年の間赤旗が高く揭げられてあつた。これらの地方では、町の行列には必ず赤旗が飜つた。共産主義の歌は到るところの公けの會合で歌はれた。議會と王座とは常に口に絶えまなく罵られた。階級的憎惡は煽られ、暴動は唆りたてられた。無政府と私有財産の沒收とは總ての人民に對して勸説せられた。公會に於て發言を許されるものは革命派だけであつた。反對派が口を開けば、彼等は威嚇し、侮辱し、時として殺戮さへも敢てした。

鐵道を支配するものは現業勞働者であつた。鐵道官吏が列車に乘ると、車掌は其の降車を求めた、其れを聽かなければ

衝き落すのである。またカラビニエーリ（憲兵）とレジア・グァルディア（治安警察兵）とは最も憎まれて、彼等が汽車に乗り込むと其の降りるまで汽車は動かなかつた。

政府はこれらの一切に對して何等の取締りをすることができなかつた。たゞ事勿れ主義を取つて、びく／＼者でゐたのである。政府の警察官に對する命令は甚だ不得要領なもので『しつかりやれ、但し愼み深くやれ』といふのであつた。暴徒に對してもピストルを射つことは許されなかつた。『愼み深く』やらないと免職されたのである。

そして社會黨左翼の政略はからである、曰く『政府を威嚇してやれ。政府がいよいよ讓歩したら益々壓迫してやれ。壓迫すればするほど政府は讓歩してくるのだ』と。

かゝる情勢の前に、一般國民殊に資本家及び中流階級は、身近に迫る自分等の運命の前に戰慄してゐた。しかしながら、この國民の恐怖と反感は、後の社會黨沒落の一大原因をなしたものであつた。特に穩和にして臆病なる知識階級が窮鼠猫を嚙むの態度に出たことは、社會黨の大損失であつたと共にファッシスティの大利益であつたのである。

四

社會黨が全盛を極めるに至つた一原因はヴェルサイユ條約にある。該條約に於けるイタリアの比較的不利な地位は、前述の如くイタリア人の夢想をすつかり打碎いてしまつた。彼等は參戰の功績を過大に見積つてゐたゞけ、また其の參戰が防禦のためでなく國權の伸張を唯一の目的としたものであつたゞけ、彼等から見れば不當に踏みつけられた此の條約は、甚しく彼等の國民的自尊心を傷けたのである。この幻滅によつて愛國的昂奮は冷やされてしまつた。その上、戰時以來の食糧の不足は益益甚しくなり、石炭は缺乏し、爲替相場は低落して、勞働者の生活標準は急激に低下し、而して一方にはいづこも同じ戰時成金が彌が上に勞働者の激憤心を煽つた。殊に一九一九年の夏に勞働者の全國的反軍國主義示威運動があつてから、彼等の傾向は決定的に反軍國的となり、社會黨の軍事侮蔑は益益露骨になつたのである。

軍人は故意に侮蔑せられた。勲章を胸にかけてをることは單に滑稽であつた。一九二〇年には、政府は將校に對して、制服帶劍で公衆の前に現はれてはならないと內訓した。戰陣に於て命を的に働いた勇士は丸腰で街路を歩いて、ナイフや小銃で武裝した共產主義者に嘲弄され、拳を握つて憤怒に顫へながら引き下る外はなかつた。手足を失つた廢兵さへも殘忍に罵詈された。愛國的昂奮と騎士的自負とを以て、あつぱれ凱旋軍人として歸つてみれば、自分等が血を以て衞つた國は共產派の手に落ちて居り、國を護るために空けて行つた以前の職業は他人に奪はれてしまつた。他の國に於ては、歸還兵士に職業を取戾させるために有らゆる努力を拂つてゐるのに、社會黨を恐れる政府は何等之がために圖るところがなかつた。彼等は饑餓と醜辱とに曝された。而して政府はこの歸還軍人の『當て外れ』の責任を、悉く『勞働者の醸成する不安』に歸したのである。

歸還軍人の此の憤激は、社會黨の沒落、ファッシスティの勃興の一大動力となつたのである。

五

次に產業方面ではどうかといふと、北部地方の工場では生產は常に防害せられ、些細な口實の下にストライキは頻りに宣言せられた。農耕地は到るところ農業勞働者に占領されたが、その占領を免れた場所では穀物は刈入手がないため立腐れになり、家畜は餓死するまゝに放置された。要するに全經濟は大仕掛に混亂せしめられたのである。蓋し共產派の目的は、あらゆる方法で一先づ國家の資源を破壞し、國民の大衆を恐怖狀態に陷れ、依つて以て共產派以外に賴るものなからしむるにあつた。

彼等は勞働者を强制的に共產クラブに加入させて高い會費を徵收した。それを拂はない者があれば、夜間その家に行つて生計狀態を調べ、二倍三倍の罰金を取り立てた。

社會黨員中の下級の多數者は必ずしもボルシェヴィストではなかつた。赤色支配の頂點の時期に於ても、武力的ボルシェ

ヴィストは比較的少數だつたのであるが、彼等は極めて巧みに、ソヴエート・ロシアの遣り口に倣つて、よく勞働者を引き廻してゐたのである。勞働者群は外に賴るべきものがないために無我夢中で彼等が笛吹くまゝに踊つてゐたのである。それゆえに一たびファッシスティが擡頭すると、彼等はたわいもなく其の方へ轉向したのである。

また共産派が支配してゐる都市では、財政は紊亂の極に達し、破産に瀕したものも少くなかつた。

以上のやうな經濟財政の破壞、産業の麻痺は、國民特に小ブルヂ・ア階級をして國家の破産を恐れしむるに至つた。イタリアは元來日本と同じく、國土狹小にして天然資源に乏しく、昔から人口過剩に苦んでゐる。ロシアのやうな自給自足に堪へる國とは全く違ふ。ムッソリーニが、忽ちにして國民の少からざる部分の間に異常な同情を得たのも一はこれがためである。共産派の潰滅、ファッシスティの勝利の最大原因はこゝに横はつてゐる。

六

一九一九年三月ファッシスティが結黨してからこのかた、いくたびか共産派とファッシスティの間に、小仕掛ながら流血の鬪爭が行はれ、その度毎に共産派の弱點は暴露されたが、遂に共産派沒落の大カタストロッフが來た。それは一九二〇年の工場占領であつた。

大戰中イタリアでは、どこの國でも然るが如く、軍需工業を中心とする重工業が過度に膨脹した。しかも此事はイタリアに取つては特殊の意義があつた。鐵も石炭も産しない國に於て、人工的に極度まで擴張せられた金屬工業は、始めから大破綻を孕んでゐたのだ。この不自然な大擴張のためには、銀行資本も亦不自然に危險に使用せられなければならなかつた。

休戰と同時に最先に製鑛業の上に大打擊が來た。引きつゞいて鐵を使用する一切の工業は破滅した。銀行は破綻した。全經濟は救ふべからざる混亂に陷つた。全有産者社會は期月ならずして麻痺してしまふかに思はれた。

かくして此の年（一九二〇年）には金属工業労働者の賃金が全イタリア労働者中で最も低くなつた。當時一般に熟練労働者は平均二十五リレ、不熟練労働者でも二十リレの日給を得てゐたのに、金属工の日給は僅かに十四乃至十八リレであつた。彼等は言葉通りに餓ゑてゐた。そこで賃銀増給を要求するストライキが始まつた。これは已むを得ないことではあつたが、時期が悪かつたため全敗に終つた。イタリアの金属工業者は緊密な團結を作り、共同の戦線を樹立し、闘争資金を準備した。加ふるに當該工業は甚しい不況に陥つてゐたので、ストライキに依つて暫く事業を休止するのは、寧ろ彼等にとつて好都合であつたからである。

この際金属労働者を援助するために、他の全工業に亘つて總同盟罷業を行つたならば、或は局面を打開することができたかも知れないが、金属工業労働組合の幹部も、イタリア労働總同盟の幹部も、一つには大衆運動が始まると自己の支配的地位が失はれることを恐れて、共に此の戦線に出でずしてサボタージュの命令を發した。傭主をして損害に堪へざらしめ、依つて以て其の要求を容れしめようと企てたのである。然し此の計畫も失敗した。傭主は要求を容れる代りに、全體的の工場閉鎖を斷行したのである。こゝに於て工場占領の外、道がなくなつた。

かくして金属労働者團は工場を占領した。そして一週間を經過したけれども傭主側は依然として降らなかつたのみならず、金属工業と密接の關係のある他の工場特に化學工場及び運輸機關をして、占領労働者團に對してボイコットをさせ、最後に外國からの生産原料の輸入を阻止する方法に出でた。彼等は手も足も出なくなつた。加ふるに經營の經驗がなく、かつ依然としてサボタージュの状態にあつたので、生産は少く取引は澁滞し、彼等自身の賃金を拂ふことさへできなかつた。當時占領工場の周圍は銃や機關銃を以て武装した労働者によつて衛られ、また労働者指導者は公然集會して、此の際寧ろ一擧に革命を斷行すべきや否やを議したのであるが、要するに其れは煙火の如きものに過ぎなかつた。かくして社會黨内の右翼、組合の幹部などの連中は、政府と妥協して政府をして經營協議會制度を布くといふ宣言をさせ、労働者を繼

撤して占領を廢棄し武装を解かしめた。

この時以來、社會黨指導者の勞働者間に於ける信用は全く地に堕ちた。彼等に裏切られて、盲目的に彼等の後について行くうちに、逆さまに地獄へ堕ちてしまつた。社會黨は口舌の雄であつて實行上の無能力者であると考へられた。そして一たび武装を解かれた勞働者群は、今や他の武装團體たるファッシスティの攻撃の前に立ち竦むほかはなくなつたのである。そしてファッシスティはこの間に於て工業資本側から豐かな資金を受けて、武装青年團を組織し、罷業破りの勞働者を保護すると共に、勞働運動指導者を暴力を以て脅迫するの準備を十分に成し遂げたのである。

七

これより後ファッシスティの勢力は次第に強大になつた。資本家側は急速に其の陣容を整へて來た。一九二二年六月に至つて、社會黨はこれ以上逡巡すれば自滅の外なきを知つて、ファッシスティに對して最後の一戰を試み、自己の手に尙ほ勞働階級を指揮する力のあることを示さんとした。そこで彼等は勞働總同盟の幹部を誘うて、全國總同盟罷業を宣言した。罷業は先づ交通機關から始まつた。然し其れは單なる政治的理由によるものであつて、勞働者には其の必要と目的とが理解されなかつたので、彼等の間には始から熱がなかつた。加ふるに長い間統一的の指揮を缺いたため地方的の無聯絡な罷業をやり續けて疲弊し切つた勞働者には、一片の宣言によつて有効な總同盟罷業をやる力は到底なくなつた。また時期も適當でなく、技術的準備も一向整はず、且つ共產黨側は冷淡であつた。その上ファッシスティは黨員を動員して自ら汽車や電車の運轉に從事し、且つ武力を以て罷工破りを保護すると共に、政府に向つて「四十八時間以內に罷業を終熄せしめることができなければ、ファッシスティは政府に代つて自由行動を採るであらう」と宣言した。さすが弱腰の政府も棄て置けず、憲兵や警察官をしてファッシスティと聯繫して罷業の鎭壓に當らしめた。かくて此の大罷業も慘敗に陷り、總同盟本部は四十八時間後に其の終了を宣告した。社會黨の生命はここに於て殆んど奪はれたのである。

この大勝利に乘じてファッシスティは猛烈な追撃戰に移り社會黨及び共產黨に對してあらゆる迫害を試みた。即ち社會黨系の都市の役所、機關新聞社、勞働組合事務所、有力者の住宅等は片端しから破壞又は燒打された。この間ファッシスティも社會黨側の者も共にピストルや手榴彈を以て相戰つたので、一週間ばかり到るところの都市に市街戰が現出された。そこで政府は已むを得ず一時都市の警察權を衞戍軍隊の手に委ねたが、元來ファッシスティと軍隊とは互に好感を持つてゐたので、軍隊は殆んど傍觀の態度を取つた。

八月に入つてファッシスティ本部は、もはや敵を十分に膺懲し得たりとして全國黨員に對し動員解除を命令し、かくて此擾亂も漸次鎭靜に歸した。

かくしてファッシスティの霸權は確立し、社會黨及び共產黨は一時殆んど全滅してしまつた。

（八）ファッシスタ黨の構成要素

一

ファッシスティの構成要素を知ることは、その本質を明かにするために極めて必要である。そしてこれを分析するにはファッシスティの成立及び發展の跡を辿つてみなければならないのであるが、こゝでは簡單を期して其の構成要素を羅列するに留める。

大戰末期に當つてイタリアの蒙つた最大の恥辱といはれるカポレットの敗戰は、一つは當時既に戰線まで擴がつたボルシェヴィズム宣傳によつて、士氣が弛緩した結果だといはれてゐる。こゝに於てディアズ將軍を中心として戰士後援激勵團が組織された。ファッシ・デイ・コンバッタンティ（戰鬪員團）といふのが之であつて、元老や代議士、ならびに知識階級が中心となり、多數の大學生が其の周圍に集まつたものであつた。同時にまた、議會内に於ては、徒らに饒舌で無訓

議を討論のために時務の遂行が害されることを憤慨して、保守黨議員の一團が國防議員のファッショたるものを作つた。これらが第一の要素である。

休戰後になつて戰線から歸還した軍人、特に其の勞働階級以外の出身者は、國內に蔓る非國家的思想に憤慨すると同時に、自己の地位を擁護するの必要にも迫られて、忽ち一團體を組織して右の『戰鬪員團』に合同した。これが第二要素である。

除隊兵卒は容易に職業を得ることが出來なかつた。その中には勞働者が多數を占め、社會主義者も少くなかつたことは言ふ迄もない。そして勞働組合はこれらの兵卒に職業を與へるといふ方面に於ては殆んど無力であつた。ムッソリーニが最初に眼をつけたのは此の種の失業者であつたので、つまり彼は自分と同じ境遇にある不平無產者分子を組織して、得意の地位にある社會黨に對抗しようとしたのである。これが第三の要素である。從つてファッシ・運動は第一には求職運動でなければならなかつた。そして勞働組合には容れられず工場からは迎へられない彼等は、勢ひ暴動や破壞的妨礙の擧に出でざるを得なかつたのである。

右の第二及び第三の要素の動機が、專ら職業回復の要求と軍人侮蔑に對する反感とにあつたことは、上記歸還軍人の團體が、一九一九年二月に第一回集會を開いた際に發した宣言によつても明かである。曰く

『本集會は、祖國の發展及び世界の平和のために戰死したイタリアの子弟ならびに廢兵、傷者、一般戰鬪員及び自己の義務を遂げた舊捕虜に對して敬意と感謝とを表し、且つ舊戰鬪員が其經濟的地位を恢復せんとする主張は極力之を支持すべきことを宣言する。』

『本集會は、曾て參戰に反對したものに對しては、現に如何なる政黨に屬してゐようとも、其の立候補を極力妨ぐべきことを團員に命令する。』

第四の要素としては、ダヌンツィオのフューメ占領が失敗に歸したとき、呆然として歸國した其の麾下の戰士『アルディティ』が擧つてファッシスト團に加はつたのである。フューメ占領の劇的情景は、イタリアの青年や知識階級の嗜好に大いに投じたので、これに對する同情はまた同時にファッシオに對する同情となつた。

ダヌンツィオの謂はゆるラティン主義と一緒に、後のファッシスティの有らゆる舞台がかりの「しぐさ」や台詞がはひつて來た。制服の『ボーイ・スカウト』主義、むやみにメダルを胸にかける習慣、古ローマ風をまねた奇妙な敬禮のしかた、色々の簡潔で力強い合言葉。それから『新ローマ帝國』の夢。そして此等は無反省で空想的で光榮好きなイタリア青年を惹きつけるに思ひの外大なる效果のあつたものである。

第五要素は大學生の注入である。それはトリノに於て勞資の爭鬪の起つてゐた間、大學長ヴィダーリ博士は其の學生を以て『自由王政擁護會』を組織し、專ら資本家側の利益を擁護したのであるが、この一團が大擧してファッシオに加つたのである。そして之を手始めとして王黨の大學生は續々來り加はるに至り、元來共和派だつたファッシスティ内部に奇妙な、またユーモラスた混雜を起さしめたのである。

更に第六要素としては紳士的の反動名群があつた。既述の如く一九一九年頃からコムミュニストの跋扈が益々傍若無人となるに從つて、當時なほ微々たる勢力をしか持たなかつたファッシストの武裝團體と雖も、脅かされた階級には唯一の賴もしいものであつた。即ち都市の富裕な家の子弟、退役將校、小獨立工業者、破産に瀕した自由職業者、各地方特にポー及びトスカナの大地主の子弟等は續々としてファッシオに加はつた。

更にまた南部カラブリアやシチリアでは、法王黨（公稱は『人民黨』）指導者の土地沒收の勸説に動かされて、貧農らはまづ小農地の佔取をやり始めた。之に對抗して此の地方の封建的大地主の子弟らは忽ち武裝してファッシ・に馳せ參じた。體力も氣力も旺盛な彼等は、忽ちにして榮養不良な、怖け易い小百姓を壓伏してしまつた。期月にして此の地方には

常時武器を携へた、規律のある、堅忍な青年闘士の幹部ができ上つた。そして彼等は遂にローマへまでも遠征に出かけたのである。

これら大地主の參加は同時にファッシスティの資金を極めて豐富にした。これ以來ファッシスティの活動力は俄に増大し且つ全國的となつた。加ふるに上記の如く、彼等は工業資本閥からも大なる財政的援助を受けてゐた。これはファッシスティに取つて極めて幸福なことではあつたが、同時に之あるがために、彼等が最初に掲げた『勞働者の利益尊重』の標語は、永久に唯の言葉として殘らざるを得なくなつたのである。その標語に曰く、『ファッシズムはボルシェヴィズムの絶對の敵であるが、勞働者の利益は飽くまで之を尊重する』と。ドイツに於ける『國粹社會主義』が、上半部だけを殘して下半部の『社會主義』をいつのまにか消失してしまつたやうに、右の標語も上半部だけは眞實であり且つ實行されたが、下半部の『尊重』は反語となつてしまつた。

二

以上に記した錯雜極まる各種構成要素の配列は、既にファッシスティに於ける統一的理想の缺除、ならびに其の解體の危險を雄辯に物語るものであるが、それにも増して皮肉なのはファッシスティの地方幹部組織の構成要素である。

ファッシスティ内部の秩序は絶對的命令服從の關係で成り立つてゐる。下級者は上級者の命令に對して其の理由を問ふことを許されない、その代り此下級者はまた自分の下級者をして、自分の命令に對して理由を問ふことを許さない。そしてファッシスタ中央本部の威令は、各地方支部の主長(『ラース』と呼んでゐる、それはアビッシニアの小諸侯の義である)が、本部の絶對命令に服して之がために忠誠の限りを盡すことによつてのみ保たれる。彼等は選擧に於て反對黨候補の當選を妨げるために一切の手段を取る、威嚇も、暴力も、時として殺戮さへも問ふところでない。また彼等は反對黨の言論や集會を蹈み躙らなければならない。同時に彼等は、かやうな忠誠の代償として、有らゆる公私の特權利權を公認又

は默認せられるのである。そこで此の重要な、同時に厄介な地位にある『ラース』たちの出身と性格を調べて見よう。

第一は、ムッソリーニに無我夢中に傾倒してゐる單純な反動家である。そして此の中には、動機に於て純眞な人たちが少なくない。

第二は、在來からの地方都市の政治ボスでファッショに鞍替へしたもの、無論以前は色々の政派のために働いてゐたものである。

第三は、曾てファッシスティの正面の敵であつたもの、即ちコムミュニストから寢返りを打つて來た連中である。彼等は始めから獨裁の教義に馴れてゐる。彼等は今日ではファッシスティ組織の基礎として重大な地位に在る。

また『ラース』たちの中には前科者が少くない。これに對して中流階級出身の健全分子から、謂はゆる『道德的反抗』が起されたことがあるが、その際ムッソリーニはファッショの『淨化』のために却つて此の潔癖な抗議者を驅逐してしまつた。そしてその理由は、彼等が絕對服從の性格に乏しいといふのにあつた。

これらの『ラース』達は、あらゆる方法を以て利權を漁つてゐる。一體イタリアでは昔から地方的ボスが民衆を苦めてゐたのであるが、それでも舊時代のボスには遠慮があつた。然るに今日の新しいボスたちは、それを露骨に憚りなくやつてのける。手には棍棒を持ち、背後には中央政府の軍隊を負うて。つまりイタリアには、暴君と惡代官との時代が復活したのだ。しかし彼等の此の特權を制限したならば、彼等は內部から反抗を起すであらう。ファッシスティの大なる弱點に一つはこゝにある。

(二) 陰謀の國イタリア――言論、團結の徹底的壓迫

ファッシスタ・イタリアは絶對服從の國である。それは文武官吏の間、更にファッシスタ黨員の間だけのことではない。反對黨員は勿論、一般民衆も亦任意條件に絶對服從を強ひられる。苟くも反對黨員がファッシスティに取つて不利益なことを言へば、事の間の眞僞と理否とに拘はらず、彼は直ちに「默ら」される。「默らす」方法には威嚇から虐殺までの有らゆる手段を含んでゐる。一九二四年六月に社會黨議員マッテオッティが、ファッシスティ政府の政策及び其の成績を忌憚なく暴露したがために、粗鋼を胸に突き刺されて「默ら」されたことは、尚ほ世人の耳目に新たなところである。

一般民衆は手も足も口も出せない。今日のイタリアは其の誇りとする晴れわたつた『イタリアの空』に似ず、殆んど類例のない陰欝な沈默の國である。そこでは人は街道に於て歡談することをも憚る。彼等は本心を打明けることを恐れ、互に警戒し合つてゐる。

一見したところイタリアは靜かである。民衆の反抗の徴候は表面に出てはゐない。然しながら地方的の小仕掛の暴動や其れに對する流血の彈壓は、實は屢々行はれてゐるのである。なぜ其れが一般化しないかと言へば、新聞が極度に嚴密苛酷な檢閲に服してゐるからである。ミラノの暴動をローマでは知らず、フィレンチェの虐殺はパレルモでは分らない。かくして民衆の反抗は常に部分的、一時的のものとして過ぎ去るのである。

要するに輿論は舌を縛られてゐるばかりでなく、耳をも塞がれてゐるのだ。そして少しでも動き出さうとすれば、背後には武裝暴力團が睨んでゐる。

二

ムッソリーニは議會に對しては始めから威壓的態度で臨んだ。然しそれは彼が執政の始めには、議會に於て極めて少數のファッシスタ黨員をしか有しなかつたためであるらしい。彼は執權最初の議會に於て次のやうな意味のことを述べた。

『自分が今日この壇上に立つのは、單に諸君に敬意を表する爲の形式的行爲に過ぎない。自分には諸君の好意を求める意

思は毫もない。

我國民中の優良な分子は、國家の一大事を決するために最近に於て二度議會外に超議會の政府を打建した。一は一九一五年五月の政變（議會は社會黨の勢力により非戰論に傾いてゐたのを國民運動によつて參戰を決した）であつて、一はファッシスティの革命である。超議會の政府に反對するのは其の人の自由である。しかし自分は、革命は其れ自らの權利を有することを主張する。

自分が聯合内閣を組織したのは（當時のムッソリーニ内閣には十五の椅子の中法王黨が二、國民黨及民主黨が各一、計四つだけ他の政黨が占めてゐた）議會の多數を制せんがためではない。現在の多數派を少數にすることは易々たることである。たゞ自分は黨派的感情に超越して、眞に祖國を救はうとしてゐる國民の援助を求めるのである。

自分は直ちに此の議會を閉鎖することができる、そしてファッシスティのみを以て内閣を組織することができる。たゞ自分は、少くとも此の當初だけは爾することを欲しなかつたのである。

吾人は國政に關する一切の權限の委任を求める。云々

かくて彼は議會から國政に關する包括的權限の委任（期限附の）を受けたのである。

次に一九二三年十一月の改正選擧法は驚くべき原則を立てた。それは全國を一選擧區として、最多數の投票數を得たる政黨の得票數が、總投票數の二割五分以上を占めた場合には、その政黨は當然に議席の三分の二を占め、殘る三分の一を他の諸政黨が其の得票數により按分比例で分け取るのである。ファッシスティが其の有らゆる手段を以てする干渉によつて、二割五分の投票を得ることは容易である。

第三に昨年（一九二六年）十月ザムボニーのムッソリーニに對する狙擊事件を機會として、かゝる犯罪を徹底的に彈壓するための『國防條例』を制定することになつたが、その法案の討議の日に、ファッシスタ議員の決議によつて反對黨議員全部（百二十人）とファッシスタ議員中の裏切者一人とを除名してしまつた。

かくしてイタリア國會は完全にファッシスティの委員會となつてしまつた。この次には恐らく此等の議員を實際上黨本部の指名にしてしまふであらう。

また之を前後して地方自治權は撤廢せられ、各地方には首相の任命にかゝる長官が、專ら國家事務として行政に當ることとになつた。即ちイタリアの立憲政治はこゝに終焉を告げたと言つてもいゝ。

三

次にファッシスティ勞働者に對する彈壓振りを見よう。

ムッソリーニ執權以來、大多數の都市及び地方に於ては、ファッシスタ社團以外の勞働團體の存在は事實上殆んど許されなかつた。極めて少數の、まだファッシスティの獨占的な支配が十分行き渡らない大都市に於てだけは自由勞働組合(自由といふものはファッシスティの管理に屬しない意味)はいくらか殘存してゐるが、これらは勞働協約を締結することも、同盟罷業をなすことも許されない。勞働協約の條項は悉くファッシスタ社團が之を定めて、一企業又は一職業に於ける全勞働者に強制するのである。

勞働者は好むと好まざるとに拘はらず、ファッシスタ社團に加入することを事實上強制される。それは大多數の地方では、これに屬しない勞働者は雇はることができないからある。ファッシスタ社團の內部組織は全然反デモクラティックであつて、役員は悉く上から指名されるのである。そして組合そのものは政治團體たるファッシスタ黨の指揮の下にある。

ファッシスタ社團は從來純粹の勞働組合ではなかつた。それはムッソリーニの言ふやうに『勞働者と技術者と雇主とが共同の訓練を以て調和的全體を形づくる』べきものであるのだ。即ち勞働者は、自分たちだけの團體を作る權利を事實上全く奪はれてしまつたのである。(この點は最近に改正されたが、それは後に述べる)

次に協同組合に就いては、自由協同組合は悉く破壞されるか又はファッシスティの支配の下に立つべく強制された。こ

れに反してファッシスタ協同組合は政府に對して種々の特權を要求してゐる。例へば消費組合の欠損補塡の國庫補助、組合積立金を擔保として使用することの認許等の如きこれである。そしてかやうに自由協同組合の大部が破壞されたことは、商人や投機者流に取つては何よりも好都合のことであつた。これに依つて彼等は、物價騰貴に對する最も有力な邪魔物を除き去ることができたからである。

メーデーは一九二三年以來廢止されてしまつた。即ち同年政府は次のやうな宣言を發したのである。曰はく、『五月一日の休日は之を撤廢する。そして同日の休業に關する雇主勞働者間の一切の協約は、そのまゝ四月二十一日（ファッシステの休日）に適用される』と。若しメーデーの示威行列をするやうな不逞勞働者があれば、警察とファッシスタ武裝員とは之を檢束する義務があり、また雇主はかゝる勞働者を解雇することを命ぜられるのである。

かやうな事項を並べたてれば切りがない。とにかく、かくの如きがファッシスティの約束した『勞働尊重』の内容であるのだ。

但し最近（一九二六年四月）の改正工場法によつて、『勞働者と雇主とは別々に組合を作ること』に改められた。然し之によつて勞働者の團結權は毫も擴張された譯ではない。即ち第一に、この改正法によつて自由勞働團體は單なる事實上の存在として、法律上には認められなくなつた。だから一切の公認勞働團體はファッシスティの直接指揮の下にある。第二にファッシスタ勞働組合と雖も其の有する機能範圍は極めて狭少で、賃金問題をすら取扱ふことができず、殆んど言ふに足らないからである。

四

ムッソリーニの團結壓迫の手は殆んど底止するところを知らない。始め彼は自己と妥協し得る他の黨派、又は自己に無害な團體に對しては寛大であつたのであるが、近來に至つて彼の態度は、かゝる團體に對しても著しく硬化して來た。例

へば彼は始めには共產黨をこそ敵にしたけれども、穩和社會黨に對しては寧ろ妥協的態度を取つて來たのであるが、上記の如く今では之をも全く彈壓してしまつた。またフリー・メーソンは始めからファッシスティに對して敵意を有せず、且つ有力なファッシスタ黨員にしてフリーメーソン員たるものが少なくないに拘はらず、彼は之をも盛んに迫害しつゝある。これ一つは苟くも社會主義的のもの又は自由思想的のものを根こそぎ拔き去つてしまふ考からでもあらうが、一つはファッシズム以外に假りにも異種の權威あることを許さざらんとするのである。ファッシズムは嫉み深い神である。ファッシスティの支配下に屬せざる一切の團體はイタリアの土地に存在することはできない。嚴しく言へば、ファッシズムに隨喜しない人間は悉く個々に切り離されてゐなければならない。

ゆゑに今日のイタリアでは、苟くも十人以上の團體は、その性質の何たるを問はず、官憲の監督に服することを肯んずるか、然らざれば解散させられるのである。その滑稽な一例としては、南部地方の或る村にあつた單なる供養のための讃背會が、地方主長から任命されたファッシストを其の幹事とするか、さもなくば解散せよと命令せられたことがあるといふ。

要するにファッシスティは、始には反對團體を擊滅して中立團體と妥協し、次にこの妥協の望みなきに至つて之をも彈壓し、次に自黨內部の抵抗分子を驅逐し、同時に一般民衆の耳目と口舌とを封鎖して、漸くイタリアを靜謐ならしめてゐるのである。そしてこれら一切は結局暴力を背景として行はれるのであり、また此の暴力の究極の出處は父家の財產を衛らんとする有產者子弟の努力にあるのである。

（へ）ファッシズムの教理

ファッシズムの教理は甚だ捕捉し難い。たゞ極めて明確なものは自由の否定、理論の否定である。換言すれば絶對服從と即時實行である。また謂はゞサンディカリズムを軍隊化したやうなものである。

『ムッソリーニは元來サンディカリストである。そして發生當初に於けるファッシスティは、ムッソリーニを始めとして時の失意者の集合であつたから、その思想は一切既存の事物に對する否定憎惡の傾向を持つてゐた。

その大多數が上述の如く欺かれたる歸還軍人であつた彼等は、國王、國家、教會、貴族、富豪等一切に對して憎惡を懷いた。彼等を欺いたもの、或は今や彼等の窮苦を白眼視して獨り得意の境遇に在るものは總て彼等の敵であつた。たゞ彼等は一方に於てはボルシェヴィキに容れられず、他方に於ては勳章を棄てることを欲しなかつたので、革命主義に走り得なかつたのである。

然るに彼等が次第に足場を得、各種要素特に大學生その他の教養ある罷工破りの參加を見るに及んで、彼等の教理も亦築き上げられざるを得なくなつた。彼等の實際活動上の必要は、從來の『一切否定』の態度を不可能ならしめた。歸還軍人の要求と、資本國の心理狀態と、反動的知識階級青年の思想とを理解し、同時に彼自身の現に置かれたる地位と、其の地位から定められたる使命とを自覺したムッソリーニーは、先づ第一に共産主義反對を中心題目とした。

共産主義者は法規を蹂躙して工場を荒し廻つた、ゆえにファッシズムは『法律及び秩序』でなければならない。從うてまた彼等は私立警察の任務を引受けなければならない。

然るにファッシスティが勝利を得てからは、其の武裝團は當然に解散せらるべき筈であつた。ところで解散を肯せずして踏み止まつた一團は、ファッシズムを以て『神秘的護法主義』と宣言せざるを得なかつた。そしてこの新しい理論は更に『暴力のための暴力の光榮』といふ觀念に展開せざるを得なかつたのである。

これからファッシスティのローマ進軍までの間は、『神聖なる「我之に當らん」主義』が流行した。その時の標語は『ア・

ノイ(貴族)」であつた。

然るにいよいよムッソリーニが天下を取るに及んでは、ファッシズムは「寡頭政治」であり、「精神的貴族政治」であらねばならなかつた。そしてこの政治組織に於ては、上級者は下級者に對して何等の義務を負はず、下級者は上級者に對して絶對服從の義務を負ふべきものとされた。

觀來ればファッシズムの正體は、その運動の各段階に於ける必要に恰度適應して、一切の矛盾を跳び越えて易々と變化してゐる。それは恰かも唯物史觀に於ける意義形態と實生活との關係を箱庭にして見るやうな感じで、失笑を禁ぜざらしめるものがある。

二

今日のファッシズムは國家の神聖、神秘、尊嚴、絶對性を極度に誇張してゐる。現に去る四月二十一日(一九二七年)のファッシスタ勞働祭に發布せられた『ファッシスト勞働憲章』の第一條にも、『イタリア國民は目的に於ても生命に於ても亦活動方法に於ても、それを構成する各個人又は其の集團のそれら(目的生命、活動方法)を優越するものを有する有機體である。即ち其れは一個の道徳的、政治的、經濟的の統一體にして、その完全なる實現は之を「ファッシスタ國家」に求むることを得る』と宣明してゐる。

然るに一九二〇年の始めに於けるポポロ・ディタリアの論說では、ムッソリーニは次の如く揚言してゐる『如何なる形態如何なる具現に於ける國家なりとも、悉く之を排斥せよ――昨日の國家も、今日の國家も、又明日の國家も、ブルヂョワの國家も社會主義の國家も。將に死せんとする個人主義に對して飽くまで忠實なる吾人にとつては、悲慘なる現在に於ても陰鬱なる將來に向つても、唯一個の信念を外にしては何物も殘らぬ。その信念とは何であるか、無政府即ち之である。』

又彼は初めは强固な共和主義者であつたのであるが、ローマ前進の直前に於けるナポリ大會に於て、初めてサヴォイア

王家に對して忠實なるべき旨を誓つた。それはローマ占領に際して國王及び王黨の反抗のために大事を過らんことを恐れたが爲めである。

ファッシズムに附着してゐる古ローマ復古主義が、單にダヌンツィオの空想から借りて來たものであることは既に述べた通りである。

然しながらファッシズムの教義の眞髓は、上記の諸點にあるのではない。寧ろそれは大規模に破綻した産業、深刻惡性なる一般的不景氣、それに伴ふ勞働者の生活標準の低下、勞働者の絶望的反抗、一口に云へば大戰後少くなくとも一時究極まで行き詰つた階級闘争の局面を、勞働者側の犠牲に於て今一度打開するには、强力なる暴力團の組織を以てするのが一番近道だと云ふ教訓にあるのであらう。

(ホ) ファッシスティ成功の理由

ファッシズムの成功（單に政權を把握し得たといふだけの意味に於ての）の理由は以上の記述によつて自ら明らであらうと思ふが、便宜上重ねて要約してみれば左の如くであらう。

（一）崩壞に瀕した工業資本閥及び沒落の恐怖に驅られた大地主が、ファッシスティを其の局面轉回の道具として利用し之に十分の財的援助を與へたこと。

（二）ファッシスト運動が一般有産階級の利益に合致したこと。

（三）同じく歸還軍人の感情及び利益に合致したこと。

（四）政治上の各既成勢力がファッシスティを利用し得るものと考へ、その成育の途上に於て之を妨害しなかつたこと。

（五）歴代の政府の軟弱は不適法な團體運動（共産黨もファッシスティも）を妨げなく繼續し得しめたこと。

（六）戰爭に[illegible]つたるファッショ・イタリー[illegible]、[illegible]
てゐる點が一般の反感と不安とを買つたこと。
（七）社會黨が勞働者に對し徒に多くを約束して何物をも與へることができず、殊に前次の大運動に失敗して勞働者の間に信用を失墜し、勞動者また此間に氣力を消耗したこと。
（八）ムッソリーニが元來社會黨の而も左翼の領袖であり、且つ其の機關紙の編輯をしてゐたので、敵の戰術や弱點を知悉してゐたこと。
（九）復古的、國粹文化的、愛國的、傳奇的、英雄的の色彩が青年を眩惑したこと。
（十）急激な、短時間の息もつかせないやうな行動が、人心に一種の催眠術的イリュージョンを起さしめたこと。（かゝる效果はその行動がテロリズムを伴つてゐる場合に一層大きいものである。）
（十一）多年政府の薄弱、政情の不安、絶え間なき擾亂に惱まされた國民の間に、何は兎もあれ强固なる政府を歡迎する心が湧き出たこと。
然しファッシズムの將來に就いては、それが到底永續すべきものでないことは上來の記述によつて既に明かであらう。

三　ドイツの反動運動

現在イタリアに次いで反動思想・反動運動の旺盛なのはドイツである。そこには數個の反動的政黨や反動團體があるが、一般に一括してドイッチエ・ファッシステン（獨製ファッシスト）と呼ばれてゐる。今其の代表的もの一二に就いて、その發生並びに發展條件を觀察してみよう。

(イ) 反動的政黨

一

反動的政黨の第一は古くからあるドイツ國民黨であつて、主としてプロイセンの貴族卿紳(ユンカー)乃至大地主などの階級的利益を代表してゐる。そてし帝政時代に於ける政權の中心は此の階級にあつたので、官僚的政治家、大官、將軍等を初め、謂はゆる宮廷の友人たちは多くはこゝから出てゐたのである。

この階級の權勢の據つて立つところの基礎は、帝政であり、傳統であり、謂はゆるドイツ至上主義である。然るに此等一切のものは革命と共に失はれた。これに伴つて彼等の權勢も亦地に墮ちた。ゆゑに彼等は何物を賭しても――、ドイツ國民の運命を賭しても――、帝政を復活しなければならぬ。如何なる犧牲を拂つても共和政體と、社會黨と、平和主義とを破壊しなければならぬ。これは彼等の階級的利益であり、同時に幸にも愛國的義務である。

更に幸にも、彼等は此事を企てるに就いて、國民の自尊心と其の現前の實生活上の苦惱とに訴へるの便宜を有してゐる。即ちヴェルサイユ平和條約は、彼等に取つては用ひて盡きざる攻撃材料の泉であるのだ。何となれば、柔順にして直覺力の鈍いドイツ人は、その從來の指導者たる軍閥官僚の教へるままに、多年ドイツの優越、特に其の軍事的優越を信じて疑はなかつた。そこで此等の惱むべき人民をして、ドイツは決して戰爭其物に敗けたのではない、全く革命のために敗けたのである。そして革命政府の賣國的外交のために、ドイツに取つて致命的であつたところの彼のヴェルサイユ條約を結ぶを餘儀なくされたのである。と斯う思はしめることは、彼等舊軍閥官僚から見れば、あの大戰爭に關する自己の責任を回避する上に於ても、社會民衆黨を攻撃する上に於ても、また國民の自尊心に投ずる上に於ても、一石三鳥を打つ底の好都合であるからだ。即ちここに、今日ドイツ人の嘗めてゐる有ゆる苦惱有ゆる屈辱の原因は、要するに彼の呪ふべき

ヴェルサイユ條約にある、そして其のヴェルサイユ條約に生命を與へ[illegible]ものは[illegible]であるといふ[illegible]のである、即ちドイツの敵は社會黨であり共和制である、といふ至極簡單な[illegible]であつた、この[illegible]に、原因結果の連鎖を舊特權階級のみの都合のために任意の一點で打切つたものであるが、[illegible]いでゐる人々には、手近いところにある直接な責任者だけしか眼につかない。そこへ有識階級、殊に專ら國[illegible]教育で育つて來た中產階級の青年達は、謂はゆるドイツ文化に對して至上の尊敬と誇りとを持つてゐる。そして此のドイツ文化なるものは、彼等の頭の中では帝政時代の光榮と結び付いてゐる。かういふ感情がまた反共和主義、反社會主義の方に投じ易いのは自然である。加ふるに多數國民の胸中に燃えさかつてゐるところの、フランスに對する敵愾心がある、かくして國民黨は、一方には民衆の經濟的社會的不安に訴へ、他方には其の國民的自負心敵愾心を煽つて、自己の地步を有利に導かうとしてゐるのである。更に今一つ國民黨（を始めとして一般反動派）の最も好んで利用する切札にユダヤ人問題がある。即ち國粹を破壞するユダヤ文化、社會主義の發病者保菌者たるユダヤ人、凡そドイツ的なる一切を毒するユダヤ式（と彼等は考へ、又考へずとも宣傳する）を排擊することは、彼等に取つて二重三重の利益があるのである。

二

第二は大ドイツ國粹社會主義自由黨であるが、右のドイツ國民黨がプロイセンを中心としてゐるのに對して、これはバイエルンを根據とするものである。上述の如くバイエルンに於ては、ドイツ政治革命に引續いて共產主義革命が起り、一時赤色恐怖の時代を現出したが、この混亂無秩序の間に種々の武裝的自衞團體が成立した。そして此等の團體から政治的に發展して來たものに、ドイツ國民自由黨と國粹社會主義勞働黨との二つがあつて、いづれも反マルクス主義、反ユダヤ主義、反共和主義、反平和主義を標榜してゐる。それが一九二四年八月に合同して大ドイツ國粹社會主義自由黨と稱し、ルーデンドルフ將軍を總帥に仰いだのである。そして此の合同會議の日に於ける示威運動に際して、指揮者の一人が群集

に對して試みた演説の一句は、如何に此の一派の運動が武斷獨裁の傾向と、英雄主義的熱狂と、白色恐怖の色彩とを多分に有してゐるかを示してゐる。曰く、私は今ドイツの大將軍に對して、裏切者たる政黨と政府とを訴へようと思ふ。吾人は最早忍ぶことが出來ない。若し吾人の指揮者たるルーデンドルフが吾人を呼ぶならば、吾人は死を決して十一月革命の謀反者を國民裁判の前に引ずり出すであらうと。

此の派の立場は上記によつても解るやうに、大體に於てドイツ國民黨のそれに酷似してゐる。然しながら其の成立事情に於て反革命的の一時の昂奮に驅られた點があり、國民黨のやうな强固な階級的根帶の上に立つてゐるものではない。從うて其の政綱の如きも、極めて强烈なる色彩を以て人心を刺戟し眩惑せしめるものでなければならぬ。その一はドイツ民族の開放、統一、膨脹の思想であり、今一つは例の國粹社會主義の思想である。即ち政治はどこまでも獨裁的軍國的にやるが、國民生活に對しては大に社會主義を加味した政策を行ふ、但し其れは現存の階級的差別を認めた儘の社會主義だといふのである。彼等の統率者の一人のヒットラーは言ふ、社會的階級といふ觀念はユダヤ的マルクス的の發明に過ぎない、實は民族的といふことと社會的といふこととは同一の觀念であるのだと。かくして國粹の二字のみが殘されて、社會主義はどこかへ吹き飛ばされてしまつた。そして斯くなるのは斯かる主義の當然の運命である。

上述の如く彼等は元來武力團體から出發し、議會制に對して强い傾向を持つてゐたところへ、イタリアに於けるファッシスティの成功に眩惑せられたので、武力的反動革命によつて一擧に事を決しようといふ決心をいよ〳〵固めた。かくして一九二三年秋にミュンヒエンに於て旗擧をしたが、脆くも敗れて先年のカップ暴動以上の悲喜劇に終つた。そしてそれ以來餘り勢力が振はない。但し其の地盤は大部分右の國民黨に吸收せられたのであるから、反動派全體が衰微したのではない。

（ロ）その他の反動團體

一

政黨以外の反動團體は革命後随所に現れた。元來ドイツには昔から多少秘密的色彩を帶びた團體が多かつたが、それは此の神秘好きなロマンティックな國民、特に其の青年たちの別段意味もない平穩な趣味から生れたものに過ぎなかつた。即ち彼等の間には數多くの學生クラブ、體育團體、山野の自由と新鮮とを喜ぶ定期的漂浪の團體などが數多く存在したのである。ところが革命以後にあつて、彼等のロマンティシズム乃至ミスティシズムの傾向は、その鋒を帝政に對する回顧の方に鋭るやうになつた。そこへ帝政時代の將校其の他の手が延びたので、彼等の團體の中に次第に謀反的秘密結社の形を取るものが生じた。彼等にとつては共和政治や社會主義は凡俗でありプロザイックでありユダヤ的である。帝王政治や貴族主義（尤も彼等の解するところでは其れは賢哲主義超人主義であるのだが）は光榮でありロマンティックでありドイツ的である。かやうな彼等の感情は、これに當然伴ふ色々の傾向と共に、上記のドイツ國民黨の利害と一致し、かくして彼等の秘密結社は國民黨のプロパガンダの機關となり、更に進んでは其のテロリズムの道具となつて幾多の顯著なる政治的暗殺を行ふに至つたのである。

二

反動團體の中で最も有名であり、革命後數年の間最も盛んに活躍したのはオルゲッシュ、コンスール團、國粹社會主義團等であるが、茲では各種團體に關する槩說を省き、代表的の一例として上記のオルゲッシュに就いてだけ其の成立事情を述べよう。

オルゲッシュも亦革命後の混亂から生れた武裝團體である。ドイツの十一月革命後、引き續きバイエルンには赤色革命

が起り、一九一九年四月ソヴエート政府が樹立されて、それが又僅か一月にして瓦解した。この瓦解前後に於ける不安擾亂は名狀し難いものがあつた。それはまことに『ミユンヒエンの恐怖期間』であつた。そして其れは一般に、東部地方から來たボルシエヴイキが土着人民の一部を引きずり込んでテロリズムを行はせたのだと考へられた。そこで之に對抗するために、バイエルンの各地方人民によつて民衛軍が組織された。民衆が政府の保護力に信頼することが出來なくなると、いつでも同樣の現象が生ずるので、そして此の事は政府が薄弱無能な場合か、又は餘り露骨に偏頗不當の態度を示す場合かに起るを常とする。

オルゲッシュ武裝員の大部分は中産階級、沒落したランティエ、官吏等の子弟であつて、社會民主黨の無能に失望し、共産黨の脅威に憤激した青年であつた。

不規則な民間反動團はその後ドイツでは次第に影を潜めつゝあるが、それは必ずしも反動運動そのものゝ衰滅を證するものでない。唯運動形式が整理され、公黨化されつゝあるのである。

（八）ファッシズムと民衆

イタリアに於てもドイツに於ても、ファシスト運動は其の眞實の動機が民衆の眼から隱されて、少なくとも一時的には受けが善い。それは何ういふ譯であるか。

一體反動はいつの時代でも、一時的には非常に早く勢よく擴がる傾向をもつてゐるものである。そして反動勢力は、これを急進勢力に比べると、その結束力の強さを常とするのである。なぜならば、急進的思想乃至運動には、その新たに建設せんとする社會及び其の實現のための手段に就いて種々の異なつた態度があるを免れない。謂はゆる全無産階級の統一戰線を張ることは、事實殆んど不可能である。且また、とにかく現狀を打破しようといふのであるから、現組織から直接痛

切な害惡を明白に受けてゐる少數の人だけしか、積極的には此の運動に參加しない傾向がある。況や弱い人にとつては、今まで住み慣れてきた現存秩序を破壞されることは、何となく不安である。それだから強き勢力にはつき從ることが多い。

然るに反動の方は現狀を維持しよう、此の儘で行かうといふのであるから、極めて簡明である。たとへ其の動機は種々異なつてゐても、運動としては直ちに結束してしまう。加ふるに反動は常に既存權力を背景としてをり、且つ現組織によつて維持されてゐるところの一切の財力と武力から支用を受けてゐる。そして多數民衆は、實際には現組織によつて害惡を與へられてゐても、容易に其の事を自覺しない。だから多大の努力と犧牲とを要する革新運動には、なかなか參加しようとはしないのである。且また何かを持つてゐる者は、たとへ其れは言ふに足らぬチツポケなものであつても、それを失ふことを何よりも嫌ふ。かくして彼等は、或は安きに就いて無爲を續け、或は逆さまに反動に與みするのである。

以上は反動と民衆との一般的關係であるが、次に現在の反動思想乃至運動に就いて見ても、かなり廣範圍の民衆が之を歡迎し、又は少くとも容認してゐるのである。そして其れには大凡次のやうな理由がある。

第一には、世界大戰の末期頃からの、嵐の樣な社會不安革命的昂奮の前に、資本家階級は、一時は如何ともし難い運命であると窃かに諦めかけてゐたのであるが、ひとたび社會黨側が破綻を示し、反動勢力が崛起して意外に優勢な姿を見せると、資本家階級は狂喜して之に縋り付いた。彼等は其の偉大なる財力を以て豐かに反動勢力に培つた。かくして反動が發展するに從つて、社會主義的傾向の下に不利益を受け又は不安を感じてゐた中層階級者が、汪然として反動派の方に流入するに至つたのである。そしてイタリアやドイツの場合では、革命派が不必要に謂はゆる小ブリチユワを威嚇した形がないでもない。

一體中層階級特に知識階級の沒落は、近代の爛熟した資本主義社會に於ける普遍的特徴の一つであるが、戰後に於て此の傾向は著しく急激になつた。その直接の原因は、戰時及び戰後の經濟的激動によつて增大した富の不平均、重工業の勃

與によつて起つた資本の不自然なる集中、貨幣價値の下落による勤勞所得者の購買力の激減等の種々の事情にあるので、知識階級の苦痛も勞働階級の苦痛も共通の原因から生じたものであるのだが、勞働階級の革命的昂奮の前に於ては、知識階級の利益は跳ね除けられ、少くとも見落されてしまふ。謂はゞ共同の敵を有する戰友たる勞働階級から、顧みられないといふ姿になつたのである。そこで彼等は逆さまに反動派の傘下に馳せ參じたのである。

第二には、これはドイツ及びイタリアに於て特に著しい事情であるが、社會黨の政策の失敗によつて、社會主義運動の指導者等は次第に勞働者側の信用をも失ふに至つた。勞働者は指導者の言ふがまゝに動いて來たが、その約束された幸福はいつまで待つても落ちて來ない。食はないで運動を續ける譯には行かない。指導者の笛吹くまゝに踊つて遂にヘトヘトに疲れてしまつたが、御褒美は一向に與へられない。こゝに於て或は氣力がなくなつて改造運動に冷淡となり、或は反動派に寢返りを打つ、といふやうなものも出て來たのである。

第三には、戰時に於ける極度の緊張と、戰後の生活上の苦痛とによつて、人心は絶望に陷つてしまつた。殊にそれはドイツに於て最も著しいのであるが、今やドイツ人は、稼いでも其の結果は皆戰勝國に捲き取られてしまふ。敵國に御奉公をしてゐるやうなものである。その他の諸國でも、物價は高くなる、勤勞所得は實質的には減る一方である、そして惡性の失業はいつ救治されるといふ見込も立たない。一般勤勞者の生活情態は際限なく惡化して、今や殆んどドン底に陷つてしまつた。かういふ情態から如何なる風潮が生れるかといふと、一つは放心的の冷淡である。どうでも宜い、どうなつても構はない。社會や國家のことには何の希望も興味も持たない。積極的の行動には、それが如何に些細な容易なことであつても、一切携はらないといふことになる。今一つは享樂主義、刹那主義の傾向である。一體人間が現前の欲情を制禦してゆくのは、將來に希望を持つからである。希望を失つた者に節制はない。それだから大震災直後の東京に現れたやうに、インフレーション時代のベルリンの市中は酒場と踊り場で一杯になつた。そして其の反面には、人心窃かに亂を思

ものである。この國では[illegible]たない。[illegible]の上に、[illegible]、[illegible]の
ものが現はれば、飛び付くやうにして之を迎へる。内容は何であつてもよい、[illegible]、[illegible]、[illegible]
とでさへあれば宜いのである。だから一方には左傾過激派（即ち共産派）もチリチリ勢を得て来るが、右傾国粋派（即ち反動派）も勃興するのである。

第四には、世の中が住み悪くなると、その原因を悉く最近の變革に求めるのは、一般の人情である。ドイツに就いて言へば、何も彼も革命後いけなくなつた、帝政時代は斯うではなかつた、一切の禍害は革命が産んだのだと思ふ。そこで人心は復古的となり、過去の幸福と光榮とを過大に囘想して、その結果反動運動に惹きつけられるやうになるのである。即ち、民衆といふものは案外輕卒で且つ粘着力のないものであつて、左右兩極の間を時計の振子のやうに彷徨してゐるものである。

四　ファッシズムと日本の情勢

私は當初本篇に於て、現在の日本にファッシスト運動の起るべき乃至其の成功すべき條件が具はつてゐるか否かを検討する積りであつた。然しヨーロッパに於けるファッシスト運動の記述のために豫定の紙數より遙かに多くを費してしまつた。ゆゑに此點に就いては稿を改めて論究することにして、たゞ左に二三の點を指摘するに留めておから。

現在世界の一般的反動は、全體として沒落に向つてゐる資本主義の苦悶多き反撥であると見ることができよう。然しながら急激な、大規模な、特殊強烈な形で現れたあのファッシスト運動は、大戰と革命とによつてその特殊容相を與へられた一時的變態現象である。これは何等かの原因による資本の急性的脅威か、又は革命的運動の挑發的刺戟なしには、單なる意識的模倣によつて有力に發展せしむることのできるものではない。のみならず、右の二大動因以外に就いても、イタリ

アやドイツに於てあの運動を發生乃至成功せしめた諸條件は、その大部分を我國に於て缺いてゐる。

然しながら我國は無産者の階級的結束未だ甚だ微薄であつて、而も小ブルヂユア乃至準無産者の階層は、その數に於ても力に於ても輕視すべからざるものがある。一方に於て資本閥は、最早好むと好まぬとに拘はらず、意識的に攻勢防禦の態形を取るべく迫られつゝある。そして此の間に於て、ファッシスト的宣傳は近來次第に深く行き渡らうとしてゐる。

凡そ或る事が成功するか否かと、それが生起するか否かとは別問題である。とにかくイタリアは次のことを敎へた。高度に發達した中央集權組織、軍隊と警察と通信機關とが悉く中央政府の手にあり、而してこれら一切の活動が高度に集中的組織的になつた時代に於ては、政治力を以て社會進化の過程を相當の期間變態的に縛つて置くことは意外に容易である。そして之がためには、嚴格なる新聞の檢閱、團結權の否認、公認武裝暴力團の組織、これのみにて足るといふことを。近代の謀反は術策だけでは行はれない、宣傳と討議とは其の缺くべからざる手段であるのだ。

かのファッシスティの追隨者が、之を模倣することによつて、歷史の必然的展開過程たる前進的社會運動を長く阻止し得るやうに夢みるのも笑止であるが、有力なる組織的反動運動が、前進運動を頓挫せしめ、之に重大なる歪曲と犧牲とを强ひることもあり得るを思はず、徒らに焦燥苛辣なる定式的革命戰術を振り廻さうとするア・プリオリ的辯證法も考へものであらう。

行政整理、税制整理

牧野輝智

(一)

政友會が在野當時實行を公約した幾多の案件中に、行政整理と税制整理とがある。現内閣は此の兩整理を實現するためと稱して、行政制度審議會と税制調査會を設置した。此の兩調査會を設置した趣旨として田中首相が聲明するところは斯うである。曰く『我國の行政諸般の制度を見るに數次の整理を經たるに拘らず、舊態依然として往々社會の實情に副はぬ憾みがある。畢竟地方に於て其の運用に慣れず、事ごとに中央の指揮を受けたる時代の法規と、随時其の必要に應じて局部的に發達せる制度と相依りて、因襲の久しき繁文縟禮の弊に陷り、今日にありては複雑多岐、行政事務上の能率増進を妨ぐることが少くない。依つて此の際汎百の制度に一大改善を加へ、行政の系統並に連絡を正し、執務の簡便を圖り、殊に中央集權の弊を打破して、地方自治權の完整を期することが刻下の急務である。政府が今回行政制度審議會を設けたのは此の趣旨に基き行政組織の刷新を企圖する所以である』。是が即ち田中内閣の行政整理の趣旨である。更に曰く『我國の税制は既に前後二回の整理を實行されたけれども、産業立國の方策を確立し、地方分權の趣旨を發揮し、國運の伸張を期するためには、一層國税並に地方税制の整理を圖るの必要がある。政府が今回税制調査會を設けて、地租の地方委讓を中心とする税制の改革方法を審議せんとするは、即ち一面國民の負擔の適正を期すると共に、地方自治體に獨立の財源を與へ、其の基礎を鞏固にして圓滿なる發達を促進せんが爲である』。是が即ち現内閣の税制整理の大體方針を語るものである

憲政會内閣では行政整理は大正十四年に、税制整理は大正十五年に終了した。此の上整理を行ふ餘地はないと稱してゐた。が吾人は憲政會の行政整理税制整理には何れも多大の不滿足を感じてゐるものであるから、既に憲政會内閣に行政税制整理の意嚮がないとすれば、新なる内閣の實現によりて行政税制を更に刷新し改善するの機會を待つの外はないと考へてゐた。此の見地からいへば憲政會内閣の倒れ、新内閣の成立したことは兩制度刷新の上に新しい希望を與へるものと稱することが出來やう。

（二）

私は是から現下の兩整理問題を論ずるに先ち、過去に於ける我國の行政整理、税制整理が如何なるものであつたかを一瞥して見たい。十數年前のことは暫らく略して歐洲大戰後からのことを考へて見る。尤も歐洲大戰中の所謂財界好況時代には行政組織は擴張されるばかり、財界は膨脹するばかりであつた。其反動として大戰後には行政財政税制の大整理を行ふことがいよいよ差迫つた急務となつた。而して先づ是に手を染めたのは加藤（友三郎氏）内閣であつた。是が即ち大正十一年（豫算制度では大正十二年度）の軍備整理、行政整理、税制整理である。

當時の行政整理は大したものではなかつたが、ワシントン會議の決定に基づく海軍縮小の實施は特に注目す可きものであつた。此の軍備縮小及び行政整理の實績を金額にて示せば左の通りである。

加藤（友）内閣の軍縮及行政整理

一、**軍備制限及び整理に依る減額**

（イ）節約額　千圓

陸軍	經常部	二〇、〇六四
	臨時部	三、七九九
	計	二三、八六三
海軍	經常部	一九、〇八三
	臨時部	八一、〇七〇
	計	一〇〇、一五三
合計		一二四、〇一七

（ロ）繰延額　千圓

陸軍臨時部	三、七三九
海軍臨時部	三、五六三
計	七、三〇二
兩者總計	一三一、三二〇

大正十二年度に於て整理捻出した額は右の通りであるが、同年度に於て軍縮に關聯して必要な經費の增加が

陸軍臨時部	三、三四七千圓
海軍臨時部	五六、九七四
合計	六〇、三二一

あつたから差引國費の節約額は七千九十九萬七千圓であつた。

二、行政整理に依る減額

（イ）節約額

經常部	三三、四三七千圓
臨時部	六、三〇八
計	三九、七四五

（ロ）繰延額

臨時部	二七、三二三
行政整理兩者總計	六七、〇六八

右の兩整理（軍縮及び行政整理）に就て、眞の節約とは稱し難い繰延額を除外し、所謂節約額と稱せらるゝものに就てのみ見ると軍縮の分が海軍陸軍を通じて一億二千四百萬圓、行政整理の分が三千九百萬圓合計一億六千三百萬圓の節約であつた。前にも一言した通り行政整理の額は僅に四千萬圓足らずであるけれど、ワシントン會議で決定した海軍縮小の實行が是だけの節約金額を生み出さしめた次第である。次に同内閣で行ふた税制整理の大要 [illegible]

加藤（友）内閣の税制整理要綱

一、所得税　銀行預金利子を總て第二種所得として課税することとし、又保全會社の所得に關し特別の規定を設けて脱税を防止する事にした。この爲の増收見込　六、八九〇、〇〇〇圓

二、營業税　各營業を通じて其の税率を改正し、又所得皆無の場合には課税を全免することにした。是等の改正に伴ふ減收見込高　一九、八三〇、〇〇〇圓

三、石油消費税廢止　之れに依る減收　六五〇、〇〇〇圓

四、印紙税　課税最低限を引上げた外に各種證書又は帳簿に對し税率を改正したこの爲の減收見込　六八〇、〇〇〇圓

上記の軍縮、行政整理、税制整理を基礎として編成された大正十二度の一般會計豫算は十三億四千六百萬圓で、前年度のそれに比し、一億三千六百萬圓即ち約一割の減少を示してゐる。我國の歳計は大正四年度以來年々増加一方であつたが、此の年

久しぶりに前年度より一億三千萬圓も減少された豫算案を編成した。是は行政、税制整理の結果ではなく、偶に海軍縮小の結果であつた。併し同年度の豫算も同年九月大震災の勃發により大なる追加豫算の必要が起り、結局大正十二年度の決算は十五億一千一百萬圓に上り前年度より却て多大の増額を實現し、軍縮や行政税制整理の効果を積極的に現はすことは出來なかつた。

當時の税制整理に至りては極めて部分的の姑息なる改正であつて、實は税制整理と云ふには當らない程のものであつた。營業税法の改正が主なるもので、其の爲め二千萬圓近くの減收がある筈であつたが、別に所得税法に於て保險會社の脱税を防止する途を講じたから、結局歳計上の收入減豫想は一千四百萬圓程度のものに過ぎなかつた。要するに加藤（友）内閣當時市來藏相が作製し實現させた税制整理は、殊減税の方面は勿論、増税の方面も何人が見ても無理とは思はないものであつたけれども、市來式とでも云はうか、用心堅固を第一とした整理であつたから、其規模は實に狭く小さく、税制整理など稱するよりか、寧ろ税法上の小改正と稱した方が當つてゐると思はれた。

（三）

大正十二年九月に成立した山本内閣は僅かに四ヶ月で倒潰した。清浦内閣も五ヶ月で總辭職となつた。兩内閣とも行政整理や財政整理には何等關與する所がなつた。大正十三年六月成立した加藤（高明氏）内閣は憲政會在野當時の主張に從ひ、行政整理財政整理、税制整理を實行すべきことを聲明した。而して先づ大正十四年度豫算に於て行政整理、財政整理を實現せしめ、大正十五年度に於て税制整理を實行するの順序を採つた。是が即ち憲政會内閣の行政財政整理及び、税制整理であつて、加藤（友）内閣當時水野内相、市來藏相等が中心となつて作製した前記の大正十二年度の行政整理税制整理に比すれば遙に大規模のもので、税制の如きも此の程度改正であれば、更に何税制整理の實現と稱して何等不都合はなかつた。併し是は前の整理との比較に於て云ふことであつて、其内容が推賞するに足る程度のものであつたと云ふ意味ではない。是も計數を中心として加藤内閣の各整理が如何なるものであつたかを簡單に説明すると左の通りである。

憲政會内閣の財政行政整理

一、節約額

經常部　五四、六〇二千圓

臨時部　一三、四五八
計　六八、〇六一

二、繰延額

經常部　八四、二一五

右合計　一五二、二七六

内｛經常部　五四、六〇二
　｛臨時部　九七、六七四

制度整理の主要なる種目

（一）會計及び各省局課の廢合

（イ）臨時國庫證券特別會計廢止

（ロ）臨時軍事費特別會計廢止

（ハ）在外國帝國專管居留地特別會計廢止

（ニ）陸軍營繕費補充資金特別會計廢止

（ホ）朝鮮醫院及濟生院特別會計廢止

（ヘ）帝國大學特別會計の廢合

（ト）大藏省主税局の經理課、理財局の秩錄課等廢止

（チ）農商務省食糧局の廢止

（リ）駐米財務官廢止

（ヌ）其他省略

（二）會計及局課新設の主なもの

（イ）教育改善及農村振興特別會計新設（補助貨改鑄益金一億三千萬圓を基金として）

[illegible]

[illegible]

憲政會内閣の税制整理

一、整理の方針　租税負擔の均衡を圖るを第一の趣旨とすること、租税收入に增減を來さない範圍にて整理を行ふこと

二、改正を行ふたるもの　所得税、地租、相續税、酒税、織物消費税、骨牌税、關税（及び煙草價格の引上）

三、新規に設けたるもの　營業收益税、資本利子税、清涼飲料税

四、廢税を行ふたるもの　營業税、通行税、醬油税、賣藥税、

大正十三年度及び十四年度の兩加藤内閣の行政整理を通觀すると、前の整理は官廳の廢合には僅に國勢院を廢したゞけで、其他は各省に亘り天引的に經費の節約人員の減少を行はしめた。後者にありても官廳の廢止は僅に農商務省食糧局の廢止位のものであつたが、其の際特別會計卅七を整理して卅一に減少したことは有意義の改正であつた。併し私をして云はしむれば憲政會内閣の行政整理は財政整理、税制整理よりも實に不徹底のものであつた、特に行政組織の系統を正し、是を出來得る限

り單純化することに於て何等見る可きものがなかつた。又經費緊縮の點から見ても、今に法外に膨脹してゐる行政費の節約が極めて不十分であるとの非難を免れる譯には行かなかたつ。私は此の點を少し詳細に述べて見たい。若し此ことを述ぶることは即ち田中内閣の行政整理に對して私の希望を陳ぶる所以であると信ずるからである。

(四)

行政整理に就て眞に意義ある成績を擧げやうと思ふならば第一に行政整理委員として現行の制度に囚はれないやうな人を官吏以外から任用し、是に對し十分の實行權を與ふることが肝要である。從來整理委員と云へば多年官場生活のみをつゞけ現行の行政組織、行政の運用が如何なる點に根本的の缺陷あるかを悟らない人のみが任用されてゐる。是等の人に依り現制の缺陷を根抵から丟ぐり取るやうな大改革の出來やう筈はない。今回の行政制度審議會の委員は必しも官吏の古手ばかりといふ譯ではないけれど、田中首相を會長とし閣僚や兩院議員を委員とするといふ遣方は從來の型と全然同一である。此のやうな組織で果して行政組織を一新するやうな整理が實現し得るであらうか。英國が大戰後に行政上の大整理を實行するために設けた有名なるゲデス委員會の如きは、委員數は僅に五人に過ぎなかつた。而して此の委員會は全く官吏以外から擧げられたが、其成績は大に見る可きものがあつた。同委員會の組織は左の如きものであつた。

委員長　エリツク・ゲデス (Eric C.Geddespe)
委　員　インチケープ (Incheat)
委　員　フアーリングトン (Fairinglon)
委　員　マクレー (J.P.Maclay)
委　員　グラネツト W.G.Granet)
幹　事　スチール (G.A.Steel)

此の委員會は一九二一年八月國費節約調査機關として政黨に關係なき實業家ばかりから任用されたもので、政府の此調査會に對する要求は、一九二二年——二三年度の經常議定費五十二億八千萬圓から約十億圓の節約、即ち國費約二割の節約案を作製せしむることであつた。ゲデス委員會は數ケ月に亘り愼重なる審議を重ね、前後三回の報告書を提出した。此の報告書にて行政改革の具體案を陳べ是による節約金額は八億六千八百萬圓餘であることを示した。此の金額では政府の要求した十億圓の節約には尚ほ足りなかつたが、委員會に華府會議の結果に基く海軍費節約が一億三千萬圓以上に達する譯であるから彼是を合

せ一九二二―一二三年度の豫算で十億圓の節約をなすことにし度くたいと決定した。斯くて五十一億圓の經常支出に對し十億圓の節約案を立て何等情弊や因襲に囚はれない所謂ピッチレス、カットを加へた次第であるが、當時タイムス紙の如きは此案を納税者のマグナ・カルタなどと稱して賞讃を表した。

ゲデス委員會の遣り方を聞いて我國でも故野田卯太郎氏などは、憲政會内閣が行政整理を企てた時、役人を委員として整理案を作製させても面目を一新するやうな整理案の出來る望みはない。我國でもゲデス委員會のやうなものを設けてやらせたらよからう」と語つたことがあつた。英國のゲデス委員會は既に五年前のことで、少し古びた前例であるけれども、私は行政整理の聲の起る度毎にゲデス委員會のことを想出さずには居られない次第である。

（五）

さて田中内閣の行政整理なるものは果して何をなさんとするであらうか。私は前の兩加藤内閣の行政整理が、表皮的の改革に過ぎなかつたことに考へ、制度の内容及形式に於て大に改革の餘地あるは勿論、行政費の如きは尚十分節約の餘地があることを信ずるものである。大正十二年度の加藤（友）内閣の遣り[illegible]行はれたことであるけれども、これに於[illegible]内閣と[illegible]立たない内に[illegible]大正十二年に大震災があつたことも原因してゐるのであらうが、大正十二年度と十四年度と兩回の行政整理があつたけれども、行政費の總額は寧ろ増加一方である。

行政費増加の狀勢（單位千圓）

	經常費	臨時費	計
大正十二年度	四六六、三三三	三九二、四七七	八五八、八一〇
同 十三年度	五五九、一一〇	三二二、七〇三	八八一、八一三
同 十四年度	四九二、五二四	三八七、八七六	八八〇、四〇〇
同 十五年度／昭和元年度	五四七、九四〇	四〇七、二一一	九五五、一五一

田中内閣の行政整理の趣旨を本文の劈頭に掲げた田中首相の聲明から忖度すると（一）行政系統並に連絡を正すこと（二）複雑多岐なる行政事務の簡易化を努むること（三）中央集權の弊を打破すること等が其主要なるものであるやうに解せられる。是等は大體に於て吾人の贊同する所であるけれども、行政費の節約といふことに言及してゐないのは重要眼目を忘却してゐるの嫌を免れない。我國の現制度では例へば同じ通商貿易に關する事務でも外務省、大藏省、商工省に別々に局課を設け重

複して其のことに當つてゐる。然らば通商貿易に關する行政は遺憾なく整ふてゐるかといへば、事實は遺憾なことばかりである。一例をいへば我國の國際貸借改善の上から見て、第三國間の貿易を勸奬することは極めて必要であると思はれるが前記三省の關係部局では此問題に就て何等知る所がない。行政の部局重複の他の例としては治山治水事業に就て考ふるも同樣であつて、内務省、農林省、遞信省など、それぞれ此種の局課を有し、徒らに官廳の組織を大ならしめ、事務を複雜多岐ならしめ、行政費の增大の原因を作り居る譯である。

此の一二の例を考へても行政系統に連絡を正すことは必要であるが、それに就ては根本の問題として中央の各省を減少することが必要である。最近噂される所では現内閣では前内閣以來の懸案たる拓殖省新設案を實行する意嚮があるなどとも傳えられるが、是は思はざるも甚しいものである。吾人は農林商工兩省の分離からが、本來無用なことであると考へてゐる。何も農林省を分離したからとて、農業が繁榮するといふのではない。農林商工兩省分離の結果、蠶糸局などいふ餘計な局も新設するやうになつた。畜産局といひ蠶糸局といひ、是等は農務局に併合して何等差支ないものである。若し我國の產業貿易上、蠶糸業は重要な地位を占めてゐるから蠶糸局設置の必要があるといふならば、綿業立國論なぞもある程の綿業に對しても同じ理由で商工省内に綿業局を設ける必要があるといへる。或は又鐵鋼局も必要であるといへやう。であるから蠶糸局だの畜産局だのいふ部局は是を廢止し、農林商工兩省を元の農商務省よりも更に規模の少さい一省に統一することは、苟も行政整理を口にする以上は第一に考ふ可きことである。斯くいへば「それは出來ない相談だ。元來が農林商工兩省の分離は政友會年來の主張が實現したのであるから」といふであらう。私は此の種の背後情實が幾何となく蓄積してゐることを知つてゐるから、行政整理を有意義に實現するためには英國のゲデス委員會のやうな局外から選んだ委員をして是に當らしむることが先決問題であると稱した次第である。

斯の如く農林省の獨立すら既に無用のことであるのに拓殖省の新設などは以ての外のことである。是等の中央省の新設を主張する人々は、英國や佛國の殖民省の實例などを引用してゐるけれども、我國の殖民地は其面積狹く其距離近く、英國や佛國なぞとは全く事情が異つてゐる。更に又拓殖省の新設が如何に國費增大の原因（新設當座は大したことではないにしても）となるかを思はないものである。

田中内閣の税制整理案[illegible]ることは、前[illegible]にも述べられ[illegible]る。又田中首相の地方長官會議に於ける施政方針中にも述べられてゐる。改めていふまでもなく地租委讓は大問題である。政友會としては多年の主張であるから、今回朝に立つことゝなつた以上、是を實現さする義務あること勿論である。併しながら私をして云はしむれば我國では租税の負擔が餘りに過重である。是を輕減することは國民の生活苦を緩和する上からいつても、產業立國の實を擧ぐる上からいつても第一に努む可きである。それも大正十二年度の税制整理や十四年度の税制整理で相當に負擔が輕減されたならば、玆に負擔輕減の必要を説くに及ばないかも知れないが、兩整理に於ては負擔均衡を正すことが主で負擔の輕減といふ點からいへば見る可きものがなかつた。それも憲政會内閣の税制整理は却つて税負擔を增加し、國庫の税收入を增加してゐる。是を金額で示せば左の通りである。

憲政會内閣税制整理の結果

（單位千圓）△は減收

税目	十五年度の本年三月末現計と前年度との比較	改税當時に豫想した前年度との比較
所得税（改正）	△二七、七七八	△九、九〇四
[illegible]（改正）	[illegible]	[illegible]
營業税（廢止）	[illegible]	[illegible]
資本利子税（新設）	[illegible]	[illegible]
[illegible]税（改正）	[illegible]	△四六[illegible]
通行税（廢止）	△一〇、一一三	△一〇、六七三
酒税（改正）	三六、三一三	五、[illegible]三四
醤油税（廢止）	△二、八四九	△六、〇二〇
清涼飲料税（新設）	二、七八五	三、七一一
織物税（廢止）	△一八、三五三	△二二、五〇七
關税（改正）	三九、一四六	六、五五六
計	二三、八五四	△四三、二八六

上記の統計が示す如く最初憲政會内閣か税制整理案を議會に提出した時は此の改正により國民の税負擔は四千三百萬圓以上輕減されるといつたが、其實は本年三月末の現計で既に二千三百萬圓以上の增收になつてゐる。本年七月末日に大正十五年度の歳計を締切つた實績が明瞭となつたならば七千萬圓以上の增收になつてゐるだらうといふ觀測である。斯樣な次第であるから前内閣の税制整理は、國民の税負擔輕減どころか、却つて其の負擔を加重してゐる。然らば國民負擔の均衡を正すといふ點に於て實効が擧つたかといふに、關税の如く富豪たると細民たるとを問はず、均等に課税されるものが四千萬圓も增税されてゐるところを見ると、この點も頗る怪しいと論斷しない譯には行

かぬ。斯の如くに我國の税制整理は國民の負擔輕減を閑却してゐるから、國民の税負擔は一年々々に増加するばかりである。左表に此の間の趨勢を說明するものである。

租税負擔增加の狀勢 (單位千圓)

	內國税	關税	合計
大正十二年度(決算)	六九六、六二七	九〇、五八五	七八七、二〇五
大正十三年度(決算)	七六六、二六九	一二〇、九六七	八八七、二三七
大正十四年度(決算)	七八九、二一七	一一三、五九一	八九七、八〇八
大正十五年度(昭和二年三月見計)	七七八、三六三	一三六、九一二	九一五、二七五

備考　大正十五年度の收支は昭和二年七月末日に締切られるが、締切の際には八億九千萬圓に達するであらうと云はる。(別に煙草價上の增收が約二千萬圓ある)

大正十二、三、四、五年といふ年は財界好況の反動來、大震災の影響等により國民が生活苦に喘ぎつゝあつた年である。今日とて同樣であるが、斯かる財界不況時にも拘らず、又兩度の税制整理が行はれたに拘らず、税負擔は輕減どころでなく、却つて増加の狀勢を示してゐる。是は爲政者の最も注目すべき事實でなくて何であらう。斯やうな次第であるから何も税制整理を行ふからには、單なる地租委讓問題を解決するばかりでなく、是と共に中央地方に亘り税負擔の輕減を實現させねばならぬ。地租の地方税の委讓の如きも斯くて國民の税負擔を輕減してこそ初めて意義ある改正といふ可きである。

此の機會に歐洲大戰後英國及び米國に於ける租税負擔減少の狀況を計數にて示せば次の通りである。

英國、米國の租税負擔輕減の狀勢

▽英國(單位千磅)

	內國税	關税
一九一九年	八四九、六〇〇	一四九、三六〇
一九二〇年	八九七、七二二	一三四、〇〇三
一九二一年	七二六、六六一	一三〇、〇五二
一九二二年	六五一、六九五	一二三、〇四三
一九二三年	五九八、一〇二	一一九、九五八
一九二四年	五九〇、三五八	九九、三四四
一九二五年	五八一、〇五七	一〇三、四八七
一九二六年	五八二、七〇〇	一〇八、四五〇

▽米國(單位千弗)

	內國税	關税
一九一九年	五、三九九、一四九	三二三、五三六
一九二〇年	四、五七九、九七三	三〇八、〇二五
一九二一年	三、二〇八、一五八	三五七、五四四
一九二二年	二、六二六、七九〇	五六二、一八九
一九二三年	二、七九四、二九〇	五四五、〇一二

一九二四年	二、五八九、一七五	五四七、五六一
一九二五年	二、八[illegible]七、六[illegible]九	五[illegible]、[illegible]

英國では大戦に於ける戦費支出の爲め公債の利払が前に比し十倍以上に増加してゐる。米國も亦大戦争の爲め戦前の十六倍以上に増加してゐる。其結果として年々の國費にありて公債費が著しく増加してゐるに拘らず是れだけの減税を行ふてゐることは注目すべきことであると思ふ。

（七）

是から進んで私は今回の税制整理の中心である地租委譲問題に對して少しく論評を試みて見たい。

地租委譲の可否については贊否とも相當喧しい議論があるが、私は趣旨としては地租委譲はよろしいと考へてゐる。地租を國税から地方税に移すことは我國體の觀念に反するといふが如き議論も貴族院當りでは聞かされるけれども、そんな時代遅れの固陋な意見には耳を藉すの必要がない。又地租を地方税に委譲すれば國税の體系を破壞すると非難する人もある。是は可なり有力な反對意見であるけれども、一體々系といふのは何のことであるか。以前は地租は租税の重要部分を占めてゐた。即ち地租であると思はれてゐた時代もあつた。それ程でなくても兎に角地租を除外しては國の財政の根源が動揺した。試みに[illegible]國[illegible]七百萬圓[illegible]に近い金額を占めてゐる。[illegible]地租の國税に於ける地位は著しく低下した。昭和二年度豫算に於ける租税收入は八億八千三百萬圓であるが、其中地租收入は六千六百萬圓に過ぎない。國税としての地租の重要性は斯の如くに著しく低下して税收入總額の僅に七分に過ぎないのである。是國税として保存せねば體系が立たないといふのは單なる形式論か、然らざれば感情論である。

一體今日の税制にありて地租の如く課税方法の不完全なものはない。明治初年に定めた地價を標準として課税してゐる。其の不公正は多年非難の的となつてゐたけれども、實際問題としては殆ど如何ともすることが出來なかつた。であるから前内閣の税制整理では法定地價を廢し、賃貸價格を標準として課税することとなり、目下全國に亙して賃貸價格の調査中であるが、是には約二ケ年の日子を要し、調査費だけで一千一百萬圓を要する次第である。それでも全國に亙る調査が極めて不完全であることは免れ難い上に、數年立てば事實と非常に相違したものとなるは固より當然のことである。是を地方税に委譲すれば、各地方ごとに其土地の實際價格（又は賃貸價格）を正確に知る

ことは割合に容易である。一旦調査したものを十ケ年も据え置かずとも常に其實際の變化に應ぜしむることも出來る。であるから地租の賦課を公正にするには國税として置くよりか、地方税に移した方が目的を達し易い。又政友會當りで云ふ通り地方に確實なる財源を與ふる點から考へても地租の委讓は望ましいことである。

併しいよ／＼地租を委讓するとなると種々な實際問題が起つて來る。其の第一は地租委讓による國庫の收入減を如何にして補塡するかといふ問題である。地租委讓問題を單なる理論として取扱ふ人は、そんなことは課税技術の問題である。地租委讓其のものがよいか惡いか定りさえすれば、そんな枝葉の問題は何でもないと稱するが、實は此の問題こそ、地租委讓の實行上最も重大な且つ困難な問題である。地租の收入は今日では大したものではないと稱しても、兎に角之を委讓すれば中央政府で六千六百萬圓の缺陥が出來る。是を補塡する策として財産税の新設を主張する人もある。消費税の引上げを提唱する者もある。關税の增徴を以て其一部にあてよといふものもある。然し地租の委讓はそれだけ國民の税負擔を輕減するものではない。國税として納めるものを地方税として納めるだけである。勿論地租委讓實現の曉には幾分他の地方税が輕減されるか知れないが、地租と同額だけ在來の地方税が輕減されるものとは思えない。といふのは元來地租委讓主張の有力な理由は、地方の財源を豐にし、地方の財政を堅實にするといふことに存してゐるからである。であるから地租委讓の代りに更に他の國税を新設するとか、現行税を增率するとかいふのは國民の税負擔を今日より更に加重せんとするものである。財産税の新設といひ、消費税關税の增率といひ、是等個々の問題に就ては論議す可き幾多の事柄があるけれども、玆には暫らく省略して兎に角地租委讓の代り財源を增税に求むることは、現下の財政々策に於て斷じて不可であるといふことを一言するに止めて置く。

新税增税によらず地租委讓を實現するの策として現在の復興費復舊費の支辨濟を待つて是を行ふ可しといふ意見がある。一寸考えて見ると復興費復舊費が出ないやうになれば國費がそれだけ減少する譯であるから、其機會に地租を委讓すればよろしいやうに思はれるが、併し復興費の財源は公債募集金であるから、復興費の必要がなくなる時には、此の目的の爲めの公債募集の必要がなくなるだけである。從つて復興費の財源を地方委讓に補塡せよといふのは、地租委讓による國庫の歳入減は公債募集金にて永久に充當せよといふ結論になる。それではまるで問題にならぬと評するの外はない。

斯く述べて來ると地租委讓の實現にも國費の節約といふことが、必要であり且つ正當であるといふことになる。私は行政整理に對して國費節約の必要を高唱したが、國費の大節約が行はれねば地租委讓が如何に合理的であるにしても其の實現は困難である。積極政策とかいふ美名の下に放漫な政治を行ふことは一時的の氣勢を添ふることは出來るけれど、其結果は實に懼るべきものである。最近財界に大波動を與へたものに鈴木商店の破綻と川崎造船所の窮狀公露とがある。鈴木商店も川崎造船所も殆ど積極一點張の經營振であつた。外見では華々しく思はれたこともあるが、引締る可き時に引締らなかつた報ひが遂に現はれて、最近の醜狀を暴露するやうになつた。國家とて何等違ひはない。大整理をなすべき時に整理をなさず、表面を糊塗してゐれば何時か現實暴露の悲哀を見ねばならぬとになる。實は我國の財界が何時までも不況の域を脱しないのは政府自身、整理緊縮を口にしながら依然放漫な不眞面目な政治を續行してゐるからである。臺灣銀行を救濟し川崎造船所を救濟せんとした政府は、是等の銀行會社の放漫な經營振に反省し、自身着手してゐる行政整理・稅制整理に對し眞に其實績を擧げ得るやう根本的の方策を講ずることに努むべきである。——（一〇・二〇夜）

軍縮會議論

(暴露された猿芝居)

水野廣德

○軍縮會議の發端

瑞西國ジュネーブ府に於て佛伊兩國委員の傍聽を以て日英米三國の海軍縮少會議が六月二十日から開かれて居る。會議場は國際聯盟本部の硝子の間とかで華美壯麗目を眩ますばかりである。此建物は國際聯盟が其の本部に當る爲め某旅館を買收したるものである。瑞西に歐洲に於ける孤獨たる一小國で世界の何等國かは知らぬが、一つの都市にも斯様な宏壯なホテルを幾つも有して居る。之に反し我日本は世界の一等國と威張りながら、軍艦や軍隊の數こそ多けれ、首府の東京にさへ旅館らしき旅館は帝國ホテルが唯一つあるばかりである。瑞西と日本。どちらが文明國としての眞價があるであらうか、どちらが文明國民として幸福であるであらうか。我等は先づ日本の委員達に「國防の最小限度」を持出す前に、此の美しい硝子の間の軟かい安樂椅子に腰を埋めて考へて見て貰ひたい。巡洋艦一隻造る金があれば斯んなホテルが五つも六つも出來るであらう。

今回の會議は本年春、米國大統領クーリッヂ氏が日英佛伊に提唱したる第二海軍軍縮會議に基づけるもので、大統領が此會議を提唱したる動機と理由と目的とは、華府會議以後漸く激烈ならんとせる各國の補助艦建造競爭をば將來に起たしめざるに防止し、以て國際の不安を除去すると共に、經費節約に依つて各國民の負擔を輕減せんとするにある、即ち一は世界平和の爲め、一は國家經濟の爲めと言はれて居る。而して會議の主題とするところは先年の華府會議に於て協定不調なりし補助艦問

國にして、今回之が協定を遂げ以て華府協定を完成せんとするにあるのである。然るところ佛國は、國際聯盟以外に於て軍縮問題を議するは聯盟の權威を損すると云ふ理由を以て、又伊國は、軍備縮少を行ふには伊國海軍は餘りに微弱であるとの理由を以て、何れも米國大統領の提議を拒否し會議參列を謝絶したるが爲め、更めて佛伊を傍聽者として招請し、日英米三國のみに依つて海軍々備縮少會議を開催することになつたのである。

曩に華府會議の開かれんとしたる時、當初我國民の大多數は之に對し極めて冷淡且つ無知であつた。或者は軍備縮少を以て人類の本能に反する狂愚の擧と爲し、痴人の夢と嘲つた。又或者は軍備縮少を以て帝國の國粹を傷つけ國威を損するものと爲し、之に反對した。何れも軍備迷信、軍備妄拜より來る錯覺である。然るに今回の軍縮會議に對しては國民中、最早や正面より之に反對する者もなければ裏面より之を嘲笑する者もなく、軍縮を以て時代の必要事と爲し、殊に新聞紙の如きは各紙競つて會議の報道通信に全力を注いで居る。僅に數年間に於ける我國民の軍備に對する思想と觀念との進歩は誠に著しきものがある。併しながら之を英米の國民に比すれば及ばざること尙ほ遠しの感がある。米國に於ては華府會議當時二千萬人の連署を以て、大統領に對して軍縮の建議を爲し、英國に於ても亦今回の會議に際し、全國知名の人士に依つて、政府に對し軍縮を提案せられた。然るに我國に於ては先年尾崎行雄氏等の極めて少數人士に依つて軍縮が唱へられたるのみにして未だ國民的運動が起らない。國際平和を目的とせる國際聯盟協會の如きも、何故か軍縮問題に對しては成るべく敬遠主義を取れる傾が見える。

抑も軍備縮少の目的は一は國際平和の爲めで、一は軍費節約の爲めである。前者は崇高なる人類愛の思想の上に立ち、後者は功利的實際政治の上に立つて居る。先年我帝國議會が殆んど滿場一致を以て陸軍縮少案を決議したる如きは全く後者に依るもので、そこに何等平和思想の痕跡を認めなかつた。之が爲め今年陸軍を縮少して明年海軍を擴張する如き結果を見たのである。今回の軍縮會議の目的は世界平和の保持と、國民負擔の經減の爲めであると、會議提唱者たる米國大統領は言つて居る。日英兩政府が欣然として之を應諾したのも、全く同一目的の爲めと言つて居る。併し外交辭令ほど看板に僞りの多きものはない。何處までが本心で、何處までが眞目的であるかは、會議を經て見なければ判らない。

○岡田海相の聲明書

我岡田海軍大臣は今回の軍縮會議に關して米國通信社員に與

へたる聲明書なるものゝ中に、

「日本政府が米國の軍縮會議提議に對し滿腔の贊意を表したるは他なし、今回の軍縮會議は世界の現狀に鑑み本質的に立派なるものであるのみならず人道的企圖にして且つ絶對的に必要事なるを確信した爲めである」

と聊か國際禮讓で敬意を表したる後、

「吾々海軍々人は何を措いても先づ歴史ある我海軍を愛するものである。何となれば吾々は常に海軍と身命を共にしつゝあるのみならず海軍は吾々の希望であり吾々の最高理想であるからだ」

と愈バタ臭きところを發揮して不得要領裡に短劍の御機嫌を伺ひ、「海軍は吾々の最高理想である」などゝのメイ句に無學者を苦しめて居る。海軍窮極の任務は戰爭である。戰爭は吾々の最高理想であると云ふ意味ではあるまい。政黨員が國家を差措いても先づ政黨を愛する如く、海軍々人も亦國家を措いても先づ海軍を愛されてはたまらない。更に何を繼いで

「然しながら海軍々人にして軍備は悲しむべき必要事であるとなすものあれば、そは海軍々人の本分を盡さぬものである。且つ日本は財政的理由の爲めに欣んで此機會を利用し以て軍備を制限せんとするものだと考ふる徒あらば、未だ吾々の眞情を知り得ないものと言はねばならぬ。吾々は今や人類の幸福を增進せんとする崇高なる希望に燃えつゝあるのだ」

と大きく出でゝヤンキイを煙に卷き、尙ほ世界平和の爲めに『今回の會議をして成功せしむる爲め飽くまで全力を盡すこと』を『大に力說して置きたい』と云つて居る。

岡田海相の此の聲明書こそは今回の軍縮會議に對する我海軍、從ふて我日本の意思と態度とを或程度まで表明せるものとして、軍縮會議を論ずるに方りては有力なる參考資料とするの價値があるであらう。海軍大臣は聲明書に於て、日本の海軍は國防の必要以外に決して擴張を企つるものにあらざること、今回の會議に於て日本海軍は國防上必要の最少限度に縮少する用意を有すること、日本は食料品並に原料品の供給を諸外國に仰ぐ關係上航路保護の爲め補助艦艇の必要なること等を極めて抽象的に述べ、何等具體的意見を發表して居ない。併し其の言ふ處を綜合すれば、現在日本の海軍は國防の最少限度であるから之を縮少することは出來ぬと云ふことを現はして居る。

聲明書に於て岡田海相は『吾々は今や人類の幸福を增進せんとする崇高なる希望に燃えつゝあり』などゝ言つて、一面には立派た平和主義者少くも平和好愛者らしく思はるる他の半面には、『海軍は吾々の最高理想である』

などゝ言つて、明かに軍國主義者少くも軍備擴張論者である如く思はれる。其他『海軍々人の本分を盡さぬもの』とか、『吾々の眞情を知り得ないもの』とか、奥歯に物のはさまつた樣な齒切れの惡い文句を竝べて、それこそ軍縮に對する岡田海相の思想の眞情を知り得ない。元來戰の劍を吊つた人間が己を欺き人を僞らずして世界の平和を口にすることが出來るものであらうか。苟くも平和を口にせんと欲するならば先づ己の腰の危險物から取り去るのが本當ではあるまいか。岡田海相は私人としては平和を愛する溫良の紳士であらうけれども、彼が現役の大將として劍をブラ下げて居る以上、其の軍備縮少に贊成する理由は平和を好愛し平和を欲求する爲めではなく、國家經濟上軍費輕減の必要に基づくものと見るべきである。故に國家財政さへ許せば成るべく多量の軍備を存置せんとするのが腹の底であらねばならぬ。軍人は國家財政の爲めには或は軍備縮少を肯んずるであらうが、國際平和の爲めには決して、軍縮を肯んずるものではない。是れ岡田海相のみでなく、獨り日本の軍人のみでなく、世界の軍人悉く皆然りである。故に彼等の稱する國防の最少限度なるものは、日本の如き貧國に在つては其の實常に國家財政の最大限度であることを國民は記憶せねばならぬ。軍縮會議を論ずるに當りては此點だけは先づ頭の中に收めて置くにあらざれば、軍部より發する宣傳に誤魔化される恐れがある。自國の軍備は成るべく減ずまいとするのが、軍縮會議に於ける軍人の通有心理である。故に軍縮の成果は會議に於ける軍人勢力の大小に反比率する。即ち軍人勢力が強ければ強き程、軍縮の成績は必ず不良である。

○華府會議とジュネーブ會議

ジュネーブに於ける軍縮會議は專門委員會の討議を終つて將に本會議に入らんとして居る。日々の議題は事の細大となく、公報として又私報として朝夕の新聞を賑はして居る。是等の報道に依れば、會議の實際が果してさうなのか、或は又通信の着色に依るのか、會議の光景が如何にも殺伐として恰かも獅子の分前を爭ひたる舊式帝國主義的外交談判の如く、そこに何等崇高なる平和人道の上に立脚せる軍縮會議と云ふ如き雅量と寛厚と、そうして溫味と柔味と潤とが認められない。口角泡を飛ばし、舌端火を吐いて自國の主張を强調するはまだしも、暗中飛躍や明中活動に依つて或は陋劣なる自己宣傳や、或は陰險なる苦肉策さへも講ぜられて居る模樣である。對外交涉と言へば事の如何を問はず、排外的敵愾心に捉はれて直ぐ喧嘩腰となるのが帝國主義思想の通弊である。我齋藤全權が渡歐の際、海上よ

り『無線電信國内を去るに臨み國民の後援を望む』との電報を發したる如きも、何となく喧嘩の談判にでも出掛ける樣な感じがした。素より全權としては國民に御別れの挨拶位の極めて輕き意味に過ぎなかつたであらうが、對外硬派の國民は忽ちムキになつて國防示威運動などを企てる者が出て來るのである。

斯かる空氣の間にもジュネーブ會議は衝突坐礁の危險ある暗礁や淺瀨を避けつゝ徐々に進みつゝある。各國の提案に係る軍艦の排水量や備砲や艦齡などの軍事專門問題は既に略ぼ議了して、今回會議の大眼目たる補助艦の協定問題が今明日の中に議題に上らんとして居る。各國ともに自國に有利に解決せんものと、種々の搜りは入れられ、種々の噂は傳へられ、陰鬱の空氣は早くも硝子の間を曇らして居る。たとひ會議の動機と目的とに不純味が有らうとも、又會議の結果が如何に落付かうとも、各國の協定に依りて軍艦が一隻でも減ぜらるれば、夫れだけ國際の疑惑が除かれ、排水量が一噸でも減ぜらるれば、夫れだけ國民の負擔が輕くなる譯である。我等は日本の全權以下と併せて各國の夫とに對し、其の御苦勞を感謝すると共に軍縮の成功の成るべく大ならんことを望んで止まない。

抑も今回の會議と華府會議とは種々の點に於て大なる相違がある。華府會議に於ては最も困難と認められたる海軍の本體たる主力艦の比率をば、世界の豫想を裏切り一氣呵成的に協定して大成功を收めた。然るに今回の補助艦協定は未だ本會議に入らずして既に早くも決裂の豫想さへ語られて居る。今華府會議とジュネーブ會議とを比較對照するに、華府會議に在つては

一、當時歐洲大戰後未だ多く年を經ず世界に於ける平和思想強烈なりしこと。

二、歐洲大戰後に於ける經濟上の苦痛は英國を始め歐洲諸國をして軍費輕減を切要ならしめたること。

三、歐洲戰後日米戰爭熱再燃し爲に兩國の海軍競爭起り、日本は八八艦隊の建造に着手したるも戰後財界の激變により之が繼續困難となれること。

四、日米戰爭防止の爲め米國に於ける平和運動熾んとなり遂に大統領を動かすに至りたること。

五、米國は會議の主催者且つ原案提出者として自ら最も多數の軍艦を犧牲に供し列國に範を示したること。

六、理否は別とし主力艦の比率五五三を定むるには各國の現在勢力と云ふ根據を有したること。

七、米國が背大の徹底的に提出したる原案は各國全權の度膽を拔き主意に對して即座に贊成を表したること。

八、英國は海軍縮少に依り財政上の危機と米國海軍の下風に

立つ[illegible]爲め努力を集中[illegible]下に於て[illegible]したること。

九、日本は財政上の理由に依り決裂を避[illegible]さりしこと。

一〇、佛伊兩國は主力艦を以て英米と對抗するの意圖なかりしこと。

一一、各國の政治的要求が軍事的要求を壓したること等である。然るに今回のジュネーブ會議に於ては、

一、世界思潮が華府會議當時に比して反動的となれること。

二、英國其他歐洲諸國の財政が漸次安定の緒に就きたること。

三、補助艦の縮少は財政上に左程大なる影響を來らさゞるが爲め、各國ともに主力艦程に之が縮少を痛感せざること。

四、主催者たる米國が會議を指導する爲め犧牲に供すべき有力なる補助艦を有せざること。

五、補助艦は主力艦に比し軍艦としての用途複雜なる爲め比率の基準を求むること困難なること。

六、英國が其の財政回復と共に再び海洋支配權を夢み、米國と同等の海軍力を以て甘んぜず軍縮に對する兩國の意思一致を[illegible]こと。

七、[illegible]

[illegible]なること。

八、一定の原案なく、兩國共に[illegible]なる爲め意見を岐に亘ること。

九、佛伊の參加せざる爲め會議の權威と決議の威力とを輕からしむること。

一〇、會議を主導する政治的勢力の中心を缺けること。

一一、政治的よりも寧ろ軍事的に解決せんとすること。

等である。

要するに華府會議に於ける時代思潮は別とするも、當時各國共に海軍縮少の必要を痛感せる爲め、何れも妥協調和の精神に滿ち、軍人側の專門的主戰論を排して專ら政治の大局上より解決に力めたのであつた。米國大統領の如きは、日本に六割の比率を與ふるは多きに過ぐと云ふ米國海軍々人の不滿に對し、寛臆を以て之に威嚇的彈壓を加へた程である。日本の海軍々人は主力艦五五三の比率を以て日本が少きに過ぐと憤慨し、米國海軍々人は多きに過ぐとて不服を唱ふ。軍備に對する軍人の意見は何時でも、何處でも斯んなものである。軍備を縮少するにしても、擴張するにしても、自國の軍備をして出來得る限り有力

ならしむることが、軍人として國家に對する義務だから仕方がない。であるから軍人の專門意見に重きを置けば軍縮の協定などは到底出來る相談ではない。華府協約に對しては關係國民何れも多少の不平不滿は有るとは云へ（之が音頭取りは何國も軍人である）、若し同協約が成立して居なかつた曉、今頃の世界は何うなつて居るであらうか。勝つたか敗けたか結果は知らぬが、日米戰爭も大概片付いて居る頃であらう。東京は復興どころか二度の燒野原となつて居るかも判らない。軍事專門の小局より見れば言ひ分もあるであらうが、國家と云ふ大局より見て我等は敢て華府協約を謳歌するものである。

今回の會議は財政經濟の上より見れば、若し滿足な協定が出來れば結構だが、假令出來なくとも左程困まらないと言ふのが各國の腹の中である。從つて自ら軍事的見地に重きを置くに至り、各國何れも自國の兵力を成るべく少く減じ、他國の兵力を成るべく多く減じ、以て相對的優勢を保たんと圖るは、軍備の性質上自然の勢である。そこに協定の困難なる理由が存する。

○三國提案の要點

會議の進捗に伴ひ種々の評論や意見が新聞其他に發表せられて居る。而して其の多くは日本の提案を以て最も合理的にして最も公正なるものであるとの妄斷的或は愛國的前提の下に下されたる評論の如く思はれる。自國政府の提案を後援することは國民としての至情である。併しながら軍備縮少の如き崇高なる世界的事業に對しては、國民的利害の感情を去つて全人類の幸福と云ふ大局の上より是非を判斷するのでなければ、其の目的を達成することは出來ぬであらう。何故となれば眞の平和は公平と正義とに對する各國民の敬虔にして謙虚なる服從の上に於てのみ打立てらるゝからである。自分は此見地に於て各國の提案に對し一視同格、是々非々主義を以て批判評論したいと思ふ。御國萬歲主義の忠良なる御用論は幾らでもある。對外正の立場より見たる率直なる剝き出し論も此際一つや二つあつたところで、まさか世界に對する國辱でもあるまい。

爾今の壽府會議開會の劈頭に於て日英米三國全權は正式に各自國の軍縮案を提出した。之が全文を掲ぐることは煩に過ぐるを以て、唯提案の骨子眼目のみを左に掲ぐることゝする。

（註、各國提案の全文は外務省公表として六月二十三日東京の諸新聞に掲げられて居る。）

（一）日本案

各國の現有勢力を以て其の海軍力の基準と爲し、今後海軍

力艦の目的を以て一切の軍艦を建造し若くは取得せざること。排水量七〇〇〇噸以下、備砲六吋砲以下の軍艦は[illegible]以内、又は二〇節以下の水上艦艇及一萬噸未滿の航空母艦は右の制限より解除すること。

（二）米國案

補助艦を巡洋艦、驅逐艦、潛水艦に分類し、各艦種毎に日英米の比率を三—五—五とし、其の噸數を左の如く定む

	米國	英國	日本
巡洋艦	二十五萬噸乃至三十萬噸	二十五萬噸乃至三十萬噸	十五萬噸乃至十八萬噸
驅逐艦	二十萬噸乃至二十五萬噸	二十萬噸乃至二十五萬噸	十二萬噸乃至十五萬噸
潛水艦	六萬噸乃至九萬噸	六萬噸乃至九萬噸	三萬六千噸乃至五萬四千噸

（三）英國案

華府協約の主力艦々齡二十年を二十六年に、將來建造の主力艦排水量を三萬五千噸より三萬噸に、備砲十六吋を十三吋半に引下ぐること。

排水量一萬噸、備砲八吋の大型巡洋艦に對し主力艦同樣五—五—三の比率を適用すること。

右の外各國何れも巡洋艦、驅逐艦、潛水艦等の單艦排水量、備砲、艦齡等に關し種々の制限を提案して居る。尙ほ又英國は

[illegible]

○日本提案の解剖

右三國案を通覽するに、何れも甲譯的に極めて輕微なる軍縮の意を現はすとは云へ、要するに自國本位の案である。先づ日本の提案に就いて見るに、徹頭徹尾現狀維持で、軍備制限案とは云へるが軍備縮少案ではない。日本の提案は各國ともに現有勢力を基準として海軍力を制限し、夫れ以上に軍艦を建造してはならぬと云ふのである。而して海軍大臣は其聲明書に於て「昭和三年度末完成の補助艦勢力は現下の狀勢に於て我自衞的國防に必要とする最少限度の兵力である」と言明して居る。最少限度とは是以上縮少の餘地の無いことを意味するもので、最初から軍備縮少の意思を有せざるものと見るべきである。尤も海軍大臣の聲明は「現下の情勢に於て」と云ふ條件付きであるから、他國の軍備が減少すれば日本も亦減少しても宜いと云ふだけの餘裕を存してゐる。夫にしても世界平和の爲めに大いに軍備の縮少に努力することを聲明しながら、現勢力維持の一本槍では餘りに無爲無策にして聲明が昔出して笑ふであらう。惟ふに華府會議に於ける主力艦比率の制定に「現有勢力」の不意

打を食ひたる日本海軍、補助艦制限の爲め早晩第二軍縮會議の開催を豫期したる日本海軍は、補助艦の現有勢力を豫め滿たすことに於て何等の遺憾は無かつたであらう。

我全權は日本提案を出すに際し『……各國民の國防安全感の基礎を殺へすが如き急激なる現狀打破の方法は、其の種類の如何を問はず愼重に之を回避すべきものと信ず』との所信を述べて居る。『國防安全感の基礎』と云ふ言葉は余りに意味深遠で了解に困難であるが、元來最も安全なる國防は世界軍備の完全なる撤廢である。國際間の軍備が少なければ少なき程、國防の安全率は增すのである。軍縮の意義も亦實に其處にあると信ずる。我等は公正にして合理的なる限り、如何に急激なる軍備の現狀打破をも歡迎するものである。若し出來得るならば海上警察以外の戰爭用艦船の即時全廢をも厭ふものではない。

現有勢力を基準とする我國の提案は、各國の海軍兵力を定むる上に於て比較的公正なる方法ではあるが、軍備縮少の精神には添はぬものである。日本の提案は忽ち英米の反對するところとなる、中にも英國全權の如きは『日本が國防の最少限度を理由として現有勢力を基準とせんとするは穩當でない。英國の海軍は今日未だ國防の最少限度に達して居ない。』とて國防の最少限度に對する日本の見解を難じ、日本が其提案を立直さんことを要求して居る。米國の反對も亦之と同樣の趣旨である。

英米の反對に對し、日本の海軍首頭會議とかでは飽まで現有勢力基準主義で進むことに決したとのことであるが日本が此方針を嚴格に固執するならば會議の成功は甚だ疑ふべきである。而して若し日本の提案が採用され、現有勢力を基準とする時、日英米の補助艦勢力は左の如くである。

	巡洋艦 隻數	巡洋艦 排水量	巡洋艦 比率	驅逐艦 隻數	驅逐艦 排水量	驅逐艦 比率	潛水艦 隻數	潛水艦 排水量	潛水艦 比率
日本	四五	一九二、七〇〇	一〇〇	一〇六	一〇九、四七五	一〇〇	七四	六九、八八六	一〇〇
米國	四〇	三四〇、三[illegible]	[illegible]	二八四	三〇四、七七七	二七八	一二五	八六、二七八	一二三
英國	七[illegible]	[illegible]	一五〇	一七六	一九四、七七五	一七八	五八	四三、八九〇	六三

備考
本表は本年六月二十日日本海軍ノ調査ニ據ル
驅逐艦ニ於テ未起工ノモノ日本一四隻、米國一一隻、英國二七隻アルモ排水量未詳ノモノアルニ依リ計算ニ加ヘス
潛水艦ニ於テ未起工ノモノ日本七隻、米一四隻、英國二四隻アルモ排水量未詳ノモノアルニ依リ計算ニ加ヘス

更に之を日本案に依る水上（巡洋艦及驅逐艦）水中（潛水艦）の兩種に改算すれば

	水上補助艦 排水量	水上補助艦 比率	水中補助艦 排水量	水中補助艦 比率
日本	四〇二、二二五	一〇〇	六九、八八六	一〇〇
米國	六一八、八〇二	一五四	八六、二七八	一二五
英國	六三四、〇〇六	一五八	四三、八九〇	六三

となり、水上艦に於ては略ぼ三・一一五—五の比率となるのである。

○國防の最少限度とは

抑も國防の最少限度とは何を意味するものであらうか。往時侵略御免の時代に於ては軍備は國家存立上無くてはならぬ必需物であつた。軍備の無き國家は一日も獨立の生存を許されなかつた。然るに國際道德の進步したる現代に在つては軍備は必ずしも國家存立の必需物では無くなつた。現に對外軍備無くとも獨立の生存を保つて居る國家は世界に幾つもある。殊に海洋を有して海軍を有せざる國は枚擧に遑がない。故に現代に在つては軍備は國家の優越慾或は國民の優越感を滿たす爲めの寧ろ贅澤物であるとも言へる。之を譬へば若き婦人の寒を防ぎ醜を覆ふ爲めの必需衣服でなく、自己の虚榮心を満たし、異性の歡心を買ふ爲めの贅澤服の如きものである。贅澤服には最低限度も無ければ最高限度も無い。人に依つては御召も最低限度と云ふであらう。人に依つては銘仙も最高限度と云ふであらう。それは唯人々の見解に屬する問題である。日本の海軍當局者が現有海軍力を以て國防の最低限度と云ふのは間違つても居ないが絕對でもない。

曾て山梨陸軍大臣は帝國議會の壇上に立つて『日本の陸軍は國防の最少限度である。最早や此上一兵一馬を減ずることを許さない』と見得を切つた。然るに次に出た宇垣陸軍大臣は議會の要求を容れて何の苦もなく四個師團の兵を減じて仕舞つたことがある。凡そ國防の最少限度とは斯んなものである。國防の最少限度とは軍事に素人なる一般國民の後援支持を得るには誠に好都合の言葉であらう。併し軍縮會議の列國委員を納得せしめ得るや否やは疑問である。

日本の提案中尙ほ一つ留意すべき問題は、排水量七百噸以下の艦艇を制限外に置くことである。數百噸の小艦艇に至る迄一一制限を付することは實際問題として殆んど其煩に堪へざるが故、日本の提案は主義に依つて當を得たるものである。唯噸數の基準を如何にするかゞ問題で、噸數を少にすればする程軍縮

の精神に添ふのである。戰艦が三萬五千噸となり驅逐艦すら二千噸近くなつた今日に於ては七百噸の艦艇は小蒸氣船位に考へられるが、日露戰爭當時に在つては我最大驅逐艦と雖も僅に四百噸に過ぎなかつたのである。支那揚子江に浮べる各國の河用砲艦は六百噸内外である。凡そ海軍々人が軍艦を欲しがることは恰も女が身の廻り品を好むが如くである。着物が買へれば帶、帶が買へれば襦袢、夫れも出來れば襟、袖、紐、扨ては頭の物から足の物と其の慾望に限りが無い。主力艦や補助艦が制限せられたる暁、海軍々人の慾求が何れに向ふかは想像に容易である　此小艦艇問題は既に專門委員會に於て、武裝の如何を問はず六百噸未滿のもの及備砲六吋砲以下、速力十八節以下の六百噸乃至二千噸の水上艦艇は制限外とすることに決定した。將來沿岸防禦の名目の下に、此種小艦艇の建造が必ず激増するであらうことを忘れてはならぬ。素より斯かる小艦艇は遠距離作戰の機能乏しきが故、國際誤解を招くの虞はなきも、經費を増す點に於ては同一である。併し軍事上より見れば日本の如き主力艦少くして專ら防禦作戰を要する國に取つては恐らく有利であらう。

○米國案(國防の對等と軍備の比率)

次に米國の提案に就きて研究して見よう。米國提案の眼目は補助艦にも主力艦同樣、英米日の間に於ける五―五―三の比率を適用しようと云ふのである。元來國家は對等であるや否やは今日頗る疑問である。現に列國は支那に對して不平等條約を課し、國際聯盟は國の強弱に依つて差別待遇を行つて居る。併し國家の對等と不對等とに拘はらず、獨立國家の生存權は不羈にして絕對である。國の大小や強弱やに依つて其の生存權に差別のあるべきものではない。既に生存權が平等である以上、生存を擁護防衞する權利即ち國防權も亦平等でなければならぬ。此見地に於て縱令其が必需物であらうと、贅澤物であらうと、國防の名の下に設置せらるる武力即ち軍備に對し、國によつて大小多少の差別を付することは道理の上に於ては間違つて居る。

故に今回の會議に於て米國が補助艦に對しても亦主力艦同樣五―五―三の比率適用を提案したのは、純理の上より言へば國防の平等權を蹂躪するもので甚だ不都合であるとも得ひ言る。併しながら實際問題として日本が世界平和と云ふ人類愛と、負擔輕減と云ふ國民愛との爲め、既に任意的に國防の平等權を犧牲にし、主力艦に於ては五―五―三の比率を承認せる以上、之を擴大延長して補助艦にも及ぼさうと云ふ米國の提案も、相當根據を有するもので強ちに日本を侮辱せるものと憤慨する程の

ことでもない。

前述の如く國防權の平等は純理である。併しながら軍備其物は純理の産物ではない。今や世界の何れの國も平和を希望すると云つて居る。世界の總ての國が平和を欲する以上、軍備なるものは全然不必要なる浪費物として、或は厄介なる危險物として、夙に撤廢せられて居なければならぬ筈のものである。然るに撤廢どころか、今日尙ほ之が縮少すらも困難なる所以は、そこに純理の外に何等かの理由と實際の必要とが存して居る爲である。故に軍備問題を論ずるには純理を離れて實際的に考へねばならぬのである。例へば文明社會に於ける人間の生存權は貴賤貧富、老幼男女悉く平等である。併し人間には天命的に身體の大小がある。軍隊や監獄の特種社會では身體の大小に拘はらず一視同食であるが、自由社會に於ては生存を維持する爲めに身體の大なる者は小なる者よりも多量の食料を攝取するは、理屈は兎に角事實上の要求である。國家にも亦大小がある。大國は其の生存權を擁護する爲めに小國よりも多くの軍備を必要とすることは、理屈でなく實際問題として常識的に首肯せらるゝところである。更に他の譬を引けば、金持も貧乏人も泥棒を防ぐ爲めには如何なる障壁を造るも自由である。そこで金持が其の多くの財産を防護する爲めに監獄式の障壁を造つた場合、貧乏人までが之を眞似て、乏しき財産を護る爲めに乏しき財布の底をはたいて高い石塀を造つたとすれば、世間は之を馬鹿と云ひ氣違と云ふであらう。軍備に比率の必要は此邊から生れて來るのである。

華府會議に於て日本が五―五―三の比率に甘んじたるを見て、或者は米國横暴を攻撃し、或者は當局の無氣力を非難し、之を以て大なる國辱と憤慨した。併し物は見樣考へ樣である。善事の爲めに己を犧牲にすることは、現今の道德に於ては如何なる場合に於ても常に必ず名譽である。華府會議に於て我國が世界平和と云ふ人類最高の善事の爲めに、自國の尊き國防平等權を犧牲に供したることは、國家としても、國民としても、世界後世に誇るに足るべき大なる名譽であると我々は信ずる。今回の會議は素より華府會議とは別物である。我國としては華府會議の例に倣ひて米國提案の比率を其まゝ承認せねばならぬと云ふ義理はない。併しながら今回の會議を成功に終らしめんと欲せば、國防權の對等と云ふ純理にのみ捉はるゝことなく、主義として比率を承認することが必要である。而して夫は國家の名譽でこそあれ、決して恥辱ではない。世界平和に對する大和民族の誠意の顯現である。さて然らば比率を如何に定むるかの問題になつては會議進行中の今日、我等は我全權以下の思慮あ

る商議に信頼し、唯軍縮の効果のなるべく大ならんことを望むに止めて置きたい。

○英國案の裏面

最後に英國案に就きて見るに、同案は主力艦艦齢問題と、大型巡洋艦の比率問題の外は、何れも各種軍艦の艦齢、排水量、備砲等に關する軍事專門問題である。而して是等の專門問題は各國多少の利害を異にするとは云へ、之が協定は左して難事ではあるまい。例へば艦齢に就きては日本の如く所有艦數少く、造船能力弱き國に在つては艦齢を成るべく短くして常に新しき軍艦を保有することが、兵備上並に造艦能力維持の上に於て有利である。之に反し英國の如く新式巡洋艦のみを有する國に在つては他國との關係上並に經濟上艦齢を長くすることが有利である。されば巡洋艦の艦齢を日本は十六年、米國は二十年、英國は二十四年と提案してゐる。何れも自國本位たるは言ふ迄もない。

又巡洋艦の排水量や備砲を小さくして巡洋艦の戰鬪力を低下することは、英國の如く多數の大商船を有する國に在つては、戰時之を巡洋艦に假裝し得るが故に有利なるも、有力なる商船の少き日米に取りては不利である。併しながら一般論としては、軍艦の艦齢は成るべく長く、排水量と備砲とは成るべく少くすることが一には製艦費を輕減し、二には戰鬪力を減殺し、軍縮の精神に副ふものである。

英國の提案中最も重要なる問題の一つは、華府協約に依る主力艦の艦齢を二十年より二十六年に延長し、其排水量三萬五千噸を三萬噸に、其備砲十六吋を十三吋半に引下げんとする案である。之に對して米國は、主力艦問題は華府會議に於て日英米佛伊の五個國の協定に依り決せらるものなるが故、佛伊の參加せざる今回の會議に於て議することは不合理であるとの理由を以て斷乎として之に反對した。然るに英國亦頑強に其提案を固執し、爲めに一時會議の決裂さへも傳へられた程である。英國の此提案は軍縮の精神には添ふとは云へ、今回會議の性質より言へば米國の反對説に道理がある。併しながら若し幸に英國案が成立し且つ佛伊の同意を得て華府協定の改正を見るを得ば、備に同協定の一改善として我等は之を歡迎する。倘ほ慾を言ふならば、排水量一萬五千噸、備砲十二吋位の日露戰爭當時の戰艦に引戻すを得ば、海軍々費は現在の半額以下に減ずるであらう。

稍や色目鏡の嫌があるやも知れぬが、主力艦に關する英國の提案をば裏面の軍事上より窺へば、そこに英國が頑強に主張し、

英國が之に反對する理由は英國にある。主力艦の代艦を延長することは、舊式艦を多數に有せる英國に有利にして舊式艦を多く有せざる米國に不利である。何故となれば艦齡を長くすれば米國は現有舊式艦の代艦を造る時期が後くれる故である。又排水量と備砲の大きさを減ずることは、英國よりも早く建造せらるべき米國の代艦の戰鬪力を弱からしむる爲め米國に不利である。殊に英國提案の十三吋半砲に英國のみ之を有し、日米は之を有せざるを以て英國に有利であることは餘りに見へ透きたる自己本位である。

英國提案の第二の問題たる大型巡洋艦の比率を五—五—三とすることは日本の強硬に反對せるところであるが、此問題は一般補助艦と同樣に取扱ふべきものであらう。

英國は其後また巡洋艦七十隻（五十六萬噸）驅逐艦二十萬噸、其の合計水上補助艦七十六萬噸の保有を會議に提出したと言ふことである。若し事實とすれば英國の現有巡洋艦三十六萬噸に對し二十萬噸の增加にして誠に驚くべき尨大なる要求である。英國代表は隻數の要求は出したるも噸數は言明せずと稱するも、大體に於て前に記するところと大差はあるまいと思はれる。先に英國全權が日本提出の現有勢力其儘案を非難したるは、日本要求の過大なるが爲めにあらずして寧ろ過小なるが故であつたことを知つた。[illegible]を要求するが如きは、會議の精神を蹂躙し、[illegible]するものである。何故に英國は佛伊との如く最初より會議參加を拒絕しなかつたであらう。若し英國にして斯かる非常識なる案を固執するに於ては會議の決裂は到底免れぬであらう。吾ら我等は決裂を厭ふ者である。而して其責任は當然英國の負はねばならぬところである。先きの支那出兵と云ひ、對露斷交と云ひ、今回の巡洋艦問題と云ひ、英國現保守黨政府の帝國主義的亂舞の樣こそ氣の毒にも哀れである。

○結言

ジュネーブ軍縮會議は既に豫定會期の大部分を經過したるも、今日迄に議了したるところは唯僅に小軍艦の排水量、艦齡等の如き軍事專門に屬する小問題のみに過ぎず、會議の主目的たる補助艦の制限縮小に關しては今尙ほ協議未了である。而かも會議の前途には危岩險礁頻りに出沒して、進路は決して平安ではない。殊に英國の投じたる巡洋艦約六十萬噸要求の大爆彈は會議の前路を濃霧の中に沒せしめた。此濃霧を開拂する爲め米國は先に提出したる英米巡洋艦最高標準三十萬噸を四十萬噸に改め、今や軍備縮少會議は愈軍備擴張會議に變ぜんとしつゝあ

ろ。此間に處して日本は如何なる態度に出でんとするであらうか。日本全權は縱令會議を決裂せしむるとも、軍備擴張の御土産を以て日本の土は踏めぬであらう。

要するに各國の提案と各國全權の心理とを通して會議の空氣を窺ふ時、そこに戰爭を前提としての軍縮會議はあるが、平和を目的としての軍縮會議は認められない。暴露された猿芝居、帝國主義國家が軍縮會議を開くなどが抑の間違ひかも知れぬ。眞の平和を目的としての眞の軍縮會議は、恐らく今一度世界の血を流したる後でなければ開かれぬであらう。夫にしても我全權の持ち歸へる土産箱、寶が出るか、蛇が出るか、筆を洗つて待つであらう。（二年六月八日了）

「岩波文庫」について

一圓全集本の出版戰は出版事業に關する一の重要なる理想を提示すると共に、その實現可能の保證をも與へた。その理想と云ふのは、(一)良き書を(二)極めて廉價で(三)自由選擇に任せて供給する事である。此の示唆に應じて出現したと思はれるのが、今度岩波書店から出た「岩波文庫」である。此の文庫は同書店が夙くより獨乙のレクラム叢書を理想として計畫してゐたとか聞いてゐるもので、その型式は一見やはりレクラムに範を執れるを察知し得る。吾々は此の文庫の出現に依つて内外古今に渉り、思想、文藝、隨筆等の古典的代表作を一作づゝ手輕るに購讀し得るやうに成つた事を、讀書子の福音として悅ばざるを得ない。

此の種の叢書は不斷、無限の生長を生命とするものであるから、包含される種目の無限に擴大さるべきは勿論であるが、已に刊行されたる部分に就きても、飜譯、校訂、校正等に關し不斷の反省鑑査を怠らず、氣付き得た不備不滿は勇敢に訂正して恒に精鍊を努めて標準的テキストと爲すやうに精進されたいと思ふ。價格の點でも猶一歩奮發したら何うであらうか。斯くの如くにして基準的な良書が陋巷邊陬に至るまで普及せられて萬人に清純の趣味、高き教養を提供する事は出版事業の光榮ある使命と云ふべきである。以前、我が讀書界にも之に似た二三の叢書が行はれてゐたが、時代が未だそれを生長せしむるだけに熟してゐなかつた爲惜しくも美果を納め得ずして亡びたが、良き潮時に乘じて現れた岩波文庫はやがては日本のレクラム又はエブリー・マンスライブラリーとして健全なる生育を遂げさうに思はれる。（東京神田區南神保十六岩波書店發行）

『學生と學制』の問題

(一) 學校騷動の必然性

長谷川如是閑

此頃の教育界に絶ゆる事のないいろ〱の問題——學校騷動、試驗地獄、就職難、危險思想、等、等——は教育の制度の根本の條件に胚胎し、教育制度の根本は一般社會制度の根本に關係してゐることで、丁度、貧困問題が、封建主義や資本主義の社會組織に觸れないでは理解されないやうに、教育問題の眞相も、今の社會の組織に於てのみその解釋を求むるべきである。

一般の無學——文字の知識の缺乏——といふやうなことも、封建制度や絶對專制の制度が安固である間は、一向差し支へないことにされてゐたのである。その當時は教育といふことは、支配階級の間に限定され、今日の意味の、もつと社會的の教育は、實際上、當時の各種の社會集團即ち商、工、農等の社會が、所謂徒弟制度として、又は家庭的制度として行つてゐたに過ぎなかつた。一般の無學が教育の實際に於て顧慮されるに至つたのは、新時代の空氣の中に、突如としてそんな教育觀念が湧き出したためではなく、舊時代の社會組織そのものが封建から又絶對專制から、新らたな新政治組織に變化する過程をとり出したためである。

社會の組織、構造を全く離れて、たゞ抽象的に、教育とは何で

あるか、如何なる教育制度が絶對的であるかといふ様なことを考へるのは、紙繪上の環境を離れ家屋や衣服の如何なるものでなければならぬかを考へるやうなもので、それらのものゝ存在が一定の條件に依つてのみ可能であることを忘れてゐるのである。

一般の無學といふことが封建制度そのものの所産であつたやうに、今日の教育界に於ける種々なる缺點や紛糾も、要するに今日の社會組織そのものの所産に過ぎない。それは自由放任主義の經濟組織に於て、定期的に恐慌が來たり、無數の失業者が生じたり、小資産者が次第に貧民となりつゝあるのと同じく、一般社會の統制が、個人的に意識された目的と方法とをもたず、先づ品物が作られ、然る後に賣り先きの作爲が行はれるといふやうな無科學的の組織が教育方面にも結果してゐるためである。

教育といふことが封建時代に於ては、支配階級の統制意識と統制行動とを作り上げる道であつて、もつと社會的の意識と行動とは社會の各方面に自主的に組み立てられてゐる商工業の各組織の自治に依つて作り上げたことは前述の如くであるが、封建政治の崩壞は、商工階級の勃興となつたので、而して國家とその政治とが、その新興階級の統制組織にまで變化する過程を取ることゝなつたので、支配的行動の完成のみが教育ではなく、もつと社會的の行動が教育の範圍に入つて來なければならなかつた。ここで昔は支配者を養成するだけの機關であつた教育が、商工業者とその技術者とを養成する機關であらねばならなくなつた。

さういふ時代の教育は、従つて二重的となつた。一つは、新らたな――資本家社會の――支配者の養成と、一つは昔ならば徒弟制度に屬した技術者の養成とである。

ところがこの二重制にはそれ自體矛盾がある。即ち右の二つの中の前者に於ては、教育は、『支配的』であらねばならぬが、後者に於ては、教育は『隷屬的』であらねばならぬ。昔の教育は、右の前者のみを包含してゐて、『隷屬的』教育の方は、徒弟制度に委ねられてゐたのだから教育の方法と精神とに矛盾を含んでゐなかつた。然るに今日の教育は、一方で支配者を作らねばならぬと同時に、他方でそれに隷屬する技術者を支配階級自から作らねばならぬ。何となれば、自治的に技術者を作つてゐたギルト的の諸組織は封建制度の打破されると共に崩壞してしまひ、従つて、その後の技術者は親方の下に隷屬せずに、支配者の下に直接隷屬せしめられることゝなつたからである。

さうなると、支配者は、その『教育』といふ一般制度の下に於て、二つの違つた精神と方法とを持たねばならなくなつた。一つは、資本主義的支配の精神と方法たる自由主義と個人主義

とつであり、他の一つは、その支配の下に於ける綜合的の精神即ち非自由主義、非個人主義である。前者は、教育する階級自體に對する要求であり、後者は、その階級が自己に隷屬する階級に對する要求である。現代の教育は、この二つの矛盾した要求を、併せ遂しようとするもので、そこに始めからとても圓滿に行く害のない事情を含んでゐる。

その上に尙ほ矛盾なことは、現代の、隷屬者を作る教育に於ても、事實上、自由主義と個人主義がある點まで勵行されねばならぬ。さうしなければ技術者養成の効果も決して擧る筈はない。何となれば、元來現代の始めに自由主義、個人主義といふやうな思想の起つたのは、決して人格の絶對的要求といふが如き、哲學者のいふやうな事情に基いたものではなく行詰つた現代社會が、個人の自由の發展によつて、その生活を取り戻す過程をとつたこととの結果である。自由思想が突如として湧き出たのではなく、個人の自由なる行動が一般的に社會的に勃興したのである。舊統制に對する一般的反逆は、思想より前に行動的にである。舊統制が、それ自體の墮落によつて消極的に、又それに對する新たな行動の勃發によつて、消極的に、崩壞せしめられ、個人とそれの自由とは、主義となり思想となる前に社會的推移の過程を行動的に働き出してゐたのである。而して之れが現代の初期に於いて、自由主義を産み出す、個人の機能の發達となり、文明の進歩をもたらしたのである。

この現代的進歩が、個人の機能によつたといふ事實は、各個人が自由に教育された結果、各個人を優秀な技術者にしたといふことである。個人が單に支配的能力に於て即ち統制者として優秀であつたといふのみでは決して、現代的進歩は持ち來たされ得なかつた。近代人は單なる支配者としてでなく、直接に生産的行動を働き出す科學的技術者として優秀であつたことが、十八九世紀以來の世界を、その以前のそれと全く別物のやうにした理由である。かくて技術者も亦當然に個人的自由を要求するものであり、且つ、個人的自由を與へることによつてのみ優秀な技術者が得られるものであるといふ經驗を、今の支配者はもつてゐる。その經驗に立脚すると、今日の技術者教育即ち資本主義的徒弟制度にはある程度まで個人的自由が與へられねばならぬ。現代の教育に於ける自由主義は即ちかくの如く資本主義的徒弟制度の條件として已むを得ないのである。

然し、この事自體が矛盾であることも亦已むを得ない。資本主義的組織が支配と隷屬といふ特殊の規律を要することは、封建のそれに異らない。何となれば、この新組織も亦その前のそ

れと同じく、一般社會生活のそれとは別な階級的の特殊利益を目的とするものに外ならないからである。然し、封建のそれとの重大な差異が二つある。一つは、その特殊利益を主張する根據を、封建時代のそれは武力の上に置いたが、今のそれは法的權力即ち財產權の上に置いたことで、他の一つは、階級的利益を獲得する方法が前の組織では、社會的生產の過程とは沒交涉な强制的掠取によつたが、今日の組織では、特殊利益獲得の方法が、特殊の社會的な生產組織の構成によつてゐるために、奴隸勞働の代りに、自由勞働を基礎としてゐること、言ひかへれば個人をなるべく自由にすることによつて能率を上げることを制度の生命としてゐる點である。矛盾はこゝから來る。

一方から考へて技術者は個人的に發展して種々なる發明をしてくれたり、又自由の裁量による管理能力を發揮してくれたりすることを制度の生命としてゐるところからいへば技術者にも自由が與へられねばならぬが、他方から考へて、それらの技術者が個人的財產權の神聖を信じ、忠實に資本家的統制に服從する必要のあることからいへば、これらの人々が人格的自由を主張するよりも、財產的權力の擴大に對して順從な隸屬者であることが望ましい。技術者はたゞその技術を以て財的支配者の利益を計る忠順な機械であることが、今日の組織にとつては最上である。

然るに他方では、如何に機械が發達して勞働は機械化したといつても、その機械の能力を完全に發揮せしめるには、奴隸的强制では不可能である。勞働者は自主的に機械を使用する熟練者であるほど良い。然かも、資本主義的生產組織の下に於ては、昔のギルドの場合のやうに職人が技術に興味をもつとそれに熱中するやうなことが段々になくなり、サボタージが根本の氣分となつた。そこから支配者側は『科學的管理法』の如きものを案出してそれを防がうとしてゐる。がそれは、自主的勞働を奴隸的强制管理の型に入れ代へたもので、たゞ機械的の勞作に適し、眞の技術的勞働の上には不適當の方法である。然も技術教育は、主として自主的の立場を要する技術に必要なのだから、技術教育に於ては科學的管理のやうな奴隸的强制方法は効果がない。優秀な發明をする能力、優秀な管理の能力等は强制では作り上げられない。そこで、今日の教育は、技術者養成のそれに於てもなほ自由であることが要求される。そこで、自由になられては困る技術者に、ある點まで自由を許さねばならぬといふ矛盾が起る。

支配者自體の養成は、無論、個人主義と自由主義とによらねばならぬことは、今日の支配者自身の體驗が彼等に敎へたこと

であるからその教育に於て、彼らは當然自由主義、個人主義であるべきだが、然し、これにも彼等の矛盾の尻尾が現はれてゐる。蓋し、彼等は、自己の支配が封建のそれを破つて近代組織のそれにまで到達する過程に於て、自由主義と個人主義とを痛烈に要求したが、さてその結果、一定の資本主義的統制が成り立ち、自己がその統制の主人公たる地位につくに至れば、丁度、親爺の專制に反抗した子供が自から家長になつた場合のやうに、その方法と精神とに變化を來たさねばならぬのである。丁度、彼れらの産業の進展によつて、自由競爭がその正反對の獨占にまで轉化したやうに、彼等の統制の完成と伴つて、自由主義は專制主義に轉化せざるを得なかつた。新らたな地位を創造するために必要な自由主義は、既に創立された地位とその利益とを擁護し進展せしめるためには必ずしも必要の條件ではない。資本主義の發達期とその衰退期とは、それに要する方法を異にせねばならぬ。從つて精神を異にせねばならぬのである。資本主義の初期に榮へた自然主義、現實主義の藝術や哲學やが、資本主義末期に於ては、ロマン主義となり、理想主義となり、文化主義となつたのも、その統制方法の變化に伴ふ意識の變化を反映したものに外ならない。

そこから、資本主義末期の統制とその意識とは、恐ろしく反動的のものとなるが當然なもの。そこでは個人主義は「奉仕」主義に變り、自由主義は專制主義に變り、自主主義は盲從主義に變り、現實主義は夢幻的理想主義に變り、自然主義は文化主義に變り、實證主義は先驗主義に變り、偶像破壊主義は偶像擁立主義に變り、科學主義は哲學主義に變る。誠に大規模の逆轉が今現に行はれてゐる。

この逆轉的精神と方法とが、あらゆる統制を特徴づけることとなつて、當然それが教育に現はれる。今日の教育は、明治の初年の教育をうけた今は六十以上の人々が驚いてゐる程逆轉的のそれである。ある意味に於て、それは封建時代以上の專制である。何となれば、封建時代には社會的教育には國家も大名も手をふれなかつたから、ある意味で、教育——武士教育の外の——は社會的に自由であつたといへる。又自由主義の時代に入つた當座は、教育が社會的になつたが、しかもその當時の社會的形勢と共に、自由主義的であり自主的であつた。それはわが明治時代の教育狀態のやうに、統制意識を異にする各集團が福澤塾を始め、いろ／＼自己流の教育機關を設けた。今の私立大學はその頃の異なる統制意識の各集團の產物であつた。だから教育も亦自由競爭的であつたのだ。然るに、資本主義が自由競爭から獨占の時代に入てトラスト的となつた今日に於ては、教

育の自由競爭は自づから資本主義國家の獨占によつて壓迫され、自由競爭の與へた學生こそが、國家的統一の下に委縮するに至つた。

けれども、前にいつた如く、現代は、その社會生活の發達に於て、いひかへれば、その生産組織に於て自由競爭的であつた如く、生活一般に於て自由競爭的であつたので、教育の方法も亦それに伴つて、一度は、自由主義を徹底せしめる方向をとつた。産業、交通、政治その他社會一般に於ける自由の精神と方法とが教育をも支配した。かういふ時代に培はれた人間が、その最近の新らたな社會的傳統――自由主義――からさう早く抜きさることが出來るわけのものではない。國家や資本家集團は、取りいそぎその自由主義を獨占主義に作りかへる必要を感じても、社會はそれに應ずる化學的變化を起す要素を缺いてゐる。のみならず、それを反拒する化學的成分が既に社會に醸成されてしまつた。即ち現代に於ける社會的諸運動を捲き起した各般の事情がそれである。學生も亦人間である。この社會の成分の化學的性質を彼れだけもたないといふわけには行かない。社會の各方面に於て、完成された資本主義的統制の封建的固定に反抗する運動が續發しつゝあるやうに、教育界に於て、所謂學校騷動の頻發することは全く必然的である。

今の學校騷動は、封建時代の百姓一揆のやうに、生存の最低限を犯かされたための勃發ではなく、近代に於て行はれた人間的發展に應ずる科學的態度の結果である。近代の人間的發展は、個人的能力の自由な發達を條件とし、それには彼等を自主的に解放し彼等をして自分自身を伸びる所まで伸ばさせるといふ方法をとつた。何しろ舊統制が崩れて新らたな統制が成立しなかつたのだから、近代は、個人を統制の型に入れることは出來ないで、先づ個人を自由にして、彼れ等が彼れ等自身を自由に伸展せしめることによつてどんな統制が産れるかを見出さうとしたのである。教育も亦さういふ個人的立脚地をとつた。然るに、資本主義統制が完成して、固定的の統制が出來上ると、教育もそれに伴つて、個人を自由にするよりは、その統制の型にはめなければならなくなつた。學校は個人を守り立てる代りにそれを取締る所となり、倫理の教科書は、個性に自由を與へるために書かれないで個性から自由を奪ふやうに書かれることゝなつた。しかしその學生は、現代の空氣を吸つてゐる生きた人間であり、しかもその人間の最も生氣潑溂たる時期にあるものである。そこに支配階級自體の教育そのものが矛盾に陷つた譯である。

彼等はこの矛盾のために、彼等の階級人を作る最高學府に於

て、彼等自身の階級の立場から反抗されてゐる。これは彼等が自己の文化を作り出す中途に於て役立つた人格解放の方法と精神とが、一番よく彼等自身の階級の子弟に影響したのである。蓋し、彼等は子弟を、自分達の作つて利用した自由主義から、自然主義から、實證主義から、浪漫主義へ、理想主義へ、先驗主義へ轉化せしめようとしたが、さういふ轉化の手段に征服されたのは辛うじて青年らしい生命の薄弱な長袖の徒で、現代的貴族の王子に過ぎない。現代の社會的機構の必然である人間的單位を主張するものは、資本主義本來の自由主義的傾向の上からも亦、それの崩壊から生れた社會主義的傾向の上からも、とにかく時代に驅れざるを得ないのである。

故に學校騷動は、學生がプロレタリアの一種であるといふ意味の運動ではなく、寧ろ現代の社會的機構の上で與へられてゐる又與へられねばならぬ統制の方法と精神と――自由主義、資本主義、等――の結論である。資本主義的統制は、その社會的性質の上で、なほ彼らの傳統的方法と精神とに依らねばならぬ必然性を保ちながら、その統制の政治的、權力的形式としては、既に新封建主義へ逆戻りしつゝあるので、そこに彼等の産業組織と政治組織との上に矛盾が生じ、一方で學者や技術者をある程度まで、自由主義の傳統の上で養成しながら、それらの人間が自由主義的になることをさへ、非常に嫌惡しなければならなくなつてゐるのである。

これは恰かも鷄が育てた子を孵化してその雛の泳ぐことに狼狽してゐるよりは一層おかしな話で、鷄が鴨の卵を孵へしてその雛の泳ぐのを見てうろたへてゐるやうなものである。この狼狽が多くの場合、學校騷動の直接原因になつてゐることは、一々の場合を調べて見れば必ず思ひ當るであらう。

以上のやうな組織の矛盾がなかつたならば學校騷動は決して起る筈はなく、又此の狼狽がなかつたら今の學校騷動の大半は起らずにすむであらう。だから今日の處、學校騷動を根本的に無くする道のないことは、誠に止を得ないが、學校騷動を悪く社會主義的のものと思ふのは狼狽の結果の錯覺である。カントの哲學も封建的壓迫に對する反抗の哲學となることは出來るので、それと同じく資本家社會の方法と精神とをもつてしても、封建化した資本家國家の統制に反抗することは充分可能なのである。だから當局者がうろたへ者でさへなければ今の學校騷動の大半は起らずに濟むであらう。

その他試驗地獄、就職難、プロレタリア運動の波及等の諸問題も、皆現代社會の統制と必然の關係にあるものだが、こゝでは其の事情に及ぼさない。

（二）卒業證書を全廢せよ

安部磯雄

現代日本の社會に活動して居る青年達は何となく壓迫されたやうな氣分で、のび／＼とした氣持を失つて居るやうに見える。之れに反してアメリカの青年は活々として元氣で、物事に對して悲觀的でなく樂觀的で、常に愉快な氣持で社會に於いて活動して居る。斯くの如く觀察して來ると其處に其國の教育制度といふものが大なる影響を及ぼして居るのではないかと考へられる。現在日本の教育制度には非常な弊害があり、青年に元氣なく、其多くが不平を抱いて居るか、悲觀的であるといふことは其結果であり、現代社會の行詰といふことも詮じ詰れば教育制度の行詰を語るものではないか。

政友會內閣が成立して三土氏が一時文部大臣であつた時、其文相としての抱負を述べた中に、大學生の持つ特權を打破しなければならないといふことを云つた。それは學士號の廢止であるとか、徵兵猶豫の特權、高等文官試驗に就いての特權の打破といふやうなことを說いたのであつたが私は非常に共鳴した。三土氏は其の經歷からいつても十分に教育に理解を有つて居るやうであるし、其抱負を實現することも不可能ではないと思つて居たが、氏は其後大藏大臣に轉任し、水野氏が代つて今では文部大臣となつた。水野氏も亦教育問題に就いては多少進步的な思想を公表されたやうであつたが、元來三土氏とは其性質を異にし、一方が政黨の土に育つた人であるに反して一方は官僚的である。私としては教育に理解のある三土氏の大藏大臣に轉任したことを甚だ遺憾とする者であつて、もつと文部大臣としての經綸を行はせたかつた。

學生の特權打破といふことに就いてはかね／＼私共の其必要を感じて居る處である。私は永く大學教育を職務としてやつて居るが、今日の教育は如何にも不自然で學生の特質を伸長せしめ發達せしめるやうに出來て居ない。而も其弊害の方面に就い

で語れば今日の教育は甚だしく行詰つて居る。小學校、中學校への入學試驗のために困難な問題が生じて居る、大學は入學試驗が一層困難であり、其の弊害も一層大きいが、而も試驗を受けて入學したら最後學問を學問の爲にする學生は殆んど稀であり、多數は皆卒業證書を目的に勉强をするといふ現象を呈する。要するに學生の目的は卒業證書を貰ふことであり、學士號は學生にとつて重要な問題となる。而も今日世間一般がさういふ傾向を助長して居るのであつて、中學を卒業した者と大學を卒業した者との間には會社、役所に傭はれる場合に最初から區別があり、甚しきは大學の中でも官立、私立の出身者に依つて最初の俸給から差別が存し、又同じ官立學校でも官吏になるには第一高等學校を出て居なければ幅が利かぬといふやうなことがあり、私立學校の間でも、同じ學士號を與へて居ても何の學校の卒業生は或處に受けが好いといふ風に其處に段階がある。或時外國人から日本の教育制度に就いて聞かれた事があつたが、私は我國に於ける學校の入學試驗の狀態に就いて語つた。我國の學生は誰も彼も官立學校に入學することを望んで其試驗を受ける。若し落第をすれば止むを得ず私立學校へやつて來る。然るに私立學校にも入學試驗がある。で學生は其中で比較的評判の好い學校の方へ押かける。其處で又落第すると更に劣つた私立學校の方へ行く……さういふ事を證明すると外國人は非常に驚いて、且つ腹を立てゝ笑つた。そして學校といふものに階級があるかと聞いたからさうだと答へた。考へると之れは實際不思議な話であつて、同じ大學と銘を打つたものが相互間の競爭の結果、社會が甲大學より乙大學を重んずる結果となり、更に學生が其處に押かけるといふ結果になる。之れは實に教育上の一大弊害であると云はなければならない。斯くの如き狀態を續けて行く時には學生は學問をすることが其本分でなくなり、單に評判の好い學校に行くといふこと丈けが其目的となる。從つて評判の好い學校は優良な學生を集め得るが、私立で評判の惡い學校は屑だけが集るといふ現象を生ずる。又試驗制度の一つの弊害として官立、私立の別なく、多勢の學生を一つ教室に入れて試驗をする場合、入學試驗にしても學年試驗にしても其處に不正の行はれないといふことはない。之れは一大事實であつて、私共の度々經驗する處であり、明かに其處に不正を發見する。斯くの如き狀態が存することは、大切な社會活動の源泉たる教育制度を根本から改造しなければならないことを示すものである。近來小中學校の入學に就いて試驗制度を廢止すべしといふ議論もあるが、小中學校は學校の數が少いから無試驗入學となると全部の學生を收容することが不可能であるか

ら結局學校を増設するといふことにもならうが、中學以上の高等學校、專門學校、大學に就いては全然試驗制度を廢止することとに賛成であつて、斯くすることに依つて學校の不足をも緩和する結果になると思ふ、試驗制度の廢止は私の平常から主張する處であつて、今日に於いてそれが益々正しいことを信じて疑はないが、若し試驗制度を全然廢止することをしなかつたならば、總ての青年が實力主義に依らずして形式主義に囚はれ、學校の種類、官立か私立か、學士號があるかないかで人の運命が定まり、其處に實力競爭が行はれずして青年の元氣は益々銷磨するに至るであらう。試驗制度を廢止する精神から云へば同時に卒業證書も與へないことにするのが當然である。之れは必しも突飛な言葉ではない。現にそれは獨逸の大學などでは實行されて居ることであつて、其處では勿論入學試驗もなく、ギムナジウムを卒業した者ならば無試驗で大學に入學を許され、入學後は試驗もなく、卒業證書も與へない。從つて大學に入つて來る者は眞に研究の必要を感じて入學する者ばかりであつて、大學は單に研究の機關であるに止まり、卒業證書を貰ふ場所ではないから、自分が滿足するまで何年でも自由に大學に居て研究をするといふ風である。若し大學の制度が獨逸の大學のそれの如くになり、學生の態度が獨逸の學生のそれの如くに變つて來れば、單に學歴のあるといふことゝ、それがないといふことだけでは社會的に差別をつけられる理由とはならない。大學の學歴のない者必しも實力を有しない者でなく、反對にそれのある者決して實力のある者とは限らないのであるから、社會的には此兩者は實力の自由競爭の立場に置かれることになり、青年は元氣で社會に活動することにならう。されば今日の社會に於いては學校の卒業證書が有力であるが故に世間の親は田地を賣拂つても子に大學教育を受けさせたのであるが一度卒業證書を與へることを廢止すれば、學生は大學に五年居ても拾年居ても單に大學に在學したといふに止まり、社會的には特權を失ふことになるのであるから、從來の如く大學の門に卒業證書を目あてに學生の雲集する傾向もなくなり、學校も其設備の不足に惱むことから救はれるであらう。若し設備に不足を感ずるならば大學を夜間開放すればいゝ。然らば大學に於て研究を志望する者は晝間仕事に從事しつゝ夜は大學に通ふことが出來る。

次に學生に卒業證書を與ふることの特權を廢止するのに伴ふ利益として、前に云つた試驗に伴ふ不正がなくなるといふことがあり、更に何大學出身を誇るやうな馬鹿げた事がなくなる。一體我國においては封建制度の影響が徒に黨派を樹てることに熱心で、學校と學校の間に於ける競爭は恰も政黨の爭ひの如く

である。此點には利益よりも寧ろ弊害の方が多く伴ひ、それには學問上の弱點を大きくして行く結果を生ずるばかりで、此くの如き競爭は國家の大局から見て實に下らないことであると云はなければならない。若し學生に卒業證書を與へないことにすれば、大學は學生にとつて眞に其研究の機關となるので、學生は自由に其好む所の學校と學課目を選擇することと獨逸の學生の如くになる。例へば甲大學には民法の有名な學者が居るので其講義を聽く爲めに學生は其處へ行き、乙大學には刑法の有名な學者が居るので其講義を聽く爲めに學校をかへるといふ風に、學生は常に永く一つ學校に止まらなくなる結果、從つて學生は何大學出身といふことは云へなくなり、從來の如く何大學出身の特權を得る爲めに生ずる弊害を防止することが出來やう。又教育制度が斯くの如く改善されゝばそれに伴ふ利益として教師の質が從來とは異つて來るに相違ない。獨逸に於いては大學者と云へば大概大學の教師であるが、それは大學が卒業證書を與へる場所でなくて研究の機關であることの結果である。學生は大學に於いて學課をあてがはれるのではなく自らそれを選擇する。即ち一つの學課に少くも二人以上の教師のある競爭講座の講義を聽き自ら教師を選擇する。學費も一つの講義に就いて定額を拂へばいゝのであるが、學期の一ケ月間に學費を拂はずに自由に其講義を聽くことが出來るやうになつて居り、其上に學生は教師を選擇する。教師には一定の試驗料がついて居り、それ以外に生徒の月謝の中から學校が事務費として二割乃至三割を差引いた殘額を教師が貰ふことになつて居る。教師が同じ講義ばかり繰返して居れば生徒は講義を聽きに來なくなり、從つて收入が少くなるので、教師は常に油斷なく勉強するといふことになる。日本に於いては、學生が講義を聽かなければ試驗も受けられず、卒業證書も貰へないといふ制度の下に於いては、教師は平氣で古い講義を繰返すことになるので獨逸のやうに大學教師の中から圖拔けた學者が生れない。

最後に述べたいことは、先日二高々長排斥問題の起つた時、水野文部大臣であつたか、今の學生は教師に對する師恩の觀念が薄くなつたのは慨嘆すべしと云つたことに就いてゞある。これは教育上の大問題であるが、師恩を感ずる感ぜぬといふ問題よりも、今日學生が教師を尊敬して居るかどうかといふことが先づ問題である。新學年に新入生が來て初めて講義をきく時、最初皆起立して禮をする。然るに二三ケ月もたつ内にそれもやらなくなり、後には百人の中五六人も坐つたまゝで禮をするのを見る位で、教師が教壇に立つのをも認めないといふのが今日の狀態である。之れ明かに教育制度の罪である。何故ならば學

生は大して教師の講義を聽きたくないので一向興味がないが、それを聽かなければ試驗を受けて卒業證書が貰へないから厭でも聽くといふ風であつて、斯くの如き狀態から教師に對する尊敬の念の起る道理はない。況んや恩といふ觀念のあり得る筈がない。水野文相がいくら慨嘆しても、今日の制度を其儘にして置いては學生に師恩の觀念を要求することは出來ない。昔の漢學塾などは學生の方から任意的に其門下に集まつて來たので、一例へば伊藤仁齋の塾に於けるが如く、又大阪の緒方塾に於けるが如くであつた。其學風を慕つて集るのであるから其處で勉強する學生が師を尊敬し、師恩を感ずるに至るのも當然である。現在の如く學生の好むと好まざるに拘はらず總て押付け主義の教育制度の下に於いて師恩などは問題ではないが、前述の如く學生が自由に其學課と教師とを撰擇出來るやうな制度になれば、學生が教師を撰擇することと昔の漢學塾に於けるが如くになり、其處に憧憬があり、感謝が生れるであらう。

以上の考察に依つて見ても、今日の教育制度の改善は最大の急務であつて、それなしには教育の墮落は益々甚だしく、社會全體の行詰ともなる。卒業證書の問題の如きは、英米に於いては之れを學生に與へて居るが、それも國民性の問題であつて、我國民の如く黨派心や小さな競爭心に驅られ易い者には、試驗制度は有害であつて、矢張獨逸式教育制度を採用することが其短所を補ふ所以であると思ふ。

(三) 智力的情熱の對象としての社會科學研究

片上伸

中等教育を終へてからの二三年の間は、人間の智力的發達の過程の上で、恐らく最初の最も重要な時期であらう。このことは、自分一個の經驗から考へて見ても、またこれまでに接觸して來た多くの青年の生活について思ひ合せて見ても、大體間ちがひのない事實である。高等學校時代に到つてはじめて智力的に大人にならうとする。自分と周圍との關係についても、あら

ゆる個々の現象の關係についても、それを全體として、系統として把握し認識しようとする要求が、望ましく湧き上つて來るのは、大凡そ何人にとつてもこの時期であるであらう。一切の事象を原因と結果との關係に於いて見ようとし、これを疑つたり判斷したりする心の鋭く烈しく動く時である。それは「哲學」を求め、「科學的說明」を求める。取りわけ、その時期に遭遇した青年が、鋭敏な良心と智力とに於いて、一層多く惠まれてゐるものであればあるだけ、さういふ要求は人一倍鋭く强く起こつて來るであらう。而してまた殊に、さういふ人々の青年期を經過する時期が、社會生活の何等かの轉換期にさしかゝつてゐて、新らしい生活統一の原則やそれのための努力の意義が、一方では疑はれたり否定せられたり、また一方ではそれがために鬪はれたりしてゐるやうな時代である場合には、鋭敏な良心と智力とに於いて一層多く惠まれてゐるやうな青年たちは、自己と周圍との關係についても、あらゆる社會現象の關係についても、それを全體として、一つの系統として把握し認識しようとする要求を一層熾んにするやうになる。

自己と周圍との關係について、「哲學」を求め、「科學的說明」を求める要求が、ひとり高等學校時代の青年心理に特有なものでなく、凡そ明敏な青年の心理に共通の特兆であることは言ふまでもない。しかし、さういふ要求は、概して高等學校時代に至つて、はじめて强く動きもすれば、またはじめて望ましく成長もするといふのである（これには、一般的に言つて、それ以前の中學時代の特兆ではない。）それは時代によつて宗教熱ともなれば、唯心論的冥想的思索的傾向の追求ともなり、また時代によつては自然主義的懷疑ともなり、官能的乃至デカダン的傾向への陶醉ともなつた。それ〲の時代の特兆がそこに正直な反映を見出したのである。而して現在この時期の青年の心をとらへて、その智力と情熱とを動かしつつあるところのものは、社會科學的研究考察である。

人は或ひは、かやうな社會科學研究熱ともいふべき事實を見て、青年一時の流行とかカブレとか言ふであらう。また實際さう見られて仕方のない事實もあるに相違ない。しかし、青年心理の流行とかカブレとかいへば、それは宗教熱に於てもさういふところがあつた。哲學的思索的傾向に於てもさういふところがあつた。その他凡て然りである。けれども、それだからその宗教熱も思索的傾向も、それ〲の傾向の凡てが一時のカブレや流行に過ぎなかつたと言へないのは勿論である。社會科學的研究熱に於いても亦勿論同樣である。たゞ、たとひ自殺者が出たりしても、宗教熱や冥想思索的傾向を禁止することも出來

す、またそれ等の興味を中心とする學生の集會を禁じたといふことも聞いてゐないのに引きかへて、社會科學研究に限つてそれを禁止するといふ手段に出でなければならなかつたところに、深刻な意味がある。

社會科學研究を禁止するといつても、公然の集會などは出來ないにしても、一人一人で書物を讀むことまで禁ずることはとても出來ない。一旦禁止して後の効果はどうなるのであらうか。本當によく[illegible]せられて、その方面の研究が下火にでもなつてゐるだらうか。ある地方の高等學校では、そこの圖書室へ『改造』を備へつけさせないことになつてゐるさうである。しかし、ルクセンブルクの經濟學は備へ附けてあるさうである。かういふ無智な嗤ふべき選擇檢閲は、たま〳〵地方の一高等學校の例外的笑話に過ぎないのかも知れないが、かういふ取締りで、批評心の鋭い聰明な學生を納得させて行けるものかどうか、考へて見るまでもない。帝政時代のロシヤの檢閲官でさへ、輸入の外國書についても、なか〳〵精細な知識を用意してゐて、つまり一々よく眼を通してゐて、この書物はこのペイジのこの一節の記事がよくないといふやうなことを、直ぐ指摘して説明してくれたものである。たとへその判斷の標準に對しては承認しがたい場合にでも、それだけの用意と知識とを以て明白に説明されると、一應は敬意を表してもよくなる。

ストライキを社會科學研究團體と結びつけ、甚だしきは赤化運動と見たりする。しかし、社會科學研究の禁止と、禁止する側の無智と不用意とに對して、社會科學研究に興味を持つやうな學生が、智力や情熱に於いて多くは最もすぐれてゐるものであることを考へて見ると、學校生活での不平や不滿の表白が、つまり批評が、自然その方面の學生と、とかく密接な關係を持つやうになるといふのは、自然のことであるやうに考へられる。禁止する側の無智と不用意とは、前にあげたある高等學校の圖書室の例などは別としても、一般に社會科學方面の考察や知識が教師側に甚だしく不足してゐて、學生は何かにつけて辯證法的唯物史觀の立ち場から教室で質問をしたりなどすることによつて、氣をやるといふやうな氣味もあるかと見受ける。要するに社會科學研究の禁止といふことを中心として、そこにいろいろの反撥する情勢が醸し成されてゐるらしく見える。それが一つのこだわりの根を作つてゐるやうに見える。雙方で神經を尖らせるやうになりがちなのは、皆そこに引つかゝつてのことらしく思はれる。

今日の高等學校時代の學生にとつての社會科學的方面の研究や考察には、今のやうな時代に於いて、比較的すぐれたその年

由の青年が起かずにゐられない情熱がある――――が感ぜられる。少なくとも、その方面の學生の中のおも眞面目なすぐれたものに於いてそれが感ぜられる。この智力的情熱を蔑する要求に對して、禁止や監視や、無智不用意な取り締りや、乃至は全く違つた立ち場からの否定などが、どういふ「効果」を持ち來たすであらうかといふことは、第三者にとつてはさう分りにくい問題ではない。學生が社會科學的研究に對して智力的情熱を抱くやうになつて來たといふことは、これを監督したり禁止したりする側から言つて、頗る困つた厄介なことに相違ない。しかしその困つた厄介な現象は、またその由つて來るところは、官吏や校長の力でどうすることも出來ないところに根ざしてゐる。今の青年中に、もし眞に良心ある教育者があつたら、この深い根について、その將來を見きはめて行つて、學生たちのその智力的熱情の由來と性質と方向とについて親切な理解に到達しようとでもつとめるであらう。或ひはまた、そこまでの指導や監督は力及ばざるところであるとして、その責から退くであらう。そのどちらにも出でず、放任も出來ず、學生の智力的情熱の向ふところを一時的にもせよ阻み止めなければならないやうな立ち場に置かれてゐるといふ點に、少なくともそこにもまた、今日に於ける教育の社會的意義が暴露せられてゐると言へるであらう。

(四) 大學教育萬能の弊

林　毅　陸

凡て特權なるものは面白くないものであつて、特權を打破する事は如何なる場合にても贊成する所である。萬人が機會均等を與へられ、その實力次第にて自由に無制限に、各自の運命を開拓し得なければならぬ。社會をして常に生々とした活氣あらしめ、萬事に於て絶えず進歩向上せしむる爲には何うしてもさうあらねばならぬ。昔、平家ならでは人に非ずと云はれた

事があつて最も嗤ふ可き事として話の種に成つてゐるのであるが、何ぞ計らんそれに類似の事が今日の時代に於ても見受けられると云ふ事では誠に我が文明の爲にも慚づべき事である。即ち官學を崇拜するの餘り官學出に非ざれば人でなきが如くに思はれた事もある。その弊は稍薄らぎ來つた樣ではあるけれど、未だその遺習決して無しとはせぬ。官學萬能の迷ひは兎も角次第に除かれつゝあるやうではあるけれど、尚刷新を要するものが殘つて居る。而して大學萬能主義に至りては、殆んど全教育界を風靡し居るかの感がある。大學教育を受けたる者に非ざれば人でなきかの如く、とに角學問を爲すと云へば皆競ふて大學に入らんとつとめる。さうしてそが爲に種々の害毒を流しつゝあるのである。更に一步を進めて言へば、學校萬能主義の弊ありとまで云ひたい。世人は學校教育に過度の重きを置き、學校の門をくゞるに非れば人間と成れないかの如くに考へ、餘りに學校教育の價値を買ひ被るの弊がある。已に學校教育の價値を買ひ被り、更に加ふるに大學教育の價値をも買ひ被ると云ふに至つては、その弊や推して知るべきである。

勿論學校教育は必要なるのみならず、大に尙ぶべきものである。大學教育亦固より然りである。教育は大に奬勵せらるべく、大學教育亦事情の許す者に於て成るべく多數之を受けんことを希望する。

然し乍ら學校教育以外の道を經て或は獨學に依り、或は實地の鍛錬に依つて立派な人物となり、社會に立つて立派な仕事をも爲し得る人は尠くない。又此の種の人物の多々益々多きを以つて大いに喜ぶべき事となさねばならぬ。從つて一般青年に向つても、此の獨學に依り實地の鍛錬に依つて人格を磨き智能を養ひ、以て社會に對して大なる貢獻を爲し得るの人と成る樣奬勵せねばならぬのである。學校教育を尊重するの餘り、それ以外には人生の進路を開拓する路の絕對に無きかの如く思はしむるは、非常に歎かはしい事である。況んや更に大學教育を過度に尊信し、全國の子弟をして事情能力の如何を問はず、唯大學に向つて熱中せしむるに至つては、一層慨嘆すべき事である。

要するに今日の教育界に於いての最大禍根は大學中心主義と成つて居る事である。多くの子弟が大學に入らんとして無理な勉强を爲し、而かも大多數は入學の目的を達せず、悲慘な現象を呈するに至るその罪は、是等青年のみにあるのではない。青年が虛榮心にかられて、何等の分別もなく、事情の如何を問はず、盲目的に只々大學に向つて走ると云ふ事は、不心得千萬ではあるけれども、實は父兄自身もさう云ふ方向を取らしむる樣にしてゐるのである。否、中等學校の教育者自身が、大學入學

に對する實際を理想として之が教育しつゝある。否々、國家自ら小學中心主義の教育制度を敷いて此の弊害を促してゐる。近頃頻りに世間で問題とせられてゐる試驗地獄とか入學難などの如きは、實は右の如くに深き根源を有する問題であつて、單に試驗の爲し方を改めるなどの如き些々たる事に依つて解決さるゝものではない。從つて學士號廢止云々の如きも枝葉の問題に過ぎない。

つまり大學中心主義の劃一制度の打破——之が現下に於ける最も重要なる問題と思ふ。必ずしも大學と稱せらるゝものでなくとも、必ずしも角帽を冠らなくとも、苟くも相當の高等教育を受けた者なれば　その學校の種類如何を問はず、無論官私の別をも問はず皆平等の立場に於て實力次第で、自由にその向上發展を計り得る事とせねばならぬ。又學校教育の資格なくとも、實際に有爲の人物に對しては、十分に進路を開かねばならぬ。形式的資格に依る差別待遇は一掃し去る可きである。大學中心主義に依て或一定の形式的資格を備ふるに非されば人に非ざるかの如くに見らるゝ如きは斷然打破せられねばならぬ。根本の問題は大學の名に拘泥せずして各種の學校を並び立たしめ、百花競ふて各々その美を發揮するが如きものとならしめたい。大學と云ふ型の學校を中心とし、その主義の下に劃一的の制度を布き、全國の總ての教育の學校は之に從はしむる事に努めんと徹底し、又全國の青年も一定の型に投げ入れられると云ふ事は、何としても忍び難き事であり、千百の弊害これより生じて居る。

右の外更に學校出身者を使用する一般社會に於ても、大いに猶弊を更めてもらひ度いと思ふ。學校の形式的資格に重きを置かず個人個人の實際の價値を主として判斷する、さうして實力の如何に依つて或者はどん／＼と進し或者はそれだけの待遇を與へられないと云ふ、それでこそ人間の活きた使ひ方である。活きた使ひ方に依つてこそ人間も活きた人間となるのである。例へば從來の弊風として出身の官私に依つて差別を設け、同じ官立にても高等工業學校出身者はいつまでも工科大學出身者の下に置かれ、その實力の如何に係らず前者は終生不幸な差別待遇を受けると云ふ。此の種の事柄は限りなくある。官界に於てはその弊最も甚しく、民間に於いても至る處にその事實を見る。此の弊を改むる事が又極めて必要である。併し、之も實は我國の教育制度が大學中心主義となり（帝大中心主義は滅らぎつつあるも）、更に角大學を本位としてゐる間に、世間一般の人も自然その弊にかぶれる事になつて居るのである。故に大學中心主義の打破が實は先決問題であらう。

けれども、政府に於て此の制度上の改革を斷行する事は何時

の事であるか豫測は出來ない。若し當り世間一般の學校出身者を使傭する側の人々に於て先づ、形式的資格に依る差別待遇を撤廢し、本人の實際の價値に重きを置き、大いに門戸を開いて青年の進路を自由ならしむる事にせられたいものである。さうすれば自然、此大學中心主義の弊害を幾分か矯正し得る事となるであらうと思ふ。人々の良く知る如く、米國などは學校の門をくゞらざる職工出身の人達が立派な地位に進むの實例甚だ多い。米人は勿論教育を尊重するとは云へ、日本人の如くに學校教育の萬能を信じて居ない。特に大學教育の萬能を信じてゐない。米國の社會に活々した氣分の常に横溢し、各方面に於ての進歩發展の甚だ驚くべきものあるは、此の邊に深き原因を有してゐるのではないかと思ふ。

(五) 教育制度改革問題

美濃部達吉

教育制度の改善と言つても、なか〳〵困難な問題で、私には確定の意見も有りません。何も無い所に新しく建設するならば、理想的な案を立てることも出來ますが、建設以來既に五十年餘の歴史を經た今日となつては、現狀を打破することは、容易な事ではなく、大改革を企てたところで、それを實行することは不可能とは言はれないまでも、甚だ困難であらうと思ひます。例へば大學に就いて言つても、帝國大學だけでも、東京、京都、東北、九州、北海道、京城、臺灣と既に七ケ所に建設せられて居り、單科大學、私立大學を合すれば、東京だけで既に十數個に達するでせうが、それは餘りに多すぎるとしても、一旦建設せられて相當の歴史を經たものはたとひ一校と雖も容易に廢止し得らるべきものではありませぬ。これまでも高等商業學校とか高等師範學校とかを廢止して帝國大學に併合するといふやうな企の有つたことは一再ではありませぬが、いつも中途で挫折する事を餘儀なくせられたのは之を證明するもので、一學校すらも廢止することが出來ないとすれば、教育制度の全

設に就いて根本的の大改革を企てようといふやうなことは、到底行ふべくして望むべからざる事だらうと思ひます。

それで實行の望の有る改革案としては、どうしても、現狀を基礎とする姑息な案となる外はありません。その改革案としても、別段珍しい奇拔な考の有るわけはなく、平凡な案となるの外ないことは已むを得ないところです。

今の教育制度の第一の重大な缺點は、餘りに學校教育を偏重することに在ります。學校教育は大衆教育で、多勢の生徒を一個所に集めて同じやうな教育を施すのでありますから、言はば大量生産の方法で、教育方法として決して理想的のものではありませぬ。これは教育を一般民衆に普及せしむる上に於いて已むを得ない方法でありますが、眞の教育方法としては、決して最も能く効果を擧げ得る所以ではないと思ひます。隨つて學校教育に費やす年限は出來るだけ短縮することが必要であります。

私は學校教育は成るべく滿二十歳くらゐを以て終らせたいと思ひます。二十歳から二十四五歳くらゐの間は人間の智識の最も發育する時期で、それを型に嵌つた學校教育に消費させることは、甚だ勿體ないことゝ思ひます。職業的の智識と能力とは職業に就いてから取得するものゝ方が一層大切で、學校教育は畢竟その準備なるに過ぎないのでありますから、人間の最も發育する時期には既に職業に就き職業的の智識と能力とを養ふことが出來るやうにするのが必要であると思ひます。

年限を短縮するには今の中學校と高等學校との制度を改革するの外は有りませぬ。私は今の高等學校の制度は結局廢止せらるべきものと思つて居ります。中學校の教課を改善して中學校から直接に大學に連絡せしむるやうにならねばならぬと思ひます。

學校教育の他の一の大なる缺點は、その教育を受けた者をして農村生活や勞働生活を嫌忌せしむる傾の有ることです。學校教育を受けた者が農村を嫌つて、都會に集中し、職業を得られないで、多くの高等遊食者を生ずることは、まことに社會の一大病患であります。是れは一般の社會組織經濟組織と關係することで、姑息な改革を以ては到底矯正し得られないところでありますが、學校教育をして今少し勞働生活に親しましむるやうにすることは、敢て望み難いところではなからうと思ひます。

學校教育偏重の弊を救ふべき一の方法としては、屢世間にも傳へられて居る通り學校の卒業から生ずる總ての特權を廢止することに在ります。これも多少の因襲もあり、外國との釣合も有り、之を斷行することは極めて困難であらうと思ひますが、

私は主義に於いて賛成して善いことと思ひます。

要するに教育制度に關して私の希望したいところは學校教育を成るべく早く終ることの出來るやうにすると共に、學校を出たといふだけで、世間からもエラク思はれず自分からもエライ者になつたやうな考をしないやうな傾向を養成したいといふことであります。單に學校を出たといふことよりも各人の持つて生れた天分の方が遙に重きを置かるべきものと信じます。人間の一生の運命は決して或る學校を出たか否かといふことによつて定るべきものでなく、その天賦の才能に依つて定まるべきものであります。今日の社會は人間の運命が餘りに多く學校の經歴に依つて左右せられ、人間本來の天分が餘りに輕視せられることを病弊とするものと信じます。

その外、國定教科書の問題、公民教育の問題、軍事訓練の問題、入學試驗の問題、所謂社會科學研究の問題など述べたいことも少くありませぬが、これ等は總て別の機會に讓ります。

新刊紹介書について

本誌の新刊紹介を希望せらるゝ向は、中央公論社内「中央公論新刊紹介係」(婦人公論への希望は「婦人公論新刊紹介係」)と明瞭に表記相成度、個人に宛てて御送附無之樣願上候。

特に個人へ献本せられんとするものは、相成るべくは個人の私宅へ宛て御送附被下候て、新刊紹介書と献本と、中央公論への希望と婦人公論への希望とを明確になし下され度、そのいづれをも希望せらるる方は、そのいづれもへ一部づつ御送附願上候

中央公論編輯部

社會時評

對支出兵問題

吉野作造

支那出兵問題に付て、現内閣の餘りに民間の反對論を苦にするは姑く恕するとして、之に關する言論の彈壓の恐しく過酷なるは吾人の了解に苦む所である。出兵に對して支那側が無條件に反對なるは云ふまでもない。支那側の反對など顧慮するに足らぬと云はゞそれまでなれど、日支兩國の將來の親善を思ふ者は、政略上から云つても、日本内部にも多少の出兵反對論者の存在することを示すことに依て幾分支那側の感情の融和をはかるに努むべき筈である。國内に反對論の横行を許すは出征軍の士氣に關すと云ふ議論もあるが、政府の一旦犯した過誤を徹底的に押し通させる爲に、強て沈默を守らねばならぬ義務を我々國民は負ふ必要はない。

いづれにしても政府の政策に反對する言論の彈壓は立憲政の汚瀆である。之は何時如何なる場合に付ても云へるが、殊に對支出兵問題に付ては他のいろ／＼な理由に依て更に一層大なる失當の處置であることを斷言するに憚らない。

× × × × ×

青島に居つた兵隊の濟南に進出した以上大連の兵を青島に移すは已むを得ない。青島に足らざる所を補充せざれば濟南の安全が期せられないからである。故に第二次出兵は濟南進出の當然の結果にしてそれ自身としてはいゝも惡いもない。是非得失は寧ろ濟南進出に付て爭はれる。そこで私共は思ふ、濟南進出に一體何の必要あり又之を遂行するに抑も何の權利ありやと。

× × × × ×

先づ實際の結果から觀よう。我が軍隊の濟南進出を機として

北軍の旗色殊によくなり南軍の氣勢頗る挫けたるの觀がある。顧れば一二ケ月前は、北京は馮國璋等の脅迫を受け張作霖の運命は風前の燈も啻ならざる有樣であつた。斯かる形勢の自然的推移に對し意外な障碍を與へたものは實に我が第一次の出兵であつた。我か日本は必しも南方の進出を邪魔しようと云ふのではない、日本には日本獨自の當然の希望があるのだと云ふ。當然の權利の遂行に依て甲が利し乙の損するは致方がないと云ふわけだ。よしそれが日本の直接に期する所でなかつたにしろ、出兵の結果が事實上南軍の進撃に對して北軍を庇保するものであつたことは疑ない。斯くして南北對峙の形勢は姑くは停頓の姿となつたのだ。此間南北双方はいろ／＼秘術をつくして裏面の暗闘に苦心したらしい。北方は南方の結束を破りその一角を誘系して他の総系を抑へんとした。南方にまた北方をその内部から内攻して、帝に天下を窺へんとした。而してその孰れかから日本の孰れかの方面へ或種の運動のあつたことも爭はれない事實だと云はれる。併し日本の内部には出兵反對論がなか／＼旺だ。既に決行せる第一次出兵に對してすら輿論は却つて反對の聲をあげ、中には速に撤兵すべきを要求する者も少くはない。斯んな風では第二次出兵などは思ひも寄らぬことだ。如何な政友會内閣でも此上の出兵だけは逡巡するだらうと我々自身も安心して居たのだから、支那の人達が之を豫期しなかつたのに不思議はない。その爲か南方派は六月の末頃からそろ／＼北方進撃を開始した。張作霖派の旗色頗る面白くない。そこへ忽に我が第二次の出兵が現はれ、強弱の勢俄に地を易へんとするかに見へると云ふわけになつたのである。

帝國の政府はいふ、我國は我が當然の權利を實行するまでで固より甲を助け乙を窘めると云ふ意圖はない、絶對に不偏不黨であると。それに相違はあるまいが、事實上の結果が、勝つべきものに勝つ機會を失はしめ、負けそうになつた奴に安心して休息するを得しめたことは疑ない。之を支那が怨嗟するのは、その當否は別として、亦人情の自然と許さねばなるまいと思ふ。

× × × × ×

昨今の支那電報を見ると、南方側の勢力が些しでも北方に伸びかけると其の地方の秩序が直に紊れるかの如くに報ずる。之に反して北方派の勢容が恢復したと云つては洶々たる人心も頓と落ち付いたと云ふ。丸で北方が優勢であれば安全が保たれ南方の手が伸びれば何事が起るか分らぬと云つた風の報道ばかりだ。私は這の報道の私の平素の見解と著しく相違するを怪しみ、新聞關係の支人に就て疑を質したところ、官憲の指示する

所に依るもので致方がないと云ふのであつたなら、さうして見れば、北方を是とし南方を否とするは或は我國の公權的解釋と觀てもいいのであるまいか。誤解を防ぐ爲に云つておくが、所謂南北の是否とは帝國政府が直接にも間接にも支那の内爭に干入してこの孰れかに加擔すると言ふ意味ではない。秩序維持の誠意と手腕とに於て南方に信頼せず北方に信頼すべきものあるを認めると云ふだけのことである。北方に秩序維持の誠意と能力とあるから陰に陽に之を助けようと云ふことになればそは正しく内政干渉になる。斯の如きは固より我が政府の斷じて手を觸るる所ではない。只私の云はんと欲する所は、我が政府の對支政策は正しく如上の一種獨特の見解に基いて樹てられて居ると云ふ事である。即ち北を是とし南を否とする前提に基いたと觀なければ對支出兵と云ふ大膽な冒險の根據が解らないからである。

× × × × ×

北方派が優勢である間はよし、之が南軍に取て代られると北方一帶の秩序がみだれる。尤も秩序がみだれるとする觀測に對しては内外を通じ大に異議を唱ふるものがあらう。併しそれは事實の上に現はれない限り水掛論におはるから今は論ずまい。只少しく立ち入つて考へて見たいのは、北方一帶の秩序がみだれると何故に我國の出兵が必要になるかの點である。隣邦の紛亂に何程のものに對しても我國の患害の甚だしきは看過できない。併し單にこれだけでは出兵すべき理由にはならない。そこで我國では秩序の紊亂に依て居留民の安全が威脅はれると云ふことにその理由を求めた。と云ふよりも、北支那一帶の居留民からその生命財産の保安の爲め是非出兵をとの熱烈なる要求に接し、深くその利害得失を考慮もせず、漫然之を相當理由あるものとして出兵を決行したと云つた方が適當であるのかも知れない。

だが居留民保護を理由とする出兵の不條理なることは詳細に前號の本欄でも説いた。之に付ては北京に居る數名の知人からは抗議を申し込まれたが、支那に永く居る多數の友人からは續々賛成の手紙を貰つて居る。よその國に居て、而もその國の市民が血みどろになつて國運改新の惡戰苦闘を續けて居る眞中に踏み留つて、己れの懷には一指をも觸れさせまいとするのは餘りに蟲のよ過ぎる要求ではあるまいか。生命財産が惜くば速に一時引き揚げたがよい。現に北京天津方面では西洋人などは婦人小兒を皆安全な地點に移したといふではないか。この方面で婦人や子供の呑氣さうにブラ／＼して居るのは日本人に限ると云ふ。そして彼等はその儘の生活を安樂に續け得る樣に保護して貰ひたいと、頻りに本國に出兵を要求するのである。尤もこの

要求の聲に應じて出兵を決行した理由はまた外にもあらう。要求に依つたら當局者は這の要求の爲に出兵したのではないと云ふかも知れぬ。併し之れ丈は間違なく云へる、北支那の居留民があれ程利己的でなく又あれ程横着でなく、少しでも帝國全體の利害を打算する聰明を有つて居つたなら、而して又自力で自家の問題を適當に處置して居つたなら、如何に出兵好きな田中内閣も、その口實を見出すに苦んで今日の樣に輿論の反對を受けずに濟んだことであらう。



川崎造船所救濟問題

堀江歸一

公明ならざる政治

我國の政治家は立憲治下の今日、最も公明なる方法を以つて、政治を行はざる可からざる地位に立ちながら、尙ほ議會の監督を離れ、國民の批判を脱して、自家の思ふ如くに、隱密の間に之を行はんとする惡癖の掩ふ可からざるものがある。若槻前內閣が一の台灣銀行を通じて、一の鈴木商店を救濟する爲め、緊急勅令に依つて、國家補償の義務を負はうとして、內閣瓦解の原因を爲したことは、世人の記憶に新なる所であるが、田中內閣亦川崎造船所救濟問題に就て、臨時議會を召集することを回避し、大藏省の意見に基き、日本興業銀行の發行に係る債券を預金部に於て引受け、更に興銀をして債券發行に依つて得た資金を川崎造船所に貸付けしめる案を以て、解決しやうとしたに對して、先づ世間の物議を招き、續いて興銀の反對に會し、遂には閣僚中にも異議を挾む者を生じて、今や川崎救濟の計畫は停頓するに至つたし、解決の成らざるときには、川崎造船所は倒壞の已むを得ざること〻爲るであらうし、曲り成りに解決を告げたとしても、大藏大臣の面目は蹂躪され、內閣の不統一は遺憾なく世間に暴露し、閣僚を統率して、閣議を成立せしめる能力の首相に缺けて居ることも亦外間に示され、田中內閣をして深き傷痍を蒙らしめざるを得ざるに至つた。斯る不利なる結果を生ずる位ならば、寧ろ始めから臨時議會を召集し、川崎造

船所を救濟することの國防上に必要なる理由を說明し、而して此必要を充すには、興業銀行をして三千萬圓の貸出を爲さしめなければならず、其れには國家に於て、此貸出に伴ふ損失の若干額まで、保證する地位に立つ可きものであると云ふことを國民の面前に開陳して、其贊成を求めるの可なるを見るのである。台灣銀行救濟の爲めに、緊急勅令を制定しやうとした若槻內閣に對して、政友會は其臨時議會に依らざる可からざることを力說し、又實際政友會自ら政權を掌握するや、パニック善後策として案出した金融救濟の諸法案を臨時議會の議に付した次第であるのに、川崎造船所救濟の計畫に就ては遽に手の裏を飜すが如く、臨時議會に依らず、預金部并に興銀の利用とか、責任支出とか、帝國議會の監督を離れた方法を以つて、事を決しやうとするのは、何故であるか。私は臨時議會に提出された金融救濟の計畫が一般に其効果を及ぼし、又其手段の公明であるに對して、川崎造船所の救濟に或る暗影の伴ふことが政府をして斯る態度に出でしめる原因と爲つたのではあるまいかと思ふ。

川崎救濟の當否

私をして卒直に云はしめれば、國費を以つて、又國民の負擔を以つて、川崎造船所を救濟することが果して正當なる理由に基くものであるかどうか、此事が一個の問題であつて、政府が如何に辭を構へて、辯明した所で、國民の贊成を博するに困難なる事情があり、此事が政府を驅つて臨時議會召集と云ふ公明なる手段を避けて、暗黑裡の方法を求めるに至らしめた最大原因であると思はれる。政府が川崎造船所救濟の理由として擧げる所は（一）同造船所の倒壞に依つて、艦艇建造に必要なる有形的施設や、熟練勞働者を喪失したならば、國防上に大なる缺陷を生ずること、（二）同造船所にして倒壞したたならば、國家は造艦費の前渡金を損失し、建造中の艦船亦造船所の財產として處分されるの損失を蒙らざるを得ないと云ふ二點に存する。卒然として之を見るときは、國費を以つて、川崎造船所を救濟する適當の理由を以つて、目されるが如くであるが、私は直に之に贊成するを得ない。固より我國の如く鐵工業の幼稚なる現狀に於ては、政府の爲めに造艦事業に從ふものは必ずしも多しとするを得ないが、左ればと云つて、川崎造船所一個所に止まるものでなく、三菱造船所もあれば、鎭守府直屬の海軍工廠もあり、加ふるに近年の如く世界に平和の風潮の行はれるもの頗る盛であり、軍備縮小の計畫の實現して已まざる場合には、縱めて短小の日時を限つて、造艦の計畫を全ふせざる可からざる程

の理由はなく、川崎造船所にして倒壞したならば、其用と爲る設備、材料、熟練職工等の優良なるものは、他の造船所又は工場に移して、其用を爲さしめる道の多々あることが考へられる。若し其れ川崎造船所の倒壞に依つて、國庫が前渡金を損失するとか建造中の艦船が處分されて、損失を招くとかすれば、是等を理由として、川崎を救濟する以前に、斯る危險なる造船所に向つて、重大なる契約を締結し、以つて工作を命じたり、工作を命じた後に、適當なる監督を施して、危險を未然に防止しなかつた海軍當局者に負ふ可き責任のあることを糺さなければならない。之を不問に付して、一方に川崎造船所の救濟を必要とするが如き、本末顚倒の甚だしきものであつて、若しも救濟計畫が議會の問題と爲つたならば、此點から海軍當局者は責任を問はれ、責任を明にするまでは、如何なる救濟計畫も議會の賛成を得ることを難しとするであらう。是れ亦政府をして議會を召集する正道を避けるに至らしめた一の理由であると思はれる。

或は責任支出に依つて、川崎を救濟することも、一の議論たるを得るが、此方法に依るは、要するに議會召集に要する日時を待つ能はざるまでに、事情の切迫し來つたことを必要とする。川崎の救濟は今日何人の眼を以つて之を見ても、斯くまでも事情の切迫せるものとすることを得ない。若し斯くまでに今日内閣の事情切迫し來たりとすれば、無事たる、急轉救濟問題の起つて以來、之を解決する方法の決定に就て、幾多の議論が起り、大藏大臣と興銀總裁との交渉が落着するかと思へば、大藏大臣と其他の閣僚との間に、意見の衝突を來し、徒に議論の爲めに、時日を徒消したからであつて、若しも事件を切迫せしめて、責任支出の已むを得ざるに至つたとすれば、其原因は田中内閣の不統一に存するのであつて、此點に於て、重大なる責任問題の生ずることを免かれないであらう。

預金部利用の弊

始め大藏省は川崎造船所救濟問題を最も手輕に取扱ひ、十五銀行救濟と相關聯して、公共上の利害に關係する以上は、之を理由として、預金部の資金を流用するに憚らざるものとしたのである。預金部は從來我國の財界並に金融界に於て、伏魔殿を以つて目され、實に百弊の生ずる根源と爲つて居つた。斯くて先年預金部資金運用法に關する規定改正され、有利確實の一條件を以つて、資金運用の根本義としたのである。然らば興銀をして川崎造船所に融通する資金を調達する特殊の目的を以つて、發行せしめた債券を預金部に於て引受けるが如き、右に述

ふ有利確實を要する條件に違背するのは勿論であつて、田中内閣が大藏省の議を容れて、此事を行つたならば、世論の非難を招く可きことは當然である。然も大藏省は多年預金部を濫用し來つた惡癖から脱する能はず、依然預金部を利用することを思ひ立ち、融通の衝に當る機關として、日本興業銀行を求めたのである。固より世論の反對はあらうが、人の噂も七十五日と云ふ喩の如く、時日さへ經過すれば、自然に消滅するであらうし、預金部資金運用委員會にした所で、官吏や、特殊銀行の首腦者が委員の多數を占めて居る以上は、政府案の通過を見ること、容易であるを得るものと、萬事に多寡を括つて居つたものゝ如くであつた。然も禍は蕭牆の内より起ると云はれる如く、藏相の計畫に對して第一に反對したのが興業銀行であり、續いて閣僚中にも反對するものを生じ、更に政友會員中にも反對を表するものがあり、今や預金部の利用を骨子とする藏相の計畫は無援孤立の地位に陷らざるを得ざるに至つた。固より大藏省案に代る可き諸案例へば責任支出を以つて、三千萬圓の國庫金を川崎造船所に貸付けることも、同造船所の造船部を國家に於て管理することも、何等名案とするに足らないから、結局預金部利用の大藏省案が採用され、興業銀行をして進んで川崎造船所に對する資金の融通を行はしめる爲めに其融通に依つて、損失を蒙つた場合には、政府に於て、之を補償する義務を負ふことを約束しなければならないことゝ爲るかも知れない。斯る約束を爲すことの違憲であつて、將來に大なる問題を殘す、然も之を回避するには、少なくとも川崎造船所が興業銀行に對して、借入金の元利を支拂はなかつた場合には、政府は興業銀行をして預金部に對する元利支拂の義務を免除せしめ、而して預金部に向つては、一般歳計から收入の回收される分を塡補することゝしなければならない。斯の如きは、預金部資金運用法に規定された有利確實を條件として、資金を運用す可しとある根本原則に背反するものであり、次第に依つては政府をして豫算外國庫の負擔を荷はしめるに至るかも知れない。此危險なきことの諒解を世人に與へる爲め、整理後に於ける川崎造船所の事業の有望であると云ふ見込みが當局者に依つて、世間に宣傳されるやうであるが果して如何なるものであらうか。兎に角斯る豫算外國庫の負擔と爲る契約を締結することの不當なるに就ては、必ず他日議會の攻撃を招くのみならず、預金部の資金を濫用して、國家的若しくは公共的名分の立たざる一私立會社を救濟した點に於て、國民の非難を蒙るであらう。殊に預金部資金の大部分は中流以下の人々の粒々辛苦の結果に成る郵便貯金であるのに、其れが一般國民の利益と爲る國家の必要を充すの財源に充

てられず、一私立會社殊に好景氣時代に暴利を獲得して、其後の經營を誤まつた一會社を救濟する用に充てられたとあつては、普通選擧の行はれる今日、田中內閣に對し、政友會に對して、國民の感情の害されるのは勿論であつて、以前であれば、斯る資本家を私する政治を自由勝手に行つた政友會も流石に普選の時代と爲つては、國民を憚り、恐れるものあつて、大藏大臣の計畫に賛成するに躊躇したものと想像される。普選の効果如何は我國に於て一の問題と爲つて居る。固より普選が次の總選擧から實行されたからと云つて、直に我國政治の革新を實現するものとは思はれないが、民衆の力なり、感情なりの直接に政治運動に現はれることに依つて、政府をして從前の如き横暴の處置を愼ましめるを得るものと考へられた。而して此事が普選實施前の今日に於て、從來横暴至らさるものなかつた政友會內閣をして川崎救濟問題に就て、愼む所あらしめたのは、即ち普選の効果の現はれたものと云へる。

特殊銀行、政府の自由に動かず

日本興業銀行は我國特殊銀行中、微弱なるものゝ一であり、從來多くの機會に於て、政府の命を奉じて、金融上の用務を爲すことを怠らなかつた。添田壽一氏の總裁時代に波佐見金鑛に對する貸出を爲し、志立鐵次郎氏の總裁時代に對支借款に應じ、土方久徵氏の總裁時代に國際汽船に對する貸出を爲し、何れも政府の命令に依つて、銀行に莫大の損失を及ぼすに至つたのである。然し興銀は損失を蒙り、總裁亦責任を負ふて、職を辭したと云ふものゝ、一の特殊銀行としては、依然として存在して居る。特殊銀行である以上は、政府の命を奉じて、政府の爲めに盡すのが當然であると云ふ考へは、常に財政當局者の腦裡に存する所である。故に今回の如く、川崎救濟の爲めに、資金を必要とするや、財政當局者の眼は自ら興銀に向ふのであつて、興銀をして興業債券を發行せしめ、預金部に於て引受け、斯くて興銀の得た資金は之を川崎に融通せしめることの計畫の如き、興銀としては、既往に於て然りしが如く、今回も亦一議に及ぶまでもなく、直に承認する所と信じたのに相違なく、斯くて高橋前藏相の時代に成立した案が三土現藏相の繼承する所と爲つたのである。然るに興銀の態度は案に相違して、政府の請求に應ぜず、遂に損失補償の約束まで求めて、散々に財政當局者を苦惱せしめ、其計畫の進行に一頓挫を來さしめたのは、何故であるか。興銀の現總裁小野英二郎氏は風格の高き溫良の紳士であり、又銀行業に多年の經驗を有する人であるが、左ればと云つて、前任總裁たる添田、志立、土方の諸氏に比較して

特に鯁直の性を備へ、自己の認めて正しとする所に對しては、自家の地位を擲つも顧みざると云ふ性格の人とも考へられない。其小野氏が平生の温柔なる態度を一變し、猛虎の如き威を以つて、財政當局者に向つたのは、何故であるか。私は其原因を求めて、下の三點に歸する。（一）預金部の資金を一不良會社に融通することに對する民間の非難攻撃頗る盛であつて、興銀として其渦中に捲き込まれることを恐れ、（二）斯る輿論の反對を楯として、興銀亦容易に政府の請求を峻拒するを得、（三）既往幾回かに亘つて、興銀は政府の無理なる請求に應じて爲した貸付の固定に依り、損失を蒙つて、株主に迷惑を加へた記憶の新なるものがある等の事實を擧げるを得る。現に寺内内閣時代に興業銀行が時の對支政策を遂行する一端として、興業債券に依つて收め得た資金を北方軍閥を代表する段祺瑞内閣に貸付け、元利金の回收不能であるに拘はらず、興業債券の元利金は債券所有者に支拂はざる可からざる窮地に陷り、結局政府の對支借款肩替りに依つて、此困難を免がれるを得たもの丶、其の此所に至るまで、興銀の苦しみ、惱む所少なしとしなかつた。此記憶の存する以上は、興銀は政府の御用を奉ずるに懲りて居るのは勿論であつて、同銀行が今回必死と爲つて、政府に反抗したのも、決して偶然ではない。然しながら私を以つて見るに、興銀をして今度政府の命令を奉ぜざらしめたに就ては、別に原因の有力なるものがある。其れは外でもない、今日の大藏大臣たる三土氏の威力、聲望共に不充分であつて、興銀當局者をして、自ら大藏大臣を輕蔑し寧ろ正義の存し、條理の命ずる所を主張せしめ得るの一事である。大藏大臣が松方公の如き、桂公の如き餘りに大なる威力を揮ふ人であつて、自家の乾兒を財界の要地に配置したり、公器を弄して、自他の利益を謀つたりすることの不合理であるや、論を俟たないが、苟も一國の藏相として、財務を處理する以上は、國家の爲めに爲すを必要と認めた政策に就ては、銀行家の如き、商工業者の如きを自家の手足の如くに驅使して、目的を達するだけの權威を持つて居らなければならない。特殊銀行の正副總裁を政府任免權の下に置き、斯くて特殊銀行をして政府に隷屬せしめることの制度としての可否に就ては、今茲に論じないが、現在斯る制度の存續しつ丶あるからには、大藏大臣は當然之を利用して、自己の目的を達す可きであり、特殊銀行の總裁にして、之を拒否したならば、其地位から現任者を逐ふて、新任者を迎へるを不可なりとせざる道理である。從來特殊銀行が政府の命ずる所を奉じて、違はなかつたのは、要するに直接には大藏大臣の有する任免權の發動を恐れるが爲めであり、間接には大藏大臣平生の威力に壓迫されるから

である。然るに今我國特殊銀行中、最も微力であり、又多年政府の御用を大切に奉じ來つた興業銀行すら、歴代大藏大臣の命令を拒絶し、世人をして其總裁の柄にもなき硬骨振りを稱揚せしめて、已まないと云ふが如きは、誠に瓢箪から駒の出た感があり、殊に微力なる特殊銀行に温厚の君子人が總裁の職を奉ずる際に此事實の生じたのに就て、一層此感を深うせざるを得ない。斯人にして尚ほ藏相の命令に反抗するに至つては、即ち藏相が藏相としての權威に乏しく、特殊銀行をして自己の所說に聽從せしめる能はざる一事に其原因が求められるのである。

權威の乏しき藏相

三土忠造と云ふ姓名の如き、數年前から衆議院議員として、時々吾人の耳目に觸れる所ではあるが、高橋是清氏の藏相であり、農相であつた際に、政務官に歴任し、又衆議院に於て豫算案其他に關して、政友會を代表する數字澤山の演說を爲した位が斯人の經歷の全部であつて、別に經濟財政に關して自家の經綸を示したこともなければ、實際方面に關して、行政上の手腕を揮つた事實もない。高橋是清氏の辭職に際し、氏の推薦に依つて、藏相の地位を占めたことの如き、三土氏の閲歴なり、實力なりから云へば、意外の沙汰であつて、人物拂底の政友會としては、已むを得ざる所であつたとするの外はないかも知れないが、其選叙の誤まれることは、彼の官僚内閣に於て、秘書官級の人物が親分の推薦を唯一の力として、大臣の高位に上つたのと異ならない。其れも財界の平穩無事を極める時であれば兎に角、金融市場に起れる波瀾、尚ほ鎭靜せず、大藏大臣の手腕を揮ふ可き問題の多々ある際に、斯る無權威の人を藏相として、能く難局に處せしめるを得るかは、何人も疑問とした所であつたが、不幸にして三土氏は第一次の試驗とも見る可き川崎造船所救濟問題に就て、物の見事に失敗し、啻に藏相としての貫祿の足らざることを暴露したのみならず、田中内閣に統一なく、田中首相に閣議を統率する能力なきことをも示した次第である。

由來閲歴のみに重きを置いて、人を尊重するの愚なるは論を俟たない。我國に於て、新進者流を拔擢する聲の頗る高きものあるは、閲歴のみあつて、白痴威しに類する人物が兎角世間に跋扈するからであつて、斯る流弊を矯めるの必要は夙に私の認める所であり、斯くて新人の拔擢を必要とするのであるが、其新人なるものは必ず實力の具備した人であることを必要とする。實力の伴はざる新人を徒に新人であると云ふ故を以つて、國家の要職に當らしめることの危險なるは、三土藏相に於て、之を

見たのである。

或は三土氏にしても、自己の實力の乏しく、威權の小なるに顧み、天下の正道とする所を迷はずに踏み歩き、一方に閣僚並に與黨全體の援助に依頼したならば、大過なきを得たかも知れないが、一會社を救濟するに就て、預金部資金融通、興銀利用と云ふが如き邪道に踏み迷ひ、權威の小なる身を以つて、橫暴を縱にしやうとし、然も閣僚の間に氏の藏相に就任したことを嫉視して、氏を助けざる者あるに至つては、三土氏としては誠に自己の無力不徳を喫ぜざるを得ないであらう。今や此問題は如何なる形に於て解決されるとしても、田中内閣の一失政と爲り、攻擊の料を反對黨に與へるのは、已むを得ざる所であつて、畢竟無力の者を藏相に擧げた餘弊とす可きである。

十五銀行と川崎造船所

由來十五銀行の開業と川崎造船所の救濟とは相關聯した問題であつて、引き離し難き關係を持つて居る。故に十五銀行開業問題の解決を高橋前藏相から依頼された郷誠之助男とか、井上日銀總裁とか云ふやうな人々が預金部資金の融通に依つて、川崎を蘇生せしめ、斯くて十五銀行の川崎造船所に有する債權を有効のものとして、十五銀行復活の道を求める案を立て、三土藏相亦之を取つて、兩者救濟の妙案と信ずるに至つたものと解されるが、如何なる犧牲を拂つても、川崎造船所なり、十五銀行なりを破綻前の狀態に復活せしめる理由は世人の諒とする能はざる所であつて、資産上に於ける兩者の缺陷の大であればあるだけ、資本金の減少とか、積立金の切崩とか、事業の縮小とか、不用資産の處分とか、重役の私財提供とか、其れ〴〵の方法に依つて、整理を實現する道は多々あるのに、是等の事は殆ど不問に付し、川崎造船所の如き瑕疵の多く、缺陷の大なる會社をも、同樣の資産狀態に居る十五銀行をも完全なる狀態に於て、又は完全に近き狀態に於て、恢復せしめやうとする。此行はれ難き所を行はふとする爲めに、幾多の無理を生ずるのである。既に日銀特別融通及損失補償法成立し、十五銀行亦其の適用を受けるを得る以上は、其力に依り、許されるだけの範圍に於て復活す可きであり、川崎造船所亦十五銀行の力の及ぶ限りに於て、自立の策を講ず可きである。川崎造船所が國防上の理由に基いて、存在せしめるに値せざることは、前論の如くであり、之を存立せしめると否とは、純經濟上の問題に屬する。果して然らば造船所の自力を竭して、存立せしめることが當然であり、自力存立に堪へざるに於ては、造船所の解散亦已むを得ない。現に川崎造船所に對して、債權者の差押の行はれるに

至つたことの如き、國家の力を以つてしても、三千萬圓程度の出資であつては、彼の如き會社を救濟することの如何に困難であるかを語る一の事實とするに足りる。一兩月來の新聞紙には大倉組が川崎造船所に巨額の債權を有することを楯として、造船所の財産を差押へるの擧に出で、他の大小債權者亦自己の債權を保護する爲めに、同樣の處置を講ずるの結果、政府の川崎救濟計畫をして水泡に歸せしめ、政府としては川崎救濟を斷念せざるを得ざるに至るであらうと云ふことが報ぜられて居る。私は前段に大藏大臣の無力なることを憐んだが、右の報道に接して、我國政治家の權威の乏しきことを認めざるを得ない。大倉組の主人大倉喜八郎なる人は近頃家督を伜に讓つて、隱居したと稱するが、大倉組の實權は依然として此老人の掌裡に在るのであらう。大倉喜八郎氏に就ては、世間に毀譽の相半ばするものがあり、何れを眞實とするかは之を知らないが、兎に角我國御用商人中の最も大なる成功者であり、西南戰爭以來政府の御用を勤めて、資産を積んだと稱されるし、時の權臣大官に特殊の因縁を有すると傳へられる。最近小松綠氏の刊行した「外交秘話」と題する書冊を閲讀すると、伊藤公は「よく喜八郎を連れ出して、其向島の別邸に押しかけ、此處で藝者を呼んでは飮んだものだ。大倉も其れを名譽と心得て、此別邸を何時でも伊藤の使用に開放して居つたのである」と云ふ一節のあるに徵しても、大倉なる者が元老大臣の爲めには、自個の邸宅を待合同樣にし、醜業婦と遊興を縱にするまでに、蹂躙されて、却つて之を名譽として、斯くて時の權臣に阿諛の限りを盡した卑劣下賤の操作が十二分に窺はれるではないか。其大倉が今、田中内閣に於て、首相自ら内閣の運命に危險を及ぼすの恐怖を懷きつゝ、川崎救濟問題の爲めに、懸命の努力を致して居る際に、突如橫合から飛出し來つて、川崎の財産差押を行ひ、斯くて救濟計畫の進行に一大障害を加へて、憚らざるが如き、恰も曩日の新聞が遂に獨立獨行の紳士に豹變したと同樣であつて、何人も一驚を喫せざるを得ないであらうし、就中田中首相の如きは、一政商大倉に依つて、自己の鼻面を摩せられた感があるであらう。唯大倉としては自卑自屈の態度を取つて、金錢を儲けるよりも、斯く堂々たる行動の下に、自家の權利を法律上に於て、爭ふことの快なるを頽齡の今日に至つて、始めて知つたであらう。唯大倉をして斯く時の大官を眼中に置かざる態度に出でしめたのは、必ずしも大倉其人の偉大と爲つた故でなく、寧ろ政府の大官權臣と稱される人々が無力と爲り、無權威と爲り一政商にすら輕蔑されるに至れる結果である。田中首相の無識無經綸であることは、臨時議會に於て、遺憾なく暴露さ

れた。唯其一介の武辯である所から、何事の決斷にも神速であり、斯くて政務の進行に遺憾なきを得るかと云へば、川崎救濟問題に就て見るが如く、優柔不斷驚く可きものがある。大倉組の差押事件の突發したことの如き、首相の決斷に手間取つて、解決の後れた間隙に乘ぜられたものに外ならない、斯くて田中男の政治家としての信用日に失墜し、世間の侮蔑を買ふに至るのも、誠に已むを得ざる所である。斯の如きは國家の爲めに、幸か不幸か之を知らないが、目前の事實は首相とか、大臣とか云はれる人々の到る所で、愚弄されたり、蔑視されたりして居る材料を供へて居るのである。

斯の如くして川崎造船所救濟は經濟問題から、政治問題に發展し來り、如何なる方法を以つてするを問はず、田中内閣をして暗礁に乘せ上げしめざれば已まざるに至つた。而して此危險に恐怖して、田中首相は自己に一任された川崎救濟問題を一時打切つて、爾後の形勢を觀望することに決心したと傳へられる。（七月五日諸新聞紙朝刊）此一事は田中内閣としては已むを得ざる所であらう。然も當初から自己の力を顧みず、又川崎の實狀を知らずして、救濟計畫に着手し、一個月の久しきに亘つて、此事に狂奔し、徒勞し、遂に一事をも成就せず、結局世間を騷がすに終つた責任は如何にするか、抑も亦川崎造船所の救濟打切りに伴ふ造船所の破産若しくは營業休止と共に生ずる職工の解傭、失業、之に關聯する社會問題に對して、如何なる處置を取るか、此邊の所爲に一歩を誤まつたならば、社會上收拾す可からざる事端の發生を免かれざる虞れの大なるものがある。

川崎造船所の救濟と相關聯して、當然發生し來るものは、十五銀行開業難の問題である。蓋し前者を救濟することに依つて、後者の開業を促進し、一石能く二鳥を捕たんとすることが當初からの政府の計畫であつたが、今や此事は之を實現するに困難なる趣きと爲り來り、十五銀行の開業は川崎造船所の救濟と引離して、考へざる可らざる狀勢と爲れるやうに認められる。然し斯くの如く爲るのが道理の正しきを得たものである。蓋し十五銀行の如き、之を其休業銀行の一として、日銀特別融通法の下に、蘇生せしめるに於ては、何人と雖も、別に異議を挾むを得ない、日銀特別融通法に於て、日本銀行設立の精神若しくは多年來の營業方針に違反するに拘はらず、船舶、工場財團等に對して、發行された債權證書を見返品として、日銀に於て資金を融通するを得ると云ふ寬大なる――寧ろ放漫なる規定の設けられたのも、實に十五銀行を救濟する必要に基いたことは公然の秘密である。而して十五銀行の債務者たる川崎造船所にして復活さへすれば、右の債權證書は日銀に對する行動なる

擔保物と爲つて、十五銀行の開業若しくは營業繼續に大なる便利を與へるが、川崎造船所救濟の見込なきこと、今日の如く爲るに於ては、十五銀行は如何なる運命に陥るであらうか。抑も亦臨時議會に於て、十五銀行の日銀補償法の下に、必ず復活するを得ることの諒解の下に、僅に數時間の内に、貴族院をして同法を成立せしめた、政府の責任は如何なるであらうか。固より政治上に公然たる責任のないのは勿論であるが、何等の機會に於て、貴族院が此事を種子として、田中内閣に或る種の要求を致すに至りはしないであらうか、興味ある事件とするに足りる。

財閥松方に就て

過日東京日々新聞は十五銀行整理の一端として、松方公爵が私財の殆ど全部を銀行に提供する決心をしたと云ふ報道を傳へた。松方公爵の私財なるものが幾何の金額に上るか、私は之を知らない。思ふに日本屈指の富豪の有する所に比較したならば、極めて小なるものであらう。然も松方公は四五年前まで、十五銀行の頭取であり、頭取退任後に於ても、取締役の一員であつたし、而して十五銀行が彼の如き失態を演ずるに至つたのは、松方公の實弟を始めとして、所謂松方系の實業家に對して、無謀の貸出を爲したことを以つて、有力なる原因とし、先年十五銀行に合併されて、却つて同銀行の資産を不良ならしめた浪速銀行は松方一族の經營に屬し、川崎造船所亦實に松方幸次郎氏を首腦者とした等の關係から考へるときは、松方公爵が公爵の榮稱こそ保留するが、私財の一切を提供して、社會に對する損失を出來る限り輕くすると云ふ覺悟を定めたのは如何にも殊勝の志であつて、流石に名門の主人たり、明治元勳の後たるに耻ぢざるの所業と解された。固より松方一族の擲たんとする私財は川崎の負ふ債務、其必要とする流動資金若しくは十五銀行の有する固定貸に對して、數ふるに足らぬ程のものであらうが、之を擲つ心事の高潔なることは、吾人の稱讃を惜まざる所である。今や川崎造船所救濟並に十五銀行開業の問題は紛糾し來つたが、私は其狀況の如何に拘はらず、松方公爵が其爲す可き所を爲すことを希望して已まない、松方氏の知己朋友たる者亦松方公爵をして其所志を果さしめるに就て、相當の努力を致す可きである。

左るにても變轉の甚だしきは實業界の常と云ひながら、川崎造船所の榮枯盛衰も亦甚だしいではないか。歐洲戰時海運界の世界的好景氣に乘じて、川崎造船所亦斯界に活躍し戰前一千萬圓の公稱資本金であつたものは數回の增資に依つて、九千萬圓

の多きに上り、其間四割の利益配當の株主に與へられたことがあり、松方氏の豪壯なる營業方針と相俟つて、内外の耳目を惹くもの少なしとしなかつた。然も戰時の好景氣に乘じて、戰後の反動時代に處する用意を怠つた一事こそ、即ち川崎造船所をして次第に窮境に陷らしめる所以と爲り、之を脱するに就ては、無理なる條件を以て、造船の註文を漁つたり、海軍縮小に依る補償金の交付に依つて、一息付いたり、國際汽船の如き、國際信託の如き會社の設立に依つて、一時を糊塗したり、十五銀行を常軌の許さゞる程度まで、利用したり、策略を施して、到らざるものなきが如くであつたが、遂に今日の破綻を見るに至つた。今にして思へば、松方氏が兩三年前屢々通貨膨脹を骨子とする經濟論を唱道し、之を小冊子に印刷して、世間に頒布したことの如き、通貨膨脹に依る空景氣の煽揚に依つて、川崎造船所の窮狀を救はんとする一種の策略であつたとも考へられる。松方氏の熱心、爲さんとして爲さゞるものなき氣力は稱す可しとするも、此氣力の一部分に前途を警戒する自制的意識の備はれるものがあつたならば、今日の破綻は免かれるを得たであらう。斯く思へば私は一面の識ある松方氏今回の失敗に對して、同情すると共に、捲土重來を祈らざるを得ない。私は金子直吉なる人に就ては、何等の知る所なく、如何なる機會に於ても、同席したことすらない、思ふに斯人は無學無識、單に自己の度胸に恃む所厚く、戰時の好景氣に乘じ過ぎて、鈴木商店を潰すに至つたものであらう。松方氏に至つては、内外國に於て、最高の教育を受け、實業に從ふ傍ら、新知識を求めて倦まず、自己の擔當する業務に就ては、細大の別を問はず、盡く之に通曉することに勉めたに拘はらず、インフレーショニストの謬見に終始し、結局自己の知識に依つて、自ら傷けられることと爲つたのである。私は氏が心機を一轉し、知見を一新して、後圖に就かんことを希望して、已まない。

社會問題としての家族的慘劇

室伏高信

この問題は與へられたものである。私自身はこの問題に注意を集めてゐるのでもなく、またこの問題について特に世間の注意を促したいと思つてゐるのでもない。けれども問題の與へられた機會に於て平常私がぶつつかつてゐた問題をここに繰返して見たいのである。それは家族制度の問題である。

家族的な悲慘事がしば〱新聞紙の材料となつてゐることは事實である。その原因がどこにあるかを統計的に調査することは私の仕事ではない。私の見るところでは近頃の家族的悲慘事の主なる原因は第一には生活難であり、第二には今日の家族制度に固有する事情であるといふことが出來ると思ふ。

生活難は今日は一般的現象である。生活不安といふことは恐らくは今日の世界都市人の大半によつて日々に經驗されてゐることである。その日〱の麵麭をうることに苦しんでゐる人は勿論のこと、一見しては甚だ安定してゐるごとくに見えてゐるものゝ生活であつても、明日のことは容易に測り知るべからざるものがある。生活不安といふことは今日の世界都市文明の一原理である。曖々遠人の村が生活の安定といふことによつて特質づけられてゐたやうに、世界都市文明は常に生活の不安といふことを伴つてゐる。われ〱の生活をして常に一つの生活破壞にと導いてゐるものは現實の生活難といふことよりは寧ろ生活の不安であるといふことができるのである。けれどもその生活の脅しをわれ〱が痛切に感んずることはたゞこの世界都市的經濟組織そのものゝ罪であるばかりではない。それは多くの場合においてわれ〱の家族的關係と結びついてゐるのである。われ〱が若しも獨身であり、そして父母のもとを離れてたゞ一人で世界都市のうちに放浪するものであるとしたらどう

か。その生活はまことに慰めのない生活であるには相違ないのであるが、そしてまた彼の生活がこの世界都市の砂漠中において家庭的避難所をもたないといふことによつて不斷の寂しさを經驗するに相違ないのではあるが、けれどもその孤獨において經驗される生活不安なるものは、われ／＼の家族的關係に結びついてゐる場合のそれのごとくに深刻なものではないのである。われ／＼は家族に對して責任を感んずる場合において、われ／＼の生活不安を一層に強く感んずるのである。私は常に思つてゐる。その道のために妻子を捨てゝ苦行林に身を投ずることのできた佛陀は幸福な人であつたと。その妻子のために生活を保障しながら尚ほその道のために戰はなければならない今日の行者は佛陀の苦しみに比べて十倍も百倍もである。それは實に生活のあらゆる矛盾と戰はなければならないのである。トルストイもいふたとほりにわれ／＼が性的誘惑と戰ふことは人生の最も困難な戰ひの一つであるには相違ないが、性的なる問題は、その誘惑と戰ふといふことであつてさへも、尚ほ且つ甚だしく遊戲的なものに見られてゐるほどに、われ／＼の今日の生活はたゞ衣食住といふことの最小限のために集中されてゐるのである。動物においては苦もなく解決されてゐるところの問題において、われ／＼人間はその日／＼を惱んでゐるのである。

あの慘めな朝鮮勞働者の往來に働く姿や、朝夕の電車の吊り革に據つてゐる月給取りの失望した顏色や、そして私たち自身のやうに一錢一厘の豫定された收入もなく、貯へもないものにとつては、そして田園に歸臥することを年來の希望としながらも尚ほその歸臥すべき田園すらもゝたないものにとつては、生活の高き理想、高きものへのわれ／＼の情熱は、しば／＼生活の社會的關係のために決定されるのである。われ／＼の生活は實に決定することの代りに決定されるのである。その社會的關係、この經濟的組織はこれを根本から改造しなければもとよりならないのである。昔の聖者が内なるものゝ戰ひのために凡てを傾けることができたのに對して、今日は道に志すものが内なるものゝために戰ふとともにまた外なるもののために戰はなければならないのである。道は難しの感を抱くことにおいて今日は最も痛切ならざるをえないところの時代である。けれども今日の經濟組織なるものが尚ほしばらくは支配するものとせよ、われ／＼の生活の悉くはそれに適應しなければならないのであらうし、また適應してゆくに相違ないのである。

今日の家族的制度は、私の見るところでは、甚だしく時代錯誤である。私はこゝには家族制度そのもの超時代的批判を試み

であるのではない。從ひてわれ〳〵の生活要求の基礎としての家族制度の問題はこゝには問はない。けれど家族制度の時代褒許についていふならば、それは最早今日の時代に堪ゆるものではないのである。勿論われ〳〵の家族生活なるものは、文明人の間にあつても、野蠻人の間にあつても今日は全く地球上に隈なく行き亙つてゐることでもあり、否、動物でさへも家族的生活を營んでゐるものがないことはないのである。今日は人々が尙ほこの家族的生活について多くの疑をもつてはゐないごとくである。人々のいふところの家族制度の問題といふことはたゞなる法律上の權利關係についての問題に過ぎないやうである。けれども今日の夫なり、若しくは父なりが家庭においてもつてゐるところの權力たるものが法律によつて與へられたものであるといふよりは、法律はたゞ事實を承認したに過ぎないものであるといふことに思ひ當るものは、今日の家族制度においてわれわれが問題となすべきものが法律の末ではなくしてその經濟的關係であるといふことに思ひ當るべきである。實に今日の父なりまたは夫なりが家庭内においてもつてゐる權力はその經濟的權力がそのまゝに承認されたに過ぎないのである。この經濟的權力なくしては法律上の權力なるものは全く無意味となつてしまふのである。そしてまた今日は事實上父または夫の經濟的權力が變化しはじめたとともに法律上の權力も變化しはじめてゐるし、その道德的關係も一變しきたのである。家族制度の根據といふことは既に多くの人々によつて懷疑されてさへゐるのである。けれども家族制度は今日は尙依然として動かすべきからざる事實であるし、それの法律的、道德的並に經濟的關係は原則としては昔のまゝである。飼ひならされた小鳥が森に放たれて飢えて死ぬやうに、われ〳〵は今日は尙ほ一般的には家庭のほかに生活することも出來ないし、家庭以外に生活のオアシスを見出すといふことも出來ないのである。それにもかゝはらず世界都市的經濟組識の壓迫は無慈悲を極めてゐる。われ〳〵は今日は今日の世界都市的經濟組識のもとにあつては、われ〳〵の個人の生活を支へることの以外には殆んど何等の餘裕をも與へられてはゐないのである。これを具體的にいふならばわれ〳〵は何等の家族的經濟の根據をもたないのである。昔の家族がその家庭に伴ふところの家なり、田地なり、若しくは商業的特殊關係なりを與へられたことによつて家族は常に家族的經濟のうへに立脚し、それによつて家族的生活の可能を保障されてゐたのに對し、今日の世界都市人は最早やかくのごとき如何なる經濟的根據をも與へられてはゐないのである。二男三男、われ〳〵のやうな四男は勿論のこと、長男と雖も都會生活者の大部

分は最早やその相續すべき何ものもたないし、從ひてまた家に伴ふところの何等の經濟的根據を見出すことはできないのである。われ／＼の家族制度は既にかくしてその經濟的根據の悉くを奪はれてゐるのであるが、われ／＼はこの經濟的根據なくしてその妻子を、父母を、祖父母の生活を與へてゆかなければならない義務を負ふてゐる。われ／＼の生活は個人的に受取つて家族的に支拂つてゐるのである。一家の主人となるといふことは今日は如何なる羨ましいことでもなくして最も苦痛に滿ちたことである。それはたゞ苦痛ではなくして本來は不可能なことである。個人的に受取るものは個人的にのみ支拂ふことのできるものであるといふことの經濟的數學を承認するものは、今日の經濟組織のもとにおいて、今日の家族生活を維持することの不可能であることを一般に見拔くべきである。われ／＼の生活難の一半、そしてまた等しく生活不安の一半はここに原因をもつてゐる。われ／＼の經濟的生活にあらゆる矛盾の、從ひてまたわれ／＼の道徳的生活のあらゆる崩壞の一半の原因をわれわれはこゝに見るべきである。

今日は一個人はたゞ一個人を支へることが可能である。從ひてまた個人生活のあらゆる組織はこの一個人を中心としてのみ可能である。一家の主人なるものをして生活の不當なる重味、家族に對する過當なる責任から解放するといふことが甚だ急務である。それは主人を救ふの道であるとともに家族を救ふところの道である。われ／＼はやがて今日の個人的、そしてまた同時に集産的大經濟組織を破壞することのできるまでは、この組織に順應した生活のみが可能であるといふことを認識するとともに、それの中間的な生活、今日の家族的生活の時代錯誤といふことについて一般の注意を喚起すべきであると思ふのである。

職業婦人なるものはもとよりこれに對する一つの實際的解決である。職業婦人なるものは今日の家族制度の崩壞者でもあり、また崩壞者としての使命において意義がある。職業婦人は既に一般的原則となりつゝある。家庭はこれによつて一人の主權者の代りに二人の主權者を迎えたのである。二人の主權者は主權者ではないごとくに、職業婦人の出現によつて家庭の有機的統一は既に破壞されたのである。けれども職業婦人の性的經濟的生活について考へてゐるものは、それが今日の家族制度の問題についての全き解決者ではなくして、あらゆる困難なる問題はこれからであるといふことを知るのである。それは家庭の破壞者として生れてきたにもかゝわらず、それが家庭を破壞し

まるがために、それは永續的性的關係からそれ自身を解放し去らなければならないからである。こゝにハグノコリスチィの問題が既に社會學者の注意に上つてきた。Hagnochoristie といふことは trennbaremonogamie といふことである。自由離婚を前提とするところの一夫一婦といふことである。それは必ずしも一時的結婚といふ意味ではないであらう。それは必ずしも羅馬においてのやうな期限付きの結婚、ゲエテが親和力のうちに示したやうな五年間の結婚といふがごときものと同じではない。けれど離婚といふことに重點が移されたことの點においてそれは既に非永續的性質をもつてゐる。從ひてそれは今日の家族制度の原則と兩立することを許されるものではないのである。こゝに家族制度の破壞といふことが既に一歩を進めてきたのである。非永續的結婚といふことはありうることであるか、また願はしいことであるかといふことはもとより一つの問題である。けれども今日の經濟組織は如何なる願はしきことよりもより大なる力である。それはそれの崩壞するまであらゆる暴威を逞しうするであらう。それはそれ自體に適應しないところのあらゆるものを破壞するとともに、それに適應するところのあらゆるものを要求するであらう。社會學者が一家族制度といふものがまだこれつゞくであらう。一夫婦中心主義に對する數夫婦、十數夫婦、數十夫婦を中心とするところの大家族制度、家族制度に非ざるところの新しい制度についても、既に學者の間においては問題である。それが果して實現されるかどうかといふことはもとより疑問である。けれどもそれもまた一つの答であり、そして今日の家族生活の問題が如何なる方面に向ひつゝあるかといふこともまたこれによつて暗示されてゐるところが少くないのである。

今日の生活はあらゆる點において道德的なるもの、人間的なるものの人間的なるものから遠ざかつてきた。われ〳〵は人間が再びその故鄉に歸りきたのであらうことを確く信んじてゐる。けれどもわれ〳〵は今日の經濟制度のもとにおいては、そしてそれが遂に崩壞せらるゝに至るまでは、それの無慈悲な要求はそれ自身の完成に向つて進むものであることの認識を忘れてならないのである。

此頃の感想

田山花袋

年を取つたらもう少しわかるやうになるだらうとか、もつと本當に人生が見えるやうになるだらうとか、さういふことをたのみにしてゐる人たちは必ず失望するに相違ない。何處までも行つても人生は同じである。何んな貴重な經驗を積んだところで、また何んなにすぐれた知識を學び得たところで、要するに同じことで何うにもならない。年を取つてから好いものが出來るなどといふことは、全くひとつの空想にしか過ぎないやうである。

それは種々なことを知つてゐるから、展望の大きなものが書けるかも知れない。また大きな人生を再現したやうなものも出來るかも知れない。ひとつの見方と言つたやうなものを完全にまとめることも出來るかも知れない。たとへばイプセンのやうに。しかしそれはひとつの作としてのまとまりで、さういふものが何れだけ人間の糧になるかは甚だ疑問である。お前がさう考へるのはそれは構はない。自己の小規模を他に見透されるだけで何の役にも立たないことを恥としなければ構はない。しかしさうしたきまりとか、まとまりとか言ふものに何の權威があらう。作者がその意圖を重んずるのはわる

くはあるまいが、それに捉えられることはつとめて避けなければならない。意圖のあまりに露はだつた作品には、すぐ捉へられて了ふ恐れがある。

從つて昔から通じて見て、割合に意圖の少なかつた作者たちのものがいつまでも讀者の心を惹いてゐるやうである。いくら才が大きくつて、學問があつて、議論があつて、その當時に於てえらい作者とされてゐたものでも、意圖があり過ぎると、すぐその底が見透かれ了てふやうな氣がするものである

意圖には捉はれたくない。また思想にも捉はれたくない。常に活潑々地でゐたい。赤裸々で人生の種々相に打突つて行きたい。更に言ひかへれば、刹那的でありたい。その時その時の感じとか氣分とかいふものでその作品の背景を塗りたい。

△

若者に若者らしさを望み、老人に老人らしさを望むことは止むを得ないことたらうが、私は取らない。私はさふいふことを、第三者的希望——更に言ひ換へて通俗的考へ方としてゐる。さういふ考へ方が多いから、秋聲氏の戀愛事件なども何うのかうのと言つて大騷ぎするのだ。あんなことは何でもないことではないか。いくらでも昔からあることではないか。また批評的に言つて見たところで、世間の人のおせつかいといふのにとゞまるではないか。

普通には年を取れば孫も出來、分別も出來、性慾も平均されて、去勢された馬か何かのやうにおとなしくなるのが、老人らしくつて好いとされてゐるやうだが、私の經て來たところでは、それは丸であべこべのやうである。年を取ると夥だしく快樂主義者(エピキユリアン)になるやうである。從つて異性などに對しても非常に開けた形になるやうである。たゞ相手にするものが少くなると同時に、若い美に對する憧憬にもいくらか無理なところが出來て來るので、それでわるく言はれたり問題にさ

れたりするが、それは要するに世間の口で、何も我々はそのために自己の保持してゐる生の權利の氣兼ねをしなくても好いわけである。相手に對する無理さへなければ何と批評されたつて構はないわけである。

たゞし秋聲氏の戀愛事件のあらはれの中で、世間といふものを對照にしてゐる形がかなりになる。その點を私は取らない。勿論、私は氏の書いたものをあまり多く讀んでゐないし、その事件をも遠くから見てゐるばかりなのだから、壺にはまつたやうなことは言へないであらうけれども、一番世をかねてゐる形がわるく眼立つやうである。わざと世間に向つて打突けて書いてゐるやうなところがある。またわざと世間に肯定させやうとしてゐるやうな無理なところがある。何も一緒に出かけて行かなくつても好いやうなところに麗々しく二人で顏を出してゐるのもあまり自然とは思はれない。趣味としても好い趣味でも新しい趣味でもない。その點だけはやゝいぢけすぎてゐるやうな氣がするが、やつてゐることには共鳴出來ないことはない。

△

正宗氏のそれに對する感慨は、力にしてゐた親しい友だちなので、それであゝいふことを痛感したのであらうが、それはわかるが、もつと先きに、氏のこの頃のセンティメンタルな心の狀態がそれと現はれて面白い。惡態も惡態ではゐられなくなつた。といふよりは世間に對する怖さとか恐ろしさとかが年を取るに從つて除れて來て、それと同時に、何も惡態でゐる必要がなくなつて來て、それで本音が出たといふ方がその眞相に觸れてゐはしないかと思ふ。それに、年齡の關係もあるだらうと思ふ。私の經驗でも五十になるかならないぐらゐの時は、人生の底が見えすいたやうな氣がして、わるくセンティメンタルになるものである。また人生の恃むに足らず、人間の恃むに足らざることがひどく痛感されるものである。場合に出つては、もはやこれで樂みも希望もないといふ風にわるく消極的に考へるものである。ことに、氏には若い時か

らさうした癖がある。人一倍すぐれた鋭利なメスが齎らして來る取越苦勞と言ふやうなものを多分に持つてゐる。

しかし秋聲氏にもさうした心の展開があつたと同じやうに、これから先き、正宗氏にもさうしたことがないとは限らぬ。また、『微光』時代——或はもつと以前にやつぱり怖さのために押されてゐた時代の心の展開がないとは言へない。五十光きだつて、さう捨てたものではない。そしたら、あの『戀愛事件』のヒロインをやれ何にもわからない一少女だとか、やれあんた女にあんなに取扱はれてゐるのが見てゐられないとかいふやうな無理解な言葉は言はなくなるかも知れない。

△

戀愛といふものは死ぬ時まで人間にくつついてゐて離れないものだ。年を取つたから何うの彼うのと言はれ得べきものではない。世間では、年を取つて了ふと、その人がたとへ何んな戀愛をしてゐても、もうあんな年寄はといふ風に觀察を落してしまつてゐるが、存外さうでなしに、却つて圓頓教(えんとんきやう)見たいな戀がそこにひそめられてあるかも知れない。

△

時代といふことがその氣分、調子、感じ、文章のスタイルなどを自然に孕んで行く。こればかりは何うにもならないやうである。詩などにも唐と宋と明と淸とははつきり區別されてゐる。調子が違ひ、格の構へ方が違ふ。從つて、もし敏感な讀者がゐるとしたら、その差異の中にその時代の氣分や空氣を細かに感得することが出來るわけである。陶彭澤の詩と杜少陵の詩との中に晉と唐の氣分をはつきりと感得し得られなければならぬ筈である。

さういふ意味で、あの平安朝時代の作品が私には貴ばれる。今の人が見たら、『何だ、こんな面倒臭いもの。こんなもの

は讀む必要はない……』から言ふかも知れないが、私にはさうは思はれないばかりか、その面倒くさいところに、陰影の多いところに、むつかしくやゝこしい言ひ廻しのところに、却つてその時代の空氣とか氣分とか調子とか言ふやうなものを發見するのである。

此間芭蕉の遊跡を調べる必要があつて、久しく手にしたこともない『奥の細道』をまたくり返して見たが、そこにも私はそれについての感じを新たにした。西鶴の書いたものなどは、芭蕉のものとは非常に違つてゐるのだけれども、しかもそこに元祿といふ時代の空氣の共通してゐるのを感じた。その使つてゐる字にも、その文章の句法にも、またその簡勁の書きあらはし方にも……。それからずつと下つて、天明になると、文體はすつかり變つて、西鶴や自笑などのあゝした簡勁な文章ではなく、南畝とか秋成とかいふ形の文章になつてゐる。それを細かく入つて尚研究すれば、檀林派の盛衰とか俳諧の興廢とかいふところまで行くのであるが、そこまで入らないでも、その時代々々の空氣はその一つ一つの作品で十分殘ることが出來るやうな氣がした。

さういふ風に見て來ると、紅葉山人の作品などは、全く江戸末期のつゞきだといふことが點頭かれる。否、一歩を讓つて、新しく始められた明治の文學だと肯定しても、それをつくつてゐる作者が全く江戸末期だから、何うしてもそこから脱却することが出來なかつたと言へるのである。近頃ある若い人が『伽羅枕』を讀んで、『丸で草草紙のやうだね』と言つたさうだが、つまり私もそこを言つてゐるのである。それから私は新しいスタイルだと言はれて其頃評判の高かつた『むらさき』をひつくり返して讀んで見て、一層その自分の言つたことのあやまりでないのを知つた。この作などは全く落語家のやることを巧に文章にしたのにとゞまるものである。今なら、ラジオにでも放送したら丁度好いだらうと思はれるくらゐの程度のものである。

だから、時代といふものはおそろしい。無意識にそれに捉はれてゐるのだから。そこを脱却しやうと思つても容易にそこ

から說明出來ないのだから。だから好い空氣の漲つた時代の作者は、何よりも第一にそれを難有く思はなければならない。

△

つゞいて私は何遍何遍も時代といふことを批評家から言はれたことを思ひ起した。時代に觸れなければいけない。でなければ時代を批評しなければいけない。でなければ何うして今の作者のものには時代とか國民とかいふものがあらはれてゐないだらう。かういふ風にかなりしつこく言はれて來たことを思ひ起した。時代！　時代　時代をあらはすことが好いか、わるいか。時代に捉はれないことが幸か不幸か。時代などはあらはさうとすれば却つて抽象的になつてあらはれて來ずに、あらはさうとも何ともしないところに却つてあらはれすぎるほどあらはれて來るのではないか。

これはその時代の言葉で書かうとする努力は、言ふまでもなく作者に取つて必要なことである。それが西鶴の今日に生きてゐる所以の素を成してゐる。しかし時代はひとり手に出て來るもので、強ゐてあらはさるべきものではあるまいと思ふ。

時代の空氣の中に細かに浸つて、それを作者の主觀であらはしたやうなものに一番好いものが出來て來てゐるやうである。

△

私は今になつても心境小說と新聞小說との眞中にあるやうなものを書きたいといふ自說を固守してゐる。何うも今の心境小說にはあきたらない。ことにわるいことには、作者のやつてゐる事件の興味と言つたやうなものを讀者も喜び、作者もまた平氣でそれを書いてゐることである。過ぎたるは及ばざるがごとしといふ言葉があるが、今の心境小說は即ちそれ

である。本當のことを書くといふ眞劍の努力の上にこそ心境小説もはじめて意義を生して來るが、『俺の實驗したやつを書いたんだから、見て呉れ――』ぐらゐの調子では、とても人を動かすものなどは出來やう筈はないのである。心境小説といふものはゲエテの『エルテル』あたりから始つたものだらう。そしてそれが段々今のやうに發達して來たのだらう。空想的な、好加減なものでは滿足出來なくなつて來て、何んなロマンチイツクなものにも現實味が非常に加へられることになつたんだらう。更に言ひ換れば、昔のやうな物語や、想像ででつちあげた小説ではだまされなくなつたんだらう。だから心境的であるといふことは非常に自然なことであるが、自己告白になつたり、自傳になつたりすることは私はあまり取らない。やつぱりその間にはひとつの線を引いて置きたい。そしてその線こそは最も踰えられない溝といふやうに私は考へて置きたい。何故なら、そこに藝術があると私は固く信じて疑はないからである。何んな大きな事柄でも、また何んなに血の涙の出るやうな事件でも、そのひとつの線を踰えなければ物にならないし、また何んなにつまらない、小さいものでも、たとへば一木一草でも、その線を踰え得れば立派な藝術になり得ると信じてゐるからである。そして多くの批評家は、その私の所謂ひとつの線を表現の技巧だと言つて手輕くきめて了つてゐるが、私には何うしてもさういふ風に簡單なものとは思へないのである。技巧と同時に内容――更にもつともつと細かい不可分なものであると思つてゐるのである。それなしには藝術は孕まれて來ないものに思はれるのである。從つて今の小説の傾向が心境的な形から段々に變形して、より多く主觀的になつて行つたにしても、その間に横つた線は、依然として取り去ることは出來ないものにきまつてゐるのである。それをごつちやにして了つては、藝術といふことはなくなつて了ふのである。

さういふ形から考へて見ても、藝術といふことは難かしいことだ。この實人生を通つて行くといふよりももつともつと難かしいことだ。

やつぱりその時でなければ書けないものだといふことが此頃になつてことに痛感された。過ぎ去るといふことは何も彼もすぎ去ることである。ためて置いて、もう少し材料を豐富してからなどゝ思つてゐる中に、その題材の細かい空氣はいつとなく皆な流されて行つて了ふものである。わかい時には年を取つた人のことは書けず、(これは止むを得ないが) 年を取れば若い時も老年も中年もすべて書けるだらうとそれにのみのぞみを置いて來ても、今になつて見ると、それは一つの空想で、とてもそんなことは出來るものでないといふことがわかつて來た。やつぱり自分の手元にあるものから丹念に書いて行くより他仕方がないといふ氣がした。

かういふものを書かう、あゝいふものを書かう。ドラマも是非やつて見やう。あゝいふ大きなコンポジションのものも試みて見たい。かういふ風に種々計畫したことも、その十の一つも出來ずに、時はぐんぐん經つて行つた。さうかと言つて、自分のしたいこともかなりにやつて來たやうな氣はしてゐる。出來たやうな、出來ないやうな――まだ何かやつて見ずにはゐられないやうな、さうかと言つて何れだけ出來るかわからないやうな氣がしてゐる。

大抵な詩人は、晩年になると自恣に陷るものである。支那ではこれを潦倒と言つてゐる。杜少陵などでさへ晩年はさう言はれてゐる。何うもこれは免れられないことらしい。段々人間はさうなつて行くらしい。批評家などに言はせると、これは東洋人のわるい習慣で、ヨオロツパでは六十、七十でも老いぼれるものはないやうだが、私にはさうは思はれない。ストリンドベルヒなどでも、イプセンでも、フロオヘルでもかなりに晩年は潦倒してゐる。トルストイでもさうである。あゝいふ風に無抵抗主義に立つたり、童話を書いたり、『復活』のやうな何方かと言へば甘いものを書いたりしてゐるのは、何うしてもさうとしか言へない。『戰爭と平和』を書いた時分のやうなあゝした潑剌さは、とても何處にも見出すこ

とは出來ない。

△

芭蕉の晩年の心境はとても容易について行かれないやうにその影を大きくして說いてゐるものがあるが、私にはさうは思はれない。むしろその反對にさへ思はれる。あれも一種の潦倒ではないかといふやうにすら考へられる。勿論それは外部の形式にあらはれてゐる形を言つてゐるのではない。外形は決して自然に墮してはゐない。しかし心は？　內部は？　やつぱりひとつの潦倒ではないか。

宗教的にその心持がなつて行くといふことは、たしかに一つの潦倒であらねばならない。それは人間としては止むを得ないことだが、次第に心が刹那的でなくなつて、刹那よりも永劫の方により多く意味を發見して行く形になる。一體、それは何方でも好いのかも知れない。自然も潦倒も永劫も刹那もないのかも知れない。またさういふこの身自身が、自然でそして潦倒であるのかも知れない。しかし芭蕉の晩年の心境のやうなものはあれは行きどまりである。あれから先きへは何うにもなれないやうな心持である。一步も踏み出すことの出來ないやうな境である。決して活潑々地に動いてゐる心持ではない。

私たちにもあの心持は覗くことが出來る。靜かな境だらうとも考へられる。曾ては私も行きかけて、かなり近くまで——その細かい襞の見えるあたりまで歩いて行つて見たことがある。しかし私はもう少し手前にゐたかつた。昔の若さと潑剌さとを再びそこに見ることは出來ないまでにも、成るだけそつちの方に心を殘して置きたかつた。で、私はそこから引返すことにした。



氷河の山を登る

小島烏水

アメリカに於ける、可なりに長かつた生活の中で、私は二つの採集をした。室内では版畫を、戸外では山を。

クローズの函に入れられ、大切に一枚々々、薄紙に包まれた版畫は阿片に次ぐ取扱を受ける運命に在るものの如く、莫大なる税金の掛け聲に脅かされて、介川の中に、蟄伏すべく餘儀なくされてゐる。我が親愛なるレムブランドや、ゴヤや、仲のいゝミレーとコローは、軈て來るべき國外追放の御咎めを受けるのも知らずに、暑さに蒸されて、呻たつてゐる。同時に私が版畫に緣れる耽美の生活は、一時停止せられて、半身不隨の惱みを受けてゐる。

併し、私の心の中に秘められてゐる山は、眼に映してゐる山は、野稿の記錄に收められた山は、蔡日の問題に關係なく、與ろ一葉の植物標本を、出し入れするよりも無造作に、私の言ひなり次第に出現してくれる。私の採集した山々は、無邊際空の藏幅を、任意に翻展するに隨つて、種々相が示現される。先づ一方の翼を切り落して、一方の羽を、勢ひよく廣げたやうなシエラ・ネヴアダの斷層山脈が出て來る。それがいかによく、我が日本アルプスの、飛驒山脈に似てゐることか。大地の褶曲から、鞍を置いたやうな凹みと、穹窿（ドーム）を立てたやうな凸面と、大空に相互の波を打つ海岸山脈がある。その間を稻妻のやうに、

ちらりと走り抜けて、遙かに高く、尖鋭なるピラミッドを立てたキャスケード火山脈は、我等の富士火山帶と、同根の生れである。實際、太平洋を挾んで、富士帶は日本に、キャスケードは米國に、殆ど同時に噴起したといつていゝ、太平洋は水の道路であつて、又火の道路であつた。年齡も、身の丈けも、略ぼ似寄つた二つの大火山脈は、日本人と亞米利加人の間に、排日問題が起つたり、軍縮會議が開かれたりするやうな、罅隙を埋めて餘りある程に、親密に觸れ合つてゐる。

富士の火山國から、派遣された一人間として、私は毎年、キャスケード火山脈の大物に、敬意を拂ふことを、どんなに悦んだらう。この山脈の中では、私はシャスタに登り、レイニーアに遊び、フッドと、ベエカアを窮めた。個々の採集ではあるが綜覽すると、私にはもう、系統のある蒐集になつてゐる。

その中で、特に憶ひ出の多いのは、昨年の夏、最後の山登りをしたベエカア火山であつた。

私たちの一行六人は、ベエカアへと急ぐ。泊まつた寒村の名は「氷河」と呼ばれた、以て登山家を悦ばすに足る名である。芭蕉翁は「一と村はみな花守の子孫かや」と誦じたが、この村の人たちは、御先祖から氷河時代に、生を享けてゞもゐるかのやうに、村をめぐつて氷河谿が、淙々と音を立て、森の空氣を掻き亂してゐる。我が一行も。村に入ると、背に冷たい水でも打つ掛けられたやうに、ざわついた寒さをおぼえた。荒物屋が一軒、マウント・ベエカア・ホテルと看板を上げてゐるが、別に人を泊める模樣はない。私たちは、この村での一軒の木賃宿氷河屋といふのに落ちついた。天井は剝げて、雨水の洩れたのが、不思議なアラビヤ模樣を描き、壁紙は、四谷怪談の大提灯のやうに、口をあけて、パク〳〵してゐるが、アルプスの氷河を、逸早く研究したルイ、アガジイ先生が、堆石を組み合せた穴の中で「もぐらもち」のやうになつて、氷河の進行を測定した報道に比べると、勿體ない程の、柔らかい寢臺の上に、寢ることが出來た。況んや一行の、東良三君の話では、先年この宿に泊まつた時は、蠟燭を立てたのが、今は電氣のついただけ、改良した方だと言ふ。一體にこの村は、アルプスで言へば、マツタアホルンに於けるゼルマット谷、ユングフラウに於けるグリンデルワルド村にも、比しい位置を占めてゐるが、賑やかな雜踏を見るべく、ベエカア火山は、餘りに高絶孤獨である。だが爛熟したアルプスを憐れむやうに、純粹の青味を氷河に秘め、清淨の潔白を萬年雪に保つて、超然と澄み切つてゐる。

荒物屋の爺は、ジョルチ、マックロウランといふ男で、甲斐甲斐しく萬端の世話を仕切つてくれた。食料もこの宿で揃へ

て、黒くろ鋼、山へかゝる、煙霧と、加州松花を燃え拔いてゐる
といふ山火事の煙で、空はいさこさ物言ひをしあつてゐるやう
に、交ぜつ返されてゐる。薊に似た草の花の多い裾野原を、辿
り拔けて、爪先上りの道にかゝる。極らしい赤葉が、山火事の
飛火のやうに、綠青の林樹に色をつけて、パット目に立つ。ふ
と仰ぐと、空には、子供が放したやうな大きな、赤い風船玉が、
ふわりと浮んで、突ッつけば、怖ろしい血球でも、ポタリと落
ちさうである。濁つてゐる空氣と、煙の厚層を透して、ぼかさ
れた圓味の朝日である。もしも我一行から、マッタアホルンに
於けるウイムパア一行が出遇つたやうな、悲劇が起つたとした
ら、風船玉の赤い朝日は、凶兆になつたであらうが、こんな朝
日をいつの時代の山登りに見たらうかと、疑つたゞけに止まつ
たのは、仕合せであつた。

　路傍の水のあるところで、切り仆された丸太の枯枝に、腰を
かけて、朝飯をたべてゐると、カウボーイが、裸馬を打たせな
がら、やつて來た。昨夜ポートランドからの山入があつて、毛
布が不足だから、取りに行くのだと言ひ殘して、駈けて行く、
森はこんもりと暗くなり、石には鮮苔類やら、隱花植物やら
が、ベッたりと叢生して、厚布團を衣せてゐる、枯木の空洞か
ら、朝と夜を間違へたやうに、蛾が飛んで出る。木の間隱れに
氷河谷の、果を呟いたやうに溜つた水を、ベッドに見て、路は
爪先上りから、今度の岡路となり、何か目方をしよつてゐる荷
で、一行の鼻息は、はづんで來る。人が滅多に登らないだけあ
つて、鮭色のサアモン苺や、熊が好んで喰べるといふ黑苺が、
累々と路傍に熟してゐて、手當り次第に摘んで、口に放り込む
ときは、原始の森を踏み分けるアメリカ印度人の歡喜をおぼえ
る。我々は、これから氷河時代に蜻蛉返りして、原始人の生活
に、頭を突ッ込むのだと思へば、山は沈鬱なる濃緑のために、
寸線を引く力も無げに影を沒してゐても、大氷河から融け落ち
るグレシア、クリークの水音は、足拍子を踏むやうに、私たち
の鈍り克ちな歩みを、拍子づけてくれる。

　汗を拭き〳〵、海拔六千尺許りの高さの、キャビンに着い
た。丸太を横に積み上げた二階建ての校倉(あぜくら)作りで、下には粗木(あらき)
の卓子(テーブル)を並べ、假か作りの小棚に地質學書や、氷河研究書が
並べてあり、二階は蠶棚のやうに、三重のハムモックを吊つ
て、簡單なベッドかしつらへてある。チカゴ大學の氷河學者、
ランドン教授引率の下に、女學生たちが二十人も來てゐた。先
刻のカウボーイの話も、地質學の本も、是れだな、と頷づい
た、食事時は、狹いキャビンが暗くなるほど、一杯に詰まつ
て、足踏みもたらないが、それが濟むと、この人たちは、離れ

の天幕に泊まり込むので、風の吹いた後の靜かさに歸る。

夜までには　尙ほ時間があるから、一同手別けして、筧から落ちる淸水を、波々とバケツに汲み込み、夕飯の前準備を整へ、空手になつて、小流れを徒涉し、草花の傾斜原を上ると、ヘザア、ミードウといふ名だけに、一面灌木と草本の草原で、白花や赤花の石楠花、オダマキ草、翁草の種類から、バタアカップ、ヘリオトロープを交へ、蝦夷菊に似たアスタア草などが、咲き亂れて、中にはもう散つてしまつたのもあるが、色絲太く縫ひ取つた印度紙纈染め色鮮やかに新らしい紅毛更紗を、敷き詰めた上を、心ゆくばかり、夕暮のそゞろ步きをした。見たところ高山植物性としては、カスケード山脈のそれよりも、アラスカの南東部に似てゐるほど、氷河性の美くしさを、一莖一葉にも含んでゐる。その草原の中から、缺けた石が、寢たり起きたりして、靴底の釘に、カッチリ音がする中を、喘ぎ上りに上り切ると、短かくなつた森林帶が、缺て頭をちよん切つたやうに坊主になつて、今は、はや限に立つものもなく、我々を吐き出すやうに、ルーズベルト氷河の蜿ねる谷間へと送り込む。

今までの傾斜原は、古代の氷河が押し流した堆石の、大堤防であつたことに、すぐ氣が注くほど、足許へ大きな氷河が爬つてゐる。谷一面、蠟石に凝化した沈默だ、一行の眼は、言ひ合せたやうに、氷河の大道を溯つて、その源へと集中した、硝子板を重ね切りにして、切々稜ある大氷塊は、北氷洋の、島から島を乘つ切る「あざらし」の群れのやうに、背を圓く、肩をく つゝけて、谷間の隅から隅まで彷徨してゐる、それを瞰下した。遠くのつゞまりに、屋蓋形の佛龕を揭ゑたやうな、巨大な岩石骸こそは、ベエカア火山の圓錐峰である。幾筋もの氷河は、その佛龕の扉から、香煙となつて八方に放射されるのである。雲はちぎれ、霧は亂れて飛ぶが如くに、氷河も擦り足をして、思ひ々々に流れてゆく、土を集積した山と、水を凝固した氷とは、茲に一體に合成して、地水火風の四大素が、同化的創造を完成したかと思ふ瞬間から、元の故鄕に還元すべく、石は土に、氷は水にと、分解され、離散されて行く姿が、眼前に激しく働いてゐる。もう足許も暗くなりかけた。夕飯の仕度をしなくてはならない。だが我々一行は、盲ひた沼のうつろから、迷ひ出た蝙蝠のやうに、十萬年の昔の氷河時代に、限り知られぬ愛着を抱いて、歸ることも知らずに、山の魔法使ひに操つられてゐる、そして永い間、忘られてゐた原始の感情、大きく强いものを、その儘に受け入れて、ひれ伏すだけの自然崇拜が甦つて來た。「あれへ登るのかと思ふと、怖くなる」と、一行中の誰かゞ

獨り言を呟やいた。これだ、ほんとうにこれだ。自然を征服などと、口幅つたいことが言へるものか、只だ抱かれたさに行くのだ。生命まで差し出すつもりで、身を投げかける苦行の徒に對してのみ、自然は恍惚夢幻の境を授けてくれるのだ。

一行は、氣抜けがしたやうに、キャビンの前に戻つた。珈琲を煮たり、罐詰を切つたりした。黒木のキャビンはあつても、所謂ホテルの無いことを私は悦んだ。此頃、山にホテルの出來ることは、松林に松蕈の生える如くである。併しモン、ブランの麓なるシャモニイ谷に、年々二十五萬人の旅客が行き、客が足りなくて、牛小舍に寢かされたり、鐵道の無蓋車に投げ込まれたりすることを思へば、原始の森に、木の葉の匂ひを嗅ぎ、柔らかい草花の感覺に觸れることに、生々しい慾情をそゝられる。この邊は、森林帶から雪線へと、移り替る境目に近く、キヤスケード山脈に普通な、ドウグラス樅は、影をかくし、「アラスカ、シダア」すら、五千尺位なところから、見えなくなり、アルパイン、ヘムロック（日本のツガに、植物學者のフツカアの名を結びつけて、「ツガ、フウカリアナ」といふ學名を呼んでゐる）や、白皮松（ホワイトバークパイン）などが、斑らに焚火の影に右往左往してゐる。

その晩は、例の二階の蠶棚の中に潜ぐり込んだ。十哩の森林を、重いルックサックをしよつて、上り一哩を辿つたので、グッスリ寢込んだが、やがて駭[illegible]の音響に、ふと眼をさまされた。底から雪でも揺り落すやうに、一定の時を置いて、水烟を立てるやうな、落ち方の音だ。この[illegible]で、日本アルプスの山谷で、耳にしたことがなかつた。まだ眞夜中の午前一時に起きて、出立の用意いかゞと聞きに來た案内者のコックランに聞くと、暫く耳を澄ましてゐたが、「ありや氷河の崩れる音だ」と片附けた。白日に滲み入つた光線に、内臓まで蝕ばまれて、朽ちゆく肉の、離れ々々に飛び去る時の、消魂ましい叫喚を、玲瓏たる氷河が放つのを聞く夜半の、淋びしかつたことよ。

夜明けには、未だ遠くとも、大堆石の上を、懷中電燈たよりに、案内者を先頭に、荷擔ぎの人夫を殿に、馬の脊越えをする。谷へ下りると、火山灰が一面に、渓水に沈澱して、深く切り込まれたところは、未だ固まらぬ砂礫層の断面を露はしてゐる。谷も低下してゐるから、氷河の融け方も早く、小さい瀑布を幾筋もかけて、一行はビショ濡れにもなつたが、次第に石も土も限界から遠ざかつて、堤防狀の氷河が、物凄い苦味を帶び、上へ上へと延びて、累なり合ひ、柘榴の實のはぢけたやうな、裂罅（クレヴァス）の断層が、並べつたり動いたりして、大きな口を開けたのもあり、針を落したほどの細い裂け目が、二つ三つ皆を吻合す

る間に、小さな漂石が挾まつて、突ツかい棒になつたりしてゐるところを跳り越したが、氣泡を含んだ雪の白さが、俯向くに從ひ、青く澄んで、萬年雪に化し、魚の鱗のやうに綾目に光るのは、琅玕洞から影がさす大海原の匂ひを感じる。

大空は薄ら明りに白んでも、霧と山火事の煙は、混沌ともつれ合ひ、煙硝くさい臭ひが、鼻を刺戟する。それは絶頂近くから放散する硫氣であることに疑ひないが、この火山の噴火孔の多いことは、足許の氷河すら、底から突き上げる硫氣のために、黄褐色に、うぢやぢやけてゐるところもある。

待ちに待つた朝日が登つたが、輪廓の鈍間が、樺色に燻ぶつて、頓狂な聲でも出しさうだ。天に二日なしと教へられてゐるに非ざりせば、誰か日本の富士山で拜んだ、御來迎の朝日と、同じ光體だと思ふものがあらう。そして腐れ卵のやうな日は、山の質量を計る錘鉛でもあるかのやうに、頂上から弓杖ばかり離れながらも、重ツ苦しい壓力を凡ての生物無生物の上に加へてゐる。生物で加へられてゐるのは我等の一行だが、無生物は、氷河や堆石ばかりでなく、氷河の上を、タケスヾメに似た小高の嶺が、二つ三つならず、今は無生物の仲間入りをして、乾固まつたやうに横たはつてゐる、その上にも、氣味の惡い鈍い光線が投げかけられてゐる。

霧が吹き拂はれぬほど、今朝は平穩であるから、氷の凹みに、新雪の融け水が、小さな湖水を湛へても、皺ほどのさゝ波も立たない。のみならず、氷の上へ春の淡雪が、うつすり刷いて、アルペン杖が、吸ひ込まれるやうに深入するので、新雪の下に、怖るべき、深刻の裂罅(クレヷァス)が潜んでゐるのに慄(おのの)かされる。その新雪が、氷河の上に薄い皮を包んで、足障り柔かく、深いところは脛を沒する中を、差し足拔き足して、この山の八合目とも言ひつべき、舊火口の殘缺なる黑痣(ブラックビユーテ)と、コルッアックス峠へ到着した。

こゝは絶頂の大ドームまで、空線を高く振るところの、鞍部に當つてゐる。過ぎ越し方のルーズベルト大氷河は素より、一八六八年、コールマンが第一登山をした時に、辿つたデミン氷河、ベエカア山の研究に一生を献げてゐる人の名を取つたイーストン氷河、または漂石の多いところから、呼ばれたらしいブウルダア氷河、それから、いつも迅雷の音を立てゝ、崩壞するといふサンダア氷河などが、大河を倒しまに立てたやうに、ひた下りに、蒼白い尖波を蜒らせ、殘る隈なく山腹に喰ひ入つて、馬の脊骨のやうな痩せた山稜を、ほんの少しばかり黑く殘してゐる。少くとも四周の關する限りに於て、我々は、もう完全に氷河時代の生物になつてしまつた。

中にも、コルフアックス峰の頂上に「サアカス」の吹ひ込みが深く、鉛成りに巣をくつて、そこから發生する氷河が、氷自開を支持する力と、急傾斜を辷べり落ちる力との不平均から、大きな綻びが、絶壁面に沿うて鋸口（ギザギザ）形に裂けたところは、美事にして典型的なる、ベルグシュランド（裂線）を作つてゐる。日本アルプスには、氷結の微弱さから、この種の明瞭なる裂縫が乏しいことを、感じながら、頂上の一萬尺の胸壁、いはゞ胸突八丁に取りかゝるところの鞍部に出たのは、朝の九時十二分、今まで仰ぎ視た黒岳も、コルフアックス峰も、眼下に落ちて、ルーズベルト氷河の生れる源頭は、手に取るやうに近く、萬年雪の少年時代を伺はせるところの粉雪の乾いたのが、風に吹き寄せられた砂丘のやうに、盛り上つて、底へ行くほど苦味と透明が加はり、薄つすりと明る味がさしてゐるのが、セガンチニの描いた、アルプスの象徴畫に、色蒼醒めた魔女が、雪の底から、パッチリ眼を開いて、そこを通る足音を誰何（すゐか）するかのやうな姿を、おぼろげに彷彿させる。

絶頂の大「ドーム」が始まる。僅か八百尺の熔岩塊を、先づ三時間はかゝると言はれてゐるが、よくも名づけた羅馬塹（ローマンウオール）を垂直に登ることと思ひも寄らねば斜（はす）に登つては、横に周囲を縫ひ曲りくねつて危なつかしい歩みをつゞけるのであるが、一番困つたのは、氷河の裂罅（クレヴアス）を綿のやうに柔らかい新雪で、ふつくり包んでゐるので、迂つかり足を突つ込んだと、胸まで滅り込み、朋輩の力で扶け起されることもあるので、眼が離されず、脚下の氷河も落ちついて見てゐられぬ、第二高點なる、シエニマン峰の尖るのが、坊主小舎あたりから槍ケ岳を仰ぐ程度に見られても、一足は進まず、一萬尺以上のことゝて呼吸もはづんで來たが、唇が紫色に變るほどでもなく、アルペン杖を力に、辿り〳〵絶頂の一角に足がかゝつた。

登つて見ると、絶頂は仰ぎ見たときとは、打つて變つて、だゞツ廣い高原になつてゐる。その廣さは、幅七百尺、長さは二千尺に垂んとしてゐる。最高點は、その上へ圓頂丘状に、蹲まつてゐる。無論雪で覆はれてゐるが、その雪は、萬年雪の薄い皮を衣せて、既に立派な氷河が、下の方に形成せられ、氷柱が垂れてゐる、カスケード最高の、レイニーア山の壯大を極むる氷河にしてからが、頂上は粉雪の堆積ばかりで未だ氷河を形成してゐないのに比べて、この山は、何といふ壯麗異常な氷河を、絶頂に飾つてゐることであらう。生憎、山火事の煙と霧との縺れが、依然眼界を遮断して、すぐ傍に見える筈の、加那陀ロッキイの雪嶺どころか、峰つゞきのシュクサン峰すら、見えなかつたが、海拔一萬八百二十五尺と註せらるゝ最高點は、確

質に踏まれた。アメリカ大陸の最北、加那陀國境を距ること僅に五哩、この山を中心として、十哩四方は、上越す高さもない、一行は紙片に各自の姓名……シアトルからは東良三、中谷裕男の二人、ポートランドからは、古谷久三、大塚隆、日高平藏の三人、香港からは小島久太一人――を手署し、固く瓶に栓をして峯の岡頂丘の小穴に埋めた、一九二六年八月十二日といふ日も、書き添えられた。時に十一時を少しく廻つたばかり、風は無くとも、骨に沁む冷たさを如何ともしがたい、クモマベニヒカゲに似た蝶一つ、頭上を弱々しく舞ふてゐた。氷の寂寥の唯一の踊りツ子に依つて、我が一行は祝福された。日本人の、あらず、東洋人の第一登山は、今月今日を以て果された、その記錄を殘して、私は日本に歸らなければならなかつた。それが我が足で踏んだ最後の氷河であつた。我が一行は、子供のやうに躍り上つて、紹東富士の高根の在ます方へ向けて、帽子を振り合つた。

キキ

——もだん・でかめろん其四——

谷　譲　次

1

「ピアノ」は誰に言はせてもピアノだらうと思ふと、これがそもそも大變な間違ひで、なかには「パイアノ」なんかと發音して、こつちが憫然とする途端に pachin と指を鳴らして、おまけに、『えいんね?』

とばかりにつこりしたりするやつがある。えいんねは ain't it? で、これは are it not ?、言ふまでもなく is it not ? の變態俗語「さうでせう?」ぐらゐのところなんだが、かう變遷の跡を辿るから解るやうなものゝ、いきなり紅毛碧眼の徒に威勢よく、

『えいんね?』

とやられたんでは、大概の大和民族がへどもどして、不得要領ににやにやと齒を露出したのち、口を耳の附け根まで裂いて——さう見えるさうだから仕方がない——笑つて、或ひは、もつと正確に言ふと笑はうと努力して、さておもむろに讀本卷之三(リイドル)式に、

『さうであります。』

とか、

『さうでありません。』

とかと簡潔に意思の表明をして退却せざるを得ないことになる。えいんね?

——などといふのは餘計な話で、このパイアノ連こそは小意氣で粗野で善良な亞米利加市民——男とさうして女——の大部分を占めてゐるのだから、日常の會話に「男(マン)」のことをガイと言つたりする。ガイはGUYだが不幸にして害にも通ずる。そこで「この男が——」なんかと指摘されると、なんだかバクテリア

にでもなつたやうで變な氣がしないでもない。えいんね？

で、そのパイアノだが――。

客間にパイアノがあつて、パイアノの上に、只今流行の小唄の樂譜が載つかつてゐる。

タ、タ、タキシに乘つて
つ、つ、月のいゝ晩に
デキシイランドの
デキシイ大街(アヴェニュウ)の
デキシイ倶樂部へ行きませう
ね、ねえ、ペギイさん
わたしの小さなペツギイさあゝゝん

といふのやら、さうかと思ふと、

ばあね、ぐうぐる
ぐぎ、ぐぎ、おい

バネイ・グウグルは漫畫に出て來る競馬用の惡馬である。

かうなると、絕對多數の尊敬すべき亞米利加家庭の外觀を備へて來て、さしづめ、五十七歲の主婦が孫娘のやうに斷髮して、赤棒縞の前掛服に土人革の上靴を穿つて、前廊の揺椅子で新聞のすぽうつ欄――競馬・殺人・野球・拳鬪・詐欺・選擧・強盜・脫獄ETCすべて平和なスポウツに關する報道を網羅してゐることと日本におなじ――を讀んでゐやうといふ、代表的あめりか都市の裏町の模範的住宅街の、或る日の午後三時のすなつぷ・しやつとを呈する。

この、法律――かならずしも巡査のことではない――と神樣を恐れる亞米利加家庭生活の三大要素はといふと、一に聖書、二に日本製青&白卓子掛(ブルウ・エンド・ホワイト)、これは白木綿を織ぎ合はしたやつへ青で竹に雀、柳につばめ、梅に鶯、浪に千鳥、その他櫻だの菊だのを染め出した浴衣みたいな輸出むき長卓かけだが、第三にそして最後に、家庭密造(ホウム・ブルウ)の白牝馬酒だとあるから、してみるとこの酒樽の一本や二本は各家庭の地下室石炭箱の底にか、湯殿の藥戸棚の奥にか、憲法第十八條を無視して例外なしに納まつてゐるのではないかと思はれる。と、先づ、こと程左樣な國民的需要を滿たすために、このところお酒の「家庭密造」もすつかり一大工業になつてゐることだらうが、なんにしても、さすが全國禁酒のあめりかだ、同時に自由貿易の亞米利加だけあつて、家庭用もしくは個人用――内服――の酒精類賣買は、離婚と自動車以上にさかんなものだ。

こゝまでが第一のまくら。

これからそろそろめりけん名物は Hooch 酒のことへ移つて行かうといふのだが、まづ一ぱいやらう。善哉！えいんね？

✦ ――

KICKが強いといふところから酒客に「白い牝馬」と呼ばれてゐる所薬酒。もつともこれは、政府の酒精に頭髪香油を混ぜたのか、それとも酒場の床板を機械で締め上げて、しぼつた汁にお酢をちよつぴり割つたものなのか、そのへんはさつぱり判然しない。しかし、一名ぶうち、概括的に家庭醸造といはれてゐるくらゐで、いたつて無害な、天下泰平な、小資本による温情的生産物には相違なからうが、こいつをあんまりやると眼を悪くして、牝馬みたいに電車にぶつかつたり溝へ片足突つ込んだり――ぐるに悪いことは言はないぜ、御者なくしては人生の行路に「何處へも近しない」ことになるし、一たいこの牝馬といふやつは往々にして御者を拋り出したうへに踏んだり蹴つたり矢庭に駈け出したりするので有名だといふから、一さう仕末におへない。こんなやうに直ぐに「蹴る」といふところで、即座に顯著な反應を示す私製の酒のことを白牝馬といふんだらうが、禁酒になつた當時はこれのがぶ呑みをやつて、命を蹴り落されたものもあつた。

『何うだい、その酒に蹴りはあるかい。』

『うん。とても足蹴するよ。』

なんかと言ひ合つて呑んでゐる。

憲法第十八條による「乾いた國土」が、このとほりに「濡れ―てゐる次第、ぜいたくさへ言はなければ、あまりふつて合酒に困るやうなことはない。

たとへば早く造つて早く賣り、早く醉つて早く呑ませうとするから、しぜん行程に無理が出來て生なのが多い。その結果、ぶうんと木つぱくさいにほひのする、藥品みたいな無色透明の液體がお酒といふことになつてゐて、火を近づけると一氣に燃えちまひさうで危險この上ない。これを一寸ほどの高さの洋杯に口きり一ぱい注いで金七十五仙也――ださうで――とにかくこいつを、西洋風にぐいつとあほつて、からのグラスをとんと置いて、同時に水をがぶつとやつて、唾をちゆつと吐いて、ぶうつと息をするまでには可成りの修業を必要とするらしい。で、その途中にある人や、お上品な方や御婦人衆――禁酒法が多くの女性の好奇心へ酒精を注入するのに成功したことは事實である――のためには、しようが水を混ぜたハイ・ボウルを進ぜる。日本のいはゆるへゑから連中のコクテエルとかつてものは亞米利加ではあまり用ひないが、それでも根がKICKを生命とする白牝馬酒のことだから、たちまち頭へのぼつて、除夜の無禮講の復命――十二月三十一日の晩、倶樂部などは亂痴氣さわぎの飲み放題で、紳士淑女が夜つぴて呑んで踊るのだが、その最中去年と今年のさかひの正十二時に暫らく電燈が消えることに

なつてゐる――そのときなんかは、着飾つた貴婦人たちをして揃つてトマトの容鑵へPさせるほどの途法もないきゝめを示すのだからたまらない。すぐに足を取られてふらふらになる。さうしたら、うゝゐ、げつぷとでも一つ英語で醉つぱらつておいて、指でも上げて合圖をすることだ。するとそこは心得たもので早速ボロモセルッアを持つてくる。曹達で吹かして盛大に白い泡の立つたところを大急ぎにいそいで――泡を食ふといふのはこれから來てゐる――咽喉へ送り込むのだが、輕い胸のわるいのは大がいこれでおさまる。宿醉にいゝのは黑珈琲――ボストンふうと稱して砂糖もクリイムも入れない珈琲、意氣ぶつて「裸足で哭んな」なんかと言ふのがそれ――となつてゐるが、あさり汁が一番利く。もとは酒場には必ず常備してあつたものだが、この頃はそこまでは屆かないから、自分で拵へるか、運よく金曜日ならば大ていの料理店にあるから、出かけるだけの勞力ですなわけだ。

ニア・ビアといふおまじなひみたいな、へんてこなものが行はれてゐるくらゐだから、麥酒もあめりかはお話にならない。シンシナタ・クリイムといふのがすこし飲めるだけで、加奈陀倶樂部などと來てはまるで天水桶に番茶をこぼしたやうなだらしのない色と味を呈してゐる。勿論これらはすべて無産階級の手にはいる酒類のことで、お金持ちはそれぐ自分のところへ出入りする秘密仲買人をもつてゐるからジョニイ・ウオウカアでもブラック・エンド・ホワイトでもキング・ジョウヂでもキング・オヴ・キングスでもなんでも手に入れることが出來る。この酒の密賣人のことを「長靴をはいた脛の男」と呼ぶのは、長靴のなかへ酒壜を隱して歩くとでもいふところから來てゐるのかも知れないが、長靴どころか、彼らは貨物自動車で問屋的に酒を仕入れてきて、衣裳鞄に入れて、賣り廻つてゐる。おかげで重い鞄を下げて暗い横町なんかをうろうろしてゐると、よく巡査に訊問されることがあるが、この長靴が苦心慘憺して酒を持つてくるのは多くは加奈陀からゝしい。したがつて値段も隨分高い。小さなグラスに一ぱい一弗廾仙、Xマス前などになると地方によつてはキング・ジョウヂが一本廾六弗もしたりする。酒のある家のことを「めくらの豚」といつて、いやに街路樹だけが立派に並んでゐるくせに、歩道から直ぐ高い木の階段がついて、赤い覆ひをした卓上電燈が應接間の窓の近くに出てゐるやうな、フラッシイな下素な住宅區域に多い。呼鈴を押すと、かあてんのかげから顏を見て入れて、蓄音機の中からウイスキイを出したり、煖爐の煙突にビイルを生ませたり、其の他いろいろの不思議を演じて見せるさうである。この「めくらの豚」の

おやぢはたいがい二つ三つの靴箱を背負つて、いざとなつたら立ちどころに家を出て、街から街へかけて長い本靴を穿くだけの準備は、四六時ちう身につけてゐるとのことだ。ご苦労なはなしだがそれでも、よほどみいりのいゝ仕事と見えて、この長靴企業は、いまや亞米利加の「下の世界」で、一ばん綺麗な「襟の白い」仕事として大した人氣を呼びつゝあるといふから、濱の眞砂は盡くるとも、降るあめりかに泥よけの長靴男の種はつきまじ——だ。

2

酒賣りの長靴男で思ひ出すが、日本人の酒神の信者たちである。

働いては旨い酒の一杯にでもありつかんがためにのみ、四十五十になるまで紐育の煙りを吸ひ、市俄古の埃りにまみれ、テキサスの砂を浴びて、桑港あたりの邦字新聞『に姓名G・Y、本籍O縣T郡K村大字W、年齢四十二歳。渡米後ヘンリイと稱す。七年前北ダコタS町より音信ありしをもつて最後とし、爾來居所不明。國元にては父既に逝き、母亦老ひたり。歸國を待つ。同人所在御存じの方は本社人事欄係まで御一報を乞ふ。などといふ廣告が出るまで、亞米利加中をぼんやりほうつき廻つてゐる。和製バイアノ達のことだから、こんな廣告にはさつぱり驚かない。當のG・Yでさへ、「何でえ、こんなもの——」と、なんとか直ぐに忘れてしまふものゝ、お酒が呑めないことになると聞いては、すつかり恐慌を來してしまつた。しかしこの心配も間もなく解決されて、紐育ではハドスン河の上流、山紫水明の地をトして日本人經營の「めくらの豚」が出來たので、一同仕事のやうに自動車の工面をしては出掛けて行つた。

亞米利加では酒を飲むことは犯罪の一つなんだから、見つかれば捕まる。そこで盲豚ではめいめいに趣向を凝らしてお役人の來襲に備へるのだが、この騒ぎがなかなか小説的で面白い。が一番簡單で他愛のないのは、現行犯でさへなければいゝのだから、探偵と見たら早速手にしてゐる酒を足許へぶちまけちまふとだ。すると先方も要領よく構へてゐて、決して溢したやつまでをかれこれ言ひはしない。今が今までやつてたことが判つてゐても、知らん顔をしてゐる。とにかく酒の隠し場は、家庭では地下室、身體ではフラスコを洋袴のお尻のポケットへ入れることになつてゐるから地下室とかヒップ・ポケットと言ふと、亞米利加人は萬人が萬人ただちにお酒を聯想してにやりとする。好き嫌ひはさておき、ちよつと法律を破るのが愉快なのだらう。なんだか其邊に酒のことばかり並べてしまつた。しかしお立

ち合ひ、全部がお酒の話といふわけではない。

と言ふのは、つまり今までは第二のまくらなので、こゝから女主人公キキの記録に取りかゝらうといふのだ。

酒のあとに女が出るのだからこれはものゝ順序かも知れないが、酒の力を借りて切り出さなければならない程の凄い筋でもなければ、また醉はせておいて聞かせうなどといふ人の悪いこんたんも毛頭ない。表面で押して行つて一からさしつかへないわけだが、禁法第十八條による禁酒國でこのとほりお酒に不自由しないのと同じ程度にそしてそれとおなじ理屈で、ある種の職業的女性のゐないはずのめりけん國だけあつて、かへつて其の種の女がうようよしてゐることを言ひたかつたまでで、多くの場合、一つの法律なり制度なりが發生し確立してゐるといふ事實は、直ちにそこに、その法律なり制度なりの存在を必要とする特定の社會事情が伏在してゐることを語るにとゞまるものだし、それに、あめりかのやうな若い社會にとつては、體面を保つことが何よりの仕事であり、苦勞を經驗しない理想を其のまゝ植えつけるのに都合のいゝ背景をもち合はしてゐるのだから單によつぱらひが街上に影を絶ち、辻君の白い顔が闇黒に浮かびさへしなければ、あとは見て見ず、聞いて聞かず、もつて能事畢れりなのであらう。それで濟めば、それも大いに結構で、たゞ、禁酒法を必要とするほど亂暴に飲酒し、ある種の女がゐないことになつてゐるだけ、一皮下には、その種の女性の大軍があらゆる方法と形式とをもつて Peppy に働いてゐるかも知れないといふのだ。えいんね？

And now, on with the yawn ——。

ウイリアム・ヤマといふ日本人がゐた。

おなじみのＮＹＣ。

ヤマは一番さきに地下鐵へ割りこんでその地下鐵のなかで未知の隣席の人とベイブ・ルウスの打擊數を批評しあつて、一ばん先に地下鐵を飛び下りて、階段を駈け上つて、出あひ頭に好人物の巡査の横腹を小突いて、大聲に笑つて、途端に葉卷の一本も捻ぢこんでやつて巡査が氣がついた時には、もうずつと向ふを走りながら、客待ちのタキシ運轉手としきりに冗談の悪口を闘はしてゐやうといふ錚々たるパイアノ通の Smart Alex、早く言へば生粹の紐育兒だつたが、職業としては、日本人仲間の「長靴はき」をつとめてゐた。ヤマはこれでしこたまお金をつくつたらしかつたが、もう一つ儲けやうといふので、さんざ頭を絞つた末考へついたのが、日本の待合みたいなもので、中どころのホテルにゐる女たちと其の定連に、お酒と料理と部屋を供給してのほゝんと濟ましてゐた。酒はめくらの豚でお手の

ものだし、もともと料理人なんだからヤマのこの計畫は見事に適中して、「家庭料理、その他一般家庭的御便宜あり」といふ妙な文句のびじねす名刺(カアド)を、その方面のホテルと深夜活躍の自働車運轉手に配つて、自分は、街路樹だけがいやに立派に並んでゐるくせに歩道から直ぐ高い木の階段がついて、赤い覆ひをした卓上電燈が應接間の窓の近くに出てゐるやうた、フラッシイで下素な區域(デストリクト)の家にぢつとして待つてゐると、間もなく二人づれのお客がこつそり滑りこんでくるやうになつた。

債券の旅行販賣人、株屋、競馬ごろ、地方から買出しに上京した商店主、なんかといふ手合ひが一ばん荒つぽい遊びをするらしい。紹介するやつがあつて、女と「友達」になる。友達だから一しよに何處へ出かけやうと勝手だといふんで、ホテルの夜間番頭(ナイト・クラアク)——煮ても燒いても食へないパイアノ樂の元締でなければ、このJOBだけはつとまらない——へ葉卷でも掴み取りに買つてやつて、

『どこか好いところはないかい、酒・食事・部屋、そして安全・親切・低廉なんてのは?』『Righto! I'll fix you』

といふので、番頭がヤマへ電話をかける。一人につき幾らとヤマから頭をはねるんだから、番頭だつて嫌な顔はしない。でヤマが料理の支度をして待つてゐるところへ、男女のお友達がタキシを乗りつける寸法なんだが、これに、まあこんなことだらうといふ俗なる想像に過ぎなく、話柄の消息をつまびらかにしないほどの野暮であることを諒恕とする。

何はともあれ、美妖女キキがこつぜんと姿を現したのは、このウイリイ・ヤマの「ごぞんじの家(ユウ・ノウ・ホワット・プレイス)」が最初であつた。

キキはアパートメント吸血鬼だつた。

いよいよ本筋にはいる——。

はじめて來たとき、キキは十六七の令孃に見えたので、さすがのばいいあのウイリアム・ヤマもびつくりして、

『お母さんにさう云つて來たの?』

と聞きたかつたくらゐださうだが、同伴といふのが三十近い男だつたから、ウイリイも安心してべつに氣にも留めずに、別室で命じられた晩餐を給仕した。ところが、食事が濟んでウイリイが勘定書を持つて這入つて行くと、いまゝでゐた同伴の男の姿が室内のどこにも見えない。むかうにキキがひとり卓子に凭れて、こつちを向いて、からになつた紅茶の洋杯をしきりに電燈にすかして見て、餘念なく振つてゐる。溶け切らない氷の破片がカップの底でからからと音を立てゝゐた。

『何時まで經つても默つてからからをやつてるから、俺あ仕方なしにつけを置いて出て來たがね、あとで呼ぶから行つてみる

と、その男がちやあんと椅子にかけてるんだ。戸口が一つで窓もなんにもない部屋で一時其のつれの男が何うして消え失せたのか、その時あ俺にも判らなかつた。が、考へてみると――卓子掛けがばかに長くてね、床に引きずつてたよ。」

ウイリアムは円牝馬を持ち廻りながらこんなことを言つてゐたが、このウイリアム・ヤマの顔を其の後しばらく見ないと思つてゐたら、或る日の紐育である。意氣地のない雪が歩道を打つと直ぐに消えて、街全體が薄汚なく濡れてゐた。あめ・とも――あめりか・ともだち――の一人が運びこんで來て、彼に關するつぎのやうな一つのすくうぷをもたらしたのだつた。

「あのヤマね、ビリイ・ヤマさ、知つてるだらう？」と件のあめともが言ふのである。「あいつ太え野郎だね。えゝ？まだ聞かねえのかい。そいつあ驚いたな。女があるんだよ女が。それが君、娘みてえな小つぽけなやつでね、なんでも先生M街の自分の家で出來たらしいんだが、まあさ、○○○とか○○○とか其のへん宜しくあつたんだらうよ。とにかく其の女つてのがまた好奇でね、たうとう結婚して日本へ歸ることになつたんだ。え？誰がつて、きまつてるぢやないか。ヤマと女がさ。まあま、聞き給へ。こゝまでは大いにお目出度いんだがね、それでいよいよ結婚證書を取つて、日本行きの船まで確定して、桑港だからTKKだらう、その出帆の前日、二人は桑港へ着いたんださうだ。ヤマは君、こつちをすつかり處分して行つたんだから、相當の物を持つてたらうと思ふんだが、日本へ行くことについちやあヤマよりも花嫁のはうが熱心でね、何かにつけ先に立つてやつてたつてえが、なあに、後から考へれあ其のわけさ。と言ふのは君、乘船した時までは確かに二人一しよだつたさうだが、ふとヤマ先生が氣がつくと、女が傍にゐないんだ。出帆前だから乘込みや見送りの人で混んでるだらう？その人浪を分けて、ヤマは氣違ひみたいに上甲板から下甲板から矢鱈に走りまはつて探したけれど、影も形も見えない。ねえ、そのうちに合圖の銅鑼だ。見送人は全部下ろされて梯子が離れる。ぢや、ぢや、ぢや、ぢやあん――てんで、あいつにあちよつと泪つぽくされるね。各色紙が段々張つて來て、船はそろそろ動き出す。もう駄目さ。すると、多勢の人群に混つて、どつからか、ヤマアーヤマアつて金切り聲が聞こえるんださうだ。先生はつとしてね、同時にきつと眸を据えて、眞下の棧橋に並ぶ人の顔を見渡したと思ひたまへ。するてえと驚いたねそこに女のやつが澄まあして立つてるんだよ。おまけに、ヤマの全財産の現金を入れた鞄を持つて笑つてるんだとさ。しかしね、これあ俺が考へるんだが、女だつて何もはじめからそんな惡氣があつた

わけじやあないんだ。つまりいよいよ船が出るといふ實際になつて、ふつと日本行きが嫌になつて、それでさつさと下船してしまつたといふだけのことなんだらうが、俺が一しよに下りちまつたのが、實はヤマ公の御難さね。

「ヤマア、これ忘れたわよ、これ！」

つて、女が船について棧橋を歩きながら、一生懸命に鞄を振つたさうだ。これを見ると、ヤマは妙に安心してね、太平洋へぼろぼろ涙を落したつてえが、女が恨めしかつたのか金が惜しかつたのか、これあ鳥渡わからないね。ところがだ君、もう一つ大變なＫＩＣＫが來るんだよ。その時まで女は、日本人はヤマが初めてで日本語なんかサヨナラも知らないつてことになつてたんだが、それが君、食はせものだつたんだね。どうも中西部あたりで大昔から日本人專門に稼いでたやつらしい。なぜつて君、船がすつかり棧橋を出外れて、もうこの先は海だつてところまで來ると、その女が棧橋のはしに爪立ちして、大聲に叫んださうだ。

「Najimi さあ——ん！　ていこくへよろしく！」

可哀さうに、これでヤマも完全に止めを刺された形さ。え？　女の名かい？　キキとかつていふんだよ。佛蘭西種かしら。』

3

新聞に出てゐた。

いつか西部の或る町で一ふらんす女が檢擧された。だんだん審べて往つたところが、彼女は日本人ばかりを相手にしてゐたことが判明したので、裁判長か何かが不思議に思ひ、一體どうしてさう排他的に範圍を日本人に限つてゐるのかと訊いてみると、女の答へがいゝ。

『日本人は清潔ですから——。』

と日本人のために陳辯これ努めた。これには同地方の日本人一統、恐縮頓首、へんなところで大いに民族的面目をほどこしたさうだが、この勇敢な女こそは當年のキキであつた。と、まあさ、話がさ。しかし、あへて事實に外れてゐないことの證明のためなら、必要とあらば麥わら帽子に牛酪をつけて食べて見せてもいゝ。勿論、自分の帽子のことである。

一たい何うといふものか日本人とかゝり合つた女は、其のうちも不思議と日本人に縁が厚く、歐羅巴の港町などには新來の日本紳士——お金のある視察旅行の實業家から、あんまりお金のないもんりゆう——文部省留學生にいたるまで、一度は必ず邂逅して上陸記念にしなければならないといふところから、内他

ともに稅關と構へてゐる國際女が頑張つてゐるとのことだが、われわれ日本人をして言はしむれば、なにもさう此日本人が有難くてたまらないといふわけでもあるまい。つまりは、西洋人はこんなことをすら用事の一つと見て何處まで行つても賣買取引の域内で事務的に扱ふに反し、日本人は「あそび」といふあたまから傳統的に金を費ふ氣でゐるんだから、ない袖まで振つて見得を張るので、お客として金になるのと、もう一つは、さうやつて日本人相手ときまつてしまふと、ちよつと他の男が寄りつかなくなつてしぜんと日本人專門の奇觀を呈するにいたるのかも知れないが、偶々日本人に接してゐるあひだには、すこし物眞似の上手な女なら日本語の一つや二つ何時しか拾上げもしやうといふもので、その代表的なのがこのキキ孃であつた。

だから、御他聞に洩れず、キキが再び姿を現はした時は、こんどは日本人の新夫人——あんまり新でもないが——として、新婚の夢まどらかに夫君の黃色い腕にぶら下つてゐた。

まさか？などとそんなことを言つちや話にならない。

何といはれても物語のために眞相を曲げることは出來ないんだし、第一、ところは女ひでり——ことに日本人にとつて——のめりけん三界。美貌と嬌態と無智と勇氣とを極度にまで所有してゐるキキのことだ。よしんば登場の度びに何んな役を買つて出たつて見物は絕對に默つてゐるべきで、ねえ君、わが日本でだつて女にすたりはないつて言ふぢやないか。えいんね？

さて、白い道と綠の樹立ちと、乾草のにほひのする風と脚の太い駄馬とのネブラスカのL市に、サミユエル・キミユウラといふ日本人の花屋があつた。

まあ相當に手廣くやつてゐたんだらうが、いはゆる魔がさしたといふやつで、L市の内外に散らばる一泊四五弗から七弗ぐらゐの、例の「あらゆる近代的便宜」のホテルの一室で、その近代的便宜の一つとしてこのサムが對面したのが、Honest-to goodness、新大陸機械文明の妖精萬年少女キキだつたのだ。キキにとつて、爪の中に土を溜めた日本人の花屋をして一生涯の自發的奉仕を誓約させるぐらゐ、じつに午前五時三十八分——ぶれきふあすと以前——だつたに相違ない。またまたそつことかCooとか其のへん宜しくあつて、筋書どほりに二人が結婚したまでは、とてもお目出度い——いふまでもなくサミユエル・キミユウラ氏のはうが——かも知れないが、今度はキキも日本へ行きたいとは言ひ出さないかはりに、サムに命令して蜜月旅行——なんと甘酸つぱいめりけん・じやつぷ花屋の戀の思出であることよ——の途に上ることゝなつた。で一路紐育へ。

二十世紀急行は早い。

もう紐育である！

南北の長さが三十五哩、東西十六哩、面積三百二十七平方哩。マンハッタンだのロング・アイランドだの、ステイトン、ブラックウエル、ランドル、ワアド、ガヴアナアなどといふ島から出來てゐて、それにウオシントン・ハイツ、ハアレム、ボウト・マリス、インウッド、トレモント、フオウデム、リヴアデイルなんかの小都市がくつゝいてゐる。名物は狹い往來と非常識に高い建築物と顎のない猶太人。市投資ビルデイングが三十二階、シンガアが四十階、亞米利加信託が二十三階、ウールウオスが四十階――ついでに丸ビルは確か七階でしたかしら――さて、見物すべきところはメトロポリタン美術館、トリニテイ教會、マンハッタン歌劇場、中央公園、ブルックリン橋――田舍つぺいみたいだから止さう、特産物は流行唄とお俠(フラッパア)――日本のもだん・があるよりあ小氣が利いてる――と流行服と日進月歩の詐欺術と煙草と皮とぱらふいんとパイアノと燻豚(ベイコン)と麥とお砂糖と大音樂家と海老と――海老はいゝ音樂が大好きだ――鐵材と家具と拳銃と帽子と泥棒とそのほか何でも、人口、一人から七百萬の中間の任意の數、獨逸人と希臘人と伊太利人と支那人とヘブルウと露西亞人と黒んぼとさうして自動車とが、一大渦卷をまいて、そのなかをにつぽん人がひらりひらりと掻い潜

つてゐる。四六時ちう血眼を攫へてゐる都會――これがNYC。

とにかく、白い道・緑の木立ち・乾草のにほひのする畠・脚の太い駄馬のネブラスカ州L市の日本人花屋をすつかり逆上させるだけの準備は出來てゐたものとみえる。紐育の内外に散らばる一泊四五弗から七弗くらゐの、例の「立派な體面」のホテルの一室を取つたまでは無事だつたが、サミユエル・キミユウラがわれに返つた時は、もうキキ・キミユウラ夫人はそこらにゐなかつた。

驚いたのはサムで、聞くところによるとこの紐育には惡いやつがうんと網を張つてゐるとのことだが、ことによるとキキは誘拐されたのではないかしら。或は途にでも迷つて泣いてゐるのではあるまいか。OH！失はれたる小さなキキよ――といふわけで、涙ぐんだサムはおろおろしながら捜して歩いたが、全世界からの run-away-kid で糞を洗ふやうな紐育のことだ、ネブラスカの花屋の手にはちと大き過ぎる。キキはいま何んな目にあつてるだらう？どこで自分を呼びつゞけてゐることであらう？と一日と過ぎ二日と經つうちに、サムは段々痩せて行つて、そして、もうすこしでサムの皮が骨――サムの骨――へ附着しやうとしてゐる時、俄然――まつたくそれはがぜんといふ音樂的感じだつた――警察からサムのところへ呼出しが來たの

である。

善良たわがサムは恐る恐る行つてみると、愛妻キキが引致（ピンチ）されて、警部のまへで悠々と鼻柱へ白粉を叩いてゐた。相手の男といふのは相變らず日本人で、ロング・アイランドの富豪の家の運轉手だつた。この事態はべらぼうにもサムに苦しく不利で、サムはびんぶか何ぞのやうに見られ、あやうく白奴法（ホワイト・スレイヴ）の適用を食つて本國へ送還といふところだつたが、八方辯解してやうやうキキを貰ひ下げて警察を出た。すると、千謝萬謝すると思ひきや、キキはぷうんとふくれ返つて、さんざん道ばたでサムとサムの男振り、服裝、事業、趣味等々を呪つた揚句、ALAS！警察の直ぐ前からサムをまいて買物時刻の人混みに呑まれてしまつた。だから、それからもサムは度々警察へ出頭してキキの身柄を引取らなければならなかつたが、離婚しやうにも何にも警察の門を出るが早いか實に正確にそして迅速に逃げちまうので話が出來ない。これはキキとしては夫君サムの保護を利用して精々稼いでゐたわけで、やがて、さうかうするうちに、キキも捕まらなくなり――上手になつたとみえて、したがつてサムも警察でキキに對面する機會を失ひ、いつしか二人の關係は消えるともなく消えたのだつた。大部分は常に薄情で忘れつぽい。キキとサム・キミユウラの中なんか、水面に浮んだ氣泡の一つみたいなもので、ぽつかり割れたら、もうそれは永久に ミミニミカだ。なんかんといやに無常を感じたのはサムだけ。キキは紐育へ出るためにサムと結婚したんだから、紐育へ來た今となつてはサムなどに用はない。大紐育の夜の一〇〇一の影の一つとして、ふたゝびここに日本人を對象に大いに働くこととなつたのだ。高速度人生（スピイディ・ライフ）、えいんね！

離婚の流行は、あめりか社會生活の手つ取り早くて解りのいいことを語つてゐる好適の現象だが、州によつてはかなり難かしいところもある。で、誤つて結ばれた赤い繩に氣のついた連中は、外科手術でも受けるやうな氣で何んな遠方からでも其の州へ出かけて行く。かるが故に、該地方へ通ずる離婚列車は乘客を滿載し、そこの離婚ホテルには人があふれ、離婚辯護士は飼犬の首輪に金剛石をちりばめようといふさわぎで、結婚の失敗者若しくは反逆者が浪の寄せるやうに集まつてくるのを唯一の繁榮策として、それを賴みに立つてゐる市町村もあるくらゐ、クロス・ワアズとラデオのすたれた今日、この離婚こそはじつに敬愛する亞米加人の創造にかゝはる國民的娯樂のA、1である。

が、いくら簡便なあめりかだつて、何か理由がなければ、この樂しい離婚――それはもう一度戀人時代の詩的なんせんすに

ゐることだ——も實現されようはずがない。そこでみんなが思案をめぐらすのが離婚請求の申出側並である。しかし、これには最も確かでき〻めのある方法が何時の間にか發見されてゐる。相手の男なり女なりが自分に對して不信不貞を働いたといふのがそれで、これだけは考慮の餘地がないとあつて直ちに離婚許可といふことになる。そこで其の證據材料を蒐集するために、私立の探偵を雇つて尾行させたり看視させたりするのだが、これを離婚探偵といつて、こいつが離婚服を着、離婚帽をかぶり、離婚煙草を吹かして離婚自動車で押し廻つてゐるところを見ると、立派以上に商賣になつて往くものとみえる。なかにはキキのやうな女を頼んで一しよにホテルに泊り込んでゐる現場へ、わざと細君方の離婚探偵を呼んで自ら進んで實證を呈供したりする男がある。早く別れたいからなんだらうが、かういふ時には後日法廷へ出すために、探偵がその場で二人の寫眞をとることになつてゐる。これが新聞に掲載されて、「男はWWW氏だが女は誰？」なんてことになると、お約束によつてそこに社交界の醜聞（スキャンダル）WWW離婚訴訟事件なるものが勃發して、これもお約束によつて、WWW夫人が寫眞を引つ掴んでお白洲に駈込み訴へに及ぶ——。

ちやあんと順序が出來てる。えいんね？

が、かうしてはゐられない。こ〻へ來た目的のキキがやつてくるのだから。

[illegible]

4

日本から、日本商會の紐育支店に來てゐた櫻井といふ若い忠實な都會探檢家があつた。これはその櫻井の光榮ある女難記なんだが——いや、其のまへに謎の自動車のことを一言しておかう。GOSH！「謎の自動車」といつたからつてH・ランドンのつくるところの小說ではない。たゞ都會は秘密を愛する。じつはこの頃から、會體の知れない素晴しい自動車が、紐育を縱橫に走り廻り出したのだ。内部には、光線の角度によつて金にも銀にも見えるケイプを纏つて、鳥の羽の扇を斜に構へたキキが、つうんと眞直ぐ向いて乘つてゐた。何時でも金モウルの制服をつけた東洋人が運轉輪（ホヰイル）を握つてゐたが、それはロング・アイランドの富豪の家を後足で飛び出した日本人の運轉手だつた。むかし西部の開墾地に、農園のボウイスを當てに、男が鞭をとり、女を幌馬車（ワゴン）にのせて來て馬車の中をそのまゝに部屋とする商賣があつたといふが、キキと運轉手の思ひつきは、場所が紐育だけに幌馬車を自動車に變へたゞけの近代味は見せてゐた。す

たゞち、かれら兩人は相談のうへキキの費用で最新型の高價な自動車を買入れ、キキは良家の貴婦人に扮し、男は召抱への運轉手に納まつて、表面キキに對して叮嚀鄭重の限りをつくしながら、キキが劇場やホテルから客を連れこんでは田舍道を走らせ、自動車内を利用してゐたのである。あたらし好きで貪慾な放蕩紳士のむれに、キキとその自動車が秘密の話題にのぼつたことは言ふまでもない。警官も度々キキを追跡したが、何分速力が出るのでキキの自動車には追ひつくべくもなかつた。ほとんど見るたびに番號札を變へてゐるこの怪自動車は、ながらく其筋を文字どほりに州道の砂けむりにまいてゐた。

そのうちに自動車の噂も消えて、キキは日本人仲間と言はず、誰もの口に上らないやうになつた。このあひだにキキは、ウイリアム・ヤマ以來最近の自動車冒險にいたるまでに蓄積した財と經驗を傾けて——といふと物々しいが——とにかく、何かをもくろんでゐたものとみえる。

こゝからえぴそうどNO・いくつかゞ始まるのだ。

獨身者のアパアトメント聚ルウスヴエンの窓に、陽日がなゝめに照つて、下の街上を走る自動車の金具が反射鏡のやうに一瞬間光つたり、それたりしてゐた。

部屋の主の清水は、都會の獨身紳士として典型的に出鱈目な獵奇性を通して、日本商會員の櫻井といゝ惡友（サイド・キック）だつたが、この二人が、メラクリノのけむりを吹き上げながらこんなことを話しあつてゐる。

——全く亞米利加生活の平俗なのには嫌氣がさす。じつさい、お互ひにもつと水つぽい毎日を持ちたい。から時間と交通機關と勞力節約と凡俗な常識に取りかこまれて身動きが出來なくなつてみると、同じうるさいなら日本の義理人情つてやつのはうがよつぽど仕末がいゝやうだ。あめりかなんて、考へたり感じたりしない人間にだけ天國なんで、水つぽいのは、似麥酒（ニヤ・ビア）と白牝馬だけではないか。

——懷郷病（ノスタルヂア）だね、君は。

『の・す・た・る・ぢあ？』

と櫻井は兩腕の肘から先をふわりと開いて、肩を小さく揺すり上げる。

——HUH! 紐育の女はみんな金魚の乾物だよ。

——You said something.

清水は何かしばらく考へてゐたが、上院議員のやうに兩手をうしろへ廻して部屋ぢうを歩るき出した。

『君、キキつて女を知つてる？』

『NOPE』

――ちやあね、この城町で黒い薔薇の造花を胸へつけてる男を見たことがあるだらう？ [illegible]へみんな倶樂部で美術記者のマクニイルなんかおさかんに振り廻してる筈だ。あれがつまりキキの黒ばらの騎士、どうも御大層な中世紀張りだが、といふんでね、一度キキを知つてゐるしるしなんだよ。

かういふわけさ。キキといふ女の家で、キキを取りまいて毎晩男ばかりの會食がある。その食事のあとで、キキが男達のなか〻ら一人を選ぶんだが、それが誰だか判らない。しかし一ぺんえらんだ男は決して二度と近づけない。そのかはり、そいつは黑ばらの花を貰つて名譽あるキキの騎士となる――はゝゝ、ちよつと變つた仕組(システム)だらう？刺戟の亡者がわいわい言つて詰めかけてるよ――。

やつぱりキキだ。

キキの返り咲き(カムバック)だ。えいんね？

一たい旅行者は、ともすると異郷の都會に、自分の好みにだけ當てはまつた、勝手な惡夢の期待をかけて、言ひかへれば暗黑面に對して無責任な想像をもつものだが、いくら國際的な塵埃樂場の紐育だつて、あの札つきの支那街でさへ、觀光團や視察者が詰めかける時だけ、それらの外國人や社會事業家の小説的好奇心を失望させないためにのみ、わざわざ臨時見世物のつもりで設置のセットみたいな阿片窟や賭博場や賣笑窟を開いて――慈善夫人なんかが猛者に案内されて見てきては、ことさらに眉をひそめる――時々こわがらせる位ゐがおちなんだからね、若い退屈な紳士から欠伸を追ひ出すやうな、こんな素晴しい都會の祕花が、さうお誂へ向きにぽつかりと咲いてゐやうはずはない。

しかし、實際「お行儀のいゝ紳士」の役を押しつけられてゐると、誰でも或る程度にまで、其の自分じしんのあまりにも紳士らしい紳士らしさに飽きあきしてきて、圓滿な常識、正規の日常生活といつたやうなものにほとほと愛憎がつきる。そして何處かこの、見渡す限りの瓦の海の底に、屋根一枚の下に、何かしらあられもない非行が平然と行はれてゐるに相違ないといふ一つの迷執(オブセッション)をもつやうになる。やたらにそんな氣がして、ゐても立つてもゐられなくなるかも知れない。が、一方には、理性と教養がさういふ事實の存在を無視し否定しやうとし、そんなことを考へるだけでも市民性への反逆だと囁く。するとそこに、この櫻井の場合のやうに、救はれないあんにゆい、公正にして明るい生活への呪詛が擡頭してくるのではあるまいか。

摩天閣にかこまれた底の空氣は、晝でも水のやうに紫いろに透んでゐる。そのむらさきが紺に變つて、いつしか灰色の度をましてくると、建物(ビルディング)の鋭角が平面にぼやけて、窓といふ窓に

灯がはいつて、何處からともなく風が渡つて、人々の足が早くなつて、夕刊賣りの鈴がやけに響いて、大紐育に夜が來る。

略禮服（タキシイド）に着更へた清水と櫻井をのせたタキシは、清水のアパアトメントの玄關から九番街を下町へとつて、芝居の開く前の廣小路（ブロウドウエイ）の雜沓を左右の步道に見ながら、マツダ・ランプの内部のやうな影のない照明のなかを流れて行く。夜とゝもにはじめて生を感じた男女のむれが、何哩も何哩も通りの上下を埋めつくして、光線に生麥酒（ハイボオル）のにほひがし、町の音樂には舞踏（ダンス）のテンポがこもつてゐた。

商業區域へはいらうとするとある横丁でタキシが停まつて、二人はくすんだ家並みの、平凡な一軒の前に立つた。ポウチにK字形の眞鍮訪問板が下つてゐた。

5

紐育市内でも島のやうに孤立した佛蘭西區域なので、來てゐる男たちは外國人が主だつた。で清水も櫻井もわりに安易な氣もちをもちつゞけた。天井の高い食堂の中空に、夢のかたまりのやうな大飾燈がうす暗く浮んで、小食卓のうへの覆ひを掛けた色蠟燭、堅板張りの壁や會食者の襯衣の胸板に、豹の皮のやうな高貴な斑點を投げて搖れてゐた。

食堂の奥に螺旋形の階段がついて、上にちようど卓子の列を見下ろしてバルコニイが廻つてゐる。その正面に扉があつて、隙間から強烈な光りが洩れてゐるのが、ちよつと宗教的な古めかしい感じをあたへた。

十四五人の紳士たちがおたがひに未知らしくもじもじして待つてゐるところへ、バルコニイの扉があいて、巴里の女アパシエみたいに作法なつくりをしたキキが、特色のある微笑と輕い足どりとで下りてきた。ウイリアム・ヤマもサミユエル・キミユウラもロング・アイランドの運轉手も、その他 God knows how many が、すべて一人のキキを今日のこの女王たらしめる階段に過ぎなかつたらしく、キキはいま、クレオパトラがパラマウント會社と一週百萬弗の撮影契約を結んだやうに、滿足と倨傲とではちきれさうだつた。

で、最後の晩餐のやうに妙にきごちない食事が始まつたわけだが、みんなインキ壺みたいに默りこくつて、音一つ立てずに食べてゐた。

「さうさ、今からやつてゐるうちに僕らの運命がきまるんだ。どうだい素適な氣持だらう？　何とも言へない悲壯なセンセイションだらう？これが忘れられないばかりに、この食事に十弗も拂つて毎晩くるんだ。ぱくちと同じやうなものだね。いや、

憫笑よりもつと喜劇的な性格をもつてゐる。」

なんかと清水が言つてゐると、不思議なことが起つた。給仕がキキの手から黒い薔薇の花を受取つて、清水の前へ持つて來て置いたのだ。清水が今夜の選に當つたのである。諒解するやうな赧い苦笑とともに、清水はキキについて階段を上つて行つた。

――＊――

食堂を出る時櫻井がバルコニイを振りあほいでみると、キキと清水が這入りこんだ扉から、黄色い光線が一筋流れ出てゐた。櫻井は下口唇を突き出して Phew と息を吹いて、そしてキキの家を出たのだつたが、なんだか何處かに間違ひがあるやうな、すべてが信じられないやうな氣がして仕やうがなかつた。つぎの日は日曜だつたから、輕い鐘の音が街路樹の葉末にそよいで、晴着をきた禮拜者のむれが三々伍々教會の圓門をくぐつて、露の乾かない廣場で鳩が餌をあさつてゐるのが、下宿の窓から見えた。紐育はけろりとすまし返つて、今やその公明正大な晝の生活にはいらうとしてゐるのだ。で、櫻井もすこし安心することが出來たが、その晩も七時になると、都會の幽靈の一つのやうに、櫻井はふらふらとしてキキの家へあの奇異な戰慄を購ひに出かけた。

『OH・BOY！』

『素敵だ！』

このハット・ドッグといふのは[illegible]といふ獨逸の腸詰のことでそれから來て、なんでも驚いたり感心したりしたとき、ハット・ドッグ！と叫ぶことがお馴染みのパイアノ連中のあひだの流行になつてゐた。

『いゝお天氣だね。』

『ハット・ドッグ！』

『おいおい、あの女を見ろよ。』

『ハット・トッグ！』

『すこし金を貸せ。』

『ハット・ドッグ！』

一頃何でもかんでも「ハット・ドッグ」だつた、そのころの或る晩、ハドソン河上流の日本人經營の旨豚で、五六人の日本人惡漢紳士が白牝馬の壜を倒しながら清水を中心に最近の冒險談に花を咲かしてゐた――。

『ハット・ドッグ！キキつて女は桃かい？』

桃（ピイチ）つてのはしやんぐらゐのところで、いゝものはすべて桃（ピイチ）だ。桃の帽子、桃の着物なんてことを言ふ。これに對して、レモンといふのが口やかましい中婆さん、くるみ（ナッツ）が判らず屋。馬鹿は南瓜といふことに一般になつてゐる。

『桃だとも。すてきな桃だよ。』
『ハット・ドッグ！何だつてそんなことをしてゐるんだらう？』
『もいすきな商賣さ。これに廣告と人氣取りの意識もあるだらうな。每晩人を集めて十弗で飯を食はせてろんだから、そのはうの上りだつて大したもんだ。考へてみるとなかなかうまい遣り方だよ。』
『さうすると、長く引つぱつて置けばおくほど、金を使はせるつてわけだな。』
『さうさ。その手でやられたのが櫻井なんだ。俺が黒ばらをもらつた日に、櫻井は始めて俺と一しよに行つたんだがね。それから先生每晩通ひつづけたとみえる。何しろ十弗づつかゝるんだから、これあ大分應へたらうよ。あつちにもこつちにも借金だらけださうだ。と言ふのが、第一キキがよくないのさ。每夜如何にも今にも遊びさうにしちやあ旨く外らして、思はせぶりに笑ふんだらう、櫻井でなくたつてつひ氣になつて、えゝ乘りかけた船だ、行くところまで行つてみやうと何時の間にか深入りするやうなことにならあね。とにかく無理な工面をしちやあ出かけてたらしいんだが、まるでこかいん常用患者みたいに、每日その時刻になると、何うしても家にゐられなくなつて、耐らなくて飛び出すんださうだが、俺も最初伴れてつたといふ責任があるから、これあ困つたことになつたと思つてね、その後は成るべく櫻井に會はないやうにしてゐたよ。ところが櫻井のはうちやキキでなくちや何うにもかうにもならないといふ騷ぎさ。何しろあれから隨分經つたが、その間一晩も欠かさずに出席したと云ふから、根氣にも驚くが、よくさう金が續いたもんだ。每夜一人づつ新しい男がキキについてバルコニイの部屋へ上つて、その黒ばらの騎士つてやつになるんだから、絕えず顏が變つてるわけで、櫻井もだんだん古參の組に廻つちまつたんだが、さうすると、變なものだね。何かつて櫻井の氣持さ。これあ初めは、莫迦々々しい話だが、まあ、キキに白羽の矢を立てられるのを目的にしてお百度を踏んでたに違ひないんだけれど、每晩々々キキを見てゐるうちに、すつかり惡く落着いちまつてね、もうそんなこたあ何うでもいゝや、ただかうやつて此處からキキを見てれあそれで結構だ、いや、そのはうが却つて有難いといふやうなぐあひに、櫻井の氣持ちが變つたと見える。なもんだから櫻井としちやあ一さう仕末が惡い。とんでもないやつに深い感情が向いちまつて、つまりその、何だかんだと言つたところで、要するに何だ、キキを戀するやうになつたんだね櫻井が。もちろん自分じやさうとは氣がつかなかつたのさ。がしかし、このキキと其の黒ばらの騎士なんてものは、言はゞ都會の

悪戯でね、既に遊戯である以上、真剣になる必要は少しもないんだ。それを櫻井は何時の間にか忘れてむきになつて、まるで自宅へ歸つて女房の手料理を食べるやうな氣でキキの食卓に向つたり、純潔な戀人を守るやうな目でキキを見てゐたといふんだから、何ともはや、大變なわけさ。だから、或る晩たうとうキキが櫻井へ黒ばらの花を送りつけて、其の夜の選擇を示したとき、櫻井はすつかり悄なく感じたらしいんだ。非常に悲しさうな叮嚀な口調で、そのばらをキキに突つ返へしたんだとさ。さあキキは屈辱だといふんで顏色を變へるし、居合はせた連中も昂奮して騷ぎ出す、とにかく一時は大揉めにもめたが、そのなかを逃げるやうにして下宿へ歸つて、さて一人になつて櫻井が考へてみると、どうも愚劣なことをしたやうな氣がしてならない。なあに、俺に言はせればこんなことにそれ程こだはるのがよつぽど妙で、これこそ櫻井がキキに戀してゐた證據ぢやないか。で、つぎの晩もキキのところへ行つたものだ。もつとも、その時はもう選に當つたら直ぐ二階へ上らうと思つてゐたのさ。すると、キキも話せらあね。ながい間、油の利いた機械のやうに何の間違ひも澁滯もなく遵奉されてきた法則を、ゆうべ始めて破つた櫻井に、その晩また、前に何事もなかつたやうに黒ばらを屆けてよこした。が、櫻井がそれを見てゐるうちに、矢つ張りむかむかつとして來てね、ちらちらとバルコニイの上のキキを見たんださうだ。すると、そこにはもうキキはゐなかつた。いや、居たにはゐたが、それあキキぢやあなかつたんだね。只の女さ。そのたゞの女が、櫻井を見つめて泣き笑ひをしてたさうだが、生れて始めて振られて、生れてはじめて戀を知つたんだ。キキが自分を戀してるつてことが、櫻井にも判つたんだよ。」

「HOT・DOG！」

櫻井の神經は急に太くなつて、黒い花を鷲掴みにすると同時に、呆れてゐる給仕を突飛ばして、しつぽに火のついたマラソン選手みたいに、一足とびに階段を駈け上つた。そして、そこによろめいてゐる小さなキキの身體を横抱きにして、彼自身もよろめきながら、眼の前の明るい部屋へdiveした。

これがキキの信者達がキキと櫻井を見た最後だつた。キキの家もゝう翌る日からはぴつたり釘づけにされたまゝだつた。キキはゐなくなつたのだ。それとゝもに「退屈な日本實業紳士櫻」井が消え失せたことも言ふまでもあるまい。any how, 紐育だ。

キキは間もなく黒薔薇の騎士の記憶からさへ滑り落ちてしまつたが、櫻井のはうはさうは往かない。日本の家族と商會が領事館や警察へ頼んで、可成り大がかりな捜索がつづけられた。

One day——たいがい事件と物語は one day に始つて one dayに終る。

その櫻井捜査團の團長格だつた清水のところへ、ネブラスカ州のL市から繪葉書が届いた。櫻井の字で、たゞ「最後の黒薔薇の騎士」と書いてあつた。で、清水は不自然でない程度に方々へ手を廻して、友人にとつてむしろ有難くないであらうところの捜索を打ち切るべく、ひそかに奔走したのだつた。櫻井のことが出るたびに、清水は笑つてゐた。

『なに、櫻井？あれあ君、おつせかいが過ぎて紐育に呑まれたのさ。』

ところが、呑まれたのは「最後の騎士」櫻井だけだつたとみえて、それから間もなく、キキはほかの日本人と腕を組んで廣小路を歩いてゐた。見た人があるんだから仕やうがない。

HOT・DOG！

えいんね？

——おはり——

宣傳

宣傳心理

高田保

宣傳の文句は大仰なほどよいが、例へば、公園の中に三軒の氷屋が店を並べたとす。その一軒が

「日本第一の大安賣」と書いたとする、

次の一軒がそれを見て

「世界第一の大安賣」と出したとする、

所でもし三軒目がこれに隣して、次のやうな看板を掲げたとしたらどうなるか。

「公園第一の大安賣」

勿論、宣傳の文句は巧妙を極めるに如くはない。が或る時、ある土地ブローカーが、賣地主のために一文を認めた。

「土地高燥にして樹多く、五年を出でずして第一流の住宅地、倍價に騰上する事必定絶好の投資物」云々、

地主がそれを讀んで當惑した。そして靜かに彼に向つて訊いたやうには

「君それは本當かね」

「本當ですとも！」

そこで地主の答へたよう

「では、もう暫らく手離さずに置いて見やうと思ふ。」

宣傳の文句は誰をしても信ぜしめねばならない。しかしそれを信じてはならぬ男が少くとも一人は此所にゐなければならない。

では、宣傳とは嘘の吹聽か。

しかしもし諸君がどこかの宣傳部員であつたならば、始終に君はから責められるであらう。

「君、今度の品物はとにかく素晴らしいよ。だから宣傳しさへすればきつと賣れる。」

よきが故の宣傳である。優れるが故の吹聽である。これは決して嘘ではない。ここで君はいそ〳〵として仕事に取りかゝり、明日を樂みにして眠るだらう。

品物は上々に捌けたとする。すると結果は公式的に次の如く諸君の前に現はれるだらう

「やつぱり品物がいゝとこの通りだ」

が諸君は、全くこれと反對な場合がある事を知つてゐなければならない、何故ならば君は始終から責められるであらうからである。

「君今度の品物は少しまづいんだ。だからうんと宣傳して貰はなきやならん。」

惡しきが故の宣傳である、劣れるが故の吹聽である、これは決して正道ではない。そして君ははら〳〵として仕事にかゝり明日を憂へて寢つかれぬだらう。

品物は下々の景氣だつたとする。すると結果は又公式的に次の如く現はれるだらう

「やつぱり宣傳がまづいとこの通りだ。」

宣傳のうまさまづさとは何であるか。

「今日は帝劇、明日は三越」は蓋し廣告名文句の一つである。がもし

「昨日は帝劇、今日は三越、明日は當店へ御越し下されたく候」

とこれが質屋の引札であつたとしたらどんなものか。諸君は充分にその屋號を印象され記憶するに違ひない。が質屋の廣告目的はそれ以上の店にある。その折角の目的は副ふだけの結果が舉げられるかどうか。

「最も安全なる貯蓄法は、ダイヤモンドを購ふにあり」

曾て僕はある貴金屬店の撒きビラの中にこの文句を見出して苦笑した。

二人のサンドヰッチマンが睦しげに並んで歩いて行く。その二人の擔ふ看板はしかし同じ一つの店ではない。が不幸にして同種の商賣であつた。

一つの[illegible]一つの廣告を[illegible]二つの人が[illegible]
で歩く事は、二人とも歩いてゐなかつたと同様であるか。

このサンドキッチマンの雇ひ主が、この態を見て、忽ちに「馬鹿な！　誰がそんな日當を拂ふものか」といきなり言つて怒つたといふ話がある。

尤も僕は、ある時の銀座街頭で、一人のサンドキッチマンから、一枚のチラシを受取つた事がある。と偶然に氣付いたのであつたが、彼の渡したチラシと、彼の擔つてゐた看板とは、全く別々の店の廣告であつた。

天空を飛行機が快翔する。時折に彼女は金魚の糞の如くに尾を曳いて散らすものを見せる。多分又宣傳の紙片であらう。微風は中空をめぐり、それは東京灣の方へ流れて行く。

で、一體、宣傳の幾割が効果を納めるのか。

全集物戰爭の熾んな時のことである。仕事にあぶれた富川町の自由勞働者は、空腹を覺える度に町を歩いた。

「おい、ロハの本を呉れ」

本屋から本屋へ、全集物一切の内容見本を貰つて來たといふのである。一町内を廻つてくれば優に懷中が一杯になつたらう。それを持つて行つて屑屋に賣り、「まづ今日も暮れた」と呟

[illegible]いたといふ[illegible]

自己宣傳

新居格

小學生や中學生の間によくある現象――「これを知つて居る人がありますか」と云つて先生が答を生徒に求めることがある。そのとき手を擧げて、その手も精々先生の注意を惹くやうに高く擧げ、手招くやうに振り動かしつゝ「先生、〳〵」と連呼するやうな生徒がよくあるものだ。その癖、そんな生徒が正しい答が出來るとは限らないのだ。正しく答へられうる生徒が知つてゐながら面倒臭がつてわざと手を擧げないことがある。

右のやうな自己宣傳は無邪氣だからその稚心にも愛すべき何ものかゞあるが、大人となると、社會に向つて手を擧げたがる大人となると煩いものになる。

花井卓藏若かりしとき、議會で星亨に打突かつて議論することは自己宣傳の手段とし、松田源治はまた花井卓藏に憲法論で

打突かつて賣名の地歩を築いて行つたとやら。文壇なぞにも同巧異曲の意味での論爭があると聞いた。

今の世の中は宣傳の世界だと一概に云はれてゐる。宣傳はアメリカ合衆國が最もうまい少くとも萬事大袈裟だが、勞農ロシヤも中々手に入つたものらしい。

宣傳戰に勝つた方が勝つ。英國で起つた炭坑爭議はお仕舞には政府對勞働階級の對峙になつたが、そのとき勞働者側の敗北は宣傳戰に敗れたからだと云はれてゐる。政府の方では大きな機關紙を發行する、ラヂオで放送してうまく宣傳する。勞働者側に傾いてゐた意見の持主の一般市民も政府の宣傳をうつかりと信用する。意見が變はると云つた風になる。

宣傳の效果を信ずる世の中だから、飛行機でばら撒いた宣傳ビラが青空からヒラヒラ舞ひ落ちる。大通りの鋪石道には紙屑籠をひつくり返したやうにビラが散る。夜は電飾、廣告塔、新聞、雜誌、口舌、行爲、利用されうべきあらゆる手段が宣傳の機關として利用される。商業は元よりのこと、政治も、主義も何もかもが何處に何一つの例外なきが如くに見受けられる。

そんな世の中だ。自己宣傳も宣傳だ。大凡そ同じ按配式の理屈が成立つであらう。

そこで「この人を見よ。」「俺はエライのだ」

尤もこの國の昔の戰爭では嘘かほんとか知らないが、われわれが芝居や講談本で知る所ではお威張りで名乘りを上げて、われこそはとてもエライ勇士なんだ、だから木葉武者共目に物を見せて呉れると云つたやうなことになつてゐる。その愚劣た習性が今に殘り、威張りたがつたり、自己宣傳をしたがつたり名前を欲しがつたりする惡癖が今の世に絕へないのである。絕へない計りか、今の世が宣傳時代と來てゐるから堪らない。一面から云へば、今の若かい時代の人間は表現をハッキリしやうとする傾向がある。表現をハッキリとすることはその人を目立たせることになる。その場合、別に宣傳的意圖がなくともあるときと效果的には同じことになる。

私などの如き無名碌讀の徒は平凡で、快活で、何事に仍らず踏張りした人間に組する。よし、空氣のやうに輕やかで、水のやうに何の味がないと云はれても貪婪な自己宣傳で風のない夏の夜のやうに蒸熱くなつたエラガリやよりどれほどいいか分らない。どんなに威張つた所で地球上の人と云ふ人に認められる點から云へば、どんな種類の人間だつて太陽にはかなはない。日本人のどんな有名な奴でも富士山にはかなはない。田中義一は「バット」や敷島の百分の一ほどにも知られてゐない。自己宣傳の目的意識は名利計りではないかも知れない。自己宣傳に

どれ丈の効果があるかないかは知れないが自己宣傳をする人間達は効果があるものと思つてゐるのだらう。事實なにがしかの効果はあるでもあらう。よし効果がないにしてもこれに興味や自己滿足を見出してすることをわれ〱の好みでないからと云つて異議を挾むことは出來ないのである。たゞ、自己宣傳が下品なものであることは明らかに云へやう。

　だが下品だからと云つて、自己宣傳をしない人が乙に上品ぶらうとするのも私は取らないのである。したいものならしたがいい。きらひなものはきらひでいい。きらいだからと云つて、好きな他人がその人の好みによつてするものを無寛容であらねばならぬ譯はない。

晩歩來晴伴杖藜　林叢深處任東西
箇中偏愛無名草　不爲騷人入品題

　右は元政上人の七絶だが、この詩は自己宣傳患者には解熱劑になるやうな清凉味がある。「草の主は誰ぞその名も白菊の咲出でて匂ふこの家ぞ知られける」と云ふ默阿彌作淸元「雁金」のき一くさりも窓を開け放つて一脈の清風を入れる位の意味はある。

　私なぞは、平凡の徒、元政上人の詩にあるやうな清高の衿持もない。たゞ極めて無頓着で、一向お構ひなしの明朗なのほほんで居たい丈である。だから、自分なんかに就いて他人が知らうが知るまいが、そんなことはどうでもいゝことである。この俺を見よなんてそんな意識を鎧つて誇張ることが既に不自然極まるのだし、それが本來無名大衆の戰であるべき筈の社會運動にさへ「この俺を見よ」の意識が多分にあるのだから堪らない。こんな場合には主義思想の宣傳に隱匿された個人の自己宣傳があるのが常である。自己宣傳中最も醜惡なものはその種のものである。

　一體今の世間が可笑しなもので云はゞ道化役者の無台みたいなものだ。今の新聞紙が新聞眼を通して新聞價値のありと麗々しく取扱ふ多くの事件が如何に下らないか。新聞自體が宣傳的なものだし、これに自己宣傳的に結び付いた如何に多くの浮遊物がゐることか。新聞の取扱ふ名士や登場人物の男と女とが大抵どんなものであるかは少しく考へれば莫迦〱しい無意味である場合が多い。

　自己宣傳を罪惡だとは云はない。それはその人達の勝手だ。惡るく云ふにも當らない。見て居ると滑稽で面白いから。だが、ただ云ひたいことは明色の陽氣な平凡人の世界が望ましいと云ふだけのことである。

宣傳の勝利

宮島新三郎

一

牛肉屋の店頭に持主のわからない下駄を澤山並べて置くことも一つの宣傳なら、赤い黄金を闇に融通して世界の赤化につとめることも亦他の宣傳である。相違はたゞ組織化されたるとされざるに在るのみ。今日は組織された宣傳が有力に行使される時代である。この意味で組織化されたる宣傳行使は現代相を物語る重要一特色でなければならぬが、しかもこの宣傳は抽象的な正不正理非理を超越して、社會全般の輿論を動かすことがある。その好適例を、私は過般の英國總同盟罷業に見た。

普通の見方によれば、無條件で罷業を中止したのだから、罷業者側の敗北であり、罷業對策に全力を傾けて、社會秩序を維持し得た政府の勝利である。更に一般國民が理性を失はず、よく常識に訴へて政府を援け、社會秩序を維持することが出來たのであるから、ボルドウイン首相の政治家的巧言を以てすれば常識の勝利かも知れない。けれどもこれは決して事實の説明になつてゐない。常識を英國民性の一つにかぞへる架空世界から發したロマンテイツクな解釋である。燒芋屋、魚屋、荒物屋と並んでゐる街に火事があつたとすれば、誰しも火元は燒芋屋だらうと想像するのと等しい認識不足である。事實的想像に見えて、實は最も非事實的、即ち架空的想像である。英國の總同盟罷業の結果は、常識の勝利ではなく、私は寧ろ宣傳の勝利だと見るのである。この方が一層事實の説明に近いやうに思はれる。なぜであるか、それを述べるのが、この一文の主眼である。

二

過般の英國同盟罷業が罷業者側に於ても對從者側に於ても、九ケ月の準備の後で開始されたものであることは、玆に呶々するまでもあるまい。本來なら、九ケ月前に、起るべきであつたのを、補助金二千三百萬磅の給與といふ一時的彌縫策で、政府が喰止めて置いたのである。この間に於て、政府はサミユエルレ・ポートの作製を始め、總罷業に對する準備と方策とに腐心した。否な調停し得るといふ確信よりも、應戰し得るといふ自信と勇

[illegible]つたところで、坑夫側に向つて責任約の履行を強要することは、経済的事情の漸次的悪化がこれを許さない。さうかといつて勞働組合の主張を容れて、直ちに炭鑛國有を斷行することが、保守黨年來の政策に矛盾を來すことは、九ケ月前も九ケ月後も同じである。坑夫側の要求を不合理のものとして引つこませる最後のたのみは、たゞサミユエル・レポートあるのみだが、それとて制作途上では、丁と出るか、半と出るか、行手は闇であつた。して見れば、政府としては總罷業の到來を豫想して、これに應戰するだけの準備と勇氣とをつくるより外にとる道はなかつた譯である。

勞働組合に於ても、主張要求の貫徹は、九ケ月後になつても、總罷業の武器に訴へるより外に方法なきことを自覺し、そのための準備に全力を傾けてゐたことは、火を見るよりも明かである。兩者共準備をしてのストライキであつたことに注意せねばならぬ。

三

政府と新聞紙とはストライキの前から、これを戰爭なりと宣傳した。政府の意向は、かの歐洲大戰を國民の頭腦に思ひ浮ば[illegible]されたといふに至つたる[illegible]十一時から總罷業を實行すべき旨を[illegible]して、政府は非常權力法を布告し、總罷業に備ふることにした。即ち政府は非常國民生活保障の名の下に、軍隊、警察その他凡ての國家權力を用ひて總罷業に對應する意志を表明した。單に意志を表明したばかりでなく、進んでその實行にも着手した。

元來總勞働組合に於ては、交通、印刷、製鐵製鋼、金屬工、化學工業、建築、瓦斯電氣の供給等に從事する勞動者を動員はしたが、食糧の供給、保健、衛生等の事業に從ふ勞働は罷業に加へないで、あくまで國民生活の最小限度を保證するつもりでゐたもの〻政府はその意をくまず、總罷業は、今日のパン、明日のミルクにも國民をして差支へさすものであるから、第一にその備へをせねばならぬとして、ロンドンではハイド・パークとリヂエント・パークとに食糧供給所本部なるものを設けた。あの美しい紋の芝生に見苦しくもバラックが建ち、白いテント張りの小舍が並んだ。軍用自動車が幾百臺となく芝生の上に集つた。而かも兩公園とも五月三日午後五時には、一般市民の入園が禁じられ、武裝せる兵隊を多數のせた自動車が出たり這入つたりした。勞働組合で國民生活は保證すると主張してゐたに拘

らず、政府は國民の飢餓を心配してかゝる行動に出た。又勞働組合の方で食糧の供給その他については出來る限りの援助を與へようと申出た時にも、政府はこれを拒絶した。これを以て見れば、勞働組合に對して敵意を示し、敵對行爲に出たのは、第一に政府そのものであつたといはねばならぬ。

四

新聞紙は歐洲大戰に依り、戰爭が新聞販賣政策上最良の種子であることを充分に知つてゐたから、ストライキなる階級鬪爭を同一目的に役立しむることに努力したに不思議はない。ストライキ第一日の朝に發行さるべき筈のデーリー・メールはストライキを對外戰爭と同一に見てゐたといふ。モーニング・ポストには、『ジノヴイエフは勝つ』といふ見出しがあつた。サンデー・タイムスは、勞働組合は『國民と闘ひつゝあり』と說明した。月曜日(ストライキ第一日)に於けるデーリー・テレグラフのビラにはたゞ一語『戰爭』の文字があるだけ、記事には總罷業を『內亂』と書いてゐた。そこで勞働黨、勞働組合の唯一機關紙たるデーリー・ヘラルドも仕方なく『政府は勞働に宣戰を布告した』とか『若しそれ(ストライキ)が戰爭なら、戰爭たらしめよ』と對抗せざるを得なくなつた。印刷工を罷業に參加せしめたのも、かゝる不利の繼續を恐れたからであつた。けれども印刷工のストライキ參加は事實に於て前掲の諸新聞を抑壓するに効を奏しなかつたばかりでなく、却てチアーチル藏相に新分野を征服する機會を與へ、全くの政府機關新聞たるブリティシュ・ガゼットを發行せしめるに至つた。政府はこれに加ふるに、B・B・C(英國放送局)を手中に收めて、出來得る限り利用した。中產階級の輿論をして反ストライキに傾けしめたのは全くラヂオの宣傳に依るとさへ述べたものゝある位である。更に又政府がストライキ中も議會を召集して、ストライキ反對熱をあふつてゐたことはいふまでもない。

政府の方にこれだけ有利な宣傳機關があつたのに對し、ストライキ側では僅かにデーリー・ヘラルドの變形たるブリティシュ・ウアーカーズが出ただけである。それはガゼットのタイムス型四頁なるに比し、その半分の形の四頁、部數も紙を得ることの困難のために遙かに尠く、ガゼットの普及には到底及ばなかつた。斯くして、政府は既に宣傳機關に於いて、有利な地位を占めた。次の問題はその運用方法である。

五

ボルトウイン首相は、五日の議會で、國民に與へる訓示を披瀝し、この中で、[illegible]への[illegible]なり、[illegible]

論と相容るる大罷業なりと述べた。それは國民全體に[illegible]きガゼツトで報はつた。七日夜は、英國有數の法律家であり、嘗つて檢事總長の職にあつた自由黨のサー・ジョン・サイモンが總罷業は不法なりと絶叫した。國民は總罷業を元來法律が勞働者に與へた罷業權の行使とのみ考へてゐた矢先であるから、彼等の耳には恰かも夜半の警鐘の如くに響いた。その是非を批判する暇はない。國民は一も二もなくそれに耳を傾けた。不法行爲は英國民の最も忌むところである。輿論の大勢は、サイモンの不法論でストライキから面をそむけた。

元來一般國民、即ち中產階級は、ストライキ以前には、大體に於て坑工夫、勞働組合側に、たとひ好意は持たぬにせよ、惡意は抱いてゐなかつた。そして寧ろ炭坑主、資本家及び彼等を直接間接に援助してゐた政府の態度に不滿を感じてゐた位である。

ところがストライキの直前から直中になつての政府宣傳によつて、國民は、總罷業が產業爭議の一武器でなく、國民生活を破壞する爆彈であるかとの不安の念を抱かしめられた。そこへもつて來て、ストライキになつて見ると、役所なり、會社なり、商店なり、勤め先へ步いて行かねばならぬ苦痛を直接眼のあたり經驗させられたのであるから、ストライキ不法論が出て[illegible]ければ、それに賛成して、ストライキを[illegible]然の勢である。

この不法論に前後してバルフオア卿の總罷業不合法論が出た。オツクスフオード卿も略々同一意見を發表し、總罷業で苦しむものは資本家でもなければ、金持階級でもなく、その日その日の生活費を得て行く勞働者であるから、早く罷業を中止して、協調に入れと促した。その間にラヂオやガゼツトでは何處々々で巡査と勞働者の衝突があつて巡査が殺されたとか、勞働者が亂暴を働いたとかいふ虛實とりどりの報を傳へた。一般國民は益々ストライキに反對せざるを得ない。政府は機を見て、巡査、車掌、運轉士等の志願者を募集し始めた。應募するものは日一日と增して行つた。首相はそれを國民に感謝した。バスや電車の車臺が日增に多くなつて行くことを、ラヂオで傳へ、新聞で書き立てた。一週間後にはバスの數は殆んど平日に復したといはれてゐる。眼に見える交通機關が平日に復したといふことは、市民に、凡ての業務が平常に復したといふ錯覺を與へた。更にその錯覺は勞働者なしでもこの世界は動いて行くといふ途法もない錯覺的安心をも生じた。政府の宣傳は全く思ふツボにはまつて來た譯である。

凡そ總罷業にして一部の目的を眼ざし、而かも革命的手段に

訴へずして成功しようとするからには、國民の多數を占める中產階級の間に積極的同情を得るに如くなしといふことは明かな事實である。ところが英國の總同盟罷業は政府の巧みな宣傳に依り、同情を得るどころか、却つて反感を買つて了つた。そして結果は無條件でストライキを中止するといふことにあつた。それは決して國民常識の勝利ではない。政府宣傳の賜物でなくて何であらう。私は組織化されたる宣傳力が如何に强く輿論を左右し支配するものであるかを、過般の英國總同盟罷業の實例に依つて、痛切に感ぜしめられたことを、こゝに繰返し述べて置く。

宣傳うらおもて

佐々木指月

■

ニューヨークは宣傳の都だ。

都そのものが宣傳の「ビラ」なのだからこのくらゐ徹底した宣傳は世界にその類がない。

こけおどしのニューヨーク、自由だ自由だのニューヨーク、いらつしやいいらつしやいのニューヨーク。

また來よう今度來ようといつて再び來られるニューヨークじやない、一刻千金のニューヨーク。それも費やす方ではなくつて儲かる方なんだからすばらしい。

見世物ならば代は見てのお戾りだが、ニューヨークはお戾りにはお土產の費を差し上るといふのだから、お上りさんはみんな一ぱいくはされる。

笞と飢とのロシアからくるものも、夫婦喧嘩のドイツから來るものも、お寺とお墓のイタリーから來るものも、ニューヨークの港へはいつて船の上から自由の女神像を拜み、マンハツタンの空に聳える黃金の摩天閣の林を仰いだ一刹那に、やれまあ、やつと一生の貧苦をのがれてこの世の樂園ニューヨークへやつてきたと思はぬものは一人もあるまい。

世界の化粧室と云はれてゐる巴里の都も、また、モノクルの一つ眼鏡のロンドンも、金ぴかの都ニューヨークにくらべては殆んど顏色がない――さうな。たゞし、都會そのものを宣傳ビラと見立てての話だぜ。

そこへ行くとわが東京なぞは――あまりおわるくつてわからな

[illegible]ことには、まだ目醒めてもゐないらしい。どうせこゝはおかい[illegible]の風だもの。

ただ偶然にも日本は富士の山と櫻の花をこの國の宣傳ビラとしてつかつてゐる。さてもお安い宣傳ビラよ。何んとか新案を出してはどうだ。

尤も宣傳に靈のない宣傳は一つもない。ニューヨークにしたところで、あれは實際無數の泡のかたまりのような都だ。人々はただその泡の面に映る幻影を攫もうとして狂奔してゐるのだ。

あの都にゐると金はなる程誰にでも儲かる。だから誰でも未來がそこにあるような氣がする。しかしその未來はどこまで追つても畢竟するに未來なんだ。あの都には人のポケットをはたかせるやうな仕かけがしてあるのだからかなはない。

人の希望を充たしてくれさうな宣傳をしてゐて、その實、人にただ働きをさせるのはニューヨークだ。

人をいつまでもテンタライズする宣傳ビラニューヨーク。自由の女神は人に秋波を送るのみだ。

■

[illegible]い、ようだ。

尤も日本のように美人と見れば、あやしい[illegible]されてしまう國柄では、美人をつかつて却つて宣傳にならないかも知れないが、ニューヨークあたりでは、人間は女に限らず、男でもみんなあやしいのだから、あやしいことなぞは何んの問題にもならないのだ。

雜誌の宣傳をする美人は、戸を叩いてはいつて來る。いづれも一寸教育のありさうなモダンガールだ。たいていは小柄で、いかにも人に好かれさうな聲と、愛くるしい綺麗な顔をもつてゐる。

「雜誌のサブスクリプションをお勧めいたします。」スナッピーストーリース、エンド、ピクチュアース。年に十二冊、それでたつた二弗と四十仙、特別號の分だけがおまけになります。と一と息に喋べる。

「いそがしいのに雜誌なんか讀んでゐられぬ。」と答へると、美人はづらりと二三冊の雜誌を扇なりに手に持つて、

「でもあなたは毎晩活動寫眞を見におでかけでしよう？だが、雜誌は雜誌の方からあなたのおそばへ參りますわ。」ちらりと意味がある目が光る——わたしのところへ來たのは光つた。もつ

ともそれはこちらの氣のせいかも知れなかつたが――

「雜誌は讀まなければわからぬから面倒だ。」とからかふと、

「近頃の雜誌は見ればわかるように出來てゐますわ、これを御覽なさい。」と、美人はなかの寫眞版の挿畫のところをめくつて見せる。

「でもそこに文句が書いてあるじやないか？」と云ふと、美人は身振まじりかなんかで、

"FLAPPER walks into the lobby,

(Flappers are my greatest hobby)

Knees are bare and hair is bobby……

Gee!"

とかなんとか讀みあげる。さあ、さうなつてはなかなかもう出て行かない。

なにしろ先は若い女だし、こちらは一人だ。――この連中は、おもに獨身者のところをえらんでやつてくる。大ていは、アパートメントの入口で、ジャニターに樣子をきいてくるのであるが――誰か來れば見つともないし、いつ迄も時間をつぶされてはかなはないし、仕方がなしに二弗四十仙出してやると、ちやんとした受取を置いて、

「おほきに、では今月號から直ぐにお屆け致します。」と、さもうれしさうな笑ひ顏をする。

たゞし、かの女たちは、いつも二三種の違つた雜誌をもつてゐる。それは一つ社で發行する雜誌とはきまつてゐない。

「おまいなにか珍らしい雜誌を持つてゐないか？」と尋ねると、

「どんな雜誌でも、お好みのを取りついであげますわ。」と、しらばつくれる。

「いくらで取りついでくれる？」ときくと、

「どの雜誌を？」ととぼける。

「そのなはおまひが知つてるだらう？」と云ふと、

「アイ、コンフエッスでしよう？」なぞと、うまくごまかして逃げていつてしまう。

仕事のひまな水曜日の午後なぞに、一人でぼんやりしてゐるときには、この雜誌の宣傳をする女のくるのはたのしみなものだ。

文壇のことや文士の噂も一と通りは知つてゐるし、それに每月の目ぼしい讀みものなぞも、聞けばきつと敎えてくれる。

給料といつてはきまつてゐないが、收入の半額とかゞ貰えるのだといふことだ。

サブスクリプションを勸めるよりも、その雜誌の宣傳をすることが、おもな仕事であるらしい。

かの女たちは、ちやんと自分の寫眞を貼つた舞踏會のサテフイケットを持つてゐる。またかの女たちの出す受取には、このサテフイケットにある番號が刷つてあるから、間違ひは先づないことになつてゐる。

さあ、日本の若い女に、かうした仕事が出來るだらうか？

——了——

赤化宣傳

森山吐虹

勞農ロシヤは一切が謎であり凡てが僞である。言論出版の自由がないから、その眞相を確めることも出來ず、國外に於てさへ苟くも勞農政府を誹謗するものに對しては執拗なる復讎と殘酷なる制裁が加へられるから、今日露西亞事情として世間に發表される事柄は悉く勞農政府の宣傳以外にないと思つても差支がないやうである。

有體に云へば勞農政府は『恐怖』を經とし『宣傳』を緯として織り出されたる一片の赤布に過ぎない、而かも絢爛たるその色彩に「ゲー、ペー、ウー」（保安局）で幾萬となく數十萬となく殺戮したる反政府者の血しほを染料として居るのである。

宣傳を以て生命として居る丈に、この手段方法は巧妙であり同時に眞劍である。

「モスクワ」に宣傳學校と云ふのがあり、各都市にまた宣傳學校がある、そこでは共産主義を宣傳するに必要なる諸科目を敎へられ、世界の革命史を讀まされ、更に宣傳に對するあらゆる技術を訓練されるのである、修業期間は八箇月で、學生は老幼男女の差なく、學術よりは寧ろ信仰の强弱を基準として入學させることになつて居る、さうして卒業生は敎會所屬の神學校を出たものが牧師宣教師と爲つてその生涯を神に捧ぐべく期待さるゝやうにまた宣傳學校の卒業生は共産主義の宣傳者として四方に派遣される。

勞農政府の宣傳は大體に於て國内國外の二つに分たれ、國内宣傳にはポスターも使ふ新聞も使ふ、小冊子も配布する、それから演説やら講演やら、ありと有らゆるものを時に臨み、機に應じて用ゆるので豫め宣傳方法をきめて居ないけれ共、宣傳者の派遣さるゝ所には必ず何かの團體を作るやうに爲つて居る、一種の信仰を持つ思想團體であつて、之をロシヤでは「ヤチエイカ」と呼んで居る、「ヤチエイカ」は「ヤイツオー」（卵子）から出

た新字句で即ち共産主義の卵をのこす意義である、その卵が將來ふ化する時機こそ完全に共産主義が宣傳され了つたと見るのである、勿論宣傳者の影には「ゲー、ペー、ウー」が眼を輝かして居る、抑壓政策の徹底的を示して他者が後世の恐るべきをさとすよりは、殘虐の現狀を露はにして不信の衆生を脅かす方がどれ丈有力であるかは云ふ迄もない話である。

況んや蟻迄さへ逃すまじとする探偵網が全露に張られて居るに於てをや。

併し勞農政府が最その頭を惱ましその力を傾けて居るのは國外宣傳である、勞農政府が孤立して生存し能はずとする生存權の主張よりするも、共産主義を普及する事が一大使命であると云ふ義務の遂行よりするも、國外宣傳の成敗は直ちに自己の興廢に歸着するのである。

所が西歐北米に試みた彼等の宣傳は殆ど根據を遺さない迄に破壞されて仕舞つたので、今度はその頭を東にして東洋方面に向つて來たのである。

尤も獨逸に對しては第一段の成功を收め得たと云つてもよからう、「カイゼル」が「レーニン」一派の亡命者を優遇し特別列車を仕立て巨額の金貨を附けして革命直後のロシヤに送還したので「レーニン」等は直ちに戰線に馳せて軍隊の解散、上長への反抗等を使嗾しとう〳〵露國の戰線をめちや〳〵に寸斷して仕舞つた迄は確かに「カイゼル」の成功であつたが、其後臨時政府を倒壞して勞兵會の天下となつた曉に露獨單獨講和に入るべく例の「ヨフエー」が講和大使として「ブレスト」會議に臨んだけれ共交渉が纒まらず「トロツキー」代つてその席に臨んでまた一度決裂した時、獨逸は盛に軍威を張つて首都を襲はんとする樣子を見せたので、遂に勞兵會議を開催し否とするもの八十五に對し可とするもの百二十六（二十六票は保留して贊否に加はらず）でとう〳〵獨逸の申出通りに、大屈辱を忍んで二月九日午後二時「ウクライナ」との條約に調印し、遅れて三月二十日全露の平和條約を締結し了つた。所が「ヨフエー」が駐獨大使たるに及んで死力を盡して獨逸軍隊の間に革命思想を宣傳した、「ヨフエー」は直ちに逐はれてしまつたけれ共、獨逸帝國は之が爲に滅亡し、「カイゼル」は敗殘の孤影を抱いて月を配所に眺めるやうになつたのである。人に與へし毒汁の半椀を、いつか自分の食膳に供へられて仕舞つた。

莫斯科政府には宣傳本部がある、丁度軍隊の參謀本部のやうな立場にある、而して現在では東洋局に全力を集中して居る、局の中には支那、印度、朝鮮、日本と云ふ風に諸課を設け着々として共産主義の宣傳につとめて居る、云ふ迄もない事だが、

主義の信奉者を得ると云ふ事が最終の目標でなく、卽ちこれが現實にされた時、換言すれば將來の制度組織が悉く勞農政府の精神と一致する迄は徹底的に遂行せんとするのである。

國外宣傳機關としては常に第三インターナショナルを表面の主體とし、全然政府と沒交涉のもののやうに仕立てゝあるが、本國に於て勞農政府と第三インターナショナルとは宛然雙頭の鷲神の如く、決して別々に分つて見る事の出來ない形になつて居る、然るに英國に於て勞働爭議に巨額の軍資を貢いだり、新聞を買收して煽動したり、機を逸せず常に擾亂を釀成せんとするものに對し、政府はいつでも責任を第三インターナショナルに嫁して逃げを打つやうにして居る。

更に甚しいのは勞農政府になつてから文字を簡易にし制限し、從來とかけ離れた一種の文法と文章とを一切の公文に用ゐて居乍ら、この國外宣傳に使用する秘密文書には必ず舊來の文法と文章とを用ゐ、それを口實として發見せられた場合に僞文書であると抗辯するなど一切が陰謀であり、用意が周到にされて居る。

宣傳機關としては大公使館も領事館も、商務官も、何もかも悉くが宣傳の爲めに働いて居るのである、唯専門にそれにかゝつて居るのと、公務の傍らそれにかゝり合うとの、區別ある計りである。

而してある方面、國々時に之を用ゐる必要のある所には所謂總領公使のやうに、宣傳分局を設けて「歐戰前獨探が活躍したその行き方を宣傳員が行つて居る、或ものは銀行を經營し、またあるものは商店や工場を經營し、事なき時は「ヤチエイカ」（共産黨の原子）を造ることにつとめ、事ある時は蟻の這ひ出る穴、水のしみ込む隙からでも、もぐり込んで騷亂と破壞との藥粉をまき散らすのである。

例へば支那に對しては、莫斯科の宣傳本部から命令が來る、それから「ハバロフスク」政府の宣傳局と「イルクーツク」の宣傳局との間に連絡を探つて居る、命令は第三インターナショナルの本部からも來る、政府は大公使及領事を通じて命令を出す、序に書くことだが哈爾賓は唯北滿及南滿に對する宣傳をやる部局とされ、支那本土に對して命令する程の重要機關が設置されて居ない。

支那に對する第一宣傳使は云ふ迄もなく「ヨフエー」であつた、而して最初に宣傳支部を設置したのが上海で、次に汕頭に移し、更に廣東にすゝめ、今は武漢にその根據を築いて居る、上海では副領事「ウイルデー」が首魁として目覺ましい活動をつゞけたこと、「ボローヂン」が廣東政府の顧問となり、羣首迷

信の假冠にまで祭り上げられた事は、世間の知悉する所として省略する。

唯茲にも注意しなければならない事は、露國は支那を赤化せんとしてもその民族性が到底一朝一夕に變化するものでないから、いかに宣傳した所がそれは全く無駄骨を折るに過ぎないなど丶樂觀するものも少くないが、夫は飛でもない大間違であつて、露國は既に外蒙を赤化して完全にその聯邦の一として領有し、更に魔手を内蒙伊犂新疆に着け遠からずして外蒙同樣の運命に置かうとして居るか、支那本土に對する勞農露國宣傳の目的は直ちに全土を赤色に染め上げやうと云ふ程爾かく淺見短慮でないのである、即第一段として所謂「ヤチエイカ」を造る事、第二段として支那を混亂狀態に置く事で、この二者を全うしてしばらく形勢を觀望せんとするのである、支那に於ける混亂が如何に歐米諸國や日本に禍するかを見、雲爾として掌を撫して居るのである。

有らゆる解放運動が絶叫され、着々として實現さるゝ時、ロシヤは老猿が小猫の毛を以て疵瘢をほじり出すやうに、狡猾の眼をしばたゝいてその獲物を凝視めて居るに相違ない、英國百年の堅壘は唯一擧にして揚子江畔に粉碎された、租界回收は何の苦もなく成功した、於是乎支那の民衆運動は、火上油を注ぐが如く濛々たる黒煙を揚げた。

日本に對しては赤化運動をしない協定がある相だ、乍併モスタワ宣傳本部では机上の世界地圖に鉛筆を以て支那方面を一段落告げたりと記入したやうだがさてその次にマークをつけるのはどの部分だらうか。

西洋名彫刻（古代篇）　矢代幸雄著

埃及、西方亞細亞、希臘、羅馬の各時代の彫刻の内、著者が親しく觀て鑑賞して來た代表的な名作を取り來つて、正面から見せ側面から見せ、或時はその局部を擴大して見せて、著者は先づ是等の神品を讀者と共に諦視し讀者と共に鑑賞しようとしてゐる。さうして此の鑑賞から發した興趣、感激を親しい對座者に向つてする樣に懇々と朴訥に語り出で且つ親切に解説してゐる。

著者は美學上の理論や美術史を學術的に説かうとしてゐるのではない、が美術の學術的な解釋は美術鑑賞に取つては寧ろ副次的な意義しか持たなくて、此の著者の如き扱ひ方こそ美術鑑賞能力を培ひ育み藝術を眞に樂しむ爲には最も適切な方法であらうと思ふ。殊に此の種の著書に對して最も適當な著者を得たるを悦び、又藝術の他の分野に於いても斯くの如き良書が尚一層多く出て吳れゝば良いと思ふ。（定價金五圓　東京京橋尾張町二ノ十五　[illegible]書店）



當なし行脚（其一）

百穴＝田植＝秩父騒動＝長瀞

堺利彦

如何に『當なし』とは云へ、一體、何でこんな處まで貴龍をしに來たのか。二三日前、私の家に來たお客が熊谷在の生れで、いろ〳〵其邊の農村生活の話をしたのが因緣だつた。それに熊谷は秩父地方への入口として又少しく私の興味を引いた。私は二三の秩父人と交つた事がある。一人は新らしい歌を作る若い婦人社會主義者だつた。一人は下駄の齒入職で社會改革的宗教信者だつた。その外、秩父地方に關する私の知識は、秩父の庄司次郎重忠の事、秩父絹の事、長瀞の風景、秩父騒動の四項に過ぎなかつたが、それらの爲、私は何となく、この山中の一地域に對して、餘ほど久しい前から床しさを感じていた。殊に

一　あこがれの一頓挫

七月二日の眞晝時、私は埼玉縣熊谷町の炎天の下に立つていた。乘合自動車の發着する驛前の光景が、甚だ賑やかに見受けられた。フォードド自動車特約販賣店といふ、堂々たるコンクリートの建物を見るに至つては、正に一驚を喫した。

これは兎にかく、この近處にも水爭ひが起つているといふカラッユの炎天はたまらなく暑い。私は出あいがしらの宿屋に飛びこんで、隣家のトタン屋根の照り返しの來る二階の一室で、何は置いても先づ晝寢をした。

秩父騷動の事が、ごくボンヤリと頭の中に浸んでいるのが、殆んど一種のあこがれになつていた。

これやこれやで私は先づ熊谷の炎天に草鞋をしたのだが、別にこゝで見物する程の名所もない。でも兎にかく、まだ暑い四時過、汗をふき／＼熊谷寺に行つて見た。直實君には重忠君以上のなじみがある。然し寺としては何の緣故もない。只だ私はフト近來の、陸軍中將だの、海軍少將だのの古手が、天理教にこつたり、大本教にかつがれたりして居る事實を思ひだした。但し、そんな比べ方をしては、直實君にも済まないし、法然さんにも氣の毒だと、直ぐ考へ直した。

本通り一丁目あたりで一軒の本屋を見つけた。顔立のシッカりした、白髮のお婆さんが店番をしていた。『埼玉叢誌』といふ本がありませんかと聞いて見た。無い。『實は秩父騷動の事が其本に書いてあると聞いたのですが、あなたは何かその騷動について御存知ぢやありませんか。』『ハアさういふ事だけは聞いて居ますけれど……。私のつれあいでも居ましたら、お話が出來たでせうが……。』

私は失望した。實は二三日前の私の客が、熊谷のこう／＼した店の本屋に行けば、そこの親爺が喜んで色々話して呉れると云つたのだつた。然るに、その話しづきらしい、物知りらしい老人が既に亡くなつて居るとは！私はその老人をしのびつゝ、猶しばらくお婆さんと話したが、私の今度の旅行は先づこれで一頓挫の形だつた。

二　奇術の傳授と船來の手相見

夜になつて又散歩に出た。廣い本通りが涼しくて明るくて賑かだ。ラヂオを聞いている人だかりもある『奇術』を『傳授』するといふ男を取りかこんだ人だかりもある。私も立寄つてそれをのぞいた。奇術師は白ガスリの薄よごれた浴衣を着てアグラをかき、前に一つ小さな椀を据えて、何か頻りにしやべりながら、扇子をもつてその椀を突く眞似をすると、椀は前の方にコロリところがる。又その椀を元のとほり据えなほして、今度は扇子で椀を上の方に釣りあげる樣な眞似をすると、椀はポンと上の方へ飛びあがる。又その椀に蓋をして、同じく扇子でその蓋をあける樣な眞似をすると、蓋は獨りでにはねかへる。總て扇子の先でチョツト眞似さへすれば自由自在に椀が動く。如何にも不思議である。次には人形、次には銀貨、色々な物を出して捻それを自由自在に動かして見せる。馬鹿にしてやがらアと罵つて立去る者もある。笑ふ者もある、感歎する者もある、首を傾げる者もある。とう／＼十錢出して『奇術傳授書』を買

つて行く者もある。一人買ふ人が出ると、跡から跡からそれに續く者が出る。恥かしながら私も續いた。而も私は、十錢のと廿錢のと二つ買つた。

先づ十錢の分をあけて見ると、變な骸骨の畫を印刷した紙ぎれと、何ともエタイの知れない、一部分が薄墨で染めてある紙ぎれと、小さい四角な薄い紙包みの樣な物に黒い細い糸を卷きつけたのとが、はいつている。說明文を讀んで見ると、『そも〳〵手品は、文明の社會に生れ、化學、理學、光線學等、種々ありますが』と先づ大きく出ている。そして次には『私の手品は化學の如きあぶなき藥品を用ひませんからあぶなき事なく、をもしろみも別であります』と碎けている。それから『この手品を遣ふ方は、極のほそき糸を皆んな長くほぐし、糸の先について居る釘を自分の居る所より約三尺ほど先の疊へ深くさし、糸卷の方を左の肩へはさむなり、右の如くすれば、この細き糸が、自分の肩より三尺先まではすに長く張るのであります、(この糸が細き故、夜間は人の目に見えぬのです)、そこで動かす物は何によらず、この糸の上へのせ、又は引掛け、或はまたがせて、左の肩を少々あげたり、又は左右に動かせば、糸の上の物は動きころがり、或は飛上るのであります、すべて肩の動かし工合でうまくあやつるのです』とある。

成るほど。これは化學ではないが、確かに物理學、光線學の應用である。然し骸骨などの紙ぎれは何だらう。尚ほ說明文の續きを見ると、（一）へびはともの先へ糸を一ツ卷つけカタを引くなり、（四）ナワンは糸へのせカタを少し上げるなり、（五）一オバケはうしろの切つてある所へ糸を引掛けるなり、（七）ガイコツは又へ糸をはさみカタをうごかすなり、などとある。これで骸骨が分つた。『何ともエタイの知れない、一部分が薄墨で染めてある紙ぎれ』は、オバケと知れた。薄墨の部分はオバケの變なのであつた。このオバケとガイコツを動かす所を見なかつたのは殘念だつた。次に二十錢の分をあけて見ると、ガイコツもオバケも同じ物で、只だ糸卷が二ツはいつていた。

それから先程の本屋の前まで來ると、そこには麥藁帽をかぶり、ステツキを携へた學生風の男が、しやがれ聲の演說口調で以て、或は西鄕隆盛を論じ、或はグラツドストンを評し、遂に芳川顯子に論及し、今は大學の方が休みだから僕はプロパーカンダの方に來て居るのだと吹聽し、それから自分の手のひらの筋を見せて、この筋はライン・オブ・ライフ、この筋はライン・オブ・何とかと早口の英語を使つたりする。そこでヤツトこれが舶來の手相見である事は分つたが、然し彼がどういふ風にして此の『プロパーカンダ』を金にするかは、殘念ながら遂に見

ないでしまつた。

三　百穴行

三月朝『名高い吉見の百穴』を見るべく、熊谷驛前から松山行の自働車に乘つた。昨日お婆さんの本屋で買つた『汽車の窓から』といふ本に『名古蹟のある人の必ず見るべきもの』とある。私もこのところ、聊かその辭を以て任じて見る。

一體、百穴に行くのなら、熊谷驛より二つ手前の鴻巣驛からが順路である。まだそれよりも、東武鐵道東上線に依つて、池袋から松山に行くのが近道である。然し廻り道や無駄道に頓着しない所が即ち當なし行脚である。

松山までの途中で、自働車が桑畑や、小松原や、くぬぎ林の間を走つてゐる時、藪の中の横道から、派手なパラソルをさした若い娘が急ぎ足に現はれて、左の手をスツト高く差しあげる、自働車がとまる、默つて乘る。こんなシーンをこの山の中で見ようとは、私の豫期し得ない所であつた。

松山町の何とかの辻で自働車を降りた。そこから鴻巣街道を八町行けば『百穴』だといふ。いづれ其の倍くらいはあるだらうと思つたが、大ぶん歩いてもまだ行きつかないので、馬の長い小便を退屈そうに待つて居る馬方さんに聞いて見た。もうじきそこでさ。それから暫く馬方さんとポツリ／＼話しながら歩いたが、馬が急に又立止つた。今度はウンコだ。私はもう御免蒙つて先に行つた。間もなく、向ふの丘の削つた様な赤茶けた絶壁に、四角の穴の幾つも並んで居るのが見えた。

所が、街道を左に折れて其の絶壁の前まで行つて見ると、それは『百穴』でなく、『巖窟ホテル』だといふ。成るほど、正面の恰好がホテルの玄關らしく見えている。四角な穴は即ち二階の窓であるらしい。何が何だかサツパリ分らないが、いづれそんな詮索は歸りの事として、先づ本尊の百穴に向ふ。少し行くと右手の山の崖に倚つて古びた一宇の樓門が聳えている。岩谷觀世音と題してある。その樓門の下から山の上へ向けて、險しい小いさな石段が小藪の間を縫ふて斜めに見えている。これは松山城趾に通ずるのだといふ。何だか西遊記でも讀んで居る樣な氣がする。これにも餘ほど心を引かれたが、矢張り何よりも先づ本尊の百穴だ。

いよ／＼向ふに本物の百穴が見えた。『之を遠望すれば蜂巣の如く、亦た石室層樓の窓戸を列開するに似たり。』それを今少し分り易く云えば、人間の頭を二つクッつけて並べた様に見える小山の外面に『丁度西洋風大建築の窓が並んだ様』になつている。(こゝでチョット注意して置きますが・この『穴』をアナと

云ふのか、ケツと云ふのか、私は初から疑問にして居たが、遂に同じく決し得なかつた。私としては、アナと云ふ方が耳ざわりもよし、分りやすくもあり、殊に昔の人の言葉遣ひとして、必ずこう云つただろうと考へるのだが、現にヒヤクケツと明らかに發音した土地の人もあつた。但しヒヤクアナといふ私の發音を咎める人も無かつた。）

四　穴居の跡、神代文字

百穴の山には構ひがあり、門がある。門を入ると直ぐ左手に事務所がある。途中で買つて來た代金五錢の入場券をその事務所に出す。あとは勝手に穴を見てまわる。穴と穴との間に少しづゝ石段や坂道を拵へた所もあるが、中々足場がわるくて歩きにくい。その歩きにくいのを、あぶなかしい足取でたどつて行く所に、又多大の興味がある。

私は先づ百穴に關する大體の智識を得べく、事務所で買つた繪葉書の中に挾んである『百穴之記』と題する印刷物を讀んだ。『丘陵連亘する所に古來百穴と稱する一地あり。雜木繁茂、荊棘途を塞ぐ。丘腹に土室二十許露出せり。傳へ云ふ、是れ往昔、火の雨の降し時、里人の逃げ隱れたる所なりと。或は曰く、松山城主の兵器を藏めたる處なりと。』『然るに時なる哉、明治二十年八月、大學院學生理學士坪井正五郎氏は茲にこの發掘に從事し、三六ヶ月にして土室總數二百三十七を發掘したり。即ち雜木を拔去し、荊棘を剷除し、山骨を暴露するに至りたれば、孔穴層々並列するもの判然見るべし』といふ現狀を呈した。『抑も此の百穴は太古穴居人一部落の遺跡たる事、亦（後に）之を埋葬に假用したる事、今回の發掘に由て殆んど疑なきに至れり。』猶ほ詳細の事は坪井氏の編輯した東京人類學會雜誌（第十號、第廿二號）にあるといふ。何しろ此の『記』には明治廿一年五月の日付があつて、それが其のまゝ今日まで說明書として用ひられて居るのだから少々驚く。

穴には幾らか大小がある。一二疊敷くらいのもあり、四疊半くらいのもあり、六疊くらいありはしないかと思はれるのもある。入口は狹く低いが、中は略ぼ立てるくらいになつて居るのもある。天井は圓く削つてある。床は入口から眞直ぐが廊下と云つた形で、それの片側、或は兩側、或は兩側と突當りが、一段高く（といふ程ではないが少し高目に）なつて居て、それが座敷、若しくは寢床と云つた形である。座敷と廊下との間にチヨツトした仕切の出來ているのもある。太古に於ける我々の先祖は、この穴の内外で、果してどんな生活をして居たのだろう。私は暫くウツトリと其の想像に耽つた。

この山の全部は、學問上からは何と云ふのか知らないが、稍や柔かい岩石の大塊から成り立つている。それが即ち太古人をして、この山を穴居の場所に選定させた所以だらう。然るに今では、その岩質の柔かい爲に、穴の壁から天井まで、殆んどスキマなく、姓名、住所、年月など、來遊者の記念の文字が大小無數に彫刻されてある。中には異樣な畫などもある。これは古今東西の旅行家、探險家、信心者、或る場合には不良者などに共通な、本能的とも云ふべき一種の心理と見える。所がそれと違ひ、この横穴の居住者たる原始人の殘したものと認められる彫刻が、一つの穴の壁上に存している。尤も、その穴には金網も張つて、人の出入を禁じてあるので、私は只その話を聞き、その彫刻を繪葉書で見たに過ぎないが、その彫刻は畫でもなく、字でもなく、何かの符徴みたいなものである。專門家はこれを何と判定して居るか知らないが、繪葉書には『神代文字』と題してある。この原始人が我々の先祖であり、この石窟が後世の家屋の先祖であると同じく、この彫刻も亦た後世の文字の先祖であるのかも知れない。

山のいただきに登つて、謂ゆる山骨の裸露した處に孔穴の層々並列して居るのを見くだすと、何だか大きな死骸の上、或は骸骨を積んだ山の上にでも立つて居る樣な氣がした。或る穴は天井が陷沒して、中に土がたまり、そこに萩や薄が生ひ茂つていた。それこそ本當に古戰場か何かの髑髏といふ感じだつた。山を降りて麓をめぐると、そこにも金網を張つた穴が幾つかある。それには『光蘚』といふ、光る苔が生えている。大變めづらしいものださうだ。のぞいて見ると、なるほど、螢のやうな青い光が地面にあつた。

五　お婆さんとお爺さん

山の麓の、事務所と反對の側の、低い丘の上に茶店が一軒ある。それが大きな櫻の木に蔽はれて涼しさうに見える。私はしばらくそこに腰かけた。

向ふの事務所にはお爺さんがひとり、こちらの茶店にはお婆さんがひとり、どちらも寂しさうだが、お客はポツ〱ある。お客がとぎれると、お爺さんはゴロリと寢たりしてゐる。お婆さんは何だのかだの私と話してくれる。

話は何よりも先づ水不足の事。植付の出來ない處の多い事。現にこの街道の、松山と鴻巣の中程の處などでは、水爭ひが烈しくなつて、警察が大ぜい出張して張番をして居る事など。

そこに又ひとり、只つた一本殘つた前齒を邪魔にしてる樣な口付のお婆さんがフラリとやつて來た。白髪はさん〲亂れて

居り、畑はさん〴〵荒になつて居るが、何處かに人のよささうな、慾がなさうなところがある。『あなたの處では、稲はお作みになつたさうで』と、茶店のお婆さんがお世辭を云ふと、『ハア、わしらが處はどうやら濟みましたが』と、一本歯のお婆さんはユツタリしている。何んでも此のお婆さんの田は、川添の低い處で、この日でりにも水の不自由が無かつたらしい。『その代り、わしらが處はハア』と、お婆さんが投げだした様に云ふので、『それはどうした譯ですか』と私が尋ねると、『ナーニ、わしらが處は、外ですこうし、好いおしめりだと云ふ頃にやア、もうハアちきに水をかぶつてしまふだから』 然しお婆さん、決してそれを怨むでも、こぼすでもない。相變らず樂天的な笑顔を見せている。

向ふの道をガヤ〴〵と子供の一群が通つて行く。『竹や！竹や！早よコツチこう！』と、樂天家のお婆さんは其の群に向つて幾度も幾度も呼びかけたが、竹公は振り返つてこちらを見たばかりで、返事もしない。お婆さんは又腰を据えて話しだした。

マユは賣つたが、今だに仲買が代金を拂つてくれぬ。手金だけでは何のたしにもならない。——わしらが家は手金も取つて居らぬ。——自分のお金の受取るのがありながら、借金して田植をするとは、何たる馬鹿な事だらう。——百姓は昔から身をつめて食べて行く稼業だからな。——でも今の人は、皆な色々と上手にお金をもうけて行く。中にはゴミのたまる様にお金のたまる處もあるが、それで酒ひとつ飲まない、煙草も飲まないとは。——たまるのが面白くて飲んだりして居られねえのだろう。——オヤ、今日の風には水氣がある。——この分ぢやおしめりかも知れねえ。——何しろ一體に植付だけはせん事にやあきらめがつかない。——そうだとも。あとの作不作は運次第だけども。——

茶店のお婆さんが茶を汲んで出すと、一本歯のお婆さんは『申譯ありましねえ』と丁寧な辭儀をしながら、兩手にうやうやしく茶碗をかゝえて、『御馳走様で御座ります』と、ウマそうに吸りこむ。

一本歯のお婆さんが行つてしまつてから、『ゴミのたまる様にお金のたまる』と云ふのは、一體どんな事かと聞いて見ると、外でもない、蠶を一年に三返りも四返りも一生懸命に飼つてる家の事だつた。『今にこの桑の芽がのびると、又秋蠶を飼ひます。』お婆さんは前の畑を見やりながら云つた。一體にこの邊は、蠶で暮しがらくならしい。それで小作も、そんなに餘計は田を作らない。地親さんも誰かに作つて貰はん事にや、どうにも仕様がないので、色々小作に遠慮してるといふ。從つて餘り面倒な

爭ひ事など無いらしい。——それに山の石掘りといふ仕事がある。若い者はその方に働らくのが多い。一日二圓くらいには成る。——この邊では、自分の田を一反なり二反なり持たない者は滅多にない。『全くの小作ぢや、あんまり寂しい。』お婆さんがそう云つた。——マア五町七町の田地持が、まだお大盡のつきあいは無し、暮し向が一等らくらしい。『お大盡となると、又いろ〳〵六かしい事があるそうです。』お婆さんがそう云つた。——この邊の水爭ひは、今のところ、上の田だけは植付が濟んで居るが、中の田と下の田はまだなので、早く上の田の水を落してくれと云ふが、上の田の方では、ヤツト植えつけたばかりだし、刈しもしたばかりだし、そんなに直ぐ落すわけに行かないと云ふ。これでは困る。中の田は、どうにでもして植付さへさせて貰へば、決して永く水をとめては置かない、直ぐに下の田へ落して下の田に植付をさせる。だから上の田に早速水を落してくれと迫る。『そんな言分で、わしの内も今朝出かけて行きましたが。でもこれで、今夜にも雨さへ降りや何もかも話は皆んな無になりますで。』お婆さんがそう云つた。

お婆さんの内は、こゝから遠くない處の、自作兼小作、養蠶家と云ふ、そんなに苦しくない暮しらしい。そしてお婆さんも毎日こゝに通つて來て、それも何程かになるのである。向ふのお爺さんも通ひだそうだ。お爺さんは、この百穴の山を持つているお大盡の、何か身よりの人だそうだ。

六　巖窟ホテル

茶店で聞いたところに依れば、岩谷觀音には別に妖怪が住んで居るわけでもなく、松山城趾も只だ見晴しがいゝだけの者だと云ふから、歸りには只だ下から見あげて敬意を表したばかり。

然し『巖窟ホテル』は何か餘程曰くのある物らしい。私は兎にかく左手の入口から入つて、途中で買つて來た十錢の入場券を出した。先づヒヤリと冷たい空氣に襲はれて、全身の汗が引いた。番人は板片の上に立てた蠟燭に火をとぼして私に持たせた。何だか譯は分らないが、私は兎にかく其の火を持つて奧の方の暗い處に進んで行つた。狹い廊下の樣な物が突當つて右に折れている。これを探り探り辿つて行くと、今度は明るい廣い處に出た、こゝは玄關のホールらしい。表から見たホテルの正面の內部らしい。正面はガラス戶か何か締切にしてある。このホールの眞中に立つて、奧の方に向ふと、その又正面に立派な階段がある。それを十段ばかり登つて行くと、そこは又眞暗がりで行止りになつてゐる。再びホールに降りると、正面右手に又廊下が見える。狹い暗い處を又探り探り行くと、その廊下は

又右に折れて外の光が見える。廊下があまり長いので、そこから引返して元のホールに戻り、ここから又別の廊下を通つて入口の處に戻つた。何だか夢でも見た樣な氣持だつた。

番人は繪葉書を一枚、私に呉れた。繪葉書には、正面から見たホテルの全景と、小判形のワクに圍まれた老人の寫眞とが印刷してあつて、その脇に次の文字がある。「三代百五十年計畫。巖窟ホテル高壯館。發掘者、初代、高橋峰吉。安政五年十二月生、大正十四年八月一日歿、行年六十七才。掘鑿努力期間二十有一年。」これで初めて大體の樣子が分つた。同時に一種の莊嚴な神秘な感じに打たれた。そこで改めて高橋翁の寫眞を見るに、筒袖の絆天に股引をはき、首のまはりには手拭をかけ、右の手には太い棒を杖につき、左の手にはツバ廣の麥藁帽の頭をつかみ、そして何かの上に腰かけてゐる。顔は無邪氣な、至極好い老人ぶりである。ワクの外は鶴ばしだの、槌だので圍んである。

何かこれにつき、モット委しい話を知りたいのですがといふと、番人は小さい印刷物を出して私に呉れた。『巖窟ホテル高壯館發掘者高橋峰吉傳』と題してある。それを讀むと、色々な面白い事が段々に分つて來た。

七　奇人高橋峰吉翁

「傳」にはまづ「奇人高橋峰吉翁の死するや、東京各新聞紙は筆を揃へて「巖窟王の死」なる標題にて報道せり」と筆を起し、次いで其の幼時の事を叙してゐる。

『翁の父は…百姓三吉にして、彼はその次男なり。幼き時より奇言奇行多く、父母之を喜ばざりき。教育は……何非の浮世を誦習せるに過ぎず。彼は幼年の頃、父より梨を松山町にて購ひ來る事を命ぜられ、その歸途、友達に誘はるゝまゝ野苺を取りて遊び、之を持歸らんとせり。然るに其の新らしき梨は紅汁の爲めに醜汚されたり。彼は父親の叱責を恐るるの餘り、居宅前方の穴藏に件の梨をしのばせ、何食はぬ顔を爲し居たり。旬日の後、腐爛したる野苺は芳醇なるアルコールの香を放ち居るを發見し、彼は考へぬ、總ての果實を粉碎し冷處に貯藏すれば、林檎酒、梅酒、葡萄酒等、望みのまゝに得らるゝと。是より後、彼は父母の目をしのび、諸處の林中へ醸造用の穴藏を作るべく努力せり。』

これが彼の、穴藏といふものに對する興味の因縁であつた。それから『二十八歳の時、幾許かの田畑山林を持ちて分家し、桑樹の栽培に從事せり。……耕作のかたはら彼の穴掘は益々伸長し

逆せり。即ち醸造用冷藏庫の欲望より種々貯藏庫の經營を夢み、更に進みては百穴にヒントを得て穴居を計畫するに至れり。』

百穴が此の奇人の心理に影響を與へて居る所が甚だ面白い。私が最初、ホテルの窓を遠くから見て、直ちにそれを百穴と思つたのも決して不思議でない。高橋翁がその窓を掘つて居た時、恐らく無意識の間に、幼時からの百穴の印象が必ず作用して居たに相違ない。そこでホテルの窓の遠望と、百穴の遠望とは、自然の類似を持つた現象を呈している。

『時恰かも百穴見物に來りし外人が探險雷燈を携帶し居るを見て、穴居するに日光を顧慮する必要なきを知り、日頃の空想に實行の可能性を認めたり。』こゝにも百穴との關係がある。『その頃、彼の兄は埼玉縣下河川護岸工事』の爲『岩屋觀世音側の岩石を發掘提供し』て居たが、『事業の進行に伴ひ斷崖は益々險しく、遂に絶壁を形成するに至』つた。そこで『彼は明治三十七年六月の天赦日、遂に此の地をトして日頃の空想、即ち居住「石窟の計畫を實現すべく起工したり。』『この絶壁が即ち今のホテルの外面なのである。

所が『世人は之を見て狂氣の沙汰となし、冷笑嘲罵至らざるなかりし』が、彼は少しも屈せず、『四面楚歌の中に工事を進むる樣、宛も旅人救濟の爲め耶馬溪の道を掘り貫きし僧禪海に似たり。』

然るに『その頃「實業之日本」社長增田義一氏等、來り遊び、「工事中の巖窟ホテル」なる標題にて之を誌上に紹介せり。』續いて「建築世界」「武俠世界」等に掲載さるゝや、その名頓に高く、好奇家より……照會頻々……應接に暇なき狀態を呈せり。此に於いてか彼は諧謔的に「巖窟掘つてる高壯館」と稱したり。』

彼は又密かに『寛政三奇人』の類を以て自ら擬し、その語るや『建築學に鑛物學に化學に物理に或は哲學に進化論に諄々として倦む所を知ら』ず、『近き將來に於て、人類は自らによりて築かれし科學の暴威に苦しむ時來らん、現代に於てすら飛行機が爆彈投下に用ひらるゝにあらずや』と說き、『かゝる際、必要缺くべからざるは我が巖窟ホテルの類』だと確信していた。

彼は『事業半ばにして尿毒症を以て斃』れたが、『彼の一生は實に忍耐の二字を以て終始』した。『一介の農夫が其の半生を窟内の暗中に、精神一到何事不成の標語を口にしつゝ、只一挺の鑿を以て、獨力掘鑿に從事せし丹精は『實に酌みて餘り』がある。

猶ほ『傳』の記者は、ホテルの構造等について次の如く記し

ている。『外面を見るに、範圍にゴシック式の西洋建築描かれあり。彼のオリジナル・スケッチに依れば、間口三十間、三階建洋館の計畫なり。』『先づ向つて左の入口より入れば、左に二ツ子風なる花瓶及び數段の棚きざまれ、中央にはジグラット風の壇あり、此の室を彼は實驗室と呼べり。』『中央の大廣間には左右均齊なる花瓶及び模様等きざまる。突きあたりは階段にして未だ二階に達せず。右手の階段はやうやく人體を通し得るに過ぎざれど、二階の三個の窓まで通ぜり。此の造營の特長は後より附加せるもの一個もなき事』である。

私はこの『右手の階段』をまだ見て居なかつたので、あとから來た二人の見物人を促がして、更に右手の入口から進んで行つた。なるほど狹い階段で、僅かに人體を通し得るに過ぎない。私は三人組の先頭となつて、這ひながらヨジ登つた。二階は只だ狹い低い横の廊下と、それから三つの窓に通ずる三つの縱の廊下とに過ぎないが、私はその廊下を這ひまわつて、三つの窓から恐る恐る首を少し出して見た。その戻り道はすべて後しざりより外なかつた。

最後に『傳』は又、『彼の子なる信太郎君は廿八歳、靜君は廿一才にして夭折』したが、『父の事業を助けて功績は見逃すべから』ずと爲し更に『翁は其の遺志を繼がせんとして、本家の三男泰文なるものを養子とし……たれど、未だ幼少』である事を云ひ、『されど其の遺志をつぐべく執着せん事を期す』と結んでいる。

私は番人君と翁との關係を問うて見た。其人は即ち翁のオイであり、翁の養子泰文君の父であつた。私は他の二三の見物人と共に、翁の使用した道具を手に取つて見たりしながら、永いあいだ實驗室で番人君と話した。彼は甚だ恬淡な人物で、話を誇大にして興味を感ぜしめる様な點が少しもない。むしろ其の反對に、あまり廣告氣が無さすぎる。もすこしプロパガンダを上手にやれば、巖窟ホテルはモット〱有名にもなり、繁昌もするだらうにと、少々はがゆい様な氣がした。現に彼は、繪葉書だけは總ての來訪者に與へるが、『傳』は滅多に見せない。或は其の兩方の中、どちらか一つだけしか與へない。私は特に懇願してヤット兩方とも貰つた。然しそれも其の筈か、現に私のあとから來た一紳士は、頗る尊大な態度で、總てに自分の無智を表白しながら、ろく〱内部の様子も見ずに行つてしまつた。

『こうして、ずいぶん來るには來ますが、この意味のわかつて呉れる人は半分もありやしません』と、番人君は少し嘆息した。『折角これほどの物を、何とかもすこし仕様がありそうなものですね』と私が云ふと、『ナニまあ、これで食へますからね』

と、彼はいよ〳〵その恬淡性を發揮した。

『何しろ大したものですね』と、私の連れの一人は改めて感嘆した。『實に偉大な藝術だ！』或る一人の若者は繰返して讃美した。『この實驗室といふのは、どうした意味でせう』と一人は聞いた。『何を實驗する積りでしたか』と、番人君はアザ笑ふ様に云つた。番人君が恬淡であればあるだけ、我々の渇仰心は增大する様な氣持がした、

八　ヤキユウさん、田植、旅の人

百穴から松山町に戻り、停車場前で晝飯を食つた。飯は旨くもない親子だが、茶店そのものは楚々とした套で、床のコンクリートの四角な池に、金魚の赤と菖蒲の紫とが映發して居るなど惡くなかつた。

停車場の建物の向ふに黑い大きな森が見える。それが此の邊で有名なヤキユウさん（即ち箭弓稲荷）である。一列車後らせてそれを見に行く。

先程から大ぶん空が暗く夕立模様になつて居たが、ヤキユウさんの門前で忽ち烈しく大粒のがやつて來た。歡喜のどよめきが四方に起つた。私も袂をぬらし足袋をよごしながら大いに此の結構なおしめりを祝つて、ヤキユウさんに參詣した。」

ヤキユウさんの境内は森に降りそそぐ雨の爲に潑溂として居た。中門の前に鷄鳥が一疋キヨトンとして、雨をあびて喜んでいた。ツル〳〵と滑らかな厚い葉の大木に、白い、大きな、フツクリした、鞠の様な花の咲いて居るのが、雨の中に著るしくあざやかだつた。それは南洋の珍らしい木で、カイサンボクと云ふのださうな。この境内にはナンジヤモンジヤの木もあると聞いたが、それは見なかつた。ヤキユウサンは目下、公園を作り、運動のグラウンドを作り、いろ〳〵客引の策を講じて居るが、茶店のおかみさんの語る所に依れば『ヤキユウさんはお大盡で』ずいぶん澤山な地持だそうな。門前には商家や住宅が續々と建てられてゐるが、それらの地代もずいぶんになるだらう。それに初午の日など、お賽錢が一日で三百圓もあがるといふ。ヤキユウさん萬歳！

松山の下り列車に乘つて寄居に向ふ。菅谷驛で、附近名所の立札に畠山屋敷跡とあるのに興味を引かれて、ちよつと下車して見ようかと考へて居る中に汽車が出た。小川驛に近づいた時、左手の山の上に白い大きな『公園』の二字が見える。今度は早く決心して降りた。

驛前の茶店に立寄ると、丸でお金が降る樣ですと行きなりの挨拶。但しその時は、雨ももう暫らく小やみ。私は乘合自動車

で公園の下まで運ばれた。その邊は田植の最中で賑やかだ。見わたすと、馬に田をすかせて居る男達の一群もある。苗代田に集まつて居る女達の一群もある。ズラリと田の畔に腰かけて休んで居る男女の一群もある。そこには土瓶なども置いてある。管笠の姿の面白いのも見える。若い嫁か娘の腰のあたりに何か赤い物のチラ〱するのも見える。五つと三つばかりの眞つぱだかの子供を連れて、獨りでセツセと植付をしている女もある。子供は母親の腰のまはりで、泥まびれになつて遊んでゐる。公園の山には寺が一つ、小さい神社が二つ、見晴しの亭が一つ茶店らしいもの二つばかりあるが、その茶店に人がひとり居るでもない。遊覽の人、散歩の人など勿論ない。それが白い大きな文字で廣告してある『公園』だ。私は汗のカキ損で、すごすご山を降りた。

　町に戻る道に馬橋といふ橋がある。橋から少し上手の、大した奇麗な水でもないが、サラ〱と流れてゐる淺い瀬で女が何か洗ひ物をしてゐる。橋の眞下は、流れが少し澱みになつて居て、そこには子供等が七八人も釣をしている。私はその磧に降りて行つた。着物をぬいで小岩の上に置き、洗ひ物の女の少し下の方の瀬に立つて、先づ縮みの半シャツをぬいで洗濯した。次に猿股をぬいで洗濯した。最後に全身の汗を流した。何とも云はれぬサバ〱した好い氣持になつて、シャツなし猿股なしで着物を着て、今度は魚つりの子供達の側に行つて見た。小さいビクの中をのぞいて釣れた魚の名を聞いて見ると、これがクキ、これがハヤだと云つた。クキはこれまでに知らない魚だが、ハヤは即ち私の子供時代のハエだつた。大きな犬も一疋子供達の間にまじつて、尾を振つて遊んでゐた。私は輕く其の犬の頭を撫でて見た。犬は目をあげて私の顔を見たが、スーウとあちらに行つてしまつた。私は矢張り旅の人だつた。

　それから小川の町で鮎の香に誘惑されて汽車に乗りおくれ、とう〱こゝに一泊した。

九　武甲山、橋立觀音

　四日朝、又到る處の汽車の窓に田植を見つゝ寄居に着いた。昨日の雨がまだ充分ではないにしても、田植の人には確かに勇みが見えている。

　寄居は東上線の終點で、秩父鐵道の一驛である。寄居から右に行けば熊谷、左に行けば秩父である。私は先づ秩父線の終點、影森まで乗つた。電車は荒川に沿つたり離れたりして秩父の山中に登つて行く。山中の氣が自然に人を襲つて來る。影森に近づく頃には、武甲山(ブコウサン)の雄大な姿が、蝦蟇のうづくまるが如

く前面に現はれる。

　武甲山の麓の一部に橋立觀音がある。影森から八町。先づ案內者に連れられて蠟燭を持ち、有名な鍾乳洞の中にはいる。今度の旅行は變に洞穴と緣が多い。『洞內暗黑にして咫尺を辨ぜず、燭を採り腰を屈して或は昇り或は降る、これを胎內潜りと唱ふ』までは結構だが、『巖壁おのづから佛體佛具等の形を現はし』すのを、案內者が變な聲で勿體らしく說明して呉れるには少々辟易した。兎にかく『蓋し本邦屈指の石灰洞』だそうな。

　鍾乳洞を出ると、直ぐ左の方に『矗然として奇巖の峙てるを見る。』『それが即ち『橋立觀音堂の在る所にして、雄大なる絕壁をなし、高さ三四十丈、幅二丁餘に亘り、綠泥片岩、絹雲母剝岩、又は石英の脈を涵する古き地層を露出し、光彩陸離、景勝云ふばかりなし。』『そもそも秩父一帶の地は、地學的に獨立せる一大山塊として、『地質學上の天然教室』と云はれて居るのだそうで、この鍾乳洞や絕壁の奇巖なども、即ちその現はれであるらしい。

　然しそんな鍾乳石などの事よりも、武甲山が全山石灰岩から成り、從つて其の山麓に石灰採掘の產業が起つて居る事の方が、私の目には一層めづらしく見えた。現に觀音の參詣道に秩父セメント株式會社があり、山麓には、崖から谷に跨がつて種々大規模な工事が施してあり、その谷底から影森まで石灰運搬用の電車も通じている。

　かくて私は秩父の山水を踏み、秩父の自然に接觸し、更にこの山中の新らしく產業化する有樣を見た。然し私のあこがれは特に秩父騷動の上にある。私は影森で又ドンブリの晝飯を食つて、直ぐに秩父町に引返した。

一〇　秩父騷動の話

　私は先づ秩父の町の中心を一巡した。『東國最古の式內社』で、『老樹欝蒼として晝なほ暗き』秩父神社も見た。『秩父の三越』と呼ばれるデパートメント・ストアも見た。町の本通りを走る乘合自働車に赤襟孃の居るのも見た。そして驛前の茶店に戻つて休息した。何か手掛りが無いか知らん。

　丸髷の若いおかみさんが氷をかいて呉れたが、これは話相手になつて呉れそうもない。奥の方に小庭があつて、そこには白髯のお爺さんと、近處の人らしい五十ばかりの大男とが、鉢植を見てあるきながら頻りに語りあつている。そのお爺さんならキット昔の事を知つて居るだらうと思はれた。

　暫くしてお爺さんと客の大男とが表に出て來た。お爺さんは

上りがまちの爐の正面に陣取つた。客はその傍に腰かけた。おかみさんは爐に金網をかけて握り飯を燒きはじめた。私は土間の丸テーブルにもたれて、その人達に話しかけた。『お年寄は秩父騷動の話を御存知でせうな。』

お爺さんは齒のない口をもぐつかせて、餘りよく知らんと答へた。その頃、彼は此の地に居なかつた。所が意外にも、客の大男が話を引取つてくれた。『あれはたしか明治十七年でしたな。』

それから段々話がはずんで來た。『何んでもあれは、金貸を征伐するといふ趣意だつた。』『首領は田代榮助と云つて、よほど義侠な人物で、貧乏人が皆な高利に苦しめられて、迚も立つていかれないと云ふので、その證文に棒を引かせて貧乏人を救ふといふ目論見だつた。』『何んでも皆んなが白鉢卷をして、刀を差し、鐵砲を持ち、エライ勢ひで、町の若い者を驅りだしに來た。出なければ斬ると云ふので、皆な出て行つた。』『郡役所を乘取つて本部にして、目ざした金持の家に火をつけて燒き立てた。その時、隣の家には水をかけ、構ひをして、火の移らない樣に充分用心して、目ざした家だけを燒き立てた。』『もうそうなつちや、警察なんど手も足も出せない。それどころぢやない、役人は皆コソ〳〵逃げてしまつた。』『この時、役人は皆んなそこらの家に飛びこんで、ちよつとカミソリを貸してくれと云つて、大急ぎで口髭を剃りおとして、ほろ〳〵の體で逃げたもんださうだ。』お爺さんは笑ひながら手眞似をして、こう云つた。『田代榮助は總大將で、町を通る時には、シイツ！　シイツ！　といふ大した威勢だつたさうだ。』お爺さんはそうも云つた。

『一揆の趣意は金貸征伐だとしても、どうしたキツカケから、そんな燒打なんといふ事になつたのでせうね。』私はその點を不審した。大きな人は答へた。『ナーニ、初からそんな亂暴を働らく積りぢや無かつたんでせう。そりや證文を燒かせるとか、質物を返させるとか云ふのだから、滿さらおとなしい事ばかりも考へて居なかつたか知れないけれども、田代としちや何も政府にまで盾づく氣は無かつたんでせう。だけど何しろ、バクチ打とか、ゴロツキとかいふ浮浪の徒が大ぜい集つて來たのだから、どうにも仕樣が無かつたのでせう。そして首領としては、總ての責任を負はねばならなかつたのでせう。』

『それで凡そ何日間、その一揆が續いたのでせうか。』私は次にそれを質問した。然しそれはハツキリ分らなかつた。『結局は高崎鎭臺から兵隊が來て、それで潰されてしまつたのだが、何しろ交通不便な時代の事だから、そんなに早くは運ばなかつただ

らう。』

そこに學生らしい青年が來て、お爺さんと大きな人との間に坐つた。おかみさんは握り飯をツケ焼にして、皆に一ツづゝ差しだした。皆はそれを食べながら話した。青年は話を中途から聞いたので、筋がよく分らないで『ぢやその連中は山へでも逃げこんで居たのですか』と聞いた。『ナーニ、逃げこむどころか、郡役所に構へこんで居たんだ。』

『つまりこうですね。半月か一週間か知らんが、暫くの間は其の一揆が天下を取つて、此の秩父町附近を支配して居たわけですね。』私はそう云つて見た。

それからまだ、この町の刀屋といふ質屋が焼かれる筈であつたが、近處の人々が郡役所の本部に行つて嘆願したので、焼かれる事だけはヤツト免れた事、その代り、質物は皆な取上げられて、質主に返された事、その騒ぎの間、刀屋には一揆の者が拔刀で踏んごんだ事、それで刀屋の大黒柱には今でも大きな刀疵が殘つている事など、いろ／＼話があつた。

『その刀屋は今でも質屋ですか。』私は聞いて見た。『えゝ／＼今でも大きな質屋です。然し今の主人はコワイ目に會つた事を知らないでせう。今の主人は、コワイ目に會つた人の孫ですから。』茶店のお爺さんはそう云つた。

『秩父人には、今でもそうした、まかりまちがへば一揆でも起すといふ、特別な氣風があるのでせうか。』私は最後にそういふ質問を出した。『つまり秩父は山の中で、人間が質朴なんですね。』大きな人が簡單にそう答へた。『だから怒るとなるとキツイんですね』と私が其あとをつけた。

私は猶この人達の話に依つて、田代榮助の長男なる田代啓助氏がツイこの近處に住んでいる事、及び其の近處の山に榮助氏の墓のある事を知つた。それで私がそこを尋ねて行くと云ふと、例の大きな人はわざわざ其の途中まで私を案内してくれた。

二　啓助翁と榮助氏の墓

四五町ばかり行くと、道の左側に尨大なセメント工場がある。その工場の長いトタン板の塀を行き過ぎると、山に突きあたつて道が右に折れる。突きあたりは石段になつて其の上に十一番札所の觀音堂がある。田代啓助氏はその觀音堂の堂守をして居るといふ。金力の暴威と戰つて、一時とは云へ、痛快にそれを懲しめた人の家は、今衰へて僅かに小佛寺の蔭に隠れ、金力は更に新らしい形を取つて、そこの直下に大工場となつて現はれている。これが即ち現在の世態である。

觀音堂に登つて田代氏を尋ねると、若い坊さんが出て來て首

をかしげて居たが、『アヽ、それは此の直ぐ下の家です』といふ。田代氏は既に觀音堂を去つて居たのである。敎へられた通り、直ぐ下の小さな家を尋ねると、若い婦人が入口の土間でハタを織つて居た。私が來意を告げると、あいそよくヱミを含んで、『父が居ります』と云はれた。

程なく私はそこの座敷で田代氏と對坐していた。田代氏は既に六十八歲の老翁である。『父は八刪の朝、伜は少し用事があつて暫らく留守にするからと云つて出て行つたきり、とう〳〵歸つて來なかつた』といふのが話の口切りで、啓助氏は自分がそんな向の事に興味を持たなかつた事、從つて少しも其の事に關係の無かつた事を語り、『弟は父について行つて居つて、あとで罰金を取られたりしたが、私は罰金も取られず、それからズツト今日まで爪の先ほども法に觸れた事はない』と、先づ身の上を辯明した。

然し啓助氏は必ずしも父の事業に無理解ではない。只だ彼はむしろノンキな淡白な人であるらしい。『弟でも居れば、いろいろお話もあるでせうが、私はサツパリもう』と、甚だしく自ら卑下してゐる。そして氏は、父の死後、父の因緣に依つて無心合力を求めて來る人が無數にあるのと、あゝして人の家を燒いて財物を取りあげたりした事に對する世上の思はくが氣になるのとで、家の財産をスツカリ無くしてしまふが一番だと考へ、大きな家も茶々々にしたらしい話である。それも合點の行かない事ではなく、そこには意外、面白味もある。

氏の語る所に依れば、田代家は代々の名主で、殊に秩父八千石(忍藩の飛地)の中、最大の名主であつたが、榮助氏は近隣に顔を賣つた世話ズキで、身代は自然、左前になつて居た。一時は城の山に大砲を飾つて居たが、それも面白くは行かなかつた。

榮助氏は自由黨であつた。從つて秩父騷動には他縣の自由黨員も來り加はつてゐた。又秩父の殘黨が、後に大井憲太郎氏等の大阪事件に馳せ參じたりしていた。自由黨は後に政友會と轉化したに相違ないが、その一部分には後の社會運動の先驅たる精神があつた。淡白なる啓助氏の話は、さうした思想上の問題には觸れないけれども、その當時の人として、矢張り何程かその精神に化せられた跡が見える。

秩父騷動の起つたキツカケについては、啓助氏の話は明瞭であつた。秩父町の在に吉川といふ村がある。その村のムク宮で、榮助氏等の一味が金貸征伐の相談會を開いてゐた。これを嗅ぎつけて數人の巡查がやつて來た。ツイした行きがゝり上、巡查の一人を殺してしまつた。サアもう是非に及ばぬ直ちに進擊するより外はない。そこで人數を集めて吉川村の吉川宇太郎、小

皆野村の平菅十郎などの家を焼き、それから進んで大宮（今の秩父町）に出で、郡役所を占領し、そこで例の刀屋（稲葉榮助）、高野伊平、その他を襲つたと云ふのである。一揆の日數については矢張りハッキリしないが、啓助氏の話振では僅かに四五日間らしく思はれた。

啓助氏は、委しい話をする程の記憶は無いが、それに關する記錄書類は殘つて居るから、その中、出して置いて貸してやると云つた。私はこれを借りた上で、改めて委しく此の事件を書いて見たいと思つている。

私は永いあいだ啓助翁に迷惑をかけるに忍びず、その邊で話を打切り、暇を告げて後、墓地のありかを尋ねた。すると翁は、墓に行つても只だ山に石が立つて居るばかりだと云ふ。勿論、私もそれ以外の事を豫期しては居ない。是非參つて行きたいと云ふと、翁は遂に私と一緒に外に出た。外には雨が降つてゐた。

墓はツイ一二町行つた町の山の裾にあつた。その山が即ち昔の天蠶の飼育場であつた。稍や大きな天然石に『田代榮助之墓』と刻してある。外に榮助氏の父母の墓、榮助氏の妻女の墓などがある。赤ん坊の墓らしいのも三つ四つ並んでいる。雜草がツイ／＼とのびて居るのを啓助翁は抜いて來てた。私も榮助氏の墓の前の長い草を四五本ぬいて來てた。辭世の歌があると聞いて、石の裏側にまわつて見た。『振りかへり見れど昨日の影もなし行くさきくらき死出の山道』とある。

翁と別れて秩父の町に戻り、教へられた道をたどつて刀屋の前に出た。正門には稲葉×××本店といふ表札が掛つている。堂々たる日本式の邸宅である。樹木盆栽なども皆な美麗である。用のないのに、はいつて行くわけにも行かず、右手の横町にまわつて見ると、そこには勝手口があつて、質屋らしい玄關先の樣子が見えている。幾らのぞいても、刀痕のある大黒柱までは見通されない。もすこし横丁を進むと、山形に刀と書いた白塗の倉が幾つも見える。まだ其の奥には、支那風の閣とでも云つた樣な物がある。何しろ稲葉家の質營業はいよ／＼繁昌らしい。刀屋萬歲！

その夜は秩父驛前の宿屋に寢た。宵の中、退屈しのぎに活動を見た。アルセヌ・ルパンと間重次郎。義士傳は見ても聞いても、どんなマズイのでも、必ず幾らか泣かされる。

二　長瀞の岩と水

五日朝、秩父から長瀞へ下る。長瀞は新らしい遊覽地として

清新の氣が溢れている。明日の晝までここに氣持よく滯在して、出來るなら行脚記をいくらかでも書く積りで川岸の××軒と云ふに宿りこんだ。

先づ午前中はくたびれ休めとしてゾンブン晝寢。おもむろに風景を賞するには、それだけの準備が入用。午後はじめてゆる〳〵川邊に出た。謂ゆる秩父赤壁、兩岸の大岩に挾まれた深い清流が、數町の間、特殊の風景を現出している。それの終端で、そして一番風景の好い處が、即ち今ま私の目の前に見ている川邊である。川の向ひ側には山があつて、その川岸は絕壁になつている。私の立つている所は砂原と小石原の平地だが、その直ぐ右手には大きな岩がむくれあがつて、その岩の丘が上の方に幾町か續いている。向ひ側の左手には、白鳥嶋といふ大きな岩の丘が斜に突出して、川の流れを恰好よく曲らせている。そしてそれが長瀞の最終端で、それから先は淺い急流になつている。岩は『盡く晶質で、綠泥片岩や雲母剝岩から成り、銀灰色を呈してキラ〳〵と日の光に輝いている。』この特殊な大岩の、日に光る美しい色と、水に浸された面白い形と、數町に亘るおびたゞしい分量とが、この風景の根本なのである。水嵩のモット多い時だつたら、確かにモウ二三割方、値打があがるだろう。

午前中から三味線入の網船が二艘、賑かに騷いで居たが、それはもう先つき引揚げてしまつた。こゝから波久禮まで四里の間を降つて行く乘合船が一艘、只つた今、二組八人の客を乘せて出發した。私は水際の小石の上で汚れた下駄を洗つていた。すると、そこに來あはせた人が、これでおやりなさいと云つて、繩切れを拾つて放つてくれた。それから其人とこゝの風景を論じた。大體に於いて規模が狹小だ。『一葦の往く所に任せて萬頃の茫然たるを凌ぐ』などといふ赤壁の面影は、及びもつかない。尤も赤壁も實物はそれ程でないかも知ないが。兎にかく京都の保津川下りでも、之に比べると遙かに雄大だ。然し今ここにこうして居る心持は極めて好い。外との比較など餘計な事だ。

私はそれから右手の岩の丘に上がつて行つた。そこには數町の向ふまで、飛々に小い亭の並んでいるのが見える。この岩の上を傳つて國神の遊園地まで行つて、そこから船で降つて來るといふ遊び方もある。然しそれをやるには今少し暑すぎる。私は一つの亭に腰かけた。涼しい風が吹いて來る。懷から一冊の本――この旅行に持つて來た只一冊の本を出した。あんまり氣持が好いので、とう〳〵夕方までそこに腰かけたまゝ、荒かた其の本を讀んでしまつた。

夜になつたら電燈の光の下に船遊びをしようといふ野心が私

にあつた。所が、一昨日からの癖で夕方から雨。仕方がない、夜はビールを一本飲んでグズ〳〵寝た。

六日の午前は旅行記に費した。昼飯の鮎がうまかつた。午後は船で波久禮まで降るつもりが、又雨でダメ。折角、長瀞に來ながら、とう〳〵船に乗れなかつた。

一三　若い男女の一組

電車に乗るべく長瀞驛に來ると、私はそこに思ひがけない男女の一組を發見した。彼等は××軒の離れの、私の隣座敷に居た人達である。そして彼等は散歩に行くと云つて、私より少し前にそこを出た人達である。現に男の方は宿の浴衣を着て、帽子もかぶつて居ない。如何にも散歩の恰好である。それが停車場に來てるのは少しおかしい。

然し散歩のついでに停車場で休息するに不思議もない。私はそうも考へて見た。然し矢張りどうも少しおかしい。彼等は稍や沈んで見える。滅多に笑ひもしない。××軒の隣室でも、一日半の間、ハシやいで居るのを聞いた事がない。男はハタチあまり、女はハタチ前かと見えるが、新婚旅行でも無いらしい。女の風俗には少し派手な所がある。袂は長いし、襟のあけ方は廣いし、帯揚は赤すぎるし。そしていつも物靜かで朝は遅ごろまで寝ていた。

男は驛の掲示板を熱心に見ていた。それが時間表でなく、賃金表だから少しおかしい。やがて女は帯の間から可愛らしい紙入を出して、その中を検べていた。男も側に寄つてそれをのぞいていた。やがて男も蟇口を出して、その中を検べるらしかつた。どうしても様子が少しおかしく見えた。私はいろ〳〵にそれを想像した。

二時十何分、電車が來た。私は熊谷行の切符でそれに乗つた。かの男女も隣りの車に乗つているのが硝子ごしに見える。何處まで行くのだろう。私は少し氣になりだした。初は女がこちら側に腰かけていたが、後には男がこちら側に來て、何かヒソ〳〵話して居るらしかつた。然しそれ以上、何事も發展せず、私は畠山重忠の墓に敬意を表すべく、熊谷の三つ前の武川驛で下車した。

一四　荒川の橋の上

小雨の中を驛から三四町行くと荒川べりに出た。その途中、植付、草取の景色も少しはあるが、このあたり大抵は桑園である。

荒川もこゝまで來ると川幅がもう餘ほど廣い。その廣い川幅

に長い成行が掛つている、[illegible]にも、中が[illegible]の見えてい
る。小川の中の景色が中々いゝ。私がこの景色に見ほれつゝブラ
り／＼橋にかゝると、少し向ふに行く学校戻りの小娘がふたり、
幾度も幾度も私の方を振返つてはグズ／＼している。変だなと
思ひながら漸くそこまで近づくと、今度は少し笑ひだした。『あ
の水車は何をやつてるの』と私が問ひかけると、『粉をこしら
へてる』と一人が答へて、そして又二人が少し笑ふ。『何がお
かしいの』と問ふと、『あそこにあんな人がいる』といふ。成
る程ど向ふに変な風体の男が突立つている。『あの人が何か悪い
事をするの』と云ふと、『どうだか知らないけど、こはいんで
すもの』と云ふ。彼女等は、私を待合せて、私と一緒に其男の
前を通らうとするのだつた。

変な男は別に何もしなかつた。少女達は私の蔭に隠れる様に
してそこを通りすぎた。橋の袂まで行きつくと、彼女等はヤッ
ト安心したらしく、『気味のわるいたら無かつた』と云つて、
振返つて笑つていた。私は畠山の墓を彼女等に聞いた。所がど
うだらう、あそこの坂を右に登つて、それから左に行つて、又
右に行つて、又左に行つてと際限がない。私はもうイヤになつ
た。私の興味はむしろ変な男の方に引かれていた。

私は重忠君に失敬して踵を返した。変な男は、今度は橋の上
にアイラをかいて[illegible]、目
は光り、着物は破れ、足はタビハダシである。それで居て[illegible]
ではない。彼は人に恵みを求めるといふ態度ではない。彼は稍
や傲然としている。私は何か彼に話しかけて見たいと思つた
が、とう／＼それが出来ないで前を通りすぎた。私がこちらの
橋の袂まで来る中に、彼は突立つて見たり、二三歩あるいて見
たり、又しやがんで見たりしていた。

橋の袂には番小屋のやうなものがあつて、お婆さんがひとり
そこで糸を繰つてゐた。私はそのお婆さんに『あれはなんでせ
うね』と話しかけて見た。何でせうか。今朝からあゝして居ま
すが』といふ。『今朝からぢや腹も減つているだらうが』と私が
云ふと、『気ちがひかも知れない』とお婆さんは云つた。

そこに若い男が二人、自転車の上から変な男を見返り見返り
しながら、やつて来た。彼等は橋の袂で自転車から飛びおり
て、『好いおしめりです』と元気な挨拶をお婆さんにして、番小
屋に腰かけた。そして『あれはなんだね』と小声で聞いた。『先
つきは橋の下に寝て居たがね。いづれ近処の者ぢやあんめえ。』
お婆さんはさう答へた。

『ヤア、あの娘はあぶないぜ』と、若い男の一人が云つた。向
ふから若い娘が変な男の前を通りかゝつていた。皆は多少心配

してそちらを見やつていた。娘は一向平氣でサッサと通りぬけた。變な男は何もしなかつた。『もうそんな氣もあるめえ。』お婆さんはそう云つた。『イヤ分らない。氣ちがひは恐ろしいものだよ。』一人の若者はそう云つた。

變な男はそろり／＼こちらにやつて來た。皆は見ない振をしながら熱心にそれを見ていた。變な男はとう／＼橋の袂を越えた。私の好奇心は私をその跡について行かせた。所が困つた。彼は忽ち道の眞中にピタリと踏みとまつて兩手を組んだ。私は少しこわくなつたが、眞似をして立止まるわけにも行かないので、その横を通りぬけて先になつた。少し歩いてから振りむいて見ると、彼は又のろ／＼歩いていた。

私が或る土手のそばで草刈のお百姓と話をしたり、向ふの田の植付を見物したりして居ると、ヤットのこと、かの男がやつて來た。今度こそ道連れになるかと思つたが、どうも言葉が掛けられなかつた。彼をやりすごして置いて、私は又默つてそのそばを通りこした。向ふでも變な奴だと思つたろう。

かくて私は變な男とアトになりサキになりで、とう／＼停車場まで來てしまつたが、その時、彼の影はモウそこらに見えなかつた。

私は又電車に乘つて熊谷に向つた。大麻生（おほあさふ）で下車すれば御正（みしやう）村に行かれる。御正村は數年前、烈しい小作爭議のあつた處で、私はいろ／＼其の話も聞いて居る。

『私が死んで地主の仇を討つと、料理庖丁で悲慘な自殺を遂げた』

婦人の話が私の耳に殘つてゐる。然しどうしてもモウ歸京の日取が迫つている。私はそのまゝ大麻生を通りすぎた。變な男のそばを通りすぎたと同じ樣に。

× × × × ×

七日の午後、私は夕刊を見ている中、忽ち胸がドキリとした。『長瀞心中』といふ雜報がある。男は廿二、女は十九、それが長瀞附近の岩の上から谷川に飛びこんだ。時刻は六日の午後四時頃。若しあの二人が、熊谷で思ふ樣にならず、間もなく長瀞に引返したとすれば時刻も丁度合ふ。私はそんな事まで考へた。然し兎にかく、心中の男女は鮎獵の船頭に助けられたとあるのが嬉しかつた。

午睡

うきくさの……みぎは離るゝひるねかな

久保田万太郎

「寢蓙」といへば「夏の季」である。が、わたしにあつては、春夏秋冬、そのいづれのときをとはない。四季いつでもい い。しかくわたしは晝間ねることが好きである。「いくらうしの年だつて暇さへあればねてゐる」と、以前、祖母のまだ生きてゐる時分、よくわたしは叱られた。祖母にいはせると、そんな脆弱なことではとても將來身上は出來ない……といふのである。――その通りいまだに身上は出來ない。

が、わたしの晝間ねるのは脆弱なばかりではない。朝早いからである。子供の時分から、わたしは、矢つ張祖母のしつけで七時よりおそく起きたことはない。これからだん〳〵熱くなれば五時から六時に起きる。――といつたつて自慢にならないことは知つてゐる。稼業の都合なら暗いうちから起きなければならない人もある。――でも、わたしのは、子供の時分から休みなしにさうなのである。十四五の時分から二十何年、一日もわたしはそれを缺さないのである。勿論日曜だからといつて十二時一時までねてはゐない。たとへ前の晩いかに遲くつてもその時間になれば必と眼が覺める。眼が覺めたら最後一分でも床の中にゐられな……かつたものである、昔ては。――このごろは五分位ぐづ〳〵する。――でも、一寸、眞似の出來る然ではない。――嘘とおもつたらあなたのいまゝでをふりかへつて御覽なさい。

だから……その代りわたしは晝間ねる。――悠々と眠る……

それこそ慾もとくもなく……

わたしのいまの書齋は四疊半である。そこに始終置いてある

ものは、机と、そのとき〳〵必要な書冊と、籐で編んだ簡單なまくらと……それだけである。——身邊、外には何ものゝ影もとゞめない。

悪いくせはどんなものでも讀むのに机のまへにすわれないことである。机のまへにすわつてゞはどんなものでも身にしみて來ないことである。さういふ病をわたしはもつてゐる。——といふことはものを讀むのに轉つて讀む。いつの場合でも腹ん這に、あるひは仰向に……つまりは出來るだけみについた恰好をするわけである。

それこそいひやうなく惰弱である。——が、祖母は、わたしの世帶をもつのをみないで死んだ。

……で、讀みながらうと〳〵する。——それもいゝ。——が、それよりも、たいていの場合そのつもりでわたしは轉るのである。——はじめからそのつもりで。——ねるときめて眠るのである……

十二三年まへだつた、そろ〳〵料簡が出來てものゝ書けなくなりはじめた時分、「新小說」の本田直次郎君が來てにや〳〵わらひながらよくわたしにいつた。

「熱い奴をぐつと上つて、ぐつすりお休みになつて、眼のおさめになつたところで熱い湯に一つ風呂お入りになる。——さうすれば、あなた……」

……さうすれば十枚や二十枚立所に書けるといふのである。——なるほどと思つた。なるほどその勢なら書けるだらうと思つた。——が、思つただけでわたしはやらなかつた。その後でも、やつてみようとかは幾たびも思つたが、いまだ嘗てやつたことはない。——何だか怖いのである。——わたしの藝術は、そんな江戸前な、そんな景氣のいい藝術ではない……

だが、親切ないゝ人だつたが本田君も死んでしまつた。……が、夏、いふところのその「晝寢」をして眼をさます。青い空がぎら〳〵して西日が疊の上に一杯さしてゐる。疊とまでいはなくつても廂ぐらゐのところでもいい。——いやな氣持である。とてもたまらない心もちである。さうでなくつても、わたしは、夏の日のいつまで強情にあかるいのが大嫌ひである。だから、さういふとき、口惜しいからもつとねてやれ。……さういつて、どうなるものかといつたかたちの不貞腐つた料簡になるのである。——そのときほど救ひのない人生をみ出すことはない、……

が、その逆に、秋から冬、あるひは冬から春にかけて、眼をさますともう燈火がついてゐる。暗くなつた障子のそとにしぐれ(あるひはしぐれのやうな雨)がしづかにいつか忍んで來て

ある。――ぢつとそのまゝ眼をつぶつてゐると、いまみた夢が、何十年、何百年まへみた芝居ででもあるやうに浮んで來る……

しみじみした人生である……（七月六日）

午睡税

水島爾保布

夜ふかし朝寢は常習だが、午睡(ひるね)つて事は殆どした事がない。した事がないんではなく、しようと思つても出來ないんである。習慣か性分か何だか知らぬが、場合によつては隨分困る。徹夜上何神氣朦朧としてゐる時なんかでも、天既に明るくなつて了つてはもう駄目だ。カルモチンでも服用したら格別、さもなければ雨戸をたて切り窓をふさぎ頭から蒲團をかぶつて見ても、眼の方がどうしてもいふ事をきかない。餘程間がよくつてトロトロしたところで、その間纔に五分か十分だ。

精力家つてものは一面睡眠家ださうだ。しかもその睡眠たる、普通人が八時間かゝるところを、二時間か三時間ぐつすりやつて濟まして了ふ。その代り睡らうと思へば、殆ど所に關係なくいつでも熟睡出來る。たとへ五分の暇でも十分の間でも、暇にあきさへあればごろりと引くり返へる。眼をつぶるが早いか忽ち高鼾だ。ナポレオンがさうだつたさうだ。ビスマルクがさうだつたさうだ。レーニンがさうだつたつて話だ。袁世凱がさうだつたさうだから、多分張作霖だつて蔣介石だつてさうなんだらう。チャツプリンやムツソリニについてはまだ聞いちやゐないが、どつちも能く寢さうな顔つきだ。

といふところから推すと、晝寢出來る人つまり午睡の出來る人は精力家であつて、同時に腕利しの英雄天下取りの傑物であるつて事になる筈だが、どうも午睡の後の斯しくむくんだ面に、そんな威厳の輝いてゐるのは皆目ない。

袁世凱で思ひ出したが、この大將が中華民國大總統第一世に押し上つて、一圓の大銀貨に自分の肖像なんか鑄りつけさせ、もう一段上つて皇帝と納まらうかなんてことを、帷幕の中午睡の夢にゆめ見てゐる當時の話――洋の東西時の古今を問はず國家と名がつき政府と稱するもの大概は貧乏が通則だ。貧乏といふ程ではないにしろ財足り豫算に餘りあつたなんて驗はトンとない。歴史あつてこの方每年十二月國民一人當り一千磅づつの金貨を分配したなんて國家や政府はたゞの一つだつてなかつたや

うだ。國内至るところ金貨が唸つてゐるといふアメリカにしたところで、夜ひるのけじめもなく不斷に黃金の噴水が湧き上つてゐるといふ評判のモナコにしたところで、國家が税金の割り戻しをしたなんて話はない。

必竟國家の財政つてえやつは國家經費を國民どもに割り當てる方法を講じる事で、その方法たるどこの國家も中々にみゝつちくやつてゐる。いくらみゝつちくして見ても大抵は足らずまいの遣り繰りだ。遣り繰りがつかなくなるといつも申わけに內閣が投げ出される。內閣つてものも全くいゝ面の皮だ。

だから、苟くも國家財政に責任のある連中は、何とかして財源を見つけ出さうと鵜の目鷹の目日も是れ足らぬといつた有様で、何の事はない荒山の鑛堀り藪ン中の自然薯堀りも同様だ。

袁世凱の政府も御他聞には洩れなかつた。で、この逼迫した財政を緩和すべくいゝ方策はあるまいか。といふことで會議を開いた。方策つていふのは今迄の課税以外何等かの名目で四億の民衆個からとは行かない迄も、せめてはその一割の人民共からなと、金を取り上げる工夫のそれであることはいふ迄もない。

ところが、税と名のつけられる限り、他の外國の例を借りる迄もなく、取り上げられる丈は大抵取り上げてゐる。いくら大總統だつて皇帝だつて人氣は大事だ。まともに苛斂誅求の看板をかけるにしては大將少し度胸がなかつた。

折角の財源探究會議もとゞのつまりは、柄の無いところに柄をすげる相談、かうなると國家だつて軋(きし)りだつて餘り大した變りはない。結局錢にする迄の道程、因縁のつけ方が差し當りの問題つてわけである。こゝらの點は何だか人事ぢやない。我我の國家にしたところで、大分柄のないところに柄をすげたやうなのをおつかぶせてゐる。國家と議會がつけた因縁なんだから、遂にして取締りやうがない。

とまアいつたわけで、どうでしまひは泣き寢入りと見越したわけでもなからうが、あゝでもない、かうでもないの果ては四民の日常、百般の行爲についてその一つ一つが金の蔓にならぬかなるかで討議される。甲論乙駁頗る紛糾した。

阿片吸喫の禁を解いて更めて税金を賦課して如何でござる。なんてえのが出た。

賭博公開を許可して各城市それ〴〵の向きに月六箇位ゐ賭會を開かせそれからカスリを取るなんかもいゝ思ひつきでは御座らぬか、この方法はその昔東洋(トンヤン)に於いて行はれてゐたもので既に前例もある事で御座る。なんて軌を海外に取つて滔々とまくしたてる先生もゐた。

高尾絹、人面絹、[illegible]絹、[illegible]絹――いろんなものがそこに並んだ大小樣々いろ／＼の口々に數へあげられた。中に、白面絹といふのがあつた。則午睡稅だ。

白面黒甜郷に遊ぶなんて事は既に今日の時世に適はざるところ、實に中國人舊來の惡習だといはなければならない。之を以つて之を觀れば、その捐收には一面國民の積弊を矯飾する意味も含まれてゐるといふのだそうだが、さてその午睡稅なるもの、何ういふ風にして徴發するかは明示されてない。まさか收稅吏が時を期して軒別に調査して歩くんぢやあるまい。さうかといつて、私は毎日午睡を致しますからつて、正直に稅金を持つて行く奴は、まア無からう。

それはとにかくに、かういふのを見ると、支那人諸君には午睡つてものが一般的習慣になつてゐるらしい。

食後の一睡

正宗白鳥

私は午睡を好む。それは夏ばかりではなくつて、春でも秋でも、日の短い冬に於てさへ、午餐後には、差支へのない限りは、私の例に做はつて、（時には書物を枕にして）午睡を樂むのを常例としてゐる。大倉喜八郎翁は、午睡なんかする懶けものは社員に採用しないと、尤もらしいことを云つてゐるさうだが、私は午睡はしても懶けものではない。

午睡は、私に取つては、最大な快樂であるばかりでなく、健康維持の上に缺くべからざるものとなつてゐる。私は、赤ん坊の時から明るいところでは眠付かなかつたさうだ。物心のついてからも、二十歳くらゐまでは、午睡をした記憶はなかつた。一朝でもあたりが薄明るくなると必ず目の醒めるのを例としてゐた。學生時代には、不眠症のためには隨分苦められたものだ。一一月でも二月でも、ろくに眠つた感んじのしなかつたことが多かつた。眠不足でいらいらした頭で讀書をするのは、鋸で生命の幹を切られてゐるやうな感んじがした。それが、學窓を出てから、やうやく午睡の習慣を養つたので、私は不眠症のために起るべき身心の破滅を、辛うじて免れることが出來た。

今でも、夜の眠りは、惡夢に襲はれたり、夢中に物を考へたりして、眞の眠りの樂みを樂みかねることが多い。しかし、午睡は私に取つては、睡眠の眞諦に達してゐるやうな感じがする。

「食後の一睡一煙」と、矢の根の五郎が云つてゐるが、私も同感である。午睡は眞夏のものとされてゐるが、眞夏では、身體が汗ばむし、蠅がうるさつくていけない。春雨や秋雨の降る日、靜かな雨の音を聞きながら、トロ〳〵と眠りに落ちる間の氣持は、この世のものとは思はれない。修善寺や鹽原の温泉で、溪流の音に誘はれて華胥の國に遊んだことも思出されるが、しかし、温泉場では廊下の足音や隣室の人聲に妨げられて、私の午睡が俗化されていけない。

夜の眠りは、私に取つては、強いられた義務のやうであつて、晝間の眠りは、豐かな趣味で、保健上缺くべからざる身心の糧となり、靈藥ともなるのである。……私は、晝寢の夢には、屢海外へ遊ぶことがあるが、その夢は今日までつひに實現されないで終つてしまづた。

讀書時間

津田青楓

私は夏の午睡時間を一年中の讀書時間としてゐます。

私達の仕事は畫を書くことで、ものを考へる仕事でないから、いつでも讀書することは無駄ごとのやうな、娯樂のやうな考へが、つい起つて、讀書は出來難くなる、讀書するよりは一枚でも畫をかこうと云ふことに成る。

讀書が畫家にとつて、決して無駄ではないのだが、それが直接仕事の上に働きかける結果が、ニブいのでどうも讀書はあとまはしになり勝ちになる。おなじ讀書でも畫に直接關係のある、美術史とか畫家の傳記とか云ふものは、割合によまれるやうだが他の種類のものになるとまるきり緣が無いやうに思はれて、讀む氣になれない。

しかしほんとは美術史や故人の傳記やそんなものはどうでもいゝのだ、自分達も美術史をこさへてゐる一員であり、生きた傳記を自ら所有してゐるのだから、ほんとはそんなものに用事はないわけである。それよりも却つて、美術に直接緣のないと思はれるやうな、論理とか心理とか哲學とか宗教とか、經濟とか政治とか云ふ本をよんだ方がためになると思ふ

それはとにかく、私は夏の午睡の時間を一年中の讀書の時間にしてゐる、何かまとまつたものを夏中に一つよむことにしてゐる。しかし實際はさう思ふ丈けで矢張りねむくなると寢て仕舞ふから、豫定だけきめて、なか〳〵實行の出來たことはない

が、去年の夏もレイモンドの「農民」だけを持つて避暑地に出かけたが、旅に飛びこむ時間や、ぶら〳〵してゐる時が多くつて、結局四五十頁しか讀まないで歸つてしまつた。

しかし本を讀み乍らねむくなつてねてしまふのはいゝ氣持だ。本を持たないで何か空想をしながら、はてしがつかないで、しまひにねてしまふよりも、本から眠つた方が樂でいゝ。

兎も角自分は午睡は、はつきり出來難い方だ、都合よく眠られゝばねるが、眠られなかつたら又起き出して、畳を拂つて字を書いてみたり、庭に下りて草とりをしたり極めて自由にする。

そこが私には又非常に氣持ちのいゝことなのだ、世の中の人が皆午睡をすると、なんだかあたりが靜かになつて且つ安息の時間のやうな氣がするので、勝手なことをしても差つかえがないやうな氣になつて樂でいゝ。小供の時母が午睡すると、ねつくまで足の裏をふんだり、腰をたゝいたりして、母が寢付くとヌキ足をして外へよく遊びに出かけた。母の眠つてゐる間がほんとうに呑氣な遊び時間のやうな氣がして、遊んだものだが今でも世間の人が眠つてゐると云ふことが、私には妙に樂な氣持ちになつて、勝手な遊びをしてゐられるやうな、小供の時のやうな氣になるのでいゝ、世の中が夏の午睡時間だけでなく、もつと一年中いつでも眠つたやうな状態になつたら、さぞ〳〵私の世界は平和に生きられるだらうと思ふ。私の人間性は世間の人が睡つてゐる位で、丁度いゝのでないかと思ふ。この頃のやうに何も彼も、積極的に動きかけねばならぬことが多いと、少し自分等は調子が合はなくなるのだと思ふ。(昭和二、六、三〇、)

午睡録

齋藤茂吉

ミユンヘンに來てからも、午食の後などには出來るだけ頭を休めねばならぬと考へて、珈琲店の隅の卓に肘をついたまゝ午睡する習慣をつけようとしたことがある。すこしの間午睡をして、それからまた敎室に出掛けて行つては精根を盡して爲事をするのである。はじめのうちは珈琲の力で勢をつけて、直ぐ敎室に出掛けて行つたものであるが、ミユンヘンに來たのは夏であつたから、いつのまにかさういふことになつた。

ミユンヘンはアルプス山系の延長を南に控へて居る高原の都市と看做していゝから、なるほど維也納(ウインナ)などとは天然の現象も

その趣を異にして居た。雷がひどい音を立てゝそれから雨が沛然として降つてくる。時には珈琲店の大きな厚い玻璃窓に無數の雹が鋭く突あたることなどもあつた。斯る現象は餘程日本に似てゐるので、維也納に留學中稀にしか遭遇しなかつた雷雨を此處に來てからなつかしいものの一つに思つたことがある。さういふ時には、少年のころに讀んだ譯作の「雲のいろいろ」といふ文章などを心の隅の方に蘇らせながら、うつらうつらとして僕は午睡した。

こんな工合にただ一人さびしく暮らしてゐるうちに、三月程經つた。そして日本では關東の大震災があり、異境でひとり戰兢々としてゐると、一人の友がひよつこり同じ教室に爲事をしにやつて來た。友は同門の專門家で、だいぶ前から禪を修め、××居士といふ好い名さへ貰つてゐる。それからは二人で一しよに午食をし、一しよに午食後珈琲店に行くやうになつた。友は印度洋を航海中、日本大地震の知らせを得たのださうである。

そのころの獨逸輸入新聞には日本の大地震で死んだ人の骸が山のやうに重つてゐる寫眞を載せて、これは日本官憲ではもう發表を禁止してゐる珍品であるといふことわり書を添へたのなどもあつた。二人は午食後の珈琲店の隅の卓で心慄然としてさういふ寫眞を見たものである。

その友はしかし午睡などはしなかつた。そしていつのまにか獨逸人の言語學者を見つけて、サンスクリット語を稽古しはじめた。友は、僕の午睡する間にサンスクリット語を暗記することに努めてゐた。百人一首加留多のやうにカアドを拵へて來て、低い發音を幾遍も繰返してゐるのを、少しづつ意識しながら僕は暫時まどろむのである。友は珍らしい言葉に出逢つたりすると僕を起すことなどもあつた。つまり昔の支那の僧侶が、遙々難儀して印度にわたり、原文の經文翻譯を企てたその名殘が、たまたま僕等のこれまでの宗教生活の間に頭のなかに殘つてゐるのと諧合したりする場合に、友は僕を呼起すのであつた。「奈落」といふ語などもその一つの場合である。

大正十二年八月であるから、まだ日本の大地震もなく、友も日本を出發しなかつた時のことである。僕は突然故郷から父の病沒した知らせを受取つた。僕は非常に寂しい氣持になつて、午食後いつもならば一人で珈琲店に行くところを行かずに宿へ歸つて來、家兄からの委しい書面を繰返して讀んで、さうしてソフアのうへに午睡してしまつた。その間に夢を視て、場面は日本のやうであるし、父が死んだといふことであるが、死なぬやうでもあり、死んだといふのは夢の中の出來事であつたのか

も知れぬ、さういふことをいろいろと細かく注意してゐるところの夢を視たのであつた。

夢から醒めて、僕はもう教室に行く氣にはなれなかつた。そこでホウフブロイといふ酒屋に行つて勞働者の群にわり込んで麥酒をひどく飲んだ。

その死んだ父の夢をば、半年も後になつてやはり珈琲店の卓に凭つてサンスクリツト語を勉強してゐる此の友の側で視たことがある。その時の父の夢はほんの瞬間で醒めてしまつたけれども、ありありと父の顔が見えた。

その時僕は、友に病歿した父の話をし、それからかうべを俯して禪の修行といふことを聽かせてもらつた。「無著」といふことなどもそのときに聽いた。何でも昔さういふ名の高僧も居つたさうであつた。

その後幾度か午睡をして、父の夢はつひに視ずにしまつた。それから、その友とは或るきつかけに幾度か口論をしたこともあつた。禪の修行を積んだ此の友には、何處かに物に動ぜない、鋭いところがあつて、その友の語氣が、物を悟りきれない、いつもいらいらしてゐる僕の耳に觸ることが間々あつたからである。

中央公論社から與へられた「午睡」といふ概念は、僕にかういふ陰鬱なことを書かしめた。今の今も、あの頃のやうにいらいらしてゐるからではなからうかとおもふ。

鳩山と三木

千林萬水

○

鳩山と三木と較べて最初に出る感じは『白い政治家』と『黒い政治家』といふことである。顏の色が白いとて必ずしも腹の白くないのがあり、腹が黒いとて必ずしも顏の色まで黒くないのがある。鳩山が白い政治家で三木が黒い政治家といふのはたゞ見たゞけの印象で鳩山が立派な政治家で三木が腹の黒い政治家といふ正札を附けようとして居るのではない。

鳩山は學者の家に生れ賢母春子とやらに育てられ良妻薫子にかしづかれて何の不自由もなくスラ〳〵と今日の地位を占めて居るので、どことなく明るく氣品がある。之に反して三木は四國の山猿を友とし、東京に出てからも悪戰苦鬪を續けて居るので骨組もガッシリして居り、どこからどこまで野人風のところがある。

色の白黒から較ぶれば鳩山一郎は民政黨の鈴木富士彌、賴母木桂吉、または貴族院の松本烝治などと似たやうな肌合ひで、三木武吉はむしろ政友會の前田米藏とよい取り組であらう。鳩山がモ少し年を取れば反對黨の江木翼といつた型になり三木が年功を重ぬれば死んだ政友會の横田千之助または内務大臣の鈴木喜三郎を思はしめる。

だが政治家としての鳩山と三木とは東京市政においてばかりでなく一は政友會の花形として今は内閣書記官長の要職を占め、一は民政黨の立役者として將來勇躍の時機を伺ひ朝野兩黨の中堅を爲して居る。兩者は顏の色が違ふやうに性格においても政治的經歷においてもそれ〳〵異つた點をもつて居る。

○

鳩山は明治十六年生れで今年四十五、三木が一年あとの十七年生れで當年四十四、いづれも油が乗つた男盛り、働き盛りといふところ。鳩山が衆議員議員に當選すること四回三木が三回で、代議士稼業はまだ中古といふところまでにもゆかないのに二人とも政友會民政黨の中に幾多の先輩を凌いでメキ／＼頭角を現はして來たのも面白い。

鳩山と三木

鳩山は父和夫の地盤を受け繼いで東京小石川に名乘りをあげ、三木は學校關係をたどつてお隣の牛込に巣を喰ひ肩を並べて衆議員に席を占めて居るが其のスタートには對照の妙がある。

鳩山が政治家稼業を初めたのは父和夫の歿後即ち明治四十五年市會議員になつたのがふり出しである。和夫はあの通りの學者であり且つ衆議院議長をつとめたほどの政治家であつたところから交友も廣く、奥田義人や原敬等とは特に善かつた。或る日のこと、奥田は和夫の遺兒一郎を呼んで「君も父の志を繼いで衆議院に打つて出で、立派な政治家にならなければならぬ」と懇々勸めたのであつた。又原敬も「親爺さんが居なくて何かと心淋しいであらうが政治家として立つならわしを伯父と思つてしつかりやれ」と激励の[illegible]と共に帝大の秀才として其の前途を嘱目された一郎は暫くして滿三十歳の時初めて代議士となつた。

三木は明治三十七年早稻田の法科を出ると日本銀行に入り門司支店詰となつたが、三十九年ポーツマス條約で國論沸騰し門司で内閣彈劾の演説をやつて首になつた。そこで東京に歸り判檢事試驗を受けて合格し、一年たらずの間鈴木喜三郎の下に司法官補として飯を食つたが性來の野人は到底司法官として身を立つるに適せなかつた。鈴木のすゝめで早速辯護士となり原嘉道の事務所に入り次で自前で開業した。區會議員や市會議員をふり出しにいよ／＼中原の鹿を爭ふことになつたがこゝに一つの障害といふのは當時安達謙藏が牛込に住んで居て、三木の立候補に贊成しなかつた。安達は口には新興勢力におべつかを使ふが腹の中では矢張り舊勢力の金持ちや名望家を大事にする。郷里熊本縣で候補者の品定めをする時にも貧乏な若手を退けて土地の金持ちに目をつけるので若手組はいつも不平タラ／＼だ。往年三木が初めて牛込から代議士に打つて出ようとした時にも之を援けぬばかりでなく陰に廻つて邪魔をしたといふのである。舊派政系内に安達派と濱口派が出來て、濱口派の頭目とせられたのが三木であり安達の惡口を言つて廻るのが三木であ

つたのも、調べて見れば三つ兒の魂性百までとやら、三木が初陣に抱いた反安達の感情が今日に禍ひして居ることが知れる。羊かん羽織、破れ袴の青年三木が將來ものになるかならぬかを看破することの出來なかつた安達にも弘法の一失はある。

○

鳩山は柔道二段と言ひ三段と傳へられる。有段者程の腕を持つて居るに違ひはない。今日講道館の仕合に何程の成績を擧げるかは知れないが妾を迎へ酒を飲んで居ても、一たん緩急あれば身を護り時に相手に迫るだけの氣魂はあらうの話ではない。彼はしば〳〵議政壇上に腕をふるつた。大隈内閣當時、隻脚總理が大風呂敷を擴げて演説中速記卓に迫つて演説草稿をひき破り、懲罰に附せられたことは世人の記憶に新なるところである。まだある。大正十一年一月廿五日、時の在野黨であつた憲政會の闘士鈴木富士彌が政友會内閣を攻擊し、滿鐵阿片の疑獄事件や東京市會の收賄事件を槍玉にあげて政府當局や鳩山一味にあたり散らし殊に鳩山に向つて『免れて恥なきもの』と毒づくと鳩山は超えて廿五日院内控室に居合せた鈴木に鐵拳を見舞つて地方裁判所檢事局に訴へられたことがある。鈴木は曾て鳩山和夫の書生をしたことがあるにも拘らず、政爭の餘波とは言へ個人攻擊をするのは怪しからぬと癇癪玉を破裂さしたのである。それほど彼は腕力をふるふ、いやふるふことがある。鳩山が衆議院四百頭分の中で最初から存在を認められたのは、和夫の息であること、選擧毎に春子夫人が戸別訪問をすること以外には僅かにこの腕力沙汰位のものであつた。その後日比谷に鐵拳沙汰の止んだためしなく、第五十二議會で革新クラブの清瀬一郎が田中政友會總裁に絡る機密費事件を擧じ立てると、政友會の議員某々が腕力沙汰を演じ、ズラリ並んで『有罪』となつたが『我黨内閣の有難味がない』と騒いで居るから滑稽である。それは兎も角として鳩山は腕力で議會人となつた。たゞそれだけで終始したらんには坂井大輔と何の撰ぶところなく原惣兵衛と甲乙なかつたであらうが彼の頭惱は相當優れて居た。

○

鳩ポッポがうなぎ上りに大政黨の幹事長となり内閣書記官長となつたやうに、三木武吉が議會人として認められたのもツイ此の間のことである。三木は鳩山のやうに腕の力はない、併し彼の口は普通の人間の一倍半に及び二倍に及んで居る。野人の毒舌は議會の野次となつて現はれた。原内閣時代大岡議長や奥議長は彼に苦しめられることが一再でなかつた。佐々木安五

郎、栗須龍太郎の野次はたゞ野次だけのものであつた。原脇兵衛、生方大吉の野次はたゞ聲だけであつた。然るに大岡も奥も三木の野次には封じ込められることが多かつた。必ずしも三木が法規先例をいぢくるわけでなく、大岡、奥に手落があつたわけではないが、彼が議事進行に名を藉つて議事妨害をやつたり少數黨の意見を發表するのは巧いものであつた。田淵豊吉は無所屬に在つて議事進行の發言をするから合割にやりよく、又議場も彼の發言を一種の餘興として迎える觀があるが、三木は反對席を控え而も味方は少數黨でありながらよく多數黨の議長をやり込めた。場あたりもやる。高橋是清が大藏大臣として海軍問題で洒脱な演說をやり軍艦の『艦齢は八年』と大きな聲を出すと、眞正面から三木が『だるまは九年』と滿場を笑らはせたのは野次の優なるものと評せられた。そんな大向ふもやるが彼の得意とするのは機を見るに敏なところである。

大岡であつたか奥であつたか、或る時議事の進行を急いで居た。この時三木は、憲政會席より議事進行に關する發言を求めて已まず、議長が發言を許可すると、彼は悠々登壇、議事進行とは何の關係もない政府攻撃演說を永々とやつて、政友會から降壇を迫られ議長から發言を制せられんとする切那『かゝる重大問題を議するに議長は議員章を附けないで着席して居り升』と議長の胸を指さした。議長は徽章を忘れて居た。議員はたゞたゞ苦笑するの外なかつたが、三木の議會演說は實はこの遠慮である。一黨を代表して大演說をやるには適せぬが機に臨み變に應ずるところは手に入つたものである。僅かの動かすべからざる證があれば之を百倍にし千倍にして論難攻撃を加へる。

議會の野次將軍が一黨の幹事長となり總務となり憲政會内閣では大藏省の參與官とまでなつたが彼は役不足で始終ブツ〳〵言つて居た。鳩山と言ひ三木と言ひ異數の出世であり將來要望の中心となるのも無理はないと言へやう。

○

鳩山と三木との相撲は東京市政を通じて見るが一番面白い。鳩山は明治四十五年の四月補缺選擧で市會議員となり、當時市會政友派の巨頭森久保作造の率ゐる常盤會に入つて、それ以來大正十五年六月まで市會に席を有つて居た。最初は市會の平議員から後には中野武營、加藤正義、桐島像一等の下に副議長をつとめ、更に市會議長の要職についたこともある。そこにゆくと三木は大正十一年六月初めて市會に入つただけで、經歷は到底鳩山に及ばないけれども其の後の活躍は三木が一枚役者が上でいつもおぼつちやん式の鳩山を手玉にとつて居る。

三木が十一年に市會議員に選出されると眞つ先きに後藤市長の追ひ出し運動を畫策した。しかし何と言つても彼の同志が僅か廿數名で鼻眼鏡の小父さんに齒が立たぬので思案投首のところへ、後藤市長攻擊に好個の題目が轉がつて來た。と申すのは安田善次郎が後藤に三百萬圓の金を出した事件をつかまへて三木一派では『あれは市長としての後藤君に出したのだから東京市に寄附せねばならぬ』と言出し、後藤派では『そんな馬鹿なことがあるものか、一個人としての後藤に呉れた金だからたとひ三百萬圓が五百萬圓であらうとも東京市に寄附しなくともよい』と頑張つた。その中に議論がつのつて金を渡した當の御本人安田に聞かねばどちらがよいか分らなくなつたが、安田はバットで殺されたので、今は死人に口なし、後藤も散々困らせられて三百萬圓の金は『市政調査會』の費用に投げ出した。こんな具合で市會議員どもがうるさいので後藤も嫌氣がさして居るところに露西亞から髪の毛の赤い、青い眼玉のヨッフエがやつて來たので、珍らしもの好きの後藤は自分が仲介で政府に向つてヨッフエと日露交渉を開かせ、その方の用事が忙しいといふ口實で市長を辭めてしまつた。

一後藤が東京市長を辭めたのが大正十二年四月二十七日でその後に吏青嵐永田が市長になつたのが五月二十五日であつた。當時の市會は市正會（三木等所屬）、新友會（小島等所屬）、自治會といつた憲政派、後藤派の外に公友會（鳩山等所屬）といふ政友派があつてこの政友派の嚮背が、市長選擧のキャスチングボートを握つて居た。

自治會の小坂梅吉は後藤新平と相談して後任市長にはさきの高級助役永田秀次郎を推すことに定めたが、自治會だけでは數が足らぬので公友會の鳩山に相談して大體同意を得た。ところが三木は京橋八官町の和合亭を根據として盛んに暗中飛躍を試み、意中の候補者として元の內務次官、横濱市長東拓總裁であつた久保田政周を擧げ、之を何人にも示さずして專ら自治會の切り崩しをやつた。けれども憲政派の市正會新友會だけでは到底勝算がないので之また鳩山抱込みに秘策を巡らしたのである。

三木は先づ自分の腹心瀨川光行を鳩山の片腕とも言はれる片山久藏のところへやつて、『政憲兩派がいつまでも喧嘩をして居ればお互に損をし漁夫の利を占める奴があるから……』と言はせて置き、三木は直接小石川音羽の鳩山の家に乘り込んで膝詰談判の一幕。『ねえ君鳩山君、お互に市政に盡すことゝに平ありだが、憲政派と政友派と爭つて居ては後藤一派にうまい汁を吸はれるといふものぢやないか、我々はお互にシッカリやらにやならんが、君の方に適當な市長候補者はないかネ、政友派の

都合さへよければ勝田主計など適任ぢやないか、また藤山雷太なども立派な人物ぢやないか、勝田や藤山が出れば我々憲政派のものも行動を共にするヨ』と尤もらしい口調で鳩山を口説いた。三木の胸中久保田政周あることを知らぬ鳩山はウカツと三木の口車に乘せられた。口車に乘せられた鳩山はタツタ今小坂と永田秀次郎を市長に推すことに決めた約束を破つて、今度は三木と手を握つて勝田を推すことに決心した。

　三木が鳩山にあつて勝田を推す話をしたのは、公友會をして勝田に投票させ市正、新友兩派は一擧に久保田に投票して自治會の永田に一泡吹かせようの魂膽であつたことは明かであるが、市會の古つはもの小坂が之を見逃さうはづがない、三木鳩山の會見をくさいとにらんで三木の策略を看破し、容易ならぬ一大事と早速鳩山を訪ふて前約を食まんとする不信を詰り、鳩山にいろ〳〵智惠をつけて三木の計畫を壞してしまつた。鳩山一派のキヤスチングボートが永田に加はつた爲めに永田五十一票、勝田三十五票で市長は永田が當選した。勝田の三十五票といふのは三木が大事破れたるを知つて敵本主義から市正新友兩派の投票を勝田に入れさしたもので久保田は遂に暗から暗に葬むられてしまつた。

○

大正十三年の七月電氣局局長長尾半平が、乘合自働車問題にブツつかつて引責辭職し、電氣局長の後任問題が起つた時のことである。門司や東京の鐵道局にゐて其の後浪人をやつてゐた大道良太がその後釜を狙ひ、從前三木と鳩山との關係を知つて居たのでこの二人を利用して電氣局を乘つ取らんとした。一方永田市長の方では、舊市制に依ると市參與や電氣局長は市長が推薦して市會がこれを選擧することになつて居たので、永田は秘密のうちに人物を探し廻り、岡野昇を登用する腹を決めた。その年の八月廿六日市會議長柳澤保惠を日本クラブに招いて『岡野を後任電氣局長にしたいからよろしくたのむ』と挨拶した。大道は必死になつて三木と鳩山にすがつたので八月卅日兩人は一致して大道を推すことに手はづが進んだ。三木が當時鳩山と一緒に大道を推すことに同意したのはその裏面に一種の策略があつた。と言ふのは『永田が自分のかついで居る岡野が落ちて大道が出れば面目上市長の椅子に晏如として居るわけには參るまい』といふのであつた。市會の形勢は永田に取つて有利であると彼は思つて居た。永田がそう思ふばかりでなく永田の旨を含んで大道切りくづしに專念してゐた近藤達兒も大丈夫と引き

受けたものである。ところが人間は感情の動物で、近藤の先輩にあたり且つ後藤や永田には充分つくして居る小坂梅吉が『近藤、近藤で我輩を袖にするのが氣に喰はぬ。青二才の近藤風情に何が出來るかッ』と横を向いてしまつた。この局長選擧は非常の混戰となり兩派互に切り崩しにあらゆる手段を講じ、小石川の待合田中で鳩山の一の子分大崎清作が大野敬吉、村山賢作を買收せんとして九百八十圓の包金を差し出し、それが後日發覺して大崎は刑務所通ひとまでなつた。混戰の結果は鳩山派からも脱會者を出し、後藤派のうちからも脱會者を出した。斯くて激戰また激戰で選擧間際では大道が勝ちそうになつたので、近藤は永田にすゝめて後藤のお聲がかりで鳩山に電話をかけさせたが、モウ大勢は如何ともすることが出來ず、選擧の結果、永田がかついだ岡野は七票の差で慘敗し、三木の應援を受けた大道良太が目出たく新電氣局長の椅子に納まつた。その夜永田は宇佐美東京府知事あて辭表を提出した。

○

三木の永田市長追ひ出しはうまく圖に當つたが、その後任市長問題になるとまた一面倒だ。永田は遂に辭職したが、後任市長は大道とも折り合ひのよい人物を迎へなければならぬ。そこで三木は湔川を鳩山のところへ走らせ互に協力して新市長を迎へようと約束させた。もとより三木の腹にはこの前の久保田政周案を抱いて居るものゝ誰にも打ち明けず、鳩山の意思を確めさしたが、鳩山の方でも之はと飛びつくやうな立派な市長候補者がなかつた。

そうするうちに小坂が『後藤さんを再び市長に迎へてはどうだらうか』と言ひ出した。また本田義成は井上準之助を擁し度いと云ひ出した。井上は大藏大臣をやつたこともあり實業界一方の重鎭だから適任者の一人だが、井上がやる意志がないといふことを三木は知つた。それと同時に鳩山は井上ならと大分乘氣になつてゐることも知つた。三木の頭はピンと動いた。先づ東京市會協議會を開かせ井上準之助を市長に推すことに贊成した、井上がいよ／＼市長にならぬと決まつた切那に久保田をかつぎ出さうとした。けれども三木のこの策動は大分世間からも批難されるやうになつて來たから、彼は市長の前途多事多端な大正十三年九月十三日『政務多忙』を名として市會を去り爾今黑幕となつて絲を引くやうになつた。

九月十五日は來た。市會協議會では滿場一致で井上を市長に推され、市會を代表する交渉委員の面々は、大磯の別莊に井上を訪ねて『市會が全會一致であなたを市長に推薦しましたから

御苦勞ながら受諾して下さい』と懇請したが井上は首を縱に振る代りに横に振つた。

それでも井上に辭められてはと彼が東京に歸るのを待ち構へて澁澤まですゝめ役になつたが井上はキッパリ斷つてしまつた。そこで後任市長問題は次第にもつれ出し鳩山から三木に向つて『この際は政黨政派に關係のない宇佐美東京府知事を推し度いと思ふがどうか』と切り出して來た。三木は表面異存がなさそうな顏をしておいて裏から人をやつて宇佐美に『出るな』と言はせたといふ評判である。それとは知らぬ鳩山は三木も內々贊成だから大丈夫と思ひ宇佐美に會つて長時間にわたつて市長の內諾を求めた。宇佐美がひやうたんで鯰を押えるやうな返事をし、詮じつめて見れば結局斷つてゐるといふことが讀めたので、鳩山もこの旨を一應三木の耳に入れた。待つてゐましたとばかり三木は『それは困つた。宇佐美君が出て吳れなければ致し方がないから久保田にでも出て貰ふか』とデモ候補らしく扱つて意中の久保田說をかつぎ出した。鳩山も今更ら斷るわけにもゆかずまあ贊成といふ段取りになつた。

一方小坂は後藤に話を持ちかけ、後藤も『三木の野郎が…』といふ感じはあり、それに後藤自身が出馬となれば鳩山も贊成と來て居るので小坂一味は第一候補後藤、第二候補中村、第三候補宇佐美に定め鳩山一派を抱き込んで後藤に投票させ後藤を以て久保田を破り當選後は第一候補が受けないで第二候補の中村にやらせるといふことになつた。

九月三十日の選擧を前に敵味方の争奪戰が行はれ鳩山は鈴木喜三郎から後藤が市長になる意志のないことを聞きこんだので三木との前約を重んじ、久保田一本槍で進んだが三木、鳩山の兩派にうき足の立つものが現はれ結局十二票の差で久保田が破れて後藤が勝つた。斯くて後藤は受けず豫定の筋書通り十月六日中村是公が市長に就任した。

○

大正十五年六月東京市會の改選が來た。後藤派では土方寧、渡邊鐵藏等が中心となつて理想選擧團を起し、後藤系の議員を多く出そうとしたが、一方憲政派では五月初旬から市政刷新聯盟の名の下に事務所を京橋八官町の和合亭において『市會背後の暗影を絕つ』といふので後藤派に對抗した。

我黨內閣をふり廻して東京市に奮戰した結果憲政派の革新會は一擧にして八十八名中五十一名の當選者を得、盆と正月が一緒に來たやうに喜んだ。中村市長はこの選擧の結果に顧み到底仕事がやつてゆけぬことを覺り六月七日辭職した。

三木は革新會背後の黒幕となり台灣總督をやつて居た伊澤多喜男を引つ張り出し、次で伊澤が病氣と稱して引退するや昭和二年二月西久保弘道を迎えて、市會の大御所を氣取つたが瓦斯事件に一世の疑惑を受け、大藏參與官を辭して一時謹愼の風を裝ふたことは人の知るとほりである。鳩山は十五年の總選擧に政友派が一敗地にまみれたので、市會から手を引くと稱して居たが昭和二年春政友會の田中内閣成立を期として東京市長問題によだれを流しひそかに機運の熟するを待つて居る。

以上市政を通して鳩山と三木を見た。しかし限りある紙面に兩者の性格經歴を抽き出さんとしたのであるから恰も澤正劇に澤正ひとり躍るの感を免れない。たとへば昨年六月市會改選に當り憲政派においても横山勝太郎、賴母木桂吉、太田信次郎、中原德太郎、作間耕逸等は三木と共に働いた。五十余名の多數議員を贏ち得たのは全く三木一個の力に非ずして彼等の努力が綜合せられ且つ議員候補者の奮鬪に負ふところ多きは論なきところであるけれども本文の主題たる鳩山と三木との人物をほうふつせしめんが爲に聊か架說をいとはなかつた次第である。

○

市政を通じて彼等が如何に活躍したかは略々語り盡つたと思ふ。僕は更に鳩山と三木とが中央政界に如何なる足跡を印したかを顧みその前途につき一言所見を述べて見ることゝしやう。

鳩山が世に認められて來たのは政友會内閣時代憲政會から普選法案を提出せられ、議會において討論をやつた頃からである。その悠揚迫らざる態度、條理一貫せる主張、議論の是非は別として彼の頭腦の凡ならざるを示した。其の後淸浦内閣の出現により政友會は分裂して彼は床次竹二郎、山本達雄等と共に政友本黨に走つたが、政友會と政友本黨との對立は憲政會を肥すのみであつた。兩者の間には幾度か合同談が持ちあがつたけれども亂れたる感情の糸は容易に結ぶことが出來なかつた。そのうちに水野錬太郎、鈴木喜三郎、山梨半造、大木遠吉等の所謂政友系の元閣僚連が四人組と言はれて政本合同の勸告をしたことがあつた。四人組の一人鈴木喜三郎は鳩山の姻戚に當る、鳩山の姉が鈴木に嫁して居るので鈴木と鳩山とは切つても切れぬ關係にある。鳩山は鈴木等が外部から政本合同を斡旋すると相呼應して政友本黨の内部から合同運動をやつた。

床次竹二郎一派が煮え切らぬうちに本黨内の合同組は勘忍袋の緒を切らした。大正十四年十二月二十九日憲政會と本黨とが妥協の疑ひがあるといふので廿餘名が袂を列ねて脱會した。中橋德五郎を筆頭として吉植庄一郎、廣岡宇一郎、上野安太郎、

鳩山一郎等はその中心人物である。

之等の議會派は一時同交會を組織し政友會の別働隊として活躍し、政友本黨からの參加を求めて居たが去就が一段落つくのを待つて政友會に復歸した。鳩山は中橋等と共に最も政友會に歡迎せられた。功に依るか彼は拔んでられて政友會の幹事長となり、田中に愛せられ、山本悌二郎、山本条太郎等と力を合せて松島事件朴烈問題等に若槻内閣攻撃に力を盡した。田中内閣成るの日鈴木を内務大臣に鳩山を内閣書記官長に配したところ田中の用意の一たんを伺ふことが出來るが鳩山の政友會における地歩は確立されたわけである。

○

三木は在野時代、野次馬を以て賣り出し次で野次將軍に昇任し黨人として奮闘力に富んで居るところから、議會に地方遊說にその才能を認められて來た。郷里の關係から濱口雄幸に私淑し又加藤高明の門に出入した。加藤の門下には若槻の如く濱口の如く江木の如く吏僚上りの人物が多かつたので加藤は型破りの部下として若輩の彼を愛した。濱口雄幸が護憲三派内閣の大藏大臣に親任せられると政務次官に早速整爾を据え參與官に數字と最も緣の遠い三木を拉して來た。濱口は少壯議員から財政腕を發揮するといふ點に出してあつたが、今日、早速と同じ型の大臣次官では仕事が出來ない。三木をして一仕事をやらせようといふ算段であつたらう。

併し三木が政界の一方に侮るべからざる勢力を得たのは、何と言つても東京市會の改選である。次で市長に伊澤を招き西久保を推すその手腕の凡ならざるのみならず、市會の多數を賴んで仕事をしようとしたことである。遂に瓦斯事件を惹起したが彼の腕は試驗せられた。更に政友會内閣の出現に依つて憲本兩派は聯盟から一歩を進めて合同運動に移り今の民政黨が生れんとしたが黨首問題で大にゴタついた。新黨問題では先づ本黨内の元田肇、川原茂輔以下十餘名の犧牲者を出し、又黨首問題では憲政會内に十名内外の動搖を傳へられた。その張本人は三木武吉であつて之は巧妙なる濱口總裁擁立運動であつた。濱口が總裁に就任すると共に彼は笑つて新黨に參加した。

鳩山と三木とは政民兩派内において中堅の一人たるを失はぬ、而も鳩山が民政黨に又三木が政友會に入つたら特色を失ふであらうがそんなこともあるまじく今日のまゝ進めば共に天下の重きを擔ふかも知れぬ。

併しながらまだ何と言つても年功が淺い。彼等と肩を並ぶるものはそれ〴〵の黨内に少くない。政友會内においてまた政友

會內閣内において鳩山と兄たり難く弟たり難きものに前田米藏が居る。彼は和歌山縣の產岡崎邦輔の推薦によつて現に法制局長官をして居るが頭もよく腹も据つて居る。一方民政黨内においても三木と比肩するものに山道襄一がある。中野正剛がある。更に鈴木富士彌、永井柳太郎があり少し先輩だが賴母木桂吉がある。

之等の政治家たちはいづれも天狗ぞろひで又先輩にも六ケ敷いしゆうとこじうとが多く、後輩にも後足(あとあし)を狙つて居るものが尠くないので、鳩山と三木とが果して濟輩を凌いでさん然頭角を現はし得るかどうかは豫言の限りでないが、兩者にはそれぞれ人に推される長所がある。

鳩山は苦勞が足りないがおぼつちやんで、やんちやで、ぼうつとして居るところが人の將たる器になれそうな氣がする。彼を推し立てて指圖を受けやうといふのでなくて、後をかついで一仕事しやうといふ連中が多く集まるであらう。部下になつて見れば頭もよし思ひやりもあるといふので相當人氣が出やう。

三木は慢心がもつて生れた病であるけれども自分がなりふり構はずやつてのけるだけに自分の黨派のやることは飽くまでかばつてやる。いはゆる昔風の清濁併せ呑む式のところがあり、それに機を見るに敏であるから轉身の術を心得ゆく／＼一方の將となることは困難でなからう。

鳩山の趣味道樂は、碁、將棋、球つきからゴルフまで。三木は女。たゞそれだけ。

芭蕉を追うて

荻原井泉水

那古浦まで

糸魚川で相馬御風氏と別れて、私は北陸道の更に西を指す汽車に乗つた。前の日は芭蕉が「奥の細道」の旅で歩いた通りに、親不知を越えてから、市振に行つて泊らうといふ豫定であつたが、時間の上で到底出來ない事を御風氏から話され、さりとて一日の日をのばす事は、此夜、那古浦即ち新湊に於ける句會の約束と差支へるので、市振といふ所には心が殘されながらも汽車の窓から見ただけで過ぎた。「奥の細道」に

鼠の關をこゆれば越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る。

芭蕉は越中の國と書いてゐるが、一ぶり（市振）はまだ越後の内なので、そこから半里程行つて境川といふ川が越中との國境なのである。さて、私が何故、市振に心を殘すかといふに、そこは「奥の細道」全篇のうちで、劇的の色彩のある遊女の話がある所だからである。

今日は親不知、子しらず、犬もどり、駒返しなどいふ北國一の難所をこえて疲れ侍れば、枕引よせて寝たるに、一間へだてゝ西の方に、若き女の聲二人ばかりと聞ゆ、年よりたる男の聲も交りて物語するをきけば、越後國新潟といふ所の遊女なりし、伊勢參宮するとて、此關まで男の送りて、あすは故郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也、白浪のよする汀に身をはふらかし、あまの子の世をあさましう下りて、定めなき契日々の業因、いかにつたなしと物いふをきゝ／＼寝入りて、朝たび立つに、我々にむかひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲し

く侍れば、見えかくれにも御跡をしたひ侍らん、衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へと泪を落す、不便の事には侍れど、我々は所々にとゞまる方多し、たゞ人の行にまかせて行べし、神明の加護かならずつゝがなかるべしと云ひ捨てゝ出でつゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一つ家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書きとゞめ侍る

背景は一面に洋々として青い日本海の感じ、左に霞んだやうな能登半島が見える、右手に稍近くそぎ立てたやうな親不知の断崖。芭蕉は年四十六、但し齢よりもずつとふけて見える、頭は剃つて長途の旅に日焦けして疲勞はしてゐるが嚴粛な顔、黒い法衣の長い袖がよれ〳〵になつたのを着、頭陀袋を掛け、雨風にさらされた檜木笠と杖とをもつてゐる。曾良は年三十七八、脊が高く、がつしりとした風采、芭蕉が小柄であつて弱々しいのに對して、義経と辨慶といふやうた感じ、身裝は芭蕉と似た行脚僧のこしらへ、荷物を振分けにして負ふてゐる。上手に旅籠の半敷の障子が見え、竹で圍うて透垣に萩の花が咲いてゐる。其前を芭蕉を先に曾良がつゞいて出てくる。左手にうつそうとした木立があり、其蔭に人を待つらしい二人の女がちらちらとして居たが、芭蕉の影を認めて立出てくる。裾を短くかかげて脚絆をつけた旅姿は甲斐々々しいけれども、旅慣れもせぬ、しどけない所がある。二人、一緒に笠をとると、一人は二十五六、一人は少し若い。きはめて慇懃に、然し媚びるやうな物ごしで寄つてくる——斯うした場面を想像しながら、さて現に私の眼にうつつた市振といふ所は、藁屋根の家、板屋根の家が山裾の街道に添ふてポチ〳〵とあつて、暫く絶えるかと思ふと、又、ポチ〳〵と續いてゐる淋しい部落だつた。尤も數年前に火災があつて、其から元のやうにはならないのださうである。——泊——入善——蔽ひかぶさるやうに迫つた山と、押迫つてゐる海との壓迫から離れて、やゝひろひろとした平野に出て汽車は走つて行く。青田は豊かさうに續いて早稲はもう穂を出してゐるらしい、田の中に網小屋のあるのは、此邊は半農半漁らしく、所々、田の向ふに遠くちら〳〵と海の色が見えては消え、又、見える。小さい森が折々あらはれる。雲の峰がむつくりと立つてゐて動かない。——

くろべ四十八か瀬とかや、數知らぬ川をわたりて、なこといふ浦に出づ

と「奥の細道」にある。「くろべ四十八か瀬」といふのは、日本アルプスに源を發し、其頃登山家の間に喧傳される黒部の溪谷を流れて日本海に注ぐ黒部川の川口に近い所が、昔は川幅一里の

間にひろがつて、瀬が多く、四十八といふのは概數だらうが、其からいろは川といふ別名もあつたといふ。義經記に「あくれば黒部のやどに少し休ませ給ひて黒部四十八瀬の渡しを越え……」とあるからかなり古くから名高かつたものである。勿論、北陸道の本道に跨つてゐるので、旅人は上流を迂回して愛本の橋（寛文三年創設の長さ三十五間支柱なしの刎橋）にかかるのでなければ、此川瀬を越えなければならなかつたのである。車窓から見ると、河原は可なり廣いけれども、數町に過ぎず、けふも暑くなつた日光が砂の上に照つて、水の乏しいよれ〳〵になつた流が幾つかもつれてゐた。海側から見ると、線路の鐵橋を並んで、長い細い橋が架つて、其上を小さな女の兒が、ひとり潮風に袂を吹かれながら歩いてゐた。

芭蕉の文で見ると「數知らぬ川をわたりて那古といふ浦にいづ」と直ぐにも出たやうに書いてあるけれども、黒部の下流からなら即ち新湊までは十里もあらう。まして、芭蕉は其日、市振を立つて來たので、既に五里餘りは歩いてゐる筈。途中、何處かに一泊せねばならぬ譯であるが、それは生地の清水庵といふ家に泊つたといふ口碑のある事を私は高岡へ來て、花笠君から聞いた。若し、芭蕉が日記的に記したとしたらば「數知らぬ川をわたりて生地といふ浦にとまる」と書くべきであつて、生[illegible]

[illegible]

私はそこへ數年前、螢烏賊を獲る爲に招かれて一泊した事がある。日が暮れてから舟を出して、波の間に光りながら泳いでゐる小さな烏賊を手網で掬うてとる、丁度、螢を狩るのと同じ趣で、空と水が逢ふだけであつた。漁師達は夜から沈めておいた大きな網で獲る、網を絞り上げるにつれて、烏賊は驚く爲に非常によく光る、其がなか〳〵に美しいのだつた。そんな行遊の記憶を呼起されながら、私は、其近い光に輝いて、薄ぐろく、とろりと湛へてゐる富山灣に眺め入つてゐた。——富山——小杉——高岡——此邊は以前に二度まで遊んだ事がある。私は高岡の驛におりた。此地には古い同人達があるので、其等の諸君と久濶を叙べながら、或旅亭で午餉をした。そこへは、今夜私が泊る豫定になつてゐる新湊から迎への人も見えてゐて十人許りが連立つて出た。高岡から伏木驛まで輕便鐵道がある、乘つたか思ふと、もう降りる位の所だつた。そこに又新湊の同人が待ち受けてゐてくれて、同勢は大分に賑かになつた。私達の爲に用意してあつた發動機船で、すぐに海へ出た。浦の景色は斯うして海上から見るのが一番に好いのであらう。伏木の港を中にして西側、氷見に近い方を有磯海、東側を那古浦と云ひな

らはしてゐる。天平年間に大伴家持が國司として國府（伏木近くにあつたといふ）に赴任して來たので、此邊りを詠じた歌など、しぜんに多く萬葉集に取入れられ、其から歌枕として歌人達の訪ふ所となつたのである。私達の船は海を一巡し終へて新湊の町中の川へはいつた。川には漁船らしい船がぎつしりと繋いであり、水面まで屆く程に茂つた柳の葉が垂れ、船の上や柳の陰から、裸の兒がドボン／＼と蛙のやうに飛込んでゐた。新湊といふのは、水郷といふ感じのする所だつた。

私達は船で放生津潟を一周してから、町へ上つた。町の八幡宮の境内に芭蕉の句碑があるといふので、そこへも案内された。

早稲の香やわけ入る右は有磯海　　芭蕉翁

百五十回遠忌　天保十四年建之

社の裏手はすぐ海である。そこの松の木の根に腰をおろして、私は一日の輕い疲勞を沖から來る夕風の涼しさに吹かした。暑い日はもう、能登半島の方に傾いてゐるのだつた。蟻が、餌を持つてゐるのも居ないのも、忙しさうにあちこちとしてゐた。中には私の下駄に登つて來る奴もあつた。下駄も薄くなつたな、と私は旅に出て幾日になるかしらと考へてゐた。（八月二十七日）

倶利加羅越え

芭蕉が今の新湊なる那古の浦に泊つた日は生地を朝に立つて來たのだとすれば魚津、水橋――そこで北陸本道と離れて――夫からは海岸づたひを來たものであらう、それでも九里程の道のりである。乘り物を藉りないとすれば健脚である。上に擧げた一節「鼠の關をこゆれば越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る、此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病發りて事を記さず」とある。鼠の關から一ぶりの關まで、即ち越後の國の北端から南端まで八十里、之を病氣で弱つてゐながら九日で通過したとは早い、恐くは駕か馬かを藉りた所もあるのであらう。那古浦から先は、芭蕉時代の交通路は六道寺渡をわたり、國府、守山を過ぎて石動へかゝつたものださうな。然し、芭蕉は高岡の貸船町なる某家へ一泊したといふ口碑があると、之も花笠君の話である。其次に芭蕉は下川崎といふ所に泊つた、其證據は

先日は立寄いろ／＼御馳走草鞋までもらひ恭悦入申候翌日倶利加羅を越え金澤へ着申候又因緣も候はば追而懸御目可申也先爲御禮如此に御座候已上

七月二十一日　　芭蕉（華押）

宮永治兵衛殿

といふ書翰に據つてゞある。之は當今、福光町の石崎甚氏の有に歸してゐるさうだが、宛名の宮永治兵衛とは縣下東礪波郡南野尻村下川崎といふ所の豪農だといふ。そこは井波に近い所で、高岡の西南五里許りの所である。此書簡の通り、芭蕉が其日、下川崎を立つて倶利加羅に向つたとすれば、津澤を經、小矢部川の西岸を通つて埴生に出て、それから峠にかゝつたものであらう。さもなくば卯の花山を越えて、峠の中腹なる天池あたりへ出る小徑があつたものか。

「奥の細道」を見ると、斯うある。

『擔籠(たご)の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと人に尋れば、これより五里いそ傳ひして、むかふの山陰にいり、蜑の苫ふきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひをとされて、加賀の國に入

わせの香や分入る右は有磯海

卯の花山、くりからか谷をこえて、金澤は七月中の五日也』

其當時、藤の名所として名高かつた擔籠(たご)といふ地は伏木から氷見へ行く道の西田村に近い處で、今も上田子(かみたご)、下田子(しもたご)といふ小字があり、藤の木も昔の紀念として殘してはあるが、後に植ゑついだもので、今はじめに見るものではないといふ事である。實際の里數は伏木若くは高岡から三里足らずだから、行かうと思へば半日にも往復が出來よう。芭蕉は五里と聞いて、それでは一日路にむつかしく、泊めてくれる家がなければ猶不便すると思つて斷念したらしい。然し、其途中までは行つたものかもしれぬ。さもなければ「早稻の香やわけ入る右は有磯海」といふ句の心が生きて來ない、即ち、有磯海を右手に見て行く感じといへば伏木から（若くは高岡から）氷見の方へ行く道より外にないのである。

私は石動で、新湊から送つて來られた奥田作君と別れ、倶利加羅越の案内をするとて改めて高岡から連立つた花笠、紫の兩君と三人で峠の道をさした。秋に入つてから一層しうねくなつた暑い日がカン〱と照つて、田の水も沸き稻の葉も蒸されるやうな一種のいきれが道を歩きながら感じられた。芭蕉の句の「早稻の香や」とは斯んな風の感じではなからうか——。その道端にある田うちで早稻は丁度、花をつけてゐる盛りだつた。けれども、稻の花が香氣をもつてゐるものではなく、又、早稻の香、なかての香、おくての香と、匂ひに區別のある譯もなからうから、句の「早稻の香」とは、殘暑の田圃道に漂ふてゐる此一種のいきれだらうと思はれる。長い、退屈な行脚の間に出

はづれて、當今の國道（天田越）と離れて、私の所謂「早稲の香」の村道を十町ばかり來ると、埴生といふ小さい村があつた。こゝが舊北陸道、即ち倶利加羅越のかゝりである。「よくとれるむぐらとるきかい」と書いた札などさげて、雑貨を賣つたり茶店もする家で、私は草鞋を求めてつけた。此村の護國八幡宮に詣でて、木曾義仲が戰勝を祈つた願文も見せてもらつた。其時、源氏勢は七手にわかれて陣取つたのだが、總帥義仲の率ゆる一隊は此埴生に屯してゐたのだつた。平家の大將、維盛の率ゆる大隊は峠の天險に倚つて、上から應戰すれば敵に矢種を盡さしめることが出來ようといふ策であつた。さうした稍安心と長途の行軍の疲勞とで、さう氣が弛んでゐた夜半に源氏の軍は突如として三方から襲ひかゝつた。義仲は數百の火牛を叱咤して進んだ。それで平家の軍は總崩れにならざるを得なかつたのだといふ。此の昔の國道は今日では、土地の人より外にめつたに通る人はないらしく荒れきつてゐた。雑草の茂りが暑くるしく、急いで歩けばつく／＼坊師に鳴き立てられるのも氣ぜはしかつた。私が特更道を急いだといふのは、今夜も七尾で其地の人達に逢ふべき約束がしてあるので、汽車の時間に遲れまいとする爲だつた。當今の旅行は昔の人の知らぬ便利さもある代りに、昔の人の知らぬ氣苦勞もあるのである。ところどころかなり急な勾配があつた。登りつめた後は息をいれねばならなかつた。草に腰をおろして暫くすると、すぐ側できりぎりすの鳴いてゐるのが耳についた。何といふ靜かな眞晝のさびしさであらう。

天池といふ所はたつた一軒の藥家があつた。そこの井戸で私達は飽くまで水を呑んだ、水もうまかつたが井戸の上に掛けた小屋の日陰に身を入れる事が快かつた。其程に日影のない所を喘いで來たのだつた。上にも云つたが、芭蕉が峠にかゝつたのは此天池の邊からではないかと思ふ。それは「細道」の「卯の花山、くりからが谷を越えて」といふ文から卯の花山を越えて來たと解した考へ方である。その卯の花山といふのは倶利加羅峠を通ずる礪波山の續きで、天池の東南に當る小丘陵なのである。而して芭蕉が何故、そんな地名を特に擧げたかといふに、そこは古來の歌枕の一つだからである。

散りぬとも猶影殘せ白砂の
　卯の花山の短夜の月
　　　　　　新千載集　宗尊親王

雑草の中にちらほらと咲てゐるのは萩の花だつた。薄も、もう穂を立てゝゐた。一番早く時節を語るものは斯うした草のそよぎなのだ。私達は猿が馬場といふ所まで來て、又腰をおろした。芭蕉の句碑が立つて、そこでは蟲がしげ／＼と鳴いてゐ

た。

義仲の寝覚の山か月悲し　　芭蕉

此句は「奥の細道」には載せてなく、「猿蓑集」には「燧山」といふ前書がある。此奥の細道の旅の作ではあるけれども、倶利伽羅峠とは關係がない。たゞ義仲といふ文字があるので爰に建てたものであらう。もつとも其亡骸を義仲の塚の側に埋めさせて、「木曾殿と背中合せの寒さかな」と詠はれる芭蕉は、義仲と縁がないとも云はれない。猿の馬場から南に大きな谷がある。夜襲に逢つて混亂した維盛の軍勢が土地の不案内と暗さとに戸惑ひして、此谷に逃げ込みさまに坂落しとなり「馬には人、人には馬、いやが上に馳せ重りて平家一萬八千餘騎、十餘丈の倶利伽羅が谷をぞ馳埋みける」と源平盛衰記にある其谷で、それから地獄谷と呼ばれるやうになつたといふ。五社權現手向神社——何れも山中の祠としてしづまりかへつてゐる其處が峠の絶頂だつた。又、其處が越中と加賀との國境だつた。私達は襟に凉風を一ぱい納れながら、遠く近くの山々の起伏をいつまでも眺めてゐたいやうな氣がしたが、汽車の時間を思つてはゆつくりも出來なかつた。倶利伽羅村といつて、家が五六軒ある所から、道は瀧のやうに下るので、私達は脚をとめるまもないやうに走り下りた。其の向ふに河北潟の見えてゐるのが美しかつた。

汽車には三十分程の間籠をとつてゐる間にあつたが、驛に着いた時は水の中から上つて來たやうに身體はびつしよりだつた。峠の上り下り二里九丁、それを二時間で越えたのだから、かなりの強行だつた。七尾で、自笑、花不言の兩君に迎ひとられて、そこへ案内されたのだつた。其晩、私は能登の和倉の温泉へ行つて泊つた。（二十八日）

金澤

其翌日の午近く、私は金澤に來て居た。此地の良作、泣果の兩君とは初めて逢つた。良作君はつねづね此地に於ける遺跡を調べてをられるので、私を存分に引きまはさうと用意してゐてくれた。奧の細道の文「金澤は七月中の五日なり」に續いて

「爰に大阪よりかよふ商人何處といふ者有り、それが旅宿をともにす。一笑と云のは此道にすける名のほのぼの聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに

塚も動け我泣聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

　秋涼し手毎にむけや瓜茄子 ―

之だけが金澤として記されてゐる。然し、芭蕉は金澤に暫く足をとゞめてをり、門人としては北枝、牧童、秋の坊、句空、其他に小春、萬子の如き人々もゐたので、爰には當時の佳い話や面白い話がかなり殘つて、「俳諧世說」其他の書に傳へられてゐる。で、此地に於ける芭蕉に關する遺跡といふのも、つまり其等の門人の遺跡なのである。

良作君を先に立てて宿を出たのは、まだ日の盛りの二時頃だつた。其邊は片町といつて、目貫きの大通りらしいが、だるさうな空氣が澱んで、ゆつくりと流れて來る輕さうな電車が、犬が一疋ゐるだけの停留場をベルも鳴らさずに通つて行つた。電柱の影だけが焦げつきさうに印せられてゐる白い途の上を、私達は片手にノートを、片手に扇を使ひながら歩いた。

「官許、耆婆萬病圓」と大きな正覺坊の甲の形をした看板を軒に上げて、古風な黑い暖簾を張つてゐる藥舖が小春の跡を繼いだ家だといふ。小春こと宮竹屋伊右衛門は當時金澤三大藥舖の一つと云はれた富商だつた。或日芭蕉を自分の家に招いだ時、膳が撤せられてから、芭蕉は云つた――今晚のおもてなしは甚だ鄭重な御馳走であつたが、一つ遺憾な事は、これでは大名の御成のやうであつて、風雅のさびといふものがない、且つ此樣な山海の珍味は浮草のやうに行脚をしてゐる自分にはふさはしくない、此次に又會合でもある時には食事の心配などはなさらぬが好い――と。で、其次に淺野川の畔で句會をした時には、煎茶を出しただけ、夜も更けて一同ひもじくなつた頃、芭蕉が、冷飯でもあらば鉢ながら、お出しなされといつた、皆が圓くなつて茶漬をさら〳〵と食べた、其時も芭蕉は、風雅はすべて斯樣にありたい、酒食の齊に隙を費しては俳諧の味を忘るゝ事になるものだといつたといふ事である。「秋すゞし手毎にむけや瓜茄子」といふ細道にある句は、其時の作なのであらう、手毎にむけやといふ言葉に訓戒的の調子がある。小春の屋號は龜田といつたさうだが、今も「本舖、黙巣堂、龜田藥舖」と店に書いてあつた。此邊を片町と云ふのは昔、犀川の流に添ふた片側町だつた其名の殘りださうである。

金澤の市内には小い流が多く其水が美しいので住みよげな氣がする。其内でも三つ構といふあたりが殊にさうした感じだつた。一つの流に添ふてゆくと數百年を經たらうと思はれる老松が、昔は庭松だつたらしい枝ぶりに立つてゐる。別の小流には水車が仕掛けてあつて、涼しさうな音を立てゝゐる。其等の流に圍まれた一廓が、萬子の邸宅の跡だといふ。萬子は牛駒家の

分家で貴藏千石を食んだ人だから、其屋敷もかなり廣かつたであらう。自ら水園亭と號したのも、此水に圍まれた趣から名けたのであらうと想像される。芭蕉は爰にも一泊したらしい。其時、萬子が芭蕉に向つて、翁は諸國に門人が澤山お有りの事であるから其道の融通に御不自由はなさらぬであらう。自分は其外に立つて隱れたる俳諧の人々を物質的に扶けてあげたい、と云つたとの事である。當時の金澤の俳人としては一方に、萬子、小春の如く富んだ人があつたと共に、一方には北枝の如く貧しく、又、秋の坊の如く貧しさを通り越して食なければ食はずといふ風な境涯の者もあつた。而して貧しい人達の側に、俳諧の上手な者がゐたのである。

北枝は、芭蕉の諸門弟を全國的に見わたした上でも光つてゐる人である。奥の細道にある

途中吟

あか／＼と日は難面も秋の風　　芭蕉

の句に就て次の逸話もある。芭蕉は此句をわざと「あか／＼と日はつれなくも秋の山。」と書いて北枝に示したところ、彼の云ふやう、今一二里の路をかゝつて日の傾くのを惜しむ氣持、又、峯の空が夕焼けで遠山に松がくつきりと浮出てゐるやうな趣までも味はれますけれども、山といふ字がすわりすぎて景色に廣さが缺けてゐる、その點がどうでありませうかと答へた。芭蕉は、さればこそ金澤の北枝である。自分は最初、「秋の風。」と案じたので、秋の風が身にしむ夕べの感じに旅人としての自分の姿をもあらはした心であつたが、其を味ひ得る人はなからうと思つて、しばらく山と置いて見せたのだ、と云つたといふことである。北枝は家や世間の事などを考へずに、たゞ俳諧の道に遊んだ人だつた。いつも、杉綱代の大笠を冠り、櫻の太杖をついて獨り吟行に出掛けてゆくのを、街に群がる子供達が見て、「北枝おぢさん、何用があつて何處へ行かしやる」と問ふと、「おれは發句を拾ひに行くのじや」と答へる。其を面白がつて子供達は何時も同じ問を掛けるのを北枝も亦何時も同じやうに「發句を拾ひに行くのじや」と答へたといふ話も北枝らしくて面白い。北枝の家の隣に造り酒屋があつて其主人も如柳といふ俳人だつたので、彼は日毎に訪ふては酒を振舞つて貰つた。自分でも濟まぬとも、惡いとも思ひながら、遂にやめられなかつたといふ氣持は「夏酒や我とのり行く火の車」といふ悲しい句でも解る。その如柳の家だけは、今も「酒造、千代」といふ古い暖簾を掛けて殘つてゐる。春日町といふて、市のずつとはづれである。私達は、そこへも行つて見た。高道町の心蓮社といふ寺にも詣でて、北枝の墓を展した。門を入ると本堂の前、二本の松の邊り

に、句碑のやうな形の其墓に、「趙北枝先生」と記して歿年月日も添へてあつた。

其邊りは寺の多い所だつた。石垣の上に白壁を立てた構へと構へとの間が細い路となつて、右に折れたり左に折れたりする、そこを「宗祖大師舊跡巡拜二十四輩」と笠に書いた女達が腰蒲團を尻の先にペタ〳〵動かしながら歩いてゐた。私達は其中の蓮昌寺に秋の坊の墓を訪ねた。秋の坊は此境内に小さい庵を構へて住んでゐたといふが、三衣一鉢の外は眞に無一物であつた　或時、俳友の李東といふものに早稻米を貰ふ約束がしてあつたので、彼は其日早稻米粥をして進ぜるとて、友人を招いだところ、來る筈の米が遂に來ず、主人も客も饑をこらへたまゝで別れたといふ。又、彼は雪の降つた日、寒さに堪へず、「寒ければ山より下を飛かりに物打になふ人ぞ戀しき」と書いて萬子の所へ遣した。萬子は之は炭といふ字を隱したものと氣付いて炭を送つたといふ。芭蕉が金澤に來た時、秋の坊はふとした事から北枝と仲違ひしてゐたので、北枝は芭蕉の來た事を彼にだけ告げずにおいた。後に解つて、彼は急いで芭蕉の宿に赴いたが、それから句會の席で同人が列座した折に、彼は北枝には一言も物を云はなかつた、其の事を芭蕉は却ておかしがつたといふ話も「世說」にある。私達は其寺の庫裡にあがつて、「秋の坊にて」と前書のある「惑ひとつ有とて暮るゝ春日かな」といふ李東の句を通して其庵の樣を心に浮べた。一間を隔てて、尊さうな聲で提婆達多品を稽古讀みしてゐる聲がふと止んだと思つたらば、小僧が茶をもつて來てくれた。

それから卯辰山へは近かつた。卯辰山といふても町の後ろにある一つの丘で今は公園になつてゐる。其麓町に接した方に賢聖坊といふ寺が明治の中頃まで殘つてゐた。それが句空の寺だつたといふ。庭に大きな柳の木があつたので、句空は自ら柳陰軒と稱してゐた。

　　柳陰軒にて

　散る柳あるじも我も鐘を聞く　　芭蕉

此句は「細道」にはないけれども、此句を以て芭蕉が其時、句空の寺を訪れた時の氣持はわかる。談のいとぐちは一寸絕えたものの、默つて對ひ合つてゐることが却て舌を動かしてゐるよりも一層の親しみを感じあふやうに思はれる時、何處ぞの寺で打出す鐘の音に耳が澄まされる、見るともなく見ると、八月の暮れ近い空氣に柳の葉がひらひらと散つてゐる。さういふ靜かさと明るさとが此主客二人の心の靜かさと明るさとして現されてゐる。さて其句空の寺があつたといふ跡は杉の若木が生え近所の塵捨場のやうにされてゐた。鐘の音ではなく、三味の音が

きこえるのは近所に遊廓があるといふ話だつた。

私達は淺野川の岸に出た。一寸京都の鴨川堤の上の方に似た松並木があつて、水に添ふて茶店らしいものがある。小春が芭蕉を二度目に招じて煎茶だけを出したのは斯んな所だつたかもしれない。川は淺いらしく子供が裸で水遊びをしてゐた。

それから、つひ近頃になつて發見されたといふ一笑の墓を探ねる爲に、私達は市の他の端に來た。犀川を渡つて、川に近い蛤坂の成覺寺である。良作君も實ははじめてだといふし、住職も不在だといふので私達は、元祿元年といふ歿年と茶屋新七といふ俗名が刻してあるといふ話を手がゝりとして、古さうな、苔むした墓に一つ一つ手を掛けて探したけれども、とう〳〵其らしいものを發見しえなかつた。打連れて柿の木畑なる私の宿へ戻ると、未翁君と滿花城君とが待つてゐてくれた。未翁君はけふは新聞社の仕事が忙しかつた爲に案内が出來なかつたと云はれた。而して、近頃、同君の許に或表具屋が見せに來た芭蕉と曾良との筆蹟に依て、奥の細道の記事に正しい解註を得たといふ事を話された。その文は

一笑居士の塚に詣侍りけるにいとやさしき竹の葵のしるしになびきそひたるも哀まさりぬ

玉よそふはかのかざしや竹の露　　曾良

としの比我を待ける人のみまかりけるつかにまうでゝ

つかも動け我泣聲は秋の風　　芭蕉

「細道」には一笑の事を「去年の冬早世したりとて」と書いてあるが命日は九月二十六日、行年は三十六といふ事が過去帳に依て解つたといふ事である。

なにしろ、此半日で金澤を一巡し終つたのだから、忙しい事だつた。私は一風呂浴びて汗を流したく思ふたもの〻、其暇もなく、北安田の曉鳥敏氏を今夜訪ねる約束はかねてからあり、其迎へとして藤原鐵乘氏も見えたので、夜食の箸もそこ〳〵にして又宿を出た。電車で犀川大橋を渡る時、初めてしみ〴〵と夜の風を涼しいと思つた。（二十九日）

演藝時評

松竹座の三時間

正宗白鳥

六月の二十日過ぎ。梅雨時に雨がなくて、眞夏のやうな激しい日の照つてゐるある日の午後。淺草の方へ行つた次手に、はじめて松竹座へ入つて見た。「新人揃ひ」の「新劇團旗擧興行」といふ宣傳に心が惹かれたゝめであつた。見物席は上下を通じて滿員であつた。廣大な劇場であるが、築地小劇場に似通つた感じがした。牢獄に入つてゐるやうな氣がした。狭苦しい席へ割込んで、漸く腰を掛けてゐると、溫氣と人いきれで目がくらみさうであつた。場內一杯の見物人が汗みどろになつて舞臺の演技を鑑賞してゐるのを見ると、人間といふものは、かうまでも芝居が好きなのかと不思議に思はれた。芝居に限らない、他の如何なる遊藝でも、興行法が巧かつたら、乾度人を惹寄せるのであらうと察せられた。

私は、忍耐力を出して、第一の「地雷火組」の終りの方の二三場と、第二の「五右衛門の釜出し」の全部と、第三の「つゆ空」の前半とを觀た。大衆は汗に浸り暑さに喘ぎながら、退屈もしないで、此等の舞臺藝術を樂んでゐるやうであつた。「地雷火組」は、講談倶樂部所載の小說を脚色したのださうだが、二場か三場を見ただけでも、講談の特色たる英雄の活躍に接しられた。維新の英傑桂小五郎は、澤田正二郎の如き武勇を揮ふので「大衆」的見物はそこを喝采してゐるのだ。しかし、ここの立廻り、すなはち劍劇的行爲は、甚だ稚拙であつて、何等の形式美をも、あるひは野獸性を有つた人

間の血を湧かすやうな眞劍味をも現はさなかつた。私は、かつて支那の民衆劇の名人小楊月樓一派の芝居を見て、その變轉百出、妙を極め奇を盡すのに感歎したが、あれに比べると、日本の劍劇なんかは、無藝無能の所作である。だ、強者崇拜の念に燃えてゐる民衆は、「地雷火組」くらゐな平凡無味な劍劇によつてなりとも、その崇拜欲を滿足してゐるらしい。ヒロインの天人お吉が、大詰に於て、見物に向つて、この脚本の後編の豫告をするのは、洒落れた思付だが、これは、菊五郎が「半七捕物帳」に於てやつた前例を眞似ねたのではあるまいか。

このお吉に扮した花柳章太郎は、在來の新派から出た若手俳優中の有望な一人であるさうだが、このお吉には、舊歌舞伎の女形が傳統的に有つてゐるやうな一種の女性美が全く缺けてゐるし、新しい藝術美もない。その姿態は女の服裝をした男だ。聲も惡弊である上に、臺詞が男のやうだ。由來新派劇の女形といふものは、非藝術ないやなものであつたが、花柳もその衒套を脱してゐるとは思はれない。この座も新劇團を組織して清新な演技を試みようと思ふのなら、變態な女形は廢止して、女優を用ひるやうにしなければなるまい。

「三右衛門の賣出し」は、相當に見られる脚本であるが、中心人物三右衛門の臆病をあまりに誇張して、見物の嗤ひ物にするやうにのみ演じるのは、作意に適つてゐるのであらうか。見物は、その粗笨な英雄崇拜心から、講談的勇者の舉の重左とともに、三右衛門を侮蔑して喜んでゐるのだが、見物をして三右衛門の人間性に同感させるやうな演出をしてはいけないのであらうか。臆病者が偶然の事から男を賣出すといふことが世相に對する作者の皮肉なのであらうか、それは考へ落ちで、自然に見物の心に入込んで來るやうに運びがついてゐるのではないから、私はこの一篇を見終つたあとで、人生の皮肉が身に染みて感ぜられなかつた。八百藏の三右衛門は熱心に演じてゐたが、あのわざとらしい臆病振り、舊劇の道化役らしいやり口が私の氣に入らなかつた。「平將門」劇の三郎に扮しては異彩を放つた小堀誠も、この劇の重左では「でくのぼう」であつた。花柳の湯女は色つぽいところ更になし。

第三番目の「つゆ空」は、以上の二篇に比べると、稍々面白かつた。この一座が民衆的新劇の上演を企てゝゐるのなら、かういふ者から進んで行つたらよさゝうに、私には思はれたが、「地雷火組」風の創劇を主としなければ、見物も役者自身も物足りなく思ふのであらうか。「つゆ空」は、作品そのものも、在來の新派劇よりは進んでゐる。現代の人心に觸れるやうな臺詞も隨所に出てゐる。わざとらしくない世相の描寫がされてゐる。花柳章太郎もここでは現代の青年に扮して、前の女形よりも遙かに人間らしく演じてゐる。臭みもない。小堀の父親もいゝ。女優英百合子は、まだ素人で、舞臺に出てゐるといふだけの感じがするが、それでも、かういふ芝居には女形を用ひるよりは、下手でも何でも女優を用ひるのがいゝに違ひない。

三時間の觀劇で、耐忍力が盡きたので私はあとの幾幕かを斷念して外へ出た。淺草といふところへは、私は學生時分から可成り頻繁に遊びに來てゐたのだが、懷かしい印象は頭に殘つてゐない。江川の玉乘りか、源之助、鬼丸（後の二左衛門）などが出てゐた頃の宮戸座が思出されるばかりである。私は、十何年か前に、淺草のある小芝居で、先代の中村芝翫の「四谷怪談」の作り變へを見たことがあつたが、あんな陰慘ないやらしい芝居は外にないと思つた。今日徳川時代の演劇は、傳統的趣味を脱却して考へたなら、陰慘卑猥殘忍惡趣味の巣窟見たいなものである。「元祿歌舞伎傑作集」に收められたものを讀んでも、後世の濁流の源がすでに濁つてゐたことが察せられる。無法な專制政治の下に住んでゐたためか、當時の觀劇者の喜んでゐた演劇は痴呆性を帶びてゐる。痴呆者の夢を語つてゐるやうなものだ。ところが、この頃は、歌舞伎劇撲滅を志してゐた新進の劇作家劇評家その他の文學者までも、いつとなしに、この痴呆性の舊劇趣味にかぶれだしたやうに思はれる。……歌舞伎芝居を人間化したら、四谷怪談のお岩見たいなものであらうが、その惡女の深情けにまかれてしまふやうである。

文學に於ては、舊藩時代の草双紙趣味から全然脱却して、新時代の文學が兎に角樹立されたのだが、演劇に於ては、痴呆性の歌舞伎趣味を全然排除する譯に行かないのであるか。時によると、淺草へ出張して開演した小劇場の「夜の宿」は

舞臺の出來榮えも思はしくなかつたし、見物も多くは築地の定連で一般民衆には迎へられなかつたさうだ。それで、小山內氏も、新劇の前途について悲觀的な感想を何處かで洩らしてゐた。菊池寛氏も、新劇協會第五回興行のパンフレツトに於て、自分の後援してゐるこの新劇團の前途を危んでゐた。二氏の如き、新劇の先達に危まれるやうでは、前途を祝した現代の藝術を舞臺の上に見ることは當分出來ないと思はなければなるまい。

私が芝居を見はじめた頃から、歌舞伎劇の滅亡はいろ／＼な識者によつて豫期されてゐたのであつた。その一例を擧げると、島村抱月氏が大正五年に發表した演劇觀のうちに、「此節出すもの（所謂の出し物）は、大抵その內容も幾分は現代に同意のできる理路を持つものに限られてゐるやうだが、それですら、多くは情脈が陳腐で事件がツリヴイアルで、我々には我慢してゐられない。伊賀越がどんなであらうと、太功記がどんなであらうと、要するに下らないものである。あれを眞劍になつて見てゐる見物の顏を見廻しては、いつも失笑を禁じ得ない。ただその中のところ／＼に例の音樂的結晶點があるだけに、沙漠でオアシスに出會つたほどの清爽な氣持でホツとして救はれる。これは誰れしも同じ經驗であらう」（抱月論集による）と云つてゐる。穩健な批評家抱月氏が十餘年前にさう云つてゐる。ところが、この頃はまた歌舞伎劇が勢ひを盛返したらしく、在來の芝居愛好者ばかりでなく、新代の藝術にたしなみのある人々までも、伊賀越だの太功記だのを、眞劍になつて見てゐるらしいから妙なものだ。かうして歌舞伎の亡骸はいつまでも劇場から退散しないでゐる。

たほ、抱月氏は言葉を續けて「現代生活若くは現代解釋を內容に持つた芝居は、やはり新樣式の芝居に落ちつかねばならない。それにしてもその新樣式を探求し創建することを本意とする新劇に對して、世間の興味の徒らに冷却し行かうとするのは何故か。私はそこに細い幾多の理由があると思ふ。波はうねつても届くところまでは必ず届く。現代人の作る芝居はいつか一度は新劇の道に落ちつくべきであることは、丁度今日の小說が今日のところに落ちついたのと同じ道理である。未來は必ずこゝにある」と云つてゐる。これも穩健な說であるが、氏が十餘年前に云つたことが、まだ實現されない

ばかりでなく、吾人の眼前には實現の曙光すら見えないやうに思はれる。波はうねつてゐるばかりで、屆くところへ屆きさうでない。………自由劇場や藝術座や文藝協會の盛んな新劇運動も、要するに外國物の紹介をしたゞけのもので、新日本の演劇樹立の上には、どれだけの効果があつたかと疑はれる。劇場の構造や舞臺裝置は著るしく進歩したが、歌舞伎の亡靈が現代の俳優に取り憑いて舞臺の上に迷つてゐることは、昔も今も變りがないのである。昔面(つら)あかりに照らされてゐた亡靈が、眩燿たる電燈の下で氣おくれもしないで、右往左往してゐるのである。歌舞伎も時代によつて次第に變化してゐると、新劇には匕を投げて、徳川時代の延長たる舊劇の跼居に安んじる人も多くなつたやうだ。默阿彌と同じ範圍に屬する岡本綺堂氏の作品が頻りに推稱される所以だ。

ところで、私はこの頃から考へてゐる。――古今無比の演劇と云はれる希臘劇が完成して榮えてゐたのは、僅か數十年間であつたさうだ。最初の大作家エスキラスの戯曲が認められてから、最後のユーリピデイスの戯曲の出現まで、數十年の間に、希臘の演劇は發展し盡して、その後は云ふに足らなかつたのであつた。有名なエリザ朝の英國の戯曲も、マーロー、シエータスピアから、マッシンヂヤー、ウエブスターあたりまでの作品が、三四十年間に現はれたので、その後は、衰頽の道を辿る外はなかつた。今「元祿歌舞伎傑作集」を見ると、そこに收められた代表作は、殆んど元祿十年以後十年間の作に止まつてゐる。そして、編纂者は序文に於て「僅か十年間の作を以て、江戸の元祿時代を代表させるのは、少し範圍が狹過ぎはしないかと思はれないでもないが、江戸歌舞伎に關する年代記を閲しても、この十年間が眞に元祿時代の代表作の演ぜられた時期で」あつたと云つてゐる。實際、後年の江戸歌舞伎のいろ〳〵な趣向は、すでにそれ等の作に網羅されてゐるのである。後世の江戸狂言はたゞそれを敷延したのに止まつてゐる。………傑れた藝術はある時代にある少數の傑物によつて創められるので、そのあとでは、それを模倣しそれを補綴するに留まる時代が續くことは、歴史に徴して明かに知ることが出來る。日本の新演劇でも、眞に時代を劃するものの現はれるのは、氣運が熟して天才の出現する

時を待つ外はないのである。日本では、五十年經つても百年經つてもさう云ふものは現はれないで、淺草芝居の延長か西洋芝居の模倣かでお茶を濁すに過ぎないやうに運命づけられてゐるのかも知れない。

私は、今年の上半期に見た芝居を回顧すると、世評のよかつたものも惡かつたものも、要するに團栗の脊比べに過ぎなかつたのである。左團次でも菊五郎でも澤田でも、一時を糊塗してゐるに過ぎない。「水野十郎左衛門」「厄年」「宗右衛門」などは、この上半期に彼等によつて演ぜられた新作であるが、これ等の新作に、どういふ新藝術が存在してゐるのであらうか。松竹座の「つゆ空」に比べても、優れたところがあるとは思はれない。

帝劇の女優劇

帝劇に於て、はじめて女優劇が成立した時には、目醒ましく世の注意を惹いて、將來の劇壇の華やかさが豫想されたのであつた。徳川幕府の壓迫から生じた男優の女裝といふ不自然な風習から解放される時が、目前に迫つて來たやうに感ぜられたのであつた。梅幸なども自分の前途を悲觀してゐるといふことを聞いた。ところが、豫想の當らないことは、ここでも證明された。女優劇は次第に影が薄くなつた。帝劇でも、年數回の女優劇には入りが少くて、藝術上の評判も香しくなくなつた。どういふ譯であらうか。

私は、今月久振りに女優劇を觀た。第一の「良人に背く勿れ」は、撮影所秘話と割註のついてゐる如く、映畫撮影所の實地を見せてゐる。そこが一篇の見せ場なのであらう。作者近藤經一氏は、ある雜誌で、新劇は面白いものを見せなければならない。と云つて、この頃の新劇用の脚本が理窟つぽくて、どれも見物に興味を與へないのを非難してゐたやうであつたが、面白いといふこともいろいろに解釋される。この芝居の面白いのは、女優のダンスなど映畫撮影の光景と、撮影所の樂屋とを見せた點にあるのだが、その面白さは甚だ飽氣ない面白さなのである。幸四郎が主要な人物に扮してゐる

が、かういふ現代劇の立役には、給金の高い大幹部役者を用ひるのは無意味な贅澤をしてゐるやうに思はれる。あれは「幸四郎」だと云つて見物が目をつける以外に、技藝に於ては、幸四郎も、新劇團の俳優に比べて勝るところはないのだ。この女優は可成り容姿の美しいものを集めてゐるのであらうが、ダンスなどを見ると、體質が貧弱で、手足も不格好なことが目につくばかりである。見物を陶醉の境地に誘ふ力は缺けてゐる。今のところ、日本の舞踊は、在來の、衣裳つけた日本風の方がいいのである。舞臺の上で裸體美を現はすことは、現在の女優には困難である。

第二の松翁氏作、新時代劇「四谷五更話」は、例の南北物の作り變へである。舊幕時代の芝居には、作り變へが盛んであつたが、この頃も舊劇の作り變へが時々現はれるやうである。昔は、どの作者も作劇の態度が似寄つてゐたのだから、作り變へも不調和でなかつたが、この頃のは、西洋物の飜案と同樣な不調和が感ぜられることが多い。しかし、松翁氏の今度のは、氏の新作のうちではいゝ方である。お袖といふ女に對して、現代的解釋を試み、「如夜叉」たる女性の一面を描いたのも面白いし、南北に對するこの頃のイリホガな解釋に基いて、伊右衛門を弱い人間性をも有つた男として描いたのも面白い。怪奇殘忍な趣向を立てゝ、外面的に見物を脅かさうとした「四谷怪談」を内面的に取扱ふとした作者の着眼には、私も好意を寄せてゐるが、たゞ、この作者は、いつもの如く、狙つたところへ的中する技巧を缺いてゐて、南北を變にもぢつた馬鹿らしさが目に立つて仕方がない。氏が「舞臺藝術の最もよき師」として推服してゐる岡本綺堂氏の作品のやうに整然としたところがない。しどろもどろの感じがする。しかし、近代歐洲の戲曲に通じてゐるほどあつて、人間性に關しての目のつけどころに於ては、松翁氏は決して綺堂氏に讓らないのである。……この芝居では、初瀬浪子のお岩は、可成りよく演じてゐるが、干涸びた歌舞伎役者らしい印象が與へられる。村川かく子のお袖は、顏付からして現代風で、表現もいき〳〵してゐるが、現代物らしく、この姉妹の演出振りは不調和である。蒔洋藏の伊右衛門も川之助の直助も、その演出態度が歌舞伎と現代とのどちらつかずの合の子であつて、若い彼等もかういふ不徹底な演出では藝の修業として効

果が薄いやうに思はれる。

第三「[illegible]」は、聴いたゞけでは、作意がよく分らなくつて、極めて働氣なかつたが、あとで脚本を讀むと、作者の狙ひどころは分つた。役者が上べの氣取りを主として、役の心持を現はす用意を缺いでゐたのも、この芝居の働氣なかつた重な原因であらうと思はれる。

第四の池田大伍氏の「海道一夕話」は、第一場は面白さうであつたが、二場目で退屈さゝれた。段取はうまく行つてゐるのだが、中江と光政との取扱ひ方が、いかにも平俗で、私には喜劇らしい感じは少しも起されなかつた。幸四郎の中江藤樹は、聖人でも學者でもなくつて、愚鈍な村學究になつてゐた。松翁氏は舊時代を取扱ふのに、突飛な現代振りを發揮するが、大伍氏はそんな反抗は試みないでおとなしい。この芝居でも、光政が中江を試したのが在來の講談情調で、こんな馬鹿なことをしてえらがつてゐる大名を揶揄してゐるところなど全くない。最後に見物が笑ふのは、丁稚の十吉などが光政を大賊と見違へてゐた不敬の態度に恐縮する點にあるので、水戸西山公が、講釋師に化けてゐたあとで、正體を現はして、皆んなを恐縮させるといふ講談慣用の手段と同樣である。私はそこに溜らないいや味が感ぜられるばかりで、喜劇感は少しも起らない。

文壇的名聲に躍起しないで、獨自の境地にあつて演劇術の修養をしてゐたらしい池田大伍氏は、この頃になつて蘊蓄を傾けだして、作家としての將來を囑目されかけてゐるやうである。早稻田の文科出身者としては、色合の異つたところのあるのが面白い。早稻田共通の田舍くさいところのないのがいゝ。私は氏が、文壇の甲是乙非の雜論などによつて自己の藝術を濁されないで、「徳川喜劇集」の大成を期することを望んでゐる。「男達ばやり」は今度のよりはまだよかつた。氏の才分は、綺堂氏とはちがつた喜劇趣味にあるのかも知れない。あれには更に仇しやれた江戸藝術の空氣が漂つてゐたが、今度のは、道話じみてゐる。あまりに平俗に流れてゐる。

第五の「短篇喜劇」は、帝國劇場の女優劇には適當してゐる出し物である。太郎冠者の通俗喜劇は、つねに識者の嘲笑を招いてゐるが、しかし十數年間の女優劇に世人の記憶に殘つてゐるやうた優れた舞臺藝術が、他に有つたであらうか。帝劇の女優劇は、太郎冠者といふ作者を待つてはじめて活躍してゐるのではあるまいか。（私はあまり多くを見てゐないのだが、「ドッチャダンネ」といふものゝ面白さを記憶してゐる）

今度のでは、第一の「支那眼鏡」が最も面白かつたが、これは、西洋種なのだらう。あとの幾つかは陳腐で平凡だ。じかし、松助の膝を枕に女優が眠るなんか、演技以外に、珍奇な想像を我々に起させる。

總てを見終つたあとで、私は女優劇の將來には、多く期待を寄せられないといふ結論に達した、女優の素質が悪いばかりではない。太郎冠者の作品以上に女優を活躍させる脚本のないことも、女優が體裁ばかりつくろつて、新興の藝術に自己の身心を投出したやうなところがなくつて、いつも餘興劇らしいことも、見てゐて手頼りなく思はれる。……帝劇は折角、養成した女優劇をどうするつもりなのであらうか。このまゝでは、次第に發展する望みはたさゝうである。

南北と春水と

「鶴屋南北の復活」といつたところで、劇界に何等の刺戟を與へる譯ではないし、私達の觀劇慾がそゝられる譯でもないが、脚本缺乏の今日、さうでもしなければ、毎月の上演物に困るのであらう。市川左團次が南北創作の惡漢に興味を有つてゐると側聞してゐるが、彼れは何故にあゝいふ惡漢を演出することに興味を有つてゐるか、その理由を知りたいと私は思つてゐる。南北の惡漢には默阿彌の惡漢以上に根強いところがあるらしい。通俗的人情に負けるやうな不徹底なところがない。我々は日常生活に於て、妥協を事として弱々しく不徹底に日を過してゐるが、自分でもそれを歯痒く思つてゐる。だから、南北の惡漢は行爲は憎むべきものであるが、徹底してゐるところは痛快であると感ずることがないでもない。左

團次もさういふ氣持で、南北の惡漢に憧憬してゐるのであらうか。立場の太平次に扮し、あるひは修善寺隨作に扮して、舞臺に於てもろ〳〵の惡虐行爲を徹底的に演出してゐる間に、左團次自身の日常の安協生活（私の空想に過ぎないかも知れないが）についての鬱憤を晴らすやうな痛快味を感じるのであらうか。かういふ主觀的演技は、古今東西の演劇道の慣例はどうであらうとも、私の好むところである。假りに私が俳優であり、あるひは演出監督者であるとしたら、さういふ演出をしたいと思つてゐる。型を守つて、自己の心を離れて、美の表現なんかにのみ屈托するのは、張合ひがないと思つてゐる。

しかし、左團次は、そんなことは夢にも思つてゐないので、たゞ、一種の豪快味のある形の上の美を南北物によつて現はすことを好んでゐるのであらうか。五世幸四郎などの舊時代の傑れた敵役の舞臺繪を見て、そこに感興を覺えて、その再現を企てたのであらうか。それも賢明な思付でないことはない。歌舞伎ばやりの今日、江戸藝術江戸情調と一般的に云はれるものは、梅幸羽左衛門などの畑の物で、左團次には纖細優美な情趣は、あの先代左團次の後繼者として、先天的にも後天的にも、身に備へてゐないのである。ところで、江戸の舞臺藝術には、所謂江戸情調以外の敵役の江戸藝術があるので、左團次はそこに自分の柄に嵌つたものとして、新たに目をつけたのであらうか。さうすれば、今生きてゐる帝劇の幸四郎などよりも、藝道の向上心がある譯である。敵役と云つても、默阿彌のよく書いた五代目菊五郎型の、イナセな惡漢、愛嬌のある色氣のある惡漢は、左團次には相應しくない。それで、南北の惡漢、幸四郎の惡漢に、自己を見出したのではあるまいか。……私は、昔の歌舞伎役者のうちでは、南北の作品を通し、あるひは、幾つかの役者繪により、あるひは古劇通の記錄などによつて、この五代目幸四郎といふ名優を最も好んでゐる。あの怪異な容貌は、日本人には珍らしい。間延びのした江戸人種のうちでは殊に珍らしい。あの舞臺の姿態には、大地から巨木がむく〳〵と生へ出た感じがする。この歌舞伎のメフイストが、舞臺の上の小世界に現はれる美人や忠臣孝子を悉く徹底的に亡ぼして行つた豪快味を空

想すると面白い。……しかし、これも形の上のこと、外形だけのことで、內容に立入ると、南北も巫山戯てゐて、人生の不可思議さも、宿命の恐ろしさも感得してゐたのではない。今池田大佐氏の「私の南北觀」といふ研究論文を、早稻田文學の七月號で讀むと、南北の長所がいろ／＼に說かれてあつて、私も南北について新たに考へ直さうと思つたが、しかし、彼れの最傑作と謂はれる「合法ヶ辻」も、脚本を讀んだゞけでは、不快な連續と云つた感じがした。幸四郎の舞臺姿を空想裡に浮べてゐる時のやうな豪爽な感じは得られなかつた。

それから、昨秋帝劇で見た左團次の「合法ヶ辻」は、あまりよくなかつた。

七月の歌舞伎座の南北物「杜若艷色紫（佐野八橋）」は、あれに比べると、よほどよかつた。「合法ヶ辻」ほど、筋が入組んでゐないのも、今日の上演に適した譯である。舞臺裝置が美くて、手馴れた役者が揃つてゐるので、間の拔けた舊い作意も、どうにかなだらかに運んで行かれた。

序幕で松蔦の八つ橋が、花道へ出て來るのを見ると、無論昔の花魁といふ感じはしないが、美しい。その美しさは帝劇の女優などとは比べものにならない。今日の女形は日常生活に於て昔の女形のやうな身だしなみを忘れてゐるから、變生女子の美を昔のやうに舞臺に現はし得ないと非難されてゐるが、今日の女優はその女形にさへ及ばないのだから駄目だ。

梅幸のお六は彼の近頃の當り藝と云つてもいゝのであらうが、彼れ自身、この役をやりたがつてゐたといふ風說は、若しそれが興行者の宣傳に留まらなかつたのなら、彼れの心境に對して私は興味を覺える。梅幸も六十に近い老年に達してゐながら、いつも、三千歲やお富や、かういふ型のいろ／＼た女に扮して、淸元情調を發揮するのは、さすがに飽き／＼してゐるだらうと察せられる。金が取れて見物も喜んでゐるのだから、繰返し／＼さういふものをやつてゐればいゝ譯であるが、いくら無自覺な俳優でも、たまにはそれだけでは物足りなく思ふことがあるであらう。土手のお六は默阿彌物よりも多少キビ／＼してゐて、梅幸も不斷よりいくらか氣が變つて、淸新な感じがするであらうと思はれる。しかし、默阿

藝術上激しい葛藤はないので、かういふものゝ、何處まで行つても[illegible]である。……作品の
ますやの裏手非人小屋の縁切れの如き、お菊とお六のだんまり、其趣を變へた斬り首をかゝげて臺上に配された次郎左衞門と相對して、歌舞伎式趣向様式の相殺であるが、要するにこれつきりで、彼等の喜怒哀樂は我々には何の關係もないのである。……「縁切り」といふ筋立てには、昔から男女の葛藤があつて、いつの世の人心にも觸れる部分のものであるが、歌舞伎なる作劇の「縁切り」は、甚しく紋切型で生氣がない。神經の鋭敏な現代人には、その男女の間拔けさ加減は、たゞ馬鹿らしいのだ。俳優はどういふ心持で演じてゐるのか、私は訊きたいと思ふことがある。自分の扮してゐる次郎左衞門とか八つ橋とかいふ役に同感を持つて演じてゐられるのであらうか。たゞさういふ役を割當てられ、さういふ臺詞を云ふべく命ぜられてゐるから、その通りにやつてゐるだけなのであらうか。

劇場發賣の繪本の筋書を讀むと「時の鐘が人の心を搔きむしるやうに、餘韻を引いて流れる」とか、「五月の空の時鳥、啼いて行くへも知れぬみじか夜。聞くも悲しい」とか、妙なことを云つてゐるが、これ等の詞句は南北情調には甚だふさはしくない。

大詰の「土手のお六」の住居の場は、筋が少し込入つてゐる。こゝは、南北の時代の世相の寫實があつて、昔卸し當時には帝劇の「撮影所秘話」の如く、見世物師の住宅の光景として裏門から見たのであらうが、今日の見物の目には切實な感じが起らない。宗十郎の作兵衞の如き、勞して功なき役である。何處まで行つても、無内容な形式美で、從つて「お六の住居」よりも「吉原土手の」劇場の場がいゝ。お六と願哲の立廻りなど、左團次も親讓りの煩雜無味な活動を脱して、菊四郎型の爽快な形を見せてゐる。かういふ所を見ると、左團次もなかなかうまくなつたものだ。少くも先代よりも舞臺藝術家として傑れてゐるに疑ひない。

形式美と云へば、中幕の「繪本太功記」十段目の尼ヶ崎閑居の場は、歌舞伎形式美の完備したものであらうが、私は、

かういふ芝居は昔から好まない。私はいく度もこの十段目を見てゐるし、どうした運か、大阪へ立寄つて文樂座へ行くと、よくこれに打突かるのでうんざりしてゐる。攝津大掾のも聽いた。越路太夫のは三四度も聽かされた。そして、最初越路のを聽いた時には、流石に感心した。攝津の平坦な語り口は、黑人の耳には、技巧の極と感ぜられたのかも知れないが、私の耳には熱意の失せた老衰の聲調として響いた。

中車の光秀も、味のない福のない、歌舞伎の殘骸である。活歷系統の老優であるためであるか。左團次の久吉も綺堂作中の人物の如く、源之助の老婆は借り物の如く、寄せ集めの、間に合はせものゝ尼ケ崎といつた感じがする。全體に、俳優諸君も興味がないらしく、サラ〱と夏向きに演じてゐる。

二番目は「梅曆」。

私はこれを機緣として、かねて讀直したいと思つてゐた「梅曆」を手に入れて、ところ〴〵拔讀みした。そして、思當るところが少くなかつた。私は、少年の頃、まだ十歲になるやならずで、八犬傳を耽讀したが、その後で讀んだのが「梅曆」であつた。無論、僻陬の漁村の一少年であつた私には後者は八犬傳よりも難解で、何のことやら分らないで、お蝶米八仇吉などの會話を素讀してゐたのだ。しかし、今思ふに、「梅曆」は[illegible]文學史では、「八犬傳」と對立する價値を有つてゐるばかりでなく、大學者の曲亭翁が支那小說の模倣を事としてゐたのとは違つて、無學な俗物たる春水が獨自の境地を開いたのは、えらいといへば云へないことがない。「梅曆」の模倣者は明治の中期にまで達してゐる。紅葉山人の「三人妻」の菊住と才藏の痴話でも、緑雨の「かくれんぼ」でも、作者が趣向を立てる時に、意識的か無意識的か、「梅曆」の支配を受けてゐたと、私は推察してゐる。

皮相な寫實で冗漫で、今日の時世では通讀するに堪へないものであるが、「梅曆」の流行と云ふ歷史的事實によつて、私は人情の機微に觸れる思ひをしてゐる。

今度の歌舞伎座では、永井荷風氏の舞踊劇、山本有三氏の新作戯曲といふのだから、近世の浮世の物語と相並んで、「梅暦」の上演には、當代作家の興行的作品が並んでゐるほどである。……改めて云ふまでもなく、満員の挿いた浮世繪が開展されてゐるやうである。憾みを拔取つた逸の口説が連續して、見物の涎を充分に垂らしてゐる。しかし、「梅暦」の寫實を、現今の身邊雜記小說の寫實と同一視するのは當を失してゐる如く、七月の歌舞伎座の「梅暦」を天保時代の世相の再現だと思つたら大間違ひなので、さう思つて見てゐる見物は、お歴々の名前によつて一杯喰はされてゐるのである。本當の江戸情調はむしろ一番目の南北の方に見ることが出來るくらゐのものだ。あれは水野越前の革新運動行前後の「梅暦」の世界と云ふよりも、むしろ「鞘くらべ」の世界に近いのだ。明治聖代の色男であり藝者である。さう云ふと、すべての江戸狂言が現代化されてゐるので、今度のも例外でないだけだと云へるであらうが、しかし、羽左梅幸の三千歳直侍などには、傳統的に江戸情調を湛へてゐる。木更津の「見染め」の場の與三郎など、昔卸し當時の色男を連想させられるやうで、たしかに、明治大正の色男ではない。しかし、今度の丹次郎は、習ひ覺えた型がないためか、羽左その人の感じがする。左團次が南北を研究する如くに、羽左衛門も、「梅暦」を熟讀して、英泉の挿繪でも研究したなら、もつと昔の影を身に宿すことが出來たであらう。彼れは、丹次郎に扮しながら丹次郎を冷かに批評してゐるやうだ。今にも自分で噴出しやしないかと思はれるやうな空々しさが見えた。「梅暦」の丹次郎は理智を忘れて來たやうな男で、ベタ〳〵してゐる。羽左の藝風のやうなスツキリしたところはない。江戸氣性の辰巳藝者は、スツキリした男に惚れるものと私は思つてゐたが、案外さうでないらしい。口では氣の利いたことを云つてゐながら、つまりはデレ〳〵した男に現を拔かしてゐたことは、「梅暦」を讀んでも知られる。春水は無意識に江戸末期の女性を諷刺してゐると解釋してもいゝ。さういふ意味で、春水は馬琴よりも時代の批評をしてゐると云つてもいゝ。

藝者の風俗は無論天保時代の風俗ではないのだ。梅暦の記事や挿繪によつても、天保の深川藝者たる彼等が、日常あん

な華美な服裝をしてゐたやうには、私には思はれない。梅暦の前編たる「春色惠の花」のうちに、例の大通人山城河岸の津藤をモデルにしたと云はれる千葉の藤兵衛が、愛人お由に對して、「このむすめを今一際みがきをかけて存分なる好みの衣裳を着せたらば、辰巳に名高き唄女でも、折江町のなにがしでもなか〱これには及ぶべからず、自由にならばまづ此所にて着替たい」と、胸の中に讀へる氣の一重ねを工夫して、「極上あつらへ織の白七子を御納戸の紋付に染め、江戸褄模樣にこぼれ梅紅白の上繪彩敷銀糸にて松葉をちらしに縫はせ、野暮なるやうでもこまかなる模樣にすれば、御納戸に松葉の銀糸も古風に見えず……」と、流行を穿つ心から粋な苦勞をしてゐるが、これは、當時金にあかした飛切の趣向なのである。色男に貢ぐために屈託してゐる米八や、慾深い母親にうたぐられてゐる仇吉などは、そんな贅はつくされたかつたに違ひない。さういふと理窟に墮して芝居氣を失ふことになるが、舞臺の風俗は天保の江戸からあまり離れ過ぎてゐることはたしかである。で、すべてが梅暦の現代譯であるが、人物としては、宗十郎の米八が、最も原本の人物を髣髴させてゐるやうに私には感ぜられた。梅幸の仇吉は、見物に與へる印象は、灰汁がぬけて、意氣で、藝者々々してゐるが、要するに現代化した默河彌劇中の女性らしく、宗十郎には粘り氣があつて、丹次郎に附纏ふ執着がある。淸方式繪模樣ばかりを主として、すべて奇麗事で飽氣なく演ぜられてゐるうちで、宗十郎だけには人間の影が差してゐる。

芝居を單なる遊びとして見ると、「梅暦」の上演も目先を變へた一つのいい趣向である。しかし、こんなのは一度で澤山だ。

荷風隨筆

永井荷風

梅雨日誌

六月廿三日。梅雨に入りてよりすでに十日ほどになりしかど、雨のふりしはわづか一日のみにて、日々外出のをりにも傘持つことを忘るゝばかり、曇りし日さへ稀にして、雲なき空は今日もまたきのふに同じく、あを〳〵と晴れわたりぬ。されど昨日より吹きつゞきし西北の風、濕氣を帶びて、いよ〳〵烈しく吹きすさみ、庭の木かげ又は窓ぎはの椅子に靜坐すれば、忽肌のひややかなるを覺ゆるに、始めて黄梅の時節とは知らるゝなり。小道を隔てたる對門の家の石榴花日ごとに花さき増りぬ。と見れば北鄰りの家の庭よりわが方に枝長くさし延したる桐は、いつの間にか截られて幹のみとなり、あたり俄に明くなりぬ。菊池五山が絶句に窓外の梧桐の伐られたるを悲しみて「栽レ桐幾歲近二階除一。最愛扶疎入レ戸初。不レ忿家人危剪薹。朝來無三意愛二吾廬一。」といひし一篇もおのづから想起されたり。きのふも一昨日も箒持たざりしかば、さらでも烈しき風に椎の古葉と竹の落葉は狹き庭を埋めたり。朝餉のショコラ啜り畢りて、書齋の塵を拂ひ、また庭に出で落葉を掃ふ。垣のほとりの梔子は花まさに盛りなれど、あまりに風の烈しきにや、近寄りても香氣少し。野薔薇は花大かた凋れて、姫百合擬寶珠の莟早くもふくらみ、金糸梅の黄なる花また咲きそめたり。突然門の戸引きあけ、郵便脚夫大きなる書留郵便を示し見留印を乞ひて去りぬ。竹箒片手に封筒を開き見れば、是歌舞伎座盆興行二番目狂言の臺本「梅ごよみ」の謄寫摺りにて、木村錦花氏かの爲永春水が人情本梅暦を採りて三幕八場につくりなせるものなり。過る日川尻

当澤氏當座に訪ひきたりし時、來月木挽町にて二番目の狂言には梅ごよみを出すべき筈なり。ついては原作者春水が戯作を始めとして、殊には江戸深川のことに關しては、日頃の御研究も尋常ならざる趣、既に世人も知るところなれば、この度錦花君書きおろしの狂言けいこの節には、御足勞ながら是非御出席ありていろ〳〵御垂教に與りたしと、物慣れたる勤め上手に、さすがの吾もいやとは言はれず、それがし元來芝居のけいこには到つて不慣れにて、何の役にも立たざるは知れたことなれど、木挽町の役者衆とはその後掛違ひて久しく言葉を交す折もなかりし故、久振りにて舊交を温むにはうれしきかぎりなり。且はまた御存じの如く、毎日爲すこともなく欠伸のみして暮す身の上なれば、御邪魔ながら稽古場へ參りて袖を賣り申すべしと返事せし事ありしかば、早速落葉掃く竹箒はそのまゝ庭の隅なる物置小屋に投込み、書齋に入りて、まづ讀過稿本の第一冊を見るに表紙次の如し。

梅ごよみ

爲永春水原作
木村錦花脚色

興行權	松竹
版權所有	合名社

序幕
向島三圍堤上の場
向島隅田川の場

第一冊序幕の稿本を讀み畢りし時、午砲の響きこえて家の老婢挽割飯(ひきわりめし)に味噌汁一椀、澤庵漬兩切を添へたる膳を持ち來り、室の片隅なる小さきテーブルの上に置きて去れり。是余の常餉なり。余は日々下女より旦那様今日の御かづは何にいたしませうと聞かるゝがうるさき故、味噌汁の身は豆腐にあらざれば大根の千六本、また漬物は澤庵漬にあらざれば白

瓜の粕漬と定めて、他のものは用ひず。また朝餉は佛蘭西製のショコラ一椀にアメリカ製のクラウカース四枚と定め置くなり。晩方にいたり散歩の途次、夕餉だけは市中隨所の飲食店に入りて、茲に始めて食事らしき食事をなすなり。さて先の日も郵送せられし錦花君の脚本梅曆第二冊目深川尾花屋門口の場、同じく奥座敷の場を讀み畢るほどに、机上の時計早や四時過となりしかば、讀み殘しの第三冊(三幕目)の脚本を携へて門を出で、裏手の崖道づたひに源空寺門前の坂を下り麻布谷町通の電車に乘りて銀座に出で、日頃行き馴れたるカツフエータイガーに立寄り二階へ上り、階段に近きテーブルを擇びて食事を命ず。余は炎暑の日にも開放ちたる窓際に坐する事を好まず、また扇風器の風に吹かるゝことを好まざる故、此のカツフエーに來つて樓に上るや必ず階段に近き處に坐を占むるなり。醉客の格闘するは是酒舖にては殆每夜の事なり。されば階段に近きあたりに坐を占むれば、いざ喧嘩となりて、コップ、ビール罎など投付けらるゝも、後に硝子窓壁等なければ硝子の破片の飛び散る虞もなく、且は速に身をかはして逃るゝことを得べし。諺にも家の閾をまたげば仇敵七人ありとの誡は今の世にても猶心得置くべき事なりかし。去る五月末の夜のことなり。生田葵山氏と此のカツフエーに飲み居たりし時、雜誌□□の編輯記者なりと自ら名乘れる男、學生風によそほひなしたる壯丁四五名を伴ひ、樓上植木鉢のかげなるテーブルに座を占め、其男一人立つてずか〳〵とわが卓子の傍に來り、「貴兄はいつぞや我等の雜誌に寄稿すべき事を約束しながら、其實を果さず、却て近頃中央公論なんどに助力せらるゝは如何なるわけなるや。我等の雜誌には反感を抱かるゝにや其返事きゝたし。」との暴言に葵山君忍びかね、余がために其の無禮を詰問せんとしたれども、余は先刻より植木鉢のかげに數名の壯丁、事の起るを待ち構へたる形勢、劉玄徳が鴻門の會見にも似たるを推察したれば、葵山君の袖を引き、勘定も支拂ふべき暇なく、そこ〳〵に逃げ歸りしこともありたり。わづか十年前頃までは新聞の記者雜誌の編輯者などいへる人々も實は皆文學の士にして、世事人情に通じたるもの多かりしに、今はさながら議員選擧の運動員の如き粗暴の輩のみとなりしも是亦時勢のなす所なるべし。さて其夕は無事カツフエーにて夕餉をすませ、歌舞伎座樂屋に松莚子

を訪はんとて三原橋を渡りしに、偶然前川桔梗に逢ふ。桔梗は戯曲家瀬戸氏の弟にして高島屋門下の女形なれば、「師匠は猶楽屋の部屋にゐたまふや」と問ひしに、桔梗答へて「今日は中幕いつもより十五分早く幕になりし故師匠は既に二番目の序幕に出でられたり」といふにぞ、余は楽屋に行きても詮方なしと思ひて、表木戸より劇場に入り、假花道揚幕の傍に設けられし舞臺監督室に入りて直に携へ來りし梅暦の三幕目をひらきて讀む。この監督室といふは觀客席平土間の後に在りて、其の窓より覗ふ時は、觀客席全體と舞臺一面を望み得るなり。演技中川尻君、この室にひかへゐて、道具の飾付、電氣光線の強弱、俳優の位置等を仔細に検視し、いさゝかにても非難すべきところある時は、直に机上の電話にて、舞台裏へ通知し、係りの者に注意する仕掛なり。この夜は既に千秋樂に近く平素の如く検視の必要もなくなりし頃とて、川尻君は室に在らず。其門人谷岡氏のみ殘りてゐたり。余は谷岡氏がすゝむる番茶を飲み、清潭子の机に憑りて梅暦の謄寫本をよみ行く程に、舞台にては富士松加賀太夫が新内の淨瑠璃にて松莚子が扮する源五兵衛、荒次郎の中間を相手に晩酌の一場、いつしか幕となる。再び拍子木の音聞えて千草屋店先の道具替る頃、余は一先梅暦三幕を讀み畢りし故谷岡氏を誘ひ、劇場を出で銀座通りを歩み、またもやカツフェータイガーに憩ひ、電車にて家に歸る。机上の時計を見るにいまだ十二時に到らざれば、直に書篋を開き、爲永春水の原作梅暦、また同じ種類の人情本春曉八幡鐘、春色湊の花など取出して後、猶豊芥子が岡場所考、哭大全なんど、凡てこの度の狂言に參考となるべきものを擇み出して閲覧するほどに、夜はいつか二時とはなりぬ。留守中に來りし郵便物を取り、其の中にて活版印刷の書状、及ペンにて書きたるものは封を開かずして屑籠に入れ、在來形式の封筒に筆にて認められし書状の返事をかき、門外の郵便箱に投じぬ。深更の空を仰ぐに雲間に淡き星を見たり。明日も亦晴天なるべし。

六月廿四日。陰晴定まらず風は依然として濕氣を含みて冷かなれど、昨日の如く烈しからず。午前八時起出でてショコラを啜り、二階の書齋寢室の塵を拂ひ、窓の植木鉢に水を灌ぐこと日々の如し。下女は下座敷事務所を掃除するのみ。

余は元來學問の事は及ばぬまでも自ら務めて人の手を借らざることを旨とせり。是一つには運命のためなりき。また二つには一旦事ありて家を失ひ、奴婢を使ふことも出來ぬ境涯に陥ることありてもさほど不自由を感ぜざるやうに平素より心懸け置くが爲なり。禪家の僧は自ら炊事をなすのみならず法衣をも手づから綻縫するものと聞きぬ。余も此は此の心掛にて襯衣足袋等の破れは手づから針を持ちてつくろふ事を怠らざるなり。衣類と食事とに女の手を借らざるやうに日頃より心掛け置く時は、たとへ或る時女の色香に迷ふことありても深味に陥り後悔することなし。現時わが國家一たび教育の方針を誤りしより都鄙上下の別なくわが國の婦女は怯懦懶惰となり家事を取るに拙くなりし故、男子たるものはこれに鑑して柳廓の心掛は必要なるべきやに思はるゝなり。書齋の掃除をなし眼り點滴して後、昨夜取出せし雜水の尺牘本一二三讀むほどに、午前十一時頃、歌舞伎座樂屋頭取電話にて二番目狂言の稽古程なく始まる由知らせ來たりしかば、出入の車宿より人力車を傭ひて赴きぬ。樂屋口にて靴をぬぎゐたりし時、澤村源之助後より來かゝりて挨拶す。源之助のことは芝居の人々田圃の太夫さんと呼ぶなり。吉原の裏田圃に住するが故なり。大正四五年頃源之助明治座にて高島屋と一座せし事ありしを以て、余はその頃始めて此名優と相識ることを得たりしなり。源之助其の頃國學の趣味あり、又古ぎれ更紗などの鑑識殊に深かりし故雜談の折々教を受けたること多かりき。總げいこ場は樂屋口正面の階段を上りたる二階の大部屋を以て之に當る定めなれば、余は頭取に挨拶してすぐさま梯子段を上るに、廊下には名題下の役者門弟、男衆供大勢つめかけ、大部屋上座の方には羽左衛門梅幸、左團次、宗十郎等席につき、下座の方には名題の役者にて二番目に出づべき人々ひかへたり。狂言方は中央に机を控き、既に序幕のけいこに取りかゝりゐたり。是の日のけいこは本稽古と稱して役者は各自の席に坐したるまゝ、書拔をひらきて臺詞の讀合せをなす。その際讀みにくき所あれば役者は作者或は臨時依囑の考證監督者、または狂言方に向つて、臺詞の添削を請ふ。囃子方よりお附師と稱する役目の者この席に來り、役者の讀合せを聞き、大體の合方鳴物を帳面に記載し置くなり。衣裳方小道具の者も來りて直接に役者の注文を聞くなり。是日本稽古は午

後二時頃に終りしかば、銀座のカッフエーに立寄り食事して家に歸る。留守の中神田今川小路の古書肆村口方より天明安永頃の武鑑貳拾部ほど屆け來れり。故渡邊霞亭翁舊藏のものなりと云ふ。夕刻より南風次第に烈しく吹きまさり、初更に至つて雨そゝぎ來れり。過日古書展覽會にて獲たりし千葉芸閣の文集を把りて燈下に讀む。風雨夜を徹して歇まず。

六月廿五日。風雨午に近きころ始めて歇む。晝飯すませて後筆硯を洗ひ、人よりたのまれたる扇子團扇に塗鴉を試むること拾餘枚なり。芸閣文集を繙く中いつしか睡魔に襲はれ、覺めて後沐浴して日の暮るゝ頃、銀座のカッフエーに赴きて夕餉を命ず。余は市中の洋食屋にて物食ふ時はスープは必ず澄みて薄きものを擇び、パンは燒きたるものを好めども決してバタを附けず。市中の洋食屋にて純良なるバタを用るところは南鍋町の風月堂のみなるべし。洋食屋の魚類は決して口にせず、肉類は煮込みたるものを避けて燒きたるものを命ず。これ肉の良否を辨別するに容易なるを以てなり。過日も新聞紙に市中不良牛乳販賣者檢擧の記事ありしにあらずや。現代日本の商人には公德心といふもの塵ほどもなき故、吾等日常の食物につきては平素の用心ゆるがせにすべからず。市中街路の如きも市政を掌るもの皆奸吏なるを以て、地中の漏電しばゝゝ人馬を斃死せしむる例あり。されば靴の裏に針を打つは危險なり。蝙蝠傘の柄も金屬製のものは避くべく、杖の先もなるべく地面を突かぬやうにすべきなり。是夜生田葵山君たまゝゝカッフエーに來り、このほど豆州某處の湯治場に遊び、昨夜歸京したりとて、審にその地の勝概を說き、杏子枇杷の實の味美なりしを語る。既にしてカッフエーの婢女閉店の時刻來れるを告ぐ。樓丁また將に燈を滅せんとするに驚き、卓子を立つて尾張町四辻に出で、葵山君と別れぬ。枕上讀殘の書を讀むこと每夜の如し。

六月二十六日。午前曇りて風涼し。今日は木挽町茱屋の稽古一番目狂言のみにて二番目は休みなれば終日家に在りて心しづかに日課の書を讀む。午後雨ふり出しがしばらくにして歇む。夕景より松莚高橋君が駿河臺の新邸に招がれゐたりし故、車を倩ひて行くに、岡鬼太郎、池田大伍、川尻淸潭の三氏も亦例の如く招かれて來り會す。是夜饗宴の献立は忘れたればし

ろさず。吾等階下に在るを知りて、主人の令閨食後時刻をはかりわざ〳〵四谷竹町をつくりて一碗を送らる。此夜壁間に掛けし日本文廟再建の時、隣家北馬の描きし畫像下圖三幅を獲たり。又さる店にて蜀山南北が僧坊の壁にかきし日本畫賛の一幅を獲たりとて示さる。岡君は玉川の家まで路遠ければとて十一時頃先に歸られしかど、吾等二人は猶居残りて談ずるに時の移るを知らず、十二時過ぎて後、いざ歸りなんとなりて、もう一杯御茶の欲しいのをと客の方より遠慮もなく申出で、主人が家の自働車に送られ、大伍子は尾張町四辻、清潭子は芝公園、余は霊南坂上といふ路頭にて車を下りぬ。深夜の風冷なること秋の如く、空は墨の如し。我居の門をくぐりて入るに木陰に咲き残りし梔子花のかをりかすかに流れ来りて靜寂の面を撲ふ。庭は板塀見るかげもなき敗亭の廢園も、深夜にいたれば雅趣しば〳〵棄てがたきものあるを覺ゆ。道戯のことと余既に窮況雜記といふ斷稿にしるせしこともあり。この夜枕上に駄句を得たり。

宵ごとに傘のおもさや五月雨
紫陽花や身持よからぬ庵の主
鍵穴をさぐる戸口や飛ぶ螢
夏草の匂ひも闇の夜ふけ哉
蟾蜍ばかり迎へに出たり石の上

六月廿七日。おそく起き出でたり。梳頭盥漱を終れば日は既に午ならんとす。白雲の去來するにつれて、雨まばらに降り來りてはまた晴る。晴るゝ時日の光靜々として燒くがごとし。木挽町稽古、今日は一番目より二番目まで通す由なれば、晝餉して後家を出でしに、門前にて折好く關文學士の來るに逢ひぬ。春陽堂合作本の中掛作校合のことにつきてなり。川作をかたり合ひつゝ杉木の生垣づたひに源空寺門前の坂を下り、谷町に出で、共に三原橋行の電車に乘る。三原橋のあたり道路既に泥濘をなせり。麻布の道は砂利すこし潤ひしのみなるに下町に來れば此の泥濘を見ること、流し水はけ

のあしきが爲めなるべし。樂屋口に到るに、可江子歯を病みて來らざりしとて稽古は早く終り、一同將に歸らんとする所なり。去つて銀座のカツフヱーに憩ふ。晝の中は樓上客少く、明けたる窓の光線、据えたらべたるテーブルの面に反映して人の眼を射るのみ。余は酷暑の時と雖も冷たきものは口にせざるを以て廣東茶を命ず。樓婢閑暇の時を幸ひに扇子を持來りて揮毫を請ふものあり。筆硯なければ家に歸りて後塗抹すべしと答へて、晡下樓を下り、銀座通を歩み、新橋を渡るに、夕陽の空染むるが如く水に映ずるさま、淸親版畫の趣あり。燈下日課の書を讀む。

六月廿八日。晴れて蒸暑し。淸潭子より電話にて、二番目稽古の時刻を通知し來りしかば、午後三時頃樂屋稽古場に赴く。是日のけいこは附立といひて合方鳴物立廻りの手順を定むるなり。淸元榮壽太夫の連中梅暦二幕目出語りの新曲を奏す。節附の模樣素人耳には甚拙し。明石島蔵の狂言に用ゆる「雁金」に似たるが如き心地したり。稽古日沒とともに終りぬ。

六月廿九日。晴れてます〳〵暑し。今日は太挽町けいこいよ〳〵物浚となりたれば、午後車を倩ひて赴く。物ざらひの日には、囃子方一同樂器を携へ下座に居ならび、狂言方は机の上に拍子木を持出で、幕の開閉、道具替の知らせも、舞臺開演の時の如くに打つなり。一番目より中幕、それより二番目と順次に稽古をなし、狂言方大詰幕切のトメ木を入れるや、囃子方大太鼓を打上げると、頭取今日は御苦勞と挨拶をなし、役者一同座頭羽左衛門を先に手を拍つて目出度く締めるを吉例とす。是日鏑木畫伯門人を從へ始めて稽古場に出張せらる。畫伯は此度二番目狂言梅暦の道具衣裳の考案を擔當せられしなり。稽古終り、役者みな〳〵歸りし後、鏑木久保田の二畫伯をはじめ大伍淸潭錦花の三子いづれも舞臺に行き、應大道具の飾付を調べ、明日舞臺ざらひの節手落なきやうに注意をなす程に、夏の夜はいつしか二更に達したれど、二番目の道具調べいまだ終らず。萬事を錦花淸潭の二子に依賴し、余は大伍子と共に樂屋を出で、表通にて別れ、獨り三原橋をわたるに三十間堀地藏尊の緣日にて、いつもは物さびしき河岸通り、まさに人の出さかるころなり。この緣日は新橋の藝

鼓の來りて植木草花を賣ふもの多き故名高し。河岸づたひに龜井橋のたもとに到れば、露に色增す草花の鉢を、浴衣がけの美女、團扇片手に三々伍々逍遙するものあるを見る。十年前までは橋北に娼名を賣するものにして余の之を識らざるは稀なりしが、今は今晩はどちらのお歸りなど聲をかけるものも絕え果てたり。往時を追囘して覺えず悵然たり。年々歲々綠日の草花は相似たりといへども、歲々年々人は同じからざるなり。銀座通りに出で、電車を宇田川橋に乘換へて、獨り家に歸る。明日晦日（みそか）なるを心づき、臺所の諸勘定をなすに、地代を除き、米炭洗濯下女給金をも加へて總高五十圓を出でず。平生獨居のわびしさも月末ばかり大に心安し。

六月三十日。朝くもりて晝頃より晴る。風吹き通へども溽暑甚しく靜坐するも油汗いづるほどなり。籬邊の夾竹桃蚤（はや）くも二三輪の花をつけたり。例年は土用に入りて始めて花ひらくに、是を以て見るも今年の梅雨、晴れつゞきにて、いかに炎威の熾なるかを察すべし。姬百合の蕾又旣に色づきたり。午前勉强して中央公論の草稿をつくる。歌舞伎座、今日午前十一時より舞臺ざらひなすを以て、正午電話にて余が受持の二番目序幕にかゝるべき時刻を問合せて、三時近きころ樂屋に入る。「梅曆」序幕高二重の土手を上下に引り割り、隅田川水面を見せ、蛇の目廻しにて舟の摺れちがふさまを見せる道具、手順なか〳〵困難なり。舞臺ざらひ終りしは夜も初更を過ぎたる頃なり。每日の炎暑に疲勞すること甚し。歸途狂言方竹柴蟹助氏と共に銀座を步み、カツフエータイガーに憩ひ、三更家に歸る。

七月朔。晴。歌舞伎初日。（寄稿〆切の日なれば略してしるさず。）

文藝時評

佐藤春夫

社會的小說

明治文化の研究は今日一種の流行である。その理由は何所から來てゐるか僕はまだ考へて居ない。しかしともかくも一つの流行的現象に相違ない。僕は別にさういふ考へもたくただ正宗氏の高教に對して答へる必要上、透谷樗牛といふ明治中期の二批評家の文藝評論を讀み返して見た。さうして甚だ偶然にも僕は自分にとつて一つの發見をした。それは樗牛の所謂「社會的小說」なるものについての一考察である。

僕は我國の今日の小說が餘りに個人的であつて社會的ではないといふことは既にこれを述べ、さうしてそれは今日の小說作者が餘りに年少にしてその活動を始め所謂文壇なる別社會にのみ生育して限られた自己の身邊にしか思索と觀察との視野を持たないがために、それは內面的心理的にはこれを深めることは出來ても、その世界を廣めるといふことは甚だ困難なのであらう。といふことをも既に述べたやうに思ふ。また小說といふ文學形式は夙に世相と人情とを描くといはれてゐる如く、人間の性格描寫と社會の文明批評とを双眾とすべきが原則であらうといふことをも述べたやうに覺えてゐる。

ところが、樗牛の「文藝評論」を通讀してゐるうちに僕は樗牛が屢々「社會的小說」といふ言葉を用ゐてさういふ種類の小說を當時の作者に向つて要求してゐるのを知つたのである。「明治三十一年の小說界」といふ一文の中には當時の少

壯作家不知庵、鷗外、風葉等の作品にその傾向が既に現はれてゐることを述べてゐる。この傾向が紅葉、露伴、その他の老大家によらずに前述の少壯作家によつて多くその例を見たことを「特に注意すべき價値あり」としてゐる。「暮の二十八日」の作者不知庵——內田魯庵氏は、就中當時に於いて作家としても又批評家としても、所謂社會的小說の主唱者であつた。樗牛は同じ論文の中に「露伴の社會的小說に對する批評」の一項目を作つて當時約二年間筆を收めてゐた大家露伴の當時の文壇に對する意見を引用してゐるが、露伴の言葉はこゝにもう一度僕をして引用せしめるだけの値打がある。

今の小說の讀者は、お孃樣に非ざれば書生、書生に非ざれば親の脛かぢりのみ。作家の目當とする所の讀者皆是の如くにして已むべけんや。苟も作家として世に立たむもの、少くとも三十歲五十歲以上の所謂世間の人に感興を與ふるの作無くして可ならむや。

又

是の活動せる社會に親炙せるもの、爭でか是の如き作家の箱庭觀察に滿足するを得むや。今後の小說は如何の傾向を取るべきや、竊に想ふに、今の物よりは其の內容に於て豐富に、其の形式に於て實世間に接觸するものなるべき乎。

樗牛は露伴のこれらの言葉を引用した上で「斯かる理想派、主觀派の作家にして、尙ほ且つ人に勸めて實際的たれ、客觀的たれと說く、批評家が千萬言にも增して、まことに好く文壇の氣運の那邊に向へるかを表明するものに非ずや、如何。」といつて彼自身の言說を裏書してゐる。

諸君は僕の文藝時評が、昭和二年のものではなく明治卅二年の時評であるかを疑ふかも知れぬ。しかし僕としては露伴のこれらの言葉は今日でも——といふよりも偶々今日の文壇に持つて來て見ても或は適用するではないかと惧れるのである。さうして頃日正宗氏が僕の時評に對し樗牛の時評を思合して「歷史は繰返すか」といはれたのを僕は思出し、さうし

て歴史は繰返すと僕は考へるのである。單に批評家の言葉が繰返されるのではない。現象そのものが繰返されるがために、從つて個々批評家の言葉も亦繰返されるのである。僕は自分が今日いはんとしたことと甚だ相似た言葉を明治三十二年の樗牛の、また或作の言葉に見出した。さうしてこれを自から奇異に思ふ程である。しかし考へて見ればそこには何の奇異もない。明治三十年は今日の時代がさうであるが如く一つの文學的精神が——硯友社的文學が殆んど爛熟の域に達してゐた當時である。さうして今日の我々の時代は今日の我々の或る文學精神の全く爛熟した時代であることを見るがいゝ。しかし僕がこゝでいはんとする所のことはこれらのこと以外に別にあるのである。

硯友社的文學がすでに爛熟して了つて社會的小說などの呼聲のうちに數年が過ぎて了つた。その後に勃然として起つたところの新文學は、樗牛が數年前に早くその風潮を察し萌芽を發見したところの社會小說なるものではなく、却つて全く別様の文學であつたことは甚だ面白い事實である。即ち僕は自然主義文學のことを指していつてゐるのである。自然主義運動が當時の社會の齎らしたところの文明批評的意義は一種の社會的事實ではあるが、この自然主義文學の精神なるものは寧ろ文學に於ける個人主義的運動なのである。この意味に於いては自然主義文學は寧ろ、內部生命の存在を說き反功利主義の藝術を述べた透谷などの思想の一展開ともいふべきものであるかも知れぬ。自我を說き、感傷を退け、すべての權威を假なりと叫び、本能にのみ人間生活を見出し、一切の詩美をさへ拒んだこの文學を解釋して、個人解放の文學と見ても差支なからうと僕は信じてゐる。さうして社會の常識、社會の良心に向つてなされた挑戰的の態度の中に、自然主義文學運動は一個の社會的要素と文明批評とを藏してゐたのである。勃興當時の自然主義文學が今日の我々の文學よりも、もつと文明批評を含んでゐたといふことは前にも既に述べたけれども、それに對して近松秋江氏は頃日僕の意見に對して反對らしい意見を發表された(「新潮」六月號)。近松氏はほんの數行の間にこれを述べてゐられるので、その意嚮のあるところを充分に諒解することは出來ないけれども、近松氏は自然主義文學が文明批評的要素がなかつたことをその當時から

不滿に思ひ馬琴の如き文學を作りたいことを念願としたといふ意味のことを述べてゐられるのを見ると、氏は尚も文學の功利的要素といふことと文明批評的要素といふこととを混同してゐられるのではないかと僕には思はる。僕を以つて、いはしめれば自然主義文學が反功利的で又反社會的であつた點にこそ、その當時の時代に對する文明批評を認め得るのである。ともあれ、自然主義文學精神といふものは個人主義の自覺に基いた文學であるといふ僕の見解は大過ないであらうと自から信ずるのであるが、さうして我々の今日の文學なるものはさまざまの部分的修正は行はれたけれどもその根本の精神に於いては結局自然主義文學の流れを汲んだ個人主義の文學であり、又個人主義の文學としては正に爛熟の域に到達してゐると考へるのである。かういふ場合に倘々無產階級文學の呼聲が高いのを聞いて僕はまた再び歷史は繰返すと思はざるを得ないのである。無產階級文學とは正しく一つの新社會的小說に外ならないからである。さうしてこの繰返しをも僕は決して不自然とは思はない。

明治の新文學として現はれた硯友社の文學は、外來の海彼岸の文學から多少の學ぶ所があり、しかしより多く西鶴の文學に負ふところがあつたのは既に人々の知るとほりである。しかし硯友社の文學が西鶴の文學の如く尖鋭な社會的批判にまで到達するほど眞に世相を捉へ得たかどうかは、僕の日頃から怪しんでゐるところである。硯友社同人の描いた世相なるものは、世相と言ふよりも寧ろ時代風俗とも稱すべき、世相とは甚だ相似て然も甚だ同じからざる、即ち單に外面的なものであり過ぎたかの如くに僕は感じてゐる。さうして硯友社の諸才人がいかに早熟であつても、二十才の青年が西鶴の如く世態の眞髓にまで穿入して行くことが出來なかつたのは是非もないことである。さうして硯友社の文學運動の完成の後に、彼等の風俗小說を眞の意味の世相小說、社會的小說に變らせようと希望したのは當時の批評家のよき意見であつた。それにも拘らず次ぎに起つたところの新しい文學運動は當時の批評家達が夢想することもなかつた別種の一精神であつた。僕はこれを面白い事實だと既に言つた。このことについて僕は一家言をしよう。僕の見るところを以つてすれば、

明治といふ時代は少くともこの三十年の間にはまだ本當の意味に於ける近代の社會はそこにはなかつたのである。さうしてその形態だけが全く新しかつたのである。この當時の文學者たちが新しい風俗以外に新しい社會精神を描くことが出來なかつたからといつて、これはあながちに彼等を批難すべきものではない。何故かとなればそこには新しい風俗以外には、ほんとうに新しい生活はこの新社會の中に發生してなかつたのではなからうか。微小ではあつたけれど近代人の先驅とも見るべき透谷の如き人物は殆んど時代と關係なく生きてゐた。そこに彼の悲劇的生涯があつた。しかも時代の精神は國力の膨脹とともに長足の進歩を遂げて國民は餘に近代主義の精神に觸れたかの如く見える。即ち自然主義運動及び所謂危險思想家と呼ばれた一團の人々の影響は國民に近代生活の洗禮を與へて了つたのである。かうして昨日まではただ新しい風俗だけしか持たなかつた一つの國家が、新しい群集の精神と新しい個人の生活とを開始した。かうしてほんとうの意味に於ける近代の社會を我々は持つことになつた。新しい社會がなかつた時にはたとへ社會的小説の呼聲があつても事實に於いてそれは現はれ得べくもなかつた。しかし今日に於いてはもうここに立派に近代の社會が存在してゐる。さうして明治以來の我々の新文學ではただ極く力のない萌芽を示しただけでつひに成立しなかつた社會的小説も、今日に於いてはもし人々にしてその志があるならば立派に存在し得るだけの下地を持つてゐるのではなからうか。

しかしすべての社會的小説は必ずしも今日の無產階級文學的でなければならぬかどうかは疑問である。僕はそれよりも寧ろすべての作家がそれ〴〵の主張と思索と信念とに從つて、ともかくもつとその視野を社會全般の生活に向けることによつて、また自己を社會的考察のなかに投入することによつて、それ〴〵の見地からそれぞれの社會的小説を試みるのは必ずしも不可能ではなく、また無意義ではないであらうと信ずるのである。

戀愛の文學・友愛の文學

「預言をするに最も適當な人々が、どんなことが起らうとしてゐるかを暗示しようと試してゐないやうである。セーンツベリー教授は、知らぬと明言してゐるが、英國の民族と國語の心髓には、何か新しいものを生ずる力があるとにしてゐる。ダウドン教授も亦知らぬと云つてゐるが、新文學が起るだらうし、これには哲學が大いに關係を有つだらうと考へてゐる。ゴッス教授のみ、大膽に公言してゐる。彼は一卷の中に、工業、技藝、商業の或る全部門を描出して能事とする、ゾラの方法でなくては、小説は書けなくなるだらうと考へて居るが、ゾラの方法は、天才に兼ねて非常な勤勉力ある人に由てのみ採用し得られるだらう。且つゾラの方法で扱つてゐるやうな題材でも、結局盡き果てるに相違ない。心理小説もあるが、チョージ・メレディスの例で、最早流行する機會の無いことが、わかつてゐる。古い意義に於ける小説は、恐らくは運命は盡きて了つてゐる。それとも、短篇小説に限ることとなるだらう。詩の方では、戀愛の題材を殆ど構はないで、主として一層高尚な感情生活に力を籠めることになるだらう。換言すれば、新しい心理的詩が出來ることになる。ゴッス氏の以上の意見は、頗る面白いが、私はそれに贊成して云々する時間が無い。私は唯だ、こんな見込に就いての大評論家の意見を、諸君が認めることを熱望するだけである――第一には、戀愛が將來の散文又は詩の主題ではあるまいといふこと。第二には、一層高尚なる感情生活が、以前情慾生活に與へられた地位に代はるのは、殆ど確かだらうといふこと。」（小泉八雲全集十三卷「散文小品に就いて」）

小泉八雲は彼の文學論集の中で澤山の暗示に富んだ議論をしてゐるが、玆に僕が引用したのもその中の一節である。このエッセイの大體の意嚮は、今まで約百年間跋扈してゐた小説は今日徐々に衰微しつゝあり、形態を變じつゝあり、さうしてその形態の變化は、譬へば衣服の格好といふよりも寧ろ衣服を作る材料に於ける變化ともいふべき根本的のもので、この種の或る新樣式の小説が今に必ず發展して來るだらうことを述べ、さうして今日まで小説の主題として欠くべからざるもののやうに思はれて來た戀愛は、今日以後必ずしもその普遍的な主題ではなく、あるまい――一體文學上に戀愛を取扱

ふことは、別に何も文學の本質な不變の約束ではなく、單に一つの流行にしか過ぎないので、しかしその流行が數百年續いてゐるので人々はその現象を見て何かこれを文學の本質でもあるかのやうに思込んでゐるのだ。この見解を論者は文學史上の事實によつて論證してゐる。さて言ひつづける――人々が最早戀愛小說に就いては飽き〳〵して了つた今日、さうしてまた作者としても今までに戀愛事件のあらゆる形が書かれて了つた今日、文學的主題としての戀愛の價値は餘程少くなつた――と、八雲はこのエッセイの第一段に於いて先づかう述べた上で、彼の見解が單に彼一人のものではないといふ證據として、エドモンド・ゴッスその他の批評家たちの意見を援用したのである。それが僕のこの文章の冒頭にある一句である。

事實、僕も亦、戀愛小說に飽き〳〵してゐるといふ讀者の聲を時折り聞く。しかしあらゆる戀愛的新脚色が八雲のいふが如く果して盡きて了つたかどうかは、彼もさういふだけで論證してはゐないから、我々も直ぐに肯くわけにはゆかない。さうしてまた戀愛なるものが人生の中に存在する以上それが文藝的取材としていつも價値を失はないだらうとも僕は考へる。しかし戀愛が文藝の上の甚だ主要な題目としてさういつまでも取扱はれまいといふ彼の云ひ分には甚だ僕も傾聽せざるを得ない。

これは僕の考へであるが、戀愛は社會がこの個人の慾望を抑壓することが強ければ強いだけ、そこに始めて複雜な人生の意味を、即ち文學主題としての價値を帶びて來るのだが、しかし男女間の道德について社會が昔日の如く窮屈な要求を持たず離婚或は結婚或は三角關係等について社會も相當な寛容を個人に對して示すやうな時代になるに從つて、戀愛の文學主題としての價値も、今までに比べて餘程輕微なものになつて來ることは考へるに難くない。この事はただ空論だけではなく大戰以前と以後とのヨーロッパの戀愛を取扱つた小說を見る時に、そこに自からはつきりした區別が出來てゐることを見ても察せられる。婦人運動の結果婦人の使命が擴大され、婦人たちの個人的自覺が深められた後では、戀愛は確に今までの社會の男女が經驗したが如きそれ程の事件ではなくなつて了ふだらうと僕は思ふ。八雲は戀愛的脚色はもう殆ど書き盡

して了つたからとだけしか云はないが、我々の前述の考へに比べると餘り簡單過ぎるやうな氣がする。けれども文學に關愛を主題とするのは數百年に渉つた流行的現象だと道破したのは面白い。これらの論旨及びその證明に關しては、直接八雲のエッセイを參照せられるがいゝ。

そこで僕はこのエッセイの第二段に進むが、この結論ともいふべき部分は、今日になつて見ると寧ろ至極平凡なものである。つまり八雲は隨筆だとか小品だとかいふ形式によつて書かれた家常茶飯的人生の中から詩趣及び人生的暗示を拾ひ出した散文の例を幾つか算へ上げて、それによつて彼は彼の學生たちに新文學の一つの道を示してゐるのである。さうして最後にいつてゐる。「私の考へでは、現代の「人道」といふ語が、希臘人の所謂情けといふ意味を最もよく現はすだらう。さて、この講義の主題であつた種類の作品は、特に情けの文學に適當して居る。生活、思想、感情、悲喜哀樂の小描寫を世間に發表するのが、尋常一般の人心を覺醒して現代の最も深刻に要求する無我的同情の念に徹底させる最良の方法である。」と彼の說を結んでゐる。

僕は八雲のこの後半の主張は甚だ平凡なものだと云つたけれども、それはしかし決して主張者の不名譽ではない。といふのは、この半ば豫言的な主張、或は勸誘はその後間もなく實現せられて、我々は我々の身邊に殆ど彼のいふが如き家常茶飯的な小品文を、小說として澤山持つことになつた。志賀直哉氏の短篇の如きがこの場合絕好の例として數へられるであらう。さうして若し八雲がそれを讀んだとしても僕と同じことを或程度まで認めるであらうと信ずる。かういふ譯で八雲のこの主張は今日では却つて分り切つたことのやうに見えるのである。ただ、手法に於いては八雲のいふが如き傾向の作品を我々は數限りなく知つてゐるけれども、その割合に彼の所謂「情け（ピテイ）の文學」といふもの、その精神は八雲が切望した程には現はれてゐるやうにも思はれぬ。しかしこれとてもその例がないわけではなく、フイリップの短篇の如きは正しく絕好の「情けの文學」である。さうして我々はそのやうな作品をまだ自から生み出すことは出來ないけれども、でも本當に

賛嘆することを知つてゐる。

フイリツプの短篇は量に於いて小さなものではあるけれども、しかしその暗示するところは至大なものではないかと僕は考へる。彼の文學の示してゐる情けとは要するに友愛に外ならぬ。まつたく、彼の文學は友愛の小品と呼んでも不足がないであらう。この點では今日の我々の知つてゐる所謂無産階級文學者たちの作風と、フイリツプのものとは同じやうな精神の下にあるかどうかは知らないけれども、見たところ全く似ても似つかないものである。

僕は今までにも屢々考へるのであるが、人間の最も高尚な感情生活は友愛の諸相より以外にはないのではあるまいか。これに比べると戀愛の感情の如きは一つの困つた病氣である。僕は八雲のこの意見を讀み、彼やエドモンド・ゴツスの觀察及び意見を甚だ興味あるものに感ずると同時に、新文學を作るべき材料ともいふべき「一層高尚なる生活感情」とは人類の友愛の、感情でありさうしてそれが「以前情慾生活に與へられた文學上の地位」に代はるのではないであらうかを、私かに豫想するのである。さうして今日の階級鬪爭的無産階級文學が我々人類の友愛の道に於ける荊棘を切り開く以外に他意なきものであるとすれば、それは本質的に新樣式な文學の非常に微かな黎明であるかも知れないと感ずる。さうしてユートピヤの夢想などによつて又その外の例によつて、「文學史上まつたく無かつたものではないところの人類の廣い意味での友愛、或はまた些やかなしかし細やかな隣人に對する友愛、またそれを妨げるところの人類の悪い約束、またはそれを妨げるところの個人の小さなる自我、さういふものに對する爭ひや悩みや考察や、さては又完全に遂げられた友愛の美しい實例や、さういふものがこの後數世紀間に渉る人間世界の文學上の主題として、それは今まで戀愛がさうであつた如く、その時代々々の相をはつきりと反映しながら、時代につれてさま〴〵に變化し、進歩し、開展しながら續けられるのではないかと僕は夢想する。また單に文學だけではなく、人生そのものに於いても友愛の問題が戀愛の問題に代はるのではないだらうか。さうしてその時戀愛も亦友愛の一種にまで變るだらう。さうして我々人類の生活はその時一歩向上した

といふことも出來るだらうと信ずる。

それにしても果して今日以後の散文は、小說の形ではなく小品で盡きたらうか。この點は僕は知らない。しかし必ずしもさうではないと思ひ、またもし小說といふものの本當の仕事から言へばエドモンド・ゴッスのいふが如く、「一卷の中に、工業、技藝、商業の或る全部門を描出して能事とするゾラの方法」なるものが、たとひ天才と異常な努力とを必要としても、作者に向つて要求されていいかと思ふ。

「大道無門」の作者に無駄話

里見弴君。氣候見舞と久濶とを先づ述べます。さてもう月おくれになつてしまつて、それでなくてさへ言はでもの事なのですが、御承知の枚數の都合といふ奴で何か書かなければならないのですが、外に手ごろなこともなく、貴君に無駄話をさせて頂きます。といふのは「文藝春秋」六月號の「心配二つ」とそれから兼ねて御恵投の「大道無門」とを研究して、ちよつと貴君に且つは敬意を表し且つは少少說明申し上げたいのです。說明の方を先に言はぬと敬意の方が引立ぬやうな譯があるので先づその方から始めますが、それは「心配二つ」の件です。

「この頃は、立派に敬意の持てる作家たちが揃つて評論の筆をとつてゐる」と言つて、貴君はそれを心配の一つにしてゐられる。「立派に敬意を持てる作家たち」と貴君に言つて貰へる柄かどうか、そこのところは自分ではわからないけれども、いやいや、はつきり言ふ方がいい、貴君は或る程度までは作者としての私をも認めてゐて下さるのだと思ふが、さうして僕も亦、作家にして御覽のとほり評論を試みてゐる者です。それでこの立場の僕として、貴君の言ひ分に對して少少申し上げたいのです。

貴君は「私の經驗では、評論や感想のやうなものに、うんと力を入れるとか、續けさまにいくつも書くとかすると、だんだんあたまに抽象ぐせがついて來て、いやにギス〳〵筋ばつたり、ついひと言で云つてのけられさうな氣がしたりして、とゞの詰りは馬鹿々々しさに、えゝ、めんどくせえ、となつて了ふのがきまりだ」と言はれる。その點全くその通りで、僕なども實はもう貴君の所謂「えゝ、めんどくさい」（――ではない、めんどくせえですか）になつて來てゐる折からです。「だから、私は、なるたけこんなことはしないやうにしてゐる」と言はれるに到つては、名人を志す小說作者としてはむしろ至極な心掛けだと感じ入るのです。全くさもあるべきことゝ僕は同感したのです。貴君はまた「朝に評論を書き夕に小說を綴つて少しの差障りも感じないのならば、無論これに越した結構なことはないのだけれど、もしさうでないとすれば、何態ないと思ひ無駄な話だと思ふ」と言はれる。しかも僕は差障りを少しは感じながらも、貴君のやうには考へずに、これからさきも或はもつと評論も書き、出來るなら小說も、詩も、或は講演でも何でもやりたいと思つてゐるのです。この點を少し貴君に聽いていたゞきたいのです。

貴君のお考へと僕のものとを比べて考へてみると、貴君は小說といふものを貴君の生活の上に君臨させてゐるかの如き觀があります。それだけが第一義の仕事のやうに思ひ込んでゐられるやうな點が見えます。僕に到つては必ずしもさうではありません。僕は自分を表現するに適する限りのあらゆる方法を辭せないのです。貴君が小說といふものをそれほど第一義的にお考へになるのは、單に小說作者といふ商賣柄だけではなく、その仕事のなかに貴君自身を表現するに最も遺憾のない方法を發見されてゐるからでせう。即ち小說を書くといふことと、生きるといふ事とが同一不二といふことにまでなつて來てゐられるのでせう。さう考へると、貴君は羨しい人です。そこから移動しなくてもいい故鄕を持ち、或は決して浮氣などしたい衝動を持たせないほどの細君を持つた人の如く羨しい限りです。御承知の如くバルザックは小說以外には何も書かなかつた人ですね。さうかと思ふとダ・キンチのやうな人もある。

さて僕は貴君が小説にはそれほどの意義を見出されてゐるにも不拘、いや、それだからこそ目のただないいかも知れないが、ともかく貴君は小説にくらべてその他のものを、少くも評論といふものを、その種の文章の意義を、面白さを解せられないが如くに僕には見えるのです。そのしるしとして僕は貴君の次の言葉を考へるのです「…讀む氣でゐるうちに、誰か來てその内容をあちこちと話して行く、するともう、小説と違つて、讀む興味の大半が失はれて了ふので…。」貴君は小説と違つてと言はれる。僕には貴君の言葉は解しにくい。僕はさういふ點では小説も評論も全く同じ事だからです。誰かが來て或る評論の内容のあちこちを聞かせる。さうしてそれが何か有意味でありさうだつたら、或はまた途方もなく思ひもがけない事だつたりしても、僕は人づての評論の荒筋に興味を呼びおこしてそれを自分で讀んで見たい氣持になること、全く小説のそのやうな場合と擇ぶところはないのです。その爲めに、「小説と違つて、讀む興味の大半が失はれて了ふ」やうなことは先づ少しも僕にはないのです。現に、僕が今ここで話題にしてゐる貴君の文章だつて、僕は正宗氏の紹介によつて知り、わざわざ讀んでみるつもりになつたのです。それも必ずしも自分に關係がありさうだからといふ理由ばかりではありません。さうして拜見して僕は、貴君の文章が貴君の小説同樣に甚だ面白いのを感じました。その面白さは正宗氏の紹介ではとても想像も出來ない種類のものです。それは貴君の文章の言外にある貴君の小説に對する信仰、(?)批評に對する謬見(失禮ながら僕にはさう見える)を、發見する上にも役立つし、また貴君の人柄もはつきり見えます。その人の人柄、或は精神(エスプリ)は必ずしも小説でなくても充分に表現されるものです。僕は僕の批評的な文章が小説以上に「實利を擧げる」かどうかは全く知りませんけれども、僕の精神だけは小説にも劣ることなく發表できると信じてゐます。さうして僕は生きてゐる限りは、僕の精神を氣魄を人々に知つて貰ひたいし、そのためにはその時折に從つて、小説だけを唯一つの方法とは考へないのです。たとひ或る場合小説は書かけなくなつても外に僕の生きてゐる證據をさへ示せる方法が見つかりさへすれば、僕はその方を擇んで、小説が書けなくなることに對しては貴君のやうにそれほど心配はし

いつもりです。貴君は常に小說の名人を志されるやうに見えるに對して、僕は一個の生きた野人でありたいといふだけが、重な相違かも知れません。

貴君はまたもう一つの心配として、今日の評論の特徵の一つはズバ〳〵と眞正面からものを云ふ點だといふ噂を聞かれて、貴君がかつて見られた或る乾き切つた景色を思ひ出して、寒心してゐられる。しかし今日の評論なるものが、貴君の感じられるほど、「それほど烈風が吹きすさんでゐる」とも見えません。それにしても僕は、貴君がかつて見られたといふ大島の景色を僕も一度見たいやうな氣がしました。貴君をそれほどもの凄じがらせたその自然を。きつとそれはひどく美しかつたのではないだらうか、根が自然を盲信してゐる僕だけに貴君の話を聞いてそんなことも考へました。それは兎も角も、貴君が言はんとしてゐられることもよくわかります。貴君は、春風駘蕩として霞のなかにおぼろに覗き出た眞實を愛されるといふのでせう。貴君の人柄を語るものです。僕の異存があらう道理はありません。唯、僕は同時に秋霜烈日の冴え渡つた刃のやうな生き方をも認めずにはゐられません。楡ふすまのなかに身を置いたやうな生き方です。ただそれを說かうにも、僕などのやうななまくらな、どつちともつかぬ不愉快な態度を考へると、わざわざ貴君に異を樹てることも出來なくなります。だから貴君の第二の心配に對しては、第一の心配ほどには何も申上げません。

貴君が一般の風潮に對して言はれた事を、自分ひとりで背負つてゐるやうなことを申しましたが、御一笑を乞ふ。

それよりも、僕は貴君の「心配二つ」の一文を拜見して、急に兼ねて御惠投の大作「大道無門」を讀みたくなつたといふ事實を申さずばなりますまい。貴君のやうに小說道に身を捧げてゐる作者の作品から學びたくなつたのです。さうして僕は學ぶところがありました。それを一々數へるつもりでしたが、今はもう時間も紙數も一杯になつてしまひました。ただ僕は、今日のたくさんの作者のなかで、それが殆んどみんなくたびれ切つてゐるなかで、唯一人の貴下のみは益々一途に小說を精進せられてゐることを改めて確實に知りました。「大道無門」は正しく所謂油の乘つた作品です。さうして貴

下が「心配二つ」の作者であることが、また同時に「大道無門」の作者であることが、漸く明瞭つて一生ハツキリと頭かれました。即ち、「大道無門」の作者にして始めて「心配二つ」の作者たるにふさはしいといふものです。さうして「心配二つ」の面白さは、すべて他の評論と同じくその合ひ分そのものではなくそこに筆者自身が現はれてゐる事です。

畏敬する友よ、もし僕を喜んでくれるなら、僕の小說をも見て下さい。また僕の評論をも見て下さい——ただ人から內容のあちこちを聞くばかりでなく。

分配

島崎藤村



四人もある私の子供の中で、亡くなつた母さんを覺えてゐるものは一人もない。ただ一番上の子供だけが、僅かに母さんを覺えてゐる。それもほんの子供心に。やうやくあの太郎が六歳ぐらゐの時分の幼い記憶で。

母さんを記念するものも、だん／＼すくなくなつて、今は形見の着物一枚殘つてゐない。古い鏡臺、古い簞笥、さういふ道具の類ばかりはそれでも長くあつて、毎朝私の家の末子が髮をとかしに行くのもその鏡の前であるが、長い年月と共に、いろいろな思ひ出すらも薄らいで來た。

あの母さんの時代も、遠い過去になつた。郷里の方に移してある母さんの墓には既に新しい草が生えて、古葉にかはらうとするやうな青年の時代が私のすぐ側までやつて來てゐた。太郎や次郎はもとより、三郎までもめき／＼と大人びて來て、縞の荒い飛白の筒袖なぞは着せて置かれなくなつた。娘の姉さんらしく成つたのにも

驚く。その末子が最早以前のやうな兵兒帶でなしに、そろ〳〵幅の廣い帶を結ぶやうになつた。眼に見えて四人の子供には金もかゝるやうになつた。

『お前達は貰ふことばかり知つてゐて、呉れることを知つてるのかい。』

私はよくこんな冗談を言つて、子供等を困らせることがある。子供、子供と私は言ふが、太郎や次郎は既に郷里の農村の方で思ひ〳〵に働いてゐるし、三郎はまた三郎で、新しい友達仲間の結びつきが出來て、思ふ道へと踏み出さうとしてゐた。それには友達の一人と十五圓づつも出し合ひ、三十圓ばかりの家を郊外の方に借りて、自炊生活を始めたいと言ひ出した。敷金だけでも六十圓はかゝる。最初その相談が三郎からあつた時に、私にはそれがお伽話のやうにしか思はれなかつた。

私は言つた。

『父さんも若い時分に自炊をした經驗がある。しまひには三度々々煮豆で飯を食ふやうになつた。自炊も面倒なものだぞ。お前達にそれが續けられるかしら。』

でも、成るべく若い時代のものゝ要求を容れて、やりたいといふことはやらせて見たいと私は考へた。私としては、もつとこの兒を自分の手許に置いて、出來るだけ支度を長くさせ、窮屈な思ひも忍んで貰ひたかつたが、しかし斯ういふ日のいつかやつて來るだらうとは自分の豫期してゐたことでもある。それがすこし早くやつて來たといふまでだ。それに私は、氣質の合はないことが次第によく分つて來た兄妹をこんな狹い巣のやうなところに無理に一緒に置くことの弊害をも考へた。何も試みだ、試みることは悟ることの始めだ、とさう考へた。私は三郎ぐらゐの年頃に小さな生活を始めようとした自分の若かつた日のことを思ひ出して、現に私達から離れて行かうとしてゐる三郎の心をいぢらしくも思つた。

この三郎を郊外の方へ送り出すために、私達の家では半分引越しのやうな騷ぎをした。三郎の好みで、二枚の座蒲團の

更紗模様も明るい色のを選らせた。役に立つか立たないか知れないやうな古い椅子や古い時計の家にあつたのも分けた。持たせてやるものも、無いよりはまだましだぐらゐの道具ばかり。それでも纏めて、荷物にして見れば、洗濯した蒲團から何からでは、折柄白く町々を埋めた春先の雪の路を一臺の自動車で運ぶほどあつた。

その時になつて見ると、三人の兄弟の子供は順に私から離れて行つて、末子一人だけが私の側に殘つた。二郎を送り出してからは、にはかに私達の家もひつそりとして、食卓もさびしかつた。私は娘と婆やを相手に日を暮すやうになつたが、次第に私の生活は變つて行くやうに見えた。巣から分れる蜂のやうに、いづれ末子も兄達の後を追つて、私から離れて行く日が來る。これは最早、時の問題であるやうに見えた。私は年老いて孤獨な自分の姿を想像で胸に浮べるやうになつた。しかし、これはむしろ私の望むところであつた。私か。私は三十年一日のやうな著作生活を送つて來たものに過ぎない。世には七十いくつの晩年になつて、まだ生活を單純にすることを考へ、家からも妻子からも一切の財産からも遁れ、全くの一人とならうとした人もあつたと聞くが、早く妻を先立てた私はそれと反對に、自分は家にとゞまりながら成長する子供を順に送り出して、だん〳〵一人になるやうな道を歩いて來た。

私の周圍へは既に幾度か死が訪れて來た。最近にもまた本郷の若い甥の一人がにはかに腎臓炎で亡くなつたといふ通知を受けた。ちやうど、私の家では次郎が徴兵適齢に當つて、本籍地の東京で檢査を受けるために郷里の方から出て來てゐた時であつた。次郎も兄の農家を助けながら描いたといふ幾枚かの習作の油繪を提げて出て來たが、元氣も相變らずだ。亡くなつた本郷の甥とは同い年齢にも當るし、それに幼い時分の遊び友達でもあつたので、その告別式には次郎が出掛けて行くことになつた。

『若くて死ぬのは一番可哀さうだね。』

と私は言つて、新しい佛への菓子折なぞを取り寄せた。私はまた、次郎や末子の見てゐるところで、こゝろざしばかりの金を包み、黒い水引を掛けながら、

『いくら不景氣の世の中でも、二圓の香奠は包めなくなつた。お前達の母さんが達者でゐた時分には、二圓も包めばそれで好かつたものだよ。』

と言つて見せた。

次郎は最早父の代理も出來るといふ改まつた顔付で出掛けて行つた。日頃人懐こく物に感じ易い次郎がその告別式から引返して來た時は、本郷の親戚の家の方に集まつてゐた知る知らぬ人々、青山から誰と誰、新宿から誰といふ風に、舊知のものが並んで座つてゐるところで、ある見知らぬ婦人から思ひがけなく聲を掛けられたといふ話を持つて歸つて來た。

『どなたでございますか。』

『いやな次郎ちやん、わたしを忘れちまつたの？』

これは二人の人の挨拶のやうに聞えるが、次郎は一人でそれを私達にやつて見せた。

『いやな次郎ちやん――だとサ。』

とまた次郎が妹に、その婦人の口眞似をして見せた。それを聞くと、末子はからだ諸共投げ出すやうな娘らしい聲を出して、そこへ笑ひ轉げた。

どうしてその婦人のことが、こんなに私達の間の噂に上つたかといふに、十八年も前に亡くなつた私の甥の一人の連合で、私の子供達から言へば母さんの友達であつたからで、かつみさんといつて、あの甥の達者な時分には親しくした人だ。あの甥は土屋といふ家に嫁いだ私の實の姉の一人子息にあたつてゐて、年も私とは三つしか違はなかつた。甥といふより

は、弟に近かつた。これに、次郎や末子の生れた家と、土屋の娘のしばらく住んでゐた家とは、歩いて通へるほど近い同じ隅田川のほとりにあつたから、そんな關係から言つても以前にはよく往來した間柄である。次郎のおいさな時分にはかつみさんも母さんのところへよく遊びに來て、長火鉢の側で話し込んだものである。この母さんの友達ですら、次郎が今逢つて見ては分らないくらゐになつてしまつた。

間もなくかつみさんは青山の姪と連れ立つて、私の家へ訪ねて來た。私がこの舊知の女の客を迎へるのは十七年振りにもなる。あまりに久し振りでの對面で、私はかつみさんの顏を見つめるともなく見つめて、言葉も容易には口に出せなかつた。私達は互ひに顏の形からして變つてゐた。

かつみさんも今では土屋でなしに、他の姓を名乘つてゐる人だ。結婚は二度とも不幸に終つて、今は三度目の家庭に落ちついてゐると聞く人だ。この薄命な、しかしねばり强い人が、何程のこの世の辛酸を經た後で、今の靜かな生活に入つたか、私もさう委しいことを知らない。かつみさんは、私の子供達を見に來たいと思ひながら今までその折もなかつたこと、漸く青山の姪に連れられて來たことなぞを私に話した。『次郎ちやん達の母さんが今まで達者でゐたら、幾つになつてゐませう。』

私がこんなことを言ひ出したのは、あの母さんとかつみさんといくつも年の違はなかつたことを覺えてゐるからで。

『叔母さんですか。ことしで、ちやうどにお成りの筈ですよ。』

かつみさんの口から出て來る話は、昔ながらの『叔父さん、叔母さん』だ。その時、青山の姪はかつみさんの『ちやうど』を聞きとがめて、

『ちやうどと言ひますと――』

『五十ですよ。』

この『五十』が私を驚かした。私は自分の年とつたことも忘れて、あの母さんが今日までぴん〳〵してゐるとしたら、もうそんな婆さんか、と想つて見た。

母さんの舊い友達が十七年振りで私達の家へ訪ねて來たといふは、次郎に取つても心の驚きであつたらしい。次郎は今更のやうに、亡くなつた母さんを探すかの面持で、しきりに私達の話に耳を傾けてゐた。私が自分の部屋を片付け、狹い四疊半のまん中に小さな机を持ち出し、平素めつたに取り出したことのない佛蘭西土産の茶卓掛なぞをその上にかけ、その水色の織模樣だけでも部屋の内を樂しくして珍客をもてなさうとした頃は、末子も學校の方から歸つて來た。末子は女學生風の校服のまゝ、青山の姪のうしろへ來て靜かに座つた。いくらかきまりわるげに、初めて逢ふ客に挨拶した。

『これが末ちやんですか。』とかつみさんは涙ぐまないばかりの懷しさうな調子で言つた。『まあ、叔母さんにそつくりですこと。』

『どうです、私の子供も大きくなりましたらう。』

『ほんとに。あの叔母さんがお達者でいらしつて、今の末ちやん達を御覽なすつたら、どんなでせう。』

土屋の甥の亡くなつたは、私の子供等の母さんが亡くなつたのと同じ年にあたる。あの母さんが三十三、甥が三十七の歳で歿した。かつみさんの前ではあつたが、つい私は甥のことなぞを言ひ出した。

『妙なものですね。三十代で亡くなつた人は、いつまでも三十代でゐるやうな氣がしますね。その人が五十いくつになるとは、どうしても思はれませんね。』

『でも、叔父さん、早く亡くなつたものが一番つまりませんよ。長く生きてゐれば、斯うしてまた叔父さんにお目に掛れ

るやうな日もまゐりますもの。」

その日はこんな話が聞きたかつた。

私の五十六といふ年も空しく過ぎて行きかけてゐた。長い病の後やら、弱い志やらで、かつみさんのやうな人が訪ねて來て呉れても、あの土屋の甥や子供等の母さんが達者でゐた頃のやうには話せなかつた。たゞたゞ私達はさういふ昔もあつたことを考へて、互ひに遠く來たことも思つた。

　不景氣、不景氣と言ひながら、諸物價はさう下りさうにもない頃で、私の住む谷間のやうな町には毎日のやうに太鼓の音が起つた。何々教とやらの分社のやうな家から起つて來るもので、冷い不景氣の風が吹き廻せば廻すほど、その音は高く響けて來た。慾と、迷信と、生活難とから、拜んで貰ひに行く人達も多いといふ。その太鼓の音は狹い谷間の町の空氣に響けて、私の部屋の障子にまで傳はつて來てゐた。

　私達の家の入口へ來て立つやうな貧困者も多くなつた。きのふは一人來た。けふは二人來たといふ風に、困つて來る人が何程あるか知れない。震災後は働きたいにも仕事がないと言つて救ひを求めるもの、私達の家へ來るまでに二日も食はなかつたといふもの。さういふ人達を見る度に私は自分の腰に卷きつけた黒いメリンスの帶の間から蝦蟇口を取出して金を分けることもあり、自分の部屋の押入から古本を取出して來て持たせてやることもある。中にはさういふ物乞ひに慣れ、遂に社會の不合理を訴へ、遣る瀨のない憤りを殘して置いて行くやうな人々も少くない。私は自分に都合の出來るだけの金をさういふ人々の前に置き、

『まつこと困つたら、來たまへ。』

とよく言ひ添へた。そして、それらの人々が歸つて行つた後で、年も若く見たところも丈夫さうな若者が、私ごとき病弱な、しかも年とつたもののところへ救ひを求めに來るやうな、その社會の矛盾に苦しんだ。正義が顚れて、大きな盜賊やみぢめな物乞ひが出た。

私達の家の婆やは、さういふ時の私の態度を見ると、いつでも憤慨した。毎月働いても十八圓の給金にしかならないと言ひたげなこの婆やは、見ず知らずの若者が私のところから持つて行く一圓、二圓の金を見のがさなかつた。

さういふ私達の家では、明日の米もないやうな日が最近なかつたといふまでゝ、さう餘裕のある生活を送つて來たわけではない。子供等が大きくなればなるほど金がかゝつて來て、まだ太郎の家の方は毎月三十圓づつ助けてゐるし、太郎ので使つてゐる婆さんの給金も私の方から拂つてゐるし、三郎が郊外に自炊生活を始めてからは、そちらの方にも毎月し六十圓はかゝつた。次郎や末子といふものも控えてゐる。私も骨が折れた。でも、私は子供等と一緒に働くことを樂みに家て、どんなに離れて暮してゐても、その考へだけは一日も私の念頭を去らなかつた。

思ひもよらない收入のある話が、この私の前に提供されるやうになつた。

私達の著作を叢書の形に集めて、豫約でそれを出版することは、これまでとても書肆によつて企てられないではなかつた。ある社で計畫した今度の新しい叢書は著作者の範圍も廣く取り入れてあるもので、その中には私の先輩の名も私の友達の名も見えるが、菊版三段抜き、六號活字、總振假名付で、一冊三四百頁もあるものを思ひ切つた安い定價で豫約應募者に分たうといふのであつた。私達はその特筆大書した定價の文字を新聞紙上の廣告欄にも、書籍小賣店の軒先にも、市中を練り歩く廣告夫の背中にまで見つけた。この思ひ切つた宣傳が廉價出版の氣勢を添へて、最初の計畫ではせい〳〵二

三萬のものだらうと言はれてゐたのが、いよ／＼蓋を開けて見るとその十倍もの意外に多數な求者が續くことになつた。思ひもよらない收入のある話と私が言つたのは、この大量生產の結果で、各著作者の所得を成るべく平均にするために、一割二分の約束の印稅の中から社預かりの分を差引いても、およそ二萬圓あまりの金が私の手に入る筈であつた。細い筆力に四人の子供等を養つて來た私に取つて、これはかなり大きな金である。今までそんなに纏まつて持つて見たこともない金である。

まだ私は受取りもしないうちから、その金のことを考へるやうになつた。私達の家では人を頼んで、檢印を押すだけに十日もかゝつた。今度の出版の計畫が次第に實現されて行くことを私の子供等もよく知つてゐた。しかしそんな纏まつた金が懷に入るといふことを、私は次郎にも末子にも知らせずに置いた。

私は、『財は盜みである』といふあの古い言葉を思ひ出しながら、庭にむいて自分の部屋の障子に近く行つた。四月も半ばを過ぎた頃で、狹い庭へも春が來てゐた。谷蔭の窪地の位置にある長屋つゞきの方からは、世間一般の不景氣を知らせるやうな例の太鼓の音が傳はつて來てゐた。

私は自分で自分に尋ねて見た。

『これは盜みだらうか。』

それには私は、否と答へたかつた。過ぐる三十年が二度と私の生涯に來ないやうに、あの叢書に入れる筈の私の著作も二つとは私にないものである。長い勞苦と努力とから生れて來たものとして、髮も白さを增すばかりのやうな私の年頃に、受けて歿しい報酬であるとは思はれなかつた。

しかし、私も年をとつたものだ。少年の時分から私は割合に金錢に淡泊な方で、一錢でも餘分なものを貯へようとするやうな、さういふ考へを今日まで起した覺えもない。今度といふ今度は、それが私に起つて來た。私も矢張、金でも貯へて置

いて、餘生を安く送らうとするやうな年頃に達したのかも知れない。日あたりも惡く、風通しも惡く、午後の四時といふと階下にある冬の障子はもう薄暗くなつて、夏はまた二階に照りつける西日も耐えがたいこんな谷の中の借家に燻ぶつてゐるよりか、自分の好きな家でも建て、靜かに病後の身を養ひたいと考へるやうな、さういふ年頃に達したのかも知れない。

今でこそあまり往來もしなくなつて、年始狀の遣り取りぐらゐな交際に過ぎないが、私の舊い知人の中に一人の美術家がある。私はその美術家の苦しい骨の折れた時代をよく知つてゐるが、いつの間にか人も羨むやうな大きな邸を構へ住むやうになつた。昔を知る私にはそれが不思議なくらゐに思へて、あの侘しさを友としてゐたやうな人は何處へ行つたらう、とそれを長い間の疑問として殘してゐた。年をとつて見て、私も他人の心を讀むやうになつた。あれはたゞ有福な人の邸ではなくて、若い時分に一人倍貧苦を嘗め盡した人の住む家だと氣がついた。

『父さん、何かお使に行く用がある？』

こんなことを言ひに來る次郎の顏を見ると、私も平素の自分に返つた。次郎も徴兵檢査の日を濟ましたが、不合格で國民兵の資格ではあまり威張れないといふ顏付だ。この次郎や、末子を側に置いて、私は若いさかりの子供等が知らない貯蓄の誘惑に氣を腐らした。有るところには有り過ぎるやうな金から見たら、おそらく一萬圓ぐらゐは何でもないかも知れない。しかし、無いところには無さ過ぎる金から見たら、それだけ纏まつた高でも大きい。でも、私は、土の中へでも埋めて置くやうに、死に金をしまつて置く氣はなかつた。どうそれを使つたものかと思つた。

どの時代を思ひ出して見ても、私にはさう樂なといふ日もない。ずつと以前に、私は著作の支度をするつもりで、三年ばかり山の上に全く默つて暮したこともある。私も既に結婚してから三年目で、家のものなぞはそろ／＼單調な田舍生活

に抱いて來て、こんなことでいつ芽が出るかといふ顏付であつたし、これに私達の家ではあゝ山の上だからやつてゆけたと思ふほどの切り詰めた暮しをしてゐたから、さういふ不自由さとも戰はねばならなかつたし、前年十一月から翌年の三月へかけて五ケ月もの長い冬とも戰はねばならなかつた。一度降つたら春まで溶けずにある雪の積りに積つた庭に向いた部屋で、寒さのために凍み裂ける恐しげな家の柱の音なぞを聞きながら、夜遲くまで獨りで机にむかつてゐた時の心持は忘れられない。でも、私はあの山の上から東京へ出て來て見る度に、兎にも角にも出版業者がこれ〳〵の店を構へ、店員を使つて、相應な生計を營んで行くのにその原料を提供する著作者が——少數の例外はあるにもせよ——食ふや食はずに居る法はないと考へた。私が全くの著作生活に移らうとしたのも、その頃からであつた。

私の眼にはまだ、六疊に二疊の二階が殘つてゐる。壁がある。障子がある。ごちや〳〵とした町中の往來を隔てゝ、魚を並べた肴屋の店がその障子の外に見おろされる。向ひ隣りには、白い障子のはまつた下風町の窓も見える。そこは私があの山の上から二度目に越して行つた家の二階で、都會の空氣も濃いところだ。かつみさん夫婦がかはる〳〵訪ねて來て、よく登つて來たのもその二階だ。そこに私は机を置いて、また著作に耽つたが、その頃に私の書いたものが子供等の母さんの女學校時代の友達の噂さにも上つたかして、さういふ昔馴染の家庭を見に行つて歸つて來る度に、いろ〳〵友達から冷かされたことだの、『お富さん（子供等の母さん）も隨分人が好い、あんなことを書かれて、默つてゐる細君があるものか』と言はれたことだの、それをあの母さんが私に話して見せた。でも、さういふ人は私の書いたものが舊い友達の噂さに上るといふだけにも滿足して、にはかに自分の夫を見直すやうな顏付であつたには、私も苦笑せずにはゐられなかつた。その頃の私が自分の周圍に見出す著作者達はと言へば、そのいづれもが新聞社に關係するとか、學校に敎鞭を執るとか、あるひは雜誌の編輯にたづさはるとかして、私のやうに著作一方で立たうとしてゐるものもめづらしいと言はれた。

私はよくさう思つた。これはまだ著作で家族を養へるやうな時代ではないのだと。私も痩我慢に痩我慢を重ねてゐたが、

親子四人に女中を一人置いて、毎月六七十圓の生活費を産み出すにすら骨が折れた。その頃の私達は十六圓の屋賃の家で辛抱したが、それすら高過ぎると思つたくらゐだ。

三年の外國の旅も、私の生涯の中でのさびしい時であつたやうな氣がする。尤も、その間には、これまで踏んだことのない土を踏み、交つたことのない人にも交つて見、陰もあり日向もあるのだから、その複雜な氣持はちよつと言葉には盡せない。實に無造作に、私はあの旅に上つて行つた。その無造作は、自分の書齋を外國の町に移すぐらゐの考へでゐた。全く知らない土地に身を置いて見ると、兎角旅の心は落ちつかず、思ふやうに筆も取れない。著作をしても旅を續けられるつもりの私は、かねての約束もその十が一をも果し得なかつた。『これまで外國に來て、著作をしたといふ人のためしがない』と言つて、ある旅行者に笑はれたこともある。でも私は國を出る頃から思ひ立つてゐた著作の一つだけは、どうにかしてそれを書きあげたいと思つたが、到頭草稿の半ばで筆を投げてしまつた。國への通信を送るぐらゐが精一ぱいの仕事であつた。それに國との手紙の往復にも多くの日數がかゝり、世界大戰爭の始まつてからは殊に事情も通じがたいもどかしさに加へて、三年の月日の間には國の方で起つた不慮な出來事とか種々の故障とかゞ一層旅を困難にした。私も、外國生活の不便はかねて覺悟して行つたやうなものゝ、旅費のことなぞでさう不自由はしないつもりであつた。時には前途の思ひに胸が塞がつて、さびしさのあまりに、禱るより外の分別もなかつたことを覺えてゐる。

過去を振り返つて見ると、今の私がどうにか不自由もさせずに子供等を養つて行けるといふだけでも、不思議なくらゐである。あの子供等の母さんの時代のことを思ふと、今の借家住居でも私には過ぎたものだ。

『富とは、生命より外の何物でもない。』

この言葉が私を勵ましました。

私は旅人のやうな心で、今迄通りのごくあたりまへな生活を續けたかつた。家は私の宿屋で、子供等は私の道連れだ。

その日、その日に不自由さへなくば、それでこの世の旅は足りる。私に必要なものは、餘生を保證するやうな金よりも強い足腰の骨であつた。

大きくなつた子供等と一緒に働くことの新しい歡び、その考へはどうにか男親の手一つで四人のちひさなものを育てゝ來た私にふさはしく思はれた。私は自分の身につけるよりも、今度の思ひがけない收入を延び行く時代のものゝ方に向けようと考へるやうになつた。

私は自分に言つた。

『いつそ、あの金は子供に分けよう。』

二階はひつそりとしてゐた。私が階下の四疊半にゐて聞くと、時々次郎の話聲がする。末子の笑ふ聲も聞えて來る。美術書生を兄に持つた末子は、肖像の手本としてよくさういふ風に頼まれる。次郎も習作に餘念のなかつた時だ。

やがて末子は二階から降りて來た。梯子段の下のところで、ちよつと私に笑つて見せた。

『けふは眠くなつちやつた。』

『春先だからね。』

と私も笑つて、手本で疲れたらしい娘を慰めようとした。

間もなく次郎も一枚の習作を手にして降りて來た。次郎は描いたばかりの妹の肖像を私の部屋に持つて來て、見やすいところに置いて見せた。

『父さん。これは、どう。』

『おそろしく丈の高い娘が出來たね』

『そんなにこの丈は高く見えるかなあ。』

『冗談だよ。父さんがふざけて言つたんだよ。そんなことは、どうでもいゝぢやないか。どんなものを造り出さうと、お前達の勝手だからね。』

畫布はまだ乾かない。新しい繪具は濡れたやうに光る。そこから發散する油の香ひも私には樂しかつた。次郎は私の側にゐて、しばらくほかの事を忘れたやうに、ぢつと自分の畫に見入つてゐた。

『ほら、お前が田舍から持つて來た畫さ。』と私は言つた。『父さんなら、あの方を取るね。やつぱし田舍の方にゐて、さびしい思ひをしながらかいた畫は違ふね。』

『さうばかりでもない。』

『でも、あの畫には、何となく迫つて來るものがあるよ。』

私達が次郎を郷里の方へ送り出したのは、過ぐる年の秋にあたる。あの惠那山の見える山地の方から、次郎はかなり土くさい畫を提げて出て來た。この次郎は、上京したついでに、今しばらく私達と一緒にゐて、春の展覽會を訪ねたり、舊い友達を見に行つたりして、田舍の方で新鮮にして來た自分を都會の濃い刺激に試みようとしてゐた。

まだ私は金を分けることなぞを何も子供等に話してない。匂はしてもない。しかし、私としては、そんな心持が自分の内に動いて來たといふだけでも、子供等に悦んで貰へるやうに思つた。眼を細くしてそれを私から受取る時の子供等の顔が見えるやうにも思つた。私は子に甘いと言はれることも忘れ、自分が一人ぼつちになつて行くことも忘れて、子供等を悦ばせたかつた。

それほど私も機嫌の好かつた時だ。私は四疊半から茶の間の方へ行つて、口さみしい時につまむほどしか殘つてゐない

菓子を取り出した。遠く滿洲の果から歸國した親戚のものゝ置いて行つた土產の罐のだ。西伯利あたりの子供でも悦びさうなボン〳〵だ。茶の間には末子が婆やを相手に、針仕事をひろげてゐた。私はその一つ一つ紙にひねつてあるボン〳〵を娘に分け、婆やにも分け、次郎のゐるところへも戻つて來て分けた。つひでに、自分の口へも入れた。

『次郎ちやん、おもしろい言葉があるよ。』と私は言つた。『田舍へ引込むのはね、社會から遠くなるのぢやなくて、自分等の虛榮から遠くなるのだ。といふ言葉があるよ。勉強の出來るのは田舍だね。お前のやうに田舍にゐて、さびしさと闘ふのも好い修業ぢやないか。』

『しかし、僕はそれに耐えられるほど、まだほんとうに頭が出來てゐない。』

『だから、とき〴〵出て來るさ。番町の先生の話なぞも聽きに來るさ。』

『さうだよ。』

『讀めるだけはいろ〳〵なものを讀んで見るさ。』

『さうだよ。』

その時になつて見ると、太郎はすでに鄕里の方の新しい農家に落ちついて、その年の耕作の支度を始めかけてゐたし、次郎はゆつくり構へながら、持つて生れた畫家の氣質を延ばさうとしてゐた。三郎はまた三郎で、出足のはしこい友達仲間と一緒に、新派の美術の方面から、都會のプロレタリアの道を踏まうとしてゐた。三人、思ひ〳〵の方向を執つて、同じ時代を步まうとしてゐた。末子は、と見ると、これもすでに學校の第三學年を終りかけて、日頃好きな裁縫や手藝なぞに殘る一學年の生ひ先を競はうとしてゐた。この四人の兄妹に、どう金を分けたものかといふことになると、私はその分け方に迷つた。

月の三十日までには約束のものを屆ける。特製何部。並製何部。この印税一割二分。そのうち社預り第五回配本の分まで三分。斯うした報告が社の會計から、すでに私の手許へ屆くやうになつた。

私も實は、次郎と三郎とに等分に金を分けることには、すでに腹をきめてゐた。ただ太郎と末子との分け方をどうしたものか。娘の方にはいくらか薄くしても、長男に厚くしたものか。それとも四人の兄妹に同じやうに分けて呉れたものか。そこまでの腹はまだきまらなかつた。

娘の支度のことを世間普通の親のやうに考へると、第一に金のかゝるのは着物だ。さういふ支度に際限はなからうが、『娘一人を結婚させるとなると、どうしても千圓はかゝる』と曾て舊友の一人が私にその話をして聞かせたこともある。そこに私はおほよその見當をつけて、そんなに餘分な金を娘のために用意する必要もあるまいかと思つた。太郎は違ふ。かすかすの心に掛ることがあの兒にはある。年若い農夫としての太郎は、過ぐる年の秋の最初の經驗では一人で十八俵の米を作つた。自作農として一軒の農家を支へるには、更に五六俵ほども多く作らせ、麥をも蒔かせ、高い米を賣つて麥をも食ふやうな方針を執らせなければならない。私は太郎の勞力を省かせるために、あの兒に馬を一匹あてがつた。副業としての養蠶も將來にはあの兒を待つてゐた。それにしても太郎はまだ年も若し、結婚するまでにも至つてゐない。すくなくも二人もしくは二人半の働き手を要するのが普通の農家である。それを思ふと、いかに言つても太郎の家では手が足りなかつた。私が妹に薄くしてもと考へるのは、その金で兒の手不足を補ひ、どうかしてあの新しい農家を獨立させたかつたからで。

言ひ忘れたが、最初私は太郎に二反七畝ほどの田をあてがつた。そこから十八俵の米が取れた。尤も、太郎から手紙で書いてよこしたやうに、これは特別な農作の場合で、毎年の收穫の例にはならない。二度目に、一反九畝九歩ほどの田をあてがつた。さう〳〵は太郎一人の力にも及ぶまいから、この方はあの兒の村の友達と二人の共同經營とした。地租、肥料、種などの代を差引き、勞力も二人で持ち寄れば、收穫も二人で分けさせることにしてあつた。

いつの間にか私達の家の狭い庭には、薔薇が最初の黄色い蕾をつけた。馬醉木もさかんな香氣を放つやうになつた。この花が庭に咲くやうになつてから、私の部屋の障子の外へは毎日のやうに蜂が訪れて來た。

あかるい光線が部屋の疊の上まで射して來てゐるところで、私はいろ〳〵と思ひ出して見た。六人ある姉妹の中で、私の子供等の母さんはその三番目にあたるが、まだその外にあの母さんの一番上の兄さんといふ人もあつた。函館のお爺さんがこの七人の兄妹の實父にあたる。お爺さんは一代のうちに藏をいくつも建てたやうな手堅い商人であつたが、總領の子息には一番重きを置いたと見えて、長いことかゝつて自分で經營した網問屋から、店の品物から、取引先の得意までつけてそつくり子息に與れた。ところが子息は、お爺さんから貰つたものをすつかり無くしてしまつた。あの子息の家が倒れて行くのを見た時は、お爺さんは半分狂氣のやうであつたと言はれてゐる。しまひには、その家屋敷も人手に渡り、子息は勘當も同樣になつて、みぢめな死を死んで行つた。私はあのお爺さんが姉娘に迎へた養子の家の方に移つて、紙問屋の二階に暮した時代を知つてゐる。あのお爺さんが、子息の人手に渡した建物を二階の窓の外に眺めながら、商人らしいあきらめをもつて晩年を送つてゐたことを覺えてゐる。

この總領子息に比べたら、三番目の妹娘なぞはいくらも分けて貰はない。あの子供等の母さんも、お爺さんのこゝろざしで一生着る物に不自由はしなかつた。それぱかりでなく、どうかするとお爺さんのこゝろざしは幼い時分の太郎や次郎や三郎のやうな孫の着る物にまで及んだ。しかし、あの母さんが金で分けて貰つて來た話は聞かない。唯一度、私の前に百圓の金を出したことがある。私もまだ山の上のわびしい暮しをしてゐた時代で、かなり骨の折れる日を送つてゐたところへ、今の青山の姪の父親にあたる私の兄貴から、電報で百圓の金の無心を受けた。當時兄貴は楽湖の方で、よく〳〵旅で

困りもしたらうが、しかもそれが二度目の無心で、私としては隨分無理な立ち場に立たせられた。その時、あの母さんが私の心配してゐるのを見るに見かねて、日頃大事にしてゐた金をそこへ取り出した。これはよく〳〵夫の困つた場合でなければ出すなと言つて、お爺さんが吳れてよこしたものとかで、母さんが後にその話を私にして見せたこともある。あの母さんは六人の姉妹の中で、一番お爺さんの秘藏娘であつたといふ。その人ですらさうだ。あゝいふ場合を想つて見ると、娘に薄くしても總領子息に厚くとは、やはり函館のお爺さんなぞの考へてたことであつたらしい。あの母さんのやうに、困つた夫の前へ、有りつたけの金を取り出すやうな場合は別としても、もつと女の生活が經濟的にも保證されてゐたなら、と今になつて私も思ひ當ることがいろ〳〵ある。

『娘の支度は、こんなことでいいのか。』

私も、そこへ氣づいた。やはり男の兄弟に分けられるだけのものは、あの末子にも同じように分けようと思ひ直した。私も二郎と纏まつたものを持つたことのない證據には、こんなに金のことを考へてしまつた。やがて、一枚の小切手が約束の三十日より二日も早く私の手許へ屆いた。私はそれを適當に仕末してしまふまでは安心しなかつた。

『次郎ちやん、けふはお前と末ちやんを下町の方へ連れて行く。自働車を一臺賴んで來てお吳れ。』

『父さん、どこへ行くのさ。』

『まあ、父さんについて來て見ればわかる。けふはお前達に分けて吳れるものがある。』

次郎は、私がめづらしいことを言ひ出したといふ顏付をした。いよ〳〵私の待つてゐた日が來た。私は娘にも言つた。

『早晝で出掛けるぜ。お前も支度をするがいいぜ。』

次郎が町の方へ自動車を約束しに行つて歸つて來た頃には、私も末子も茶の間にたつて着物を著かへてしまつてゐた。出掛ける時間の都合もあつたので、私は晝飯をいつもより早く濟ました上で、と思つた。

『末ちやん、羽織でも着更へればそれで澤山なんだよ。けふは用達に行くんだからね。』

『ぢや、わたしは袴にしませう。』

私と末子とが支度をしてゐると、次郎は朝から仕事着兼帶のやうな背廣服で、自分で着更へる世話もなかつたものだから、そこに足を投げ出しながらいろ〳〵なことを言つた。

『おい、末ちやんはそんな袴で行くのかい。』

『さうよ。』

さう答へる末子は婆やにまで手傳つて貰はないと、まだ自分獨りでは幅の廣い帶が堅くしめられなかつたからで。末子は母さんの遺した古い鏡臺の前あたりに立つて、黑い袴の紐を結んだが、それが背丈の延びた彼女に似合つて見えた。

次郎は私の方をも眺めながら、

『斯うして見ると、父さんの肩の幅はずゐぶん廣いな。』

『そりや、さうさ。』と私は言つた。『こゝまで凌いで來たのも、この肩だもの。』

『僕等を四人も背負つて來たか。』

次郎は笑つた。

間もなく飯の支度が出來た。私達は婆やのつくつて呉れた簡單な食事に就いた。

『けふは下町の方へ行つて洋食でも濟つて貰へるのかと思つた。』

さういふ次郎はあてがはづれたやうに、『なあんだ』と言はないばかりの顏付であつた。

『用達に行くんぢやないか。そんな遊びに行くんぢやあるまいし。まあ父さんについて來て御覧よ。へたな洋食などより、もつと好い事があるから。』

その時になつて、私は初めて分配のことを簡單に二人の子供に話したが、次郎も末子も半信半疑の顔付であつた。

自動車は坂の上に待つてゐた。私達は、家の前の石段から下の通りへ出、崖のやうな勾配の急な路についてその細い坂を上つた。砂利が敷いてあつて餘計に歩きにくい。私は坂の途中で後から登つて來る娘の方を振返つて見て、また路を踏んで行つた。斯うして親子三人のものが一緒に揃つて出掛けるといふは、それだけでも私には樂しかつた。

『新橋の手前までやつて下さい。』

と私は坂の上に待つ運轉手に聲をかけて、やがて車の上の人となつた。肥つた末子は私の隣りに、痩せぎすな次郎は私と差向ひに腰掛けた。

『けふは用達だぜ。次郎ちやんにも手傳つて貰ふぜ。』

『分つてるよ。』

動いて行く車の上で、私達は大體の手筈をきめた。

『末ちやんは風呂敷を忘れて來やしないか。』

と私が言ふと、末子は車の窓の側から黒い風呂敷を取出して見せた。

私達を乘せた車は、震災の當時に燒け殘つた岡の地勢を降りて、まだバラツク建の家屋の多い、ごちや〳〵とした廣い町の方へ一息に走つて行つた。町の曲り角で急に車が停まるとか、また動き出すとか、何か私達の乘心地を刺激するもの

があると、その度に[illegible]を通り過ぎると、そこはもう新橋の手前だ。ある銀行の前で、私は車を[illegible]

しばらく私達は、大きな金庫の眼につくやうなバラック造の建物の中に時を送つた。

「現金でお持ちになりますか。それとも御便利なやうに、何かほかの形にして差上げるやうにしませうか。」

とそこの銀行員が尋ねるので、私は例の小切手を現金に換へて貰ふことにした。私が支拂口の窓のところで受取つた紙幣は、風呂敷包にして、次郎と二人でそれを分けて提げた。

「斯うして見ると、ずゐぶん重いね。」

待たせて置いた自働車に移つてから、次郎はそれを妹に言つた。

「どれ。」

と妹も手を出して見せた。

私達の乗る車は更に日本橋手前の方角を取つて、繁華な町の中を走つて行つた。私は風呂敷包を解いて、はじめて手にするほどの紙幣の束の中から、あの太郎宛に送金する分だけを別にしようとした。不慣な私には、五千圓の札を車の上で數へるだけでもちよつと容易でない。その私を見ると、次郎も末子も笑つた。やがて次郎は何か思ひついたやうに、やゝ中腰の姿勢をして、車のゆきゝや人通りの劇しい外の町から私を掩隠すやうにした。

私達はある町を通り過ぎようとした。祭禮かと見まがふばかり賑かに飾り立てたある書店の前の廣告塔が眼につく。私は次郎や末子にそれを指して見せた。

「御覧、競争が始まつてるんだよ。」

紅い旗、紅い暖簾は、車の窓の硝子に映つたり消えたりした。大量生産の氣運に促されて、廉價な叢書の出版計畫がそ

こにも競ふやうに起つて來たかと思ひながら、日本橋手前のある地方銀行の支店へと急いだ。郷里の山地の方にゐる太郎宛に送金するには、その支店から爲替を組んで貰ふのが、一番簡單でもあり、便利でもあつたからで。日本橋の通りにあるバラツク風な建物の中でも、また私達はしばらく時を送つた。その建物の前にある石の階段を下りたところで、私は連れの次郎や末子を見て言つた。

『さあ、太郎さんへはお金を送つた。これからは次郎ちやんや三ちやんの番だ。』

自働車が動く度に私の子供に話したことがほんとうになつて行つた。『へたな洋食より好い事がある』と私が誘ひ出した意味は、その時になつて次郎にもわかつて來た。私は京橋邊まで車を引返させて、そこの町にある銀行の支店で、次郎と三郎との二人のために五千円づつの金を預けた。兄は兄、弟は弟の名前で。

私は次郎に言つた。

『これはいつでも引出せるといふわけには行かない。半年に一度しかさういふ時期は廻つて來ない。』

『そこは父さんに任せるよ。』

私は時計を見た。どこの銀行でも店を閉ぢるといふ午後の三時までには、まだ時の餘裕があつた。私はその日のうちに四人の兄弟に分けるだけのものは分け、受取つた金の仕末をしてしまひたいと思つた。そこは人通りの多い町中で、買物にも都合がいゝ。末子は家への土産にと言つて、町で求めた菓子パンなどを風呂敷包にしながら、自動車の中に私達を待つてゐた。

『末ちやん、今度はお前の番だよ。』

さう言つて、私は家路に近い町の方へとまた車をいそがせた。

かなりくたぶれて私は家に歸り着いた。殆んど一日がゝりでその日の用達に奔走し、受取つた金の始末もつけ、漸く自分の部屋にくつろいで見ると、肩の荷物をおろしたやうな疲れが出た。

私は一緒に歸つて來た次郎と末子を自分の側へ呼んだ。銀行へ預けた金の證書をそこへ取り出して見せた。

『次郎ちやん、御覽。これはもうお前達のものだ。どうこれを役に立てようと、お前達の勝手だ。これだけあつたら、ちよつと佛蘭西あたりへ行つて見て來ることも出來ようぜ。まあ、一度は世界を見て來るがいゝ。このお金はさういふことに使ふがいゝ。それまでは父さんの方に預つて置いてあげる。』

子供を育てるには、寒く、ひもじく、とある人が曾て私に言つて見せたが、あれは忘れられない言葉として私の記憶に殘つてゐる。あまり多くを與へ過ぎないやうに、さうかと言つて成るべく子供等が手足を延ばせるやうに。私も艱難の續いたやうな自分の若かつた日のことを思ひ出して、これくらゐの支度は子供等のためにして置きたいと考へた。父としての私が生活の基調を働くことに置いたのはかなり舊いことであること、それはあの山の上へ行つて七年も百姓の中に暮して見た頃からであること、金の利息で樂に暮さうと考へるやうなことは到底自分等親子の願ひでないこと、さういふ話までも私は二人の子供の前に言ひ添へた。

その時、末子は兄の側に靜かにゐて、例のうつむき勝ちに私達の話に耳を傾けたが、自分の證書を開いて見ようとはしなかつた。私はそれを娘の遠慮だとして、

『末ちやん、お前も御覽。もつと、よく御覽。お前の名前もちやんとそこに書いてあるよ。』

と言つて、その分け前を確かめさせた。

私達の間には樂しい笑ひ聲が起つた。次郎は、兩手を振りながら、四疊半と茶の間のさかひにある廊下のところを幾度

となく往つたり來たりした。

『さあ、俺も成金だぞ。』

その次郎のふざけた言葉を聞くと、私はあわてゝ、

『馬鹿。それだからお前達は駄目だ。』

と叱つた。

最早、私の前には、太郎宛に銀行でつくつて來た爲替を送ることゝ、三郎にもこれを知らせることゝが殘つた。私も、著作に從事するものゝ癖で、筆執ることが仕事のやうになつてゐて、手紙となるとひどくおつくうに思はれてならない。でも、ほかの手紙でもなかつた。私は太郎宛のものをその翌日になつて書いた。

送金

金五千圓。

これは思ひがけない收入があつて、お前と、次郎と、三郎と、末ちやんとに父さんの分ける金です。

お前の家でも手の足りないことは、父さんもよく承知してゐます。父さんはほかに手傳ひのしようもないから、お前の耕作を助ける代りとしてこれを送ります。この金を預けたら毎年三百圓ほどの餘裕が出來ませう。それでお前の農家の經濟を補つて行くことにして下さい。

これはたゞ金で父さんから貰つたと考へずに、父さんがお前と一緒に働いてゐるしるしと考へて下さい。くれ〴〵もこの金をお前の農家に送る父さんの心を忘れないで下さい。

委しいことは、いづれ次郎が歸村の日に。

ちやうど、そこへ三郎が郊外の方の話をもつて訪ねて來た。

『おう、三ちやんもちやうど好いとこへ來た。お前にも見せるものがある。』

と私は言つて、この兒のためにも同じやうに用意して置いた證書を取り出して見せた後で、

『お前も一度は世界を見て來るがいゝよ。』

と言ひ添へた。

『さうして貰へば、僕もうれしい。』

それが三郎の返事であつた。

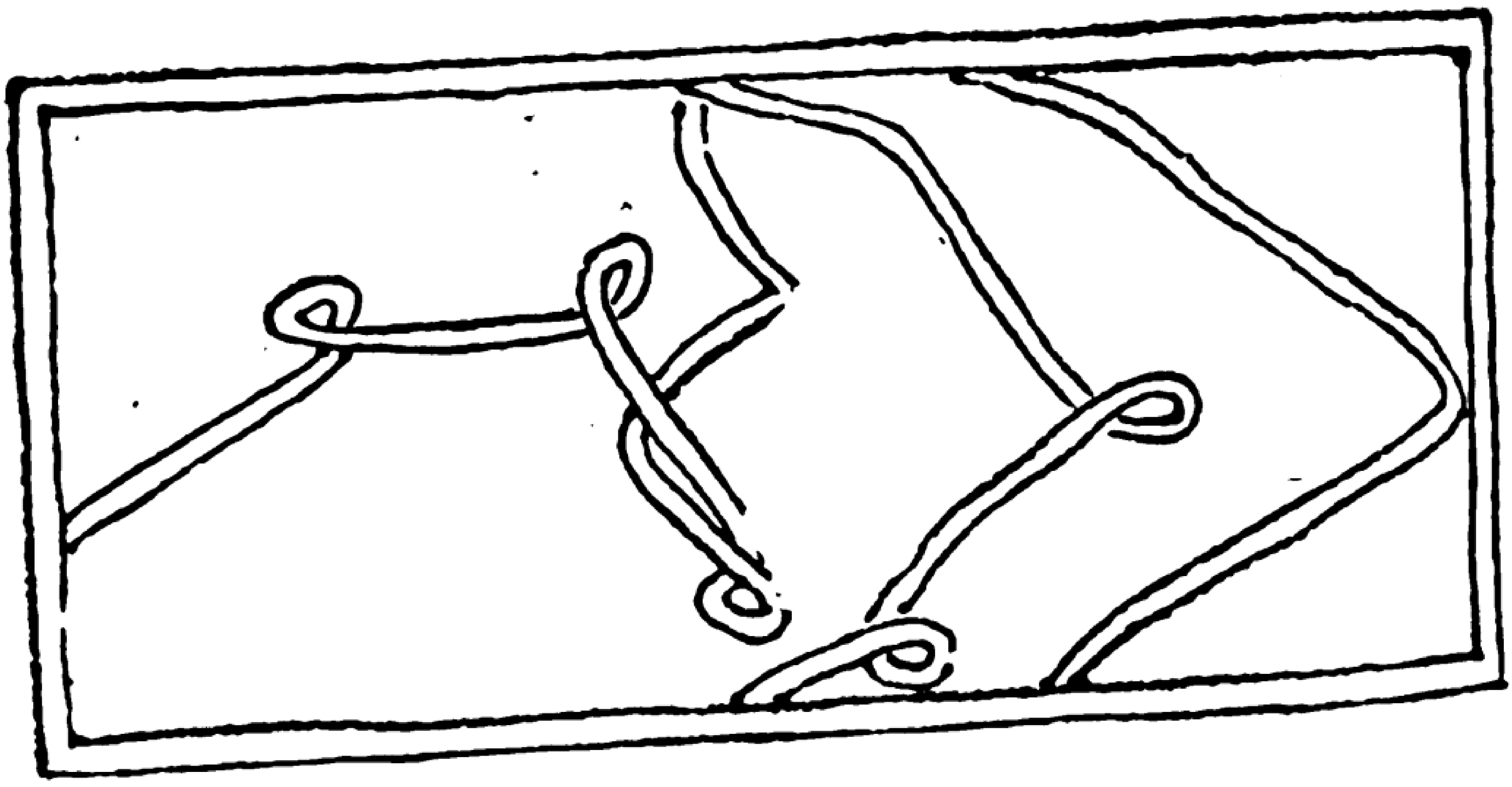
何か私は三人の男の兒に餞別でも出したやうな氣がして、自分のしたことを笑ひたくもあつた。時には、末子が茶の間の外のあたゝかい縁側に出て、風に前髪をなぶらせてゐることもある。白足袋はいた娘らしい足をそこへ投げ出してゐることがある。それが私の部屋からも見える。私は自分の考へることをこの兒にも言つて置きたいと思つて、一生他人に依るやうなこれまでの女の生涯のはかないことなぞを話し聞かせた。

『長い一生の間にはいろ〳〵なことがあるぜ。土屋の祖母(おばあ)さんのやうに後家さんになる人もあるし、あのかつみさんのやうに三度も旦那さんの變る人もある。なか〳〵若い時分に考へたやうなわけにはいかない。お前だつて、いつまで父さんを頼りにしてゐるわけにもいかない。それに、子供の教育のためにも、もつとお金の欲しいと思ふやうな場合も起つて來る。まあ父さんもいろ〳〵なことを考へて、これから先のために支度をして置いたよ。』

娘はうなづいた。

それにしても、筆執るものとしての私達に關係の深い出版界が、あの世界の大戰以來順調な道を通つて來てゐるとは、私には思へなかつた。その前途も心に掛つた。どうかすると私の家では、次郎も留守、末子も留守、婆やまでも留守で、一住み慣れた屋根の下はまるでからつぽのやうになることもある。さういふ時にかぎつて、私は居るか居ないか分らないほどひつそりと暮した。私の前には、まだいくらも覗いて見ない老年の世界が待つてゐた。私はこゝまで連れて來た四人の子供等のため、何かそれ〴〵役に立つ日も來ようと考へて、長い旅の途中の道ばたに、思ひがけない收入をそつと殘して置いて行かうとした。

（をはり）



山蟹

――牧歌的に――

藤森成吉

1

祭日のつゞいた五月末日の土曜日の朝、仁木夫婦は全家族を率ゐて伊豆の溫泉場Gへ行つた。全家族と云ふのは、小學二年生のA坊と、六歲のB子だつた。

仁木は、さして有名でない、從つて金もない作家だ。それが術發して家おちの溫泉旅行を企てたのは、一つにはその二三日前思ひがけない印稅が入つた事、二つには（實は此の方が最初に來なければならないが）彼の細君との結婚記念月である事、（然も今年は滿十週年に當つてゐた）等に依つてゐた。

から云ふ華麗な企ては、仁木一家に取つては破天荒だつた。可愛想に、細君は結婚してから（生れてから、と云ひたほしても差し支へない）まだ一度も溫泉の味を知らなかつた。その糟糠の妻をいたはるやさしい夫の氣もちと、始終ごみつぽい東京の街の片隅にゐて、碌に自然の事物を知らない小さな者達への父性愛とが、仁木

の頭腦に此の計畫を起させた。では何故G溫泉を選んだか、と云へば、仲間の或る金持ち作家の口から、そこが甚だ靜かな山の中で、然も一軒きりないホテルが非常に新しく氣もちがよく、更にいい事には費用が所謂ホテルとしてとても安い、と聞かされてゐたからだ。

ここに第三の旅行理由が來る。職業柄、仁木は一度ホテルの經驗をして置かうとも考へたのだ。即ち、もう三十を幾つか越しながら、彼はまだ一度もホテルの（泊つた）經驗がなかつた。この點では、彼は決して細君の溫泉的無知識を笑へなかつた。もつとも、笑はうともしなければ、細君も又それを夫の缺點とも考へなかつたが。

さてかうして、此の珍しい旅行へ彼等は押し出された。彼等は初夏の朝のまだ仄白いうちに起きて（細君や子供は、寢てゐるあひだも夢や幻ばかり見てゐた）電車と汽車と乘合馬車の便を借りて、午少し過ぎ無事ホテルの客となつた。

これは、如何にもブル作家の言葉どほり靜かな山の中にあつた。兩方の山のあひだを、白い泡を嚙んで多角的な川が歌ひくだつてゐた。その片岸へ橋をかけて、まるで西洋の童話にでもありさうな（と仁木は思つた）ヂグザグな屋根を持つた、白と青の清楚な壁や窓を列ねたホテルが立つてゐた。

2

最初彼等を迎へた者は、番頭や女中達ではなかつた。（その人々は、彼等が停車場前から乘つた田舍風景的な赤ペンキ塗りの馬車の襤褸たる音を聞くと一緒に、玄關へ出て來たが）それは一羽の鳥だつた。彼（又は彼女）は、逸早く「お早やう。」と、玄關の棚の上から挨拶した。そして矢繼早に、「ホー、ホケキョ」と歡迎歌をうたつた。彼は決して鶯ではなかつた。（勿論鶯も、ホテル裏の藪や山で夢を惜しな人のやうな春のうたひ殘りをうたつてゐた。が、その馬鹿な鳥に、どうして偉大な模倣者の模倣が出來やう。）それは全身を漆のやうに光らせ、伊達者らしく胸へ金色の紺襟卷を卷いて、恰

好のいい長い鬚を自慢さうにさし出した。
「あれだらうに！ かアちやんさ。」
Bさんは、馬車から降りると、度膽を抜かれたやうに顎を指した。
「九官鳥だらう。かアちやん。」
A坊が得意になつて「かアちやん」の袂をつかんだ。
「さうよ。」
彼等の不作法さに、細君は、少しキマリを悪くして答へた。
「これ九官鳥？」
「さうさ。僕爺話したいな。いゝ？かアちやん！」
「うるさい人達ね。」
とうとう細君はきめつけた。
「あとで、いくらでも御話しなさいませ。」
女中頭が取りなすやうに云つた。
先きへ立つた彼女の案内で、仁木一家は赤べりの絨氈を敷いた正面の廣い階段を旋回して、二階の日本間の一つへ入つた。それは、浴室の屋根と前庭の樹木を前に落ちついてゐた。窓の前はヴエランダ風の廊縁になり、茶卓や椅子がしつらへられてゐた。
仁木達は日本風な浴衣に脱ぎ換へると、階段を降りて、食堂や玉突き室の横をとほつて浴場へ行つた。浴場は家族風呂と大浴室に分れ、どつちも青銅の虎の口から絶えず温泉が噴き落ちて、装飾風な鏡の面を薄く湯氣が曇らせてゐた。大浴

室の前は廣いヴエランダになつて、壁には釣り花活けや寫眞が懸り、ギクザクな窓の前の幾つかのテエブルには、新聞や雜誌が積まれてゐた。

何から何まで、子供達（と同時に親達）には珍しかつた。いよいよ童話の世界へ入つた氣もちで、彼等はぐるぐるホテルを歩き廻つた。

3

全體の設備が一とほり紹介されると、仁木達はホテルを出て、孔雀の夫婦や南洋の鳩や（その夫婦は敏捷な歩行をし、身體の割りにいやに高い鳴き聲をひびかせた）狸や鷹などの附屬小動物園の横から、橋を越して山路（さつき赤馬車で來た）へ出た。そして川上の方へ、田舍らしい素朴な石ころ路をあがつて行つた。

狹い麥畑や野菜畑が、濕つたわさび畑の河原と一緒に兩側に拓かれた。さう云ふ縁や畔を、白い野バラの叢や、あざみの小さな太陽や、すいこの紅い烽火や、つつじの燃え殘りの火やが豐富に飾つてゐた。仁木は、みんなにすいこを指して聞いた。誰も知らなかつた。彼は長年ぶりに――これは結婚の年月を倍してゐた――その酸つぱい莖をむしり取つて嚙んだ。細君や子供達にも嚙ませた。彼は又わさび畑をゆびさした。辛い物好きのくせに、細君はその青い葉が何を意味するかを知らなかつた。彼は同じくその小さな葉を口へ入れた。

空は、山と山のあひだを大きな川のやうに流れてゐた。その水々した色と同じく、仁木一家の心は青く晴れ渡つた。前途の叢で、つつじの紅い花を彼等は矢鱈に嚙みながら、出鱈目な歌をうたひながら、田舍の生物らしくゆつくり白い水を振り落してゐる眞つ黒な水車小屋の傍から、川縁へ降りて行つた。そこには、彼等を歡迎するやうに、赤色と白色をゴチヤ交ぜにした花の灌木が幾本となく笑つてゐた。

「これは何の花？」

細君は早速教師――の夫にきいた。生憎賢明な夫は、その一株に別々な美麗な花を咲かす不可思議な樹木を知らなかった。

「こんな木、知らないよ。」

それから然し夫の權威に關するやうに、彼はつけ加へた「今まで時々見てゐるがね。」

が、細君は格別樹の名に拘泥しやうとしなかつた。夫も知らない花の咲いてゐる場所へ來た事が、むしろ彼女を深くよろこばせた。

親達のそんな詩的問答のあいだに、ヨリ實踐的な子供達は一つの動物を發見した。それは、黒い畑の石垣を横に攀ぢあがつてゐた。

「お父さん！蟹！」

「おかあちやん、生きた蟹。」

「あら。」

細君は、むしつて鼻へ當てた花びらをひびかせた。

「どれ。」

仁木は、一齊射撃的空氣振動の爲めに面喰つて石垣の隙の暗みに入りかけたまま、ぼんやり聞き耳を立ててゐる甲殻類の背中を、いきなり片手の指につまんだ。

「頂戴。」

小さな掌が、蟹の身體の下に花ひらいた。

「大丈夫かしら。」

父親らしい心配を以て、仁木は片手の人指しゆびをわざと小さな生物の――裝飾的に偉大な白い鋏のあひだへ置いて見た。囚はれた者は、然し小さな氣泡を扁平な鼻先きへ吹き出したまま、何の攻撃的態度をも取らうとしなかつた。

「おとなしい。――だが、なりたけ背中の方を御持ち。狹まれるといけないから。」

獲物は渡された。二人の子供は忽ち獨占權の爲めに爭つた。が仁木の仲裁で交る交る持つ事になつた。

子供達はすつかりよろこばされた。或は、ホテルへ來てこれほどよろこばされた事はなかつたかも知れなかつた。その蟹は可成り大きかつた。が、眞ッ黒だつたり、腕や鋏の柄へモヂャモヂャ毛が生へてゐたりする、恐ろしさやいやらしさが少しもなかつた。細長い脚や甲羅が、とても臙脂色に透いてゐて、ただ鋏だけホンノリと白かつた。その美しさに加へて、性質が善良だつた。どんなに彼等（子供達）が、小さな指をその眼先きへ突きつけても、その奇妙な柄附き眼鏡を引ッ込めるきり決して鋏の誘惑を示さうとしなかつた。で、一躍して彼等のペットになつた。

やがて川傳ひにホテルへ歸ると、彼等は早速彼の家を探した。母親の考案で、瓷の灰落しへ水が滿たえられ、その中へペットは入つた。子供達は、彼の住み心地を檢査して又茶卓の上へ取り出し、その板の上で運動させて又水の家へ歸した。

4

その晩、あたかも夜中に煙草を吸ふ習慣を持つた老人のやうに、子供達は小さな赤い枕の向ふへ灰落しを備へて眠つた。翌朝起きると、逸早く中を覗いた。（その前日それほど旅行し、運動し、おそく寢たにも係はらず、彼等は六時頃眼をさました。就中細君は、五時半には起きてヴェランダの新しい空氣に浸つた。彼女は、三十分でも多く此の稀な生活を欲し

たのだつたが、子供達のおどろき——と同時に失望——にまで、な暮しは窮になつてゐた。しつきに前横にふへくに、空ぐ水になつてゐた。

彼等はけたたましく母親に報告した。（そのけたたましさは、寝坊の父親を起すにさへ充分だつた。）これは全く異變だつた。どうしてあの不器用そうな蟹は、どこもかも眞ッ白くスベスベした、足がかりのない、おまけに出口が横へ折れ曲つて半分壺形にたつた瀬戸物から、首尾よく脱走したらう。現に昨日の午后から晩へかけて、彼は時々水底を這ひ廻つてゐた。そして滑かな白壁に片脚をかけては、脆く横にころがり落ちてゐた。そこからの蟹的脱出は、誰の眼からも絶對不可能に見えた——。

仁木一家を擧つた捜索が始まつた。めいめいが、寢床や亂れ箱の下、チャブ台や机の上下、床の間、花瓶のうしろ、ヴェランダの隅を探し廻つた。が、どこの隅にも蟹の足さへ見えなかつた。

「不思議ねえ、逃げたにしても、どこか室のうちに居そうなもんね。」

茶箪笥をガタガタやつて壁際を覗いたばかりでなく、細君はつひにはバスケットの蓋までひらいた。

「ゆうべ、中へ汽車の時間表と一緒に收つておいた、とでもいふのかい。」

父親のひやかしにも係はらず、子供達は襖をあけて廊下から階段まで駈け廻つた。

「おいおい、あんまりあばれるなよ。」

が、バスケットの中にも階段にも、動物はゐなかつた。

仁木達の室の隣りには、瀟洒とした西洋間があつた。やつぱりヴェランダ附きで、ダブルベットが一つゆつたりと置い

てあつた。そのよくバネの利いた、雪のやうに白くフワリとした寢床の中で、若い一對が一晩を過した。それは誰の眼にも新婚だつた。片方がどこかの大學でも出たばかりなら、片方は女學校出の才媛（無論才色を兼ねた）と云つた恰好だつた。どんな場合にも、彼等はきつと一緒にゐた。家族風呂はもとより、ヴエランダで新聞をよむにも。――對ひ合ひ、寄り添ひながら、出來るなら、同じ新聞の同じ欄の行をよんでゐたさうに見えた。

そのくせ、二人はあまり――少くも人の見てゐるところでは――話し合はなかつた。無論、他のどんな客達とも話さなかつた。一つホテルの中で、彼等は完全に隔離圏を形成してゐた。もう一つの著るしい特徴は、彼等が全然服裝を變へなかつた事だつた。切角温泉に來ながら、浴衣も着ず、外國人のやうにキチンとした服裝で浴室へ入り、ヴエランダへ腰かけ、又散歩に出た。

その朝、花嫁は仁木の細君に負けなく早く起きた。無論眠らなかつたわけではなかつた。ただカアテンの隙間から潜び寄つた朝の白い光が、それ以上寢の床に彼女を置かなかつた。彼女は、その可憐なよごれた顏を……それには決して新夫の責任がなくはなかつたが、……見られるのを欲しなかつたのだ。彼女は顏を洗ひ髮を梳き、そして夫の起きるのを待つ間に、青葉の影を落したヴエランダの籐椅子に倚つて、「ドナウの流れ」を低聲でうたひ始めた。

そのひびきで、若い夫はこの上もなく爽かな眼をさました。それは、春の空の雲雀にもたとふべきだつた。彼は靜かな呼吸をしながら、默つて快い顫音に聞き入つた。

が、突然、或る何かの故障が、そのデリケエトな油の流れに起つた。廻轉をとめられた蓄音機の盤のやうに、音が急に停止した。「あら！」と云ふ短いおどろきの叫びがそして擧げられた。

若い夫は、その感動詞で敏感に兩眼をひらいた。が、言葉をかけやうかと躊躇してゐるあひだに、いきなり花嫁の救ひに襲はれた。

「あなた！」

彼が眼をさましてゐる事を、彼女は、夙に知つてゐた。

「どうしたの？」

彼は彼女のフックラした手を握つた。

「蟹がゐますわ、蟹がヴエランダに……。」

「蟹が？」

彼に取つてもそれは以外なニユースだつた。

「えゝ、来て御らんあそばせ！」

彼は無論行つた。如何にも、ヴエランダの茶卓の下に、一疋の薄紅い蟹が這つてゐた。

「ねえ？」

「たしかに蟹だ。——が、どうしてこんなところに蟹がゐるんだらう？」

「山の中ですから、きつと家の中まで蟹が這入り込んで来たんでせう。」

やさしい女鳩の胸毛のそよぎのやうに、彼女は夫へ身體を摺りつけた。彼女の敏感な頭は突嗟に、寝床へ入つて来る蟹の感覚をさへ想像した。

「さうかも知れないね。」

仁木は隣りのヴエランダに倚つてゐた。

「そんな物、又川つぷちへ行けば幾らでもゐるよ。」

彼は探し倦きて云つてゐた。が、まだ云ひ終らないうち、隣室の問答を敏膜に感受した。そして、隣りの異變が全く同一物によつて惹き起されてゐる事を知つた。

「おい。」

思はず笑ひ出しながら、彼は家族へ呼びかけた。

「ゐるよ。ゐるよ。隣りの室へ行つてるんだ。――A坊、お前行つて貰つておいで！」

「あら、お隣りへ？」

細君のあとから、子供達も一緒にヴエランダへ駈け寄つて來た。

「うむ、今若い細君がびつくりしてね、きツと山の中だからホテルへまで蟹が這ひ込むんだらう、なんて云つてるんだ。」

「おや、瓜いてらツしやい。」

細君は、安心とおかしさを攪き交ぜた表情をした。早速A坊は、仕切りの高い衝立を動かした隙から使者に立つた。

「蟹を下さい！」

突然の端的な要求に、若い隔壁例は再度のおどろきを持つた。

「あら、これ坊ちやんの蟹ですの？」

「そうです。」

小さな使者は、兵隊のやうに簡單明瞭だつた。

「どうも済みません……。」

背後から、仁木の細君が雲の脱出記を一口話した。

「そうで御座いましたか？ ……あら、坊ちゃん大丈夫ですか？」

A坊がいきなり、つかんだのを見て、花嫁はびつくりして叫んだ。

「これ、おとなしい雲です。」

A坊は無事脱出者を連れ戻した。衝立がもとどほり、立てられた。若夫婦は、完全な隔離館に退つた。

「よくまアあんな方まで這つて行つたもんね。」

仁木の細君は改めて感心した。

「身體は小さくてもえらいね。」

子供達は勇敢な雲に對して、いよいよ愛着を感じた。その勇ましい雲を手もとに置く爲め、更に新しい棲家が工夫された。彼等は、燕子花を活けた床の間の花瓶を、危く空けやうとしてから、机の上の黒い籠の、ホテルの寫眞刷りの書翰箋や封筒をみんな出して、ひつくりかへして雲を伏せた。

そのあひだ、仁木夫婦は不意に自分達の結婚の晩の追憶に耽つてゐた。

「あの晩、あなたの下宿の二階に寝ましたツけね。一緒に蚊帳を釣つて。——そうしたら、夜中に一疋蚊が入つて、刺されたとか何とか云つてあなたは起きあがりなすつたけれど、どうしてもつかまへられなく、切角釣つた蚊帳をはづして、二人で一生懸命上から踏みつけましたわね。」

「そんな事があつたかねえ？」

「あら、おぼえてらつしやらないの？」

「下宿の二階はおぼえてゐる。」

「蚊帳の事は？――いやなかたね。」

「隣りの新婚達も、きつと十年位經つたら盥の話をするよ。」

記述は、少し遡らなければいけない。

仁木一家がホテルへ着いて間もなく、ホテル附屬の自働車が勢ひよく玄關へ爆音を立てた。今度は、九官鳥より早く番頭や女中達が出迎えた。停車場前のホテル案内所へ出張してゐた番頭の一人が、自働車を出すと同時にホテルへ知らせたからだつた。

車の中からは、ふとつた、どこか會社の重役と云つた、五十に近い和服の男が降りた。そのあとから、丸髷に結つた、痩せぎすの、さほど色も白くないくせに粋な、一見して藝妓あがりと睨まれる年増の細君が降り立つた。最後に、母親に似たらしく色の淺黑い、が、一向粋でも標緻よしでもない女の子が出て來た。ホテルの者達は常得意の扱ひかたをした、

「よくいらつしやいました。」

「今度はしばらく御見えで御座いませんでしたわね。」

「この頃一寸忙しくてね。」

男は鷹揚に口をきいた。

「切角蕨狩りの知らせを頂いたのですけれどねえ。」

馴れた調子で細君は云つた。

「今度はお嬢さまも御一緒で？」

「ああ、——いつもの室は空いてゐる！」

「空いてをります。さあどうぞ。」

幾人かの女中に守られて、紳士の一族は別館の日本間の、十畳敷へ六畳もの控室の附いた最上の室へ、長い廊下と階段を傳つて行つた。女の子は、小さな女中のやうに両親のあとからチョコチョコ走つた。

ホテルの滯在客は多くなかつた。殊に子供は尠く、三人きりだつた。無論、それは仁木のA坊とB子と、新しいB子だ。——偶然にも、二人は同じ名前だつた。年も、新しいB子が一つ上だけだつた。

そう云ふ關係が、三人を忽ち親密な交際狀態に導いたのに、何の不思議もない。が、彼等を特別にしたには、もう一つの原因があつた。それは、女の子を最後にひとり自働車から降りさせ、又廊下を女中のやうに走らせた同じ原因だつた。

彼女の両親達は、彼女に對しておそろしく無頓着にした。——決して積極的な殘酷な行動をしたわけではなかつた。格別彼女を叱責するでも、手を當てるでもなかつた。が、もしそれさへ面倒がる冷淡が殘酷の一種なら、この両親ほど殘酷な人間は珍しかつたにちがひない。

親達は、なまじ他人に對する以上、幼い存在を無視した。前述の新婚の若夫婦以上、子供に對して隔離的な立場を取つた。父親は、母親と家族風呂へ入つたあと、大浴場前のバルコニイに陣取つた。そして椅子の一つに腰をおろし、四脚の台の上へ碁盤を載せて、他の客達と黑白の石を闘はせたり、ひとりパチパチと扇子と石を使ひ分けたりしてゐた。細君の方は、彼の傍の椅子で觀戰武官の役を勤めたり、それに倦きると向ふのピンポン室へ入つて、若い客達と一緒に賑かに笑ひ興じた。スポーツに加はりもし、傍から勝負を數へもした。

「えゝとツウ、……ツウ何ですか？——ああ、ツウワンこんですか。……今度は？——スリイワン？三つはスリイつてんですね。」

彼女には、簡單な英語がよくわかつてゐないらしかつた。

そのあひだ、例の色の淺黑いB子は、ひとり置き忘れられてゐた。

食事の時も、兩親は自分の室へ膳を取つて、三度とも——細君の酌で——酒を飲んだ。B子は先きへひとり飯を濟ませられ、室から出されて、ぶらぶらと野良犬のやうにホテルを歩き廻つてゐた。仁木一家が時刻ごとに食堂へ出かけて、隅の一卓を圍みながら靜かな食事をしてゐると、彼女は、いつも入口のカアテンの陰へ來て、寂しそうにいつまでもそつと他人の團欒を覗いてゐた。

「一體どうしたんでせう、あの子は？」

「變な親達だね。」

彼女の行動は、いや應無し仁木一家の話題にのぼつた。

「あの位の年になつたら、隨分子供が可愛い筈なのに。……赤の他人よりひどいや。」

「よく平氣でゐられますわね。」

母親として默つてゐられないやうに細君は云つた。

「顏つきが似てゐるし、あれは細君の連れ子かも知れないね。」

「そんならそれで、何故お母さんだけでも面倒を見てやらないんでせう。あんな贅澤な金持ちらしい樣子をしながら、ほんとにいやね。」

「可愛ちやうね。」

「僕達で見てやらうや。」

親達の言葉を聞きかぢつて、A坊もB子も同情してしまつた。そして新しいB子を自分達の仲間へ入れた。（實は、そ

うてたくても入れたくて仕様がなかつたのだつた。黒いB子は、ひどくよろこばされたた。彼女は、籠さへあれば一羽に選び出いた。淋しく萎れた花のやうな彼女が、はしやいでゐると明るい光を頬に見せた。

彼等は、或は玄關の九官鳥のところへ押しよせた。そして、彼等の頭に浮ぶ色々な言葉を云はせやうと試みた。……が、その頭のいゝ、同時に頑固な鳥は決して新しい言葉をおぼえやうとせずに、嘗て採集したヴオカビユラリイばかりを繰り返した。「お早う。」「あのねえ、——一寸待つて下さい。」「ホウホケキヨ。」「ピヨピヨピヨピヨ……。」最後の發音はどこかのヒヨツ子の眞似らしかつた。彼の第一の得意は、「もしもし龜よ、龜さんよ」だつた。子供達の方でも、一所懸命その唱歌をうたはせやうと努めた。が、鳥は意地惡るく、請求すればするほどちがつた事を云つて彼等を焦らせた。

意地惡な—— あまりに意地惡な鳥に倦きると、今度は彼等は二階へのぼる階段の兩側の平たい板の上へスリッパを乘せて、自分達を代表させた滑走競爭をさせた。が、無器用なスリッパは、競爭の途中で横へ飛び出したり、停つたり、ひつくりかへつたりばかりした。……それにも倦きると、彼等は隱れんぼや鬼ごつこをした。便所のドアのうしろへかくれて、思ひがけなく大人にあけられてびつくりしたり、玉突き台の素敵に嚴丈な台の下へもぐつて、頭をいやと云ふほどぶつつけたりした。

子供を遊ばせて貰つてゐるのを見て、流石にわづかばかりデセール風な菓子を紙に包んで、例の痩せぎすな細君は、一言の御禮と一緒に仁木の細君へよこした。

「苺取りにいらつしやいませんか?」

二日目の午后、仁木達が南洋鳩や狸の金網の前にうづくまつてゐると、一對の客を案内して橋を渡つて行く女中が聲を

かけた。ホテル附属の薔薇園の前をかねて聞かされてゐた仁木達は、腰をあげた。

「一緒に行つて?」

細君は傍の浅黒いB子にきいた。B子は默つてコツクリをした。

「みんなで行かう。」

A坊は先きへ駈け出した。

女中のあとから、かなり遠く彼等は川下の方へくだつて行つた。崖の一方を降りた時、川沿ひの繁みの中に一軒の平家が蔭つてゐた。

「大旦那様の別荘で御座います。」

そこへは、「大旦那様」夫婦は時々來るだけだと云つた。その庭先きに、いろいろな色の西洋草花の畑がひろがつてゐた。その附属花園から、ホテルの花瓶や吊り花活けの一切の草花が取られて行くのだ、と女中は又鉄で說明した。花園の上には幾つかの段々畑が重なつて、全部薔薇に埋れてゐた。低く土を舐めてゐる葉蔭に、矮人の提灯行列のやうな無數の眞つ赤な實が覗いてゐた。

「いくらでも御好きなだけ御取り下さいまし。なりたけよろしいのを。」

女中は、指揮官のやうに笊を振り廻した。子供達も大人も、叫び笑ひながら赤い火をむしり取つた。まるで急がなければ消えでもするやうに。——かなりな大笊が一杯になる時分、やつと彼等は夕方の新鮮な反照の中をホテルへ歸つて行つた。

晩餐の前に一浴びしやうと、仁木達は浴場へ廻つた。と、そこのヴェランダには、例の紳士が細君と碁盤へ向き合つてゐた。子供達の叫び聲に、彼等は一寸仁木達の方へ眼をあげた。が、すぐ又盤へ向けかへた。隨分長くゐなかつた子供

へ、一言「どこへ行つてゐたの？」と訊かうともせず、又仁木達へ挨拶をしやうともせずに。

9

仁木達は、その夜食事のあと苺を注文した。食堂附きの女中が早速燃えるやうな實へドロドロにクリイムを掛けた白皿を運んで來た。それは、彼等の味はつた事のない苺のうまさだつた。子供達は、小さな獣のやうに鼻まで皿へ突つ込んだ。

ふと、向ふのカアテンの陰に、その時仁木は小さな淋しさうな顔を發見した。

「あ……。」

彼は女中を呼んでもう一皿注文した。

「ウツカリしてゐましたわね。」

「B子ちやん、いらつちやい。」

仁木達のB子は、椅子の上からカアテンへ手を振つた。一種複雑な微笑が、淺黒いB子の小さな顔を走つた。そのまゝそれはカアテンのうしろへかくれた。新しい皿を持つた女中が交替に現れた。

「僕、引ッ張つて來やうか？」

A坊は猿のやうに椅子から滑り落ちた。

「お待ち。それよりこの苺を持つて、B子ちやんのお室(へや)へ行つて來ませう。前に菓子を頂いてゐるし、その方がいいでせう。」

細君は、クリイムの揺ぐ皿を注意深く手に持つて椅子を離れた。

仁木が堆高い皿を空にした頃、細君は戻つて來た。

「どうだ？」

「B子ちやんと一緒に行きましたわ。そしたらね……。」

細君は興奮したやうに、

「二人で酒を飲んでらしツて、どうもありがとう御座いましたツて、そのまま取りあげて了ひなすつたの。」

「B子ちやんにやらないのか？」

「えゝ、もうこの子は先きへ御飯を濟ませましたから、今食べては食べ過ぎますから、ツて。」

「だつて今食べたい盛りだ。ちツと位食べたつて障るもんか。」

「ほんとにね。それに、切角持つてツてあげたんですもの。その位なら、ここで食べさせてあげるんだつたわ。」

「一盃酒を飲むんでも、子供がゐたら、傍へ置いて、一緒に肴でも食べさせたらいゝんだ。——子供だつてどんなにたのしみだかわかるまいに。」

「惡いお父さんだね。」

A坊が憤慨を示した。

「だから、あなたがたは、あんまり我がままを云つちやあ駄目よ。そう云ふお父さんやお母さんだつたら、どうします？」

「僕ア泣くな。」

A坊は端的な同答を發した。

翌朝、仁木達は勘定書きを持つた。豊かな待遇にひどく恐れをなしてゐたにも係はらず、案外計算は尠かつた。

「昨夜食べた物が落ちてゐますよ。」

一とほり調べて、ホテルの吞氣さを笑ひながら仁木は訂正した。

「それはよろしいので御座います。」

女中は微笑しながら、案外な返答をした。

「だつて、――客の分まで取つたんですよ。」

「幾らお取りになつても。――こゝでは、菓は御客様の御好きなやうに、御自由に御あがりなさる事になつておりますから。」

「そう？……」

仁木は嚴くなつた。

「それで御商賣になつて？」

細君が正直な質問を呈出した。

「大旦那様が御金持ちでいらつしやいますから。……此のホテルも、御自分の別莊代りにやつてらツしやるんで御座いませう。」

「そう？」

仁木は、急に頭に閃いたやうに細君を向いた。

「共産主義の時代になつたら、みんなから云ふ調子になるんだらうね。」

「そうしたら、どんなに子供達なんかしあはせかわかりませんね。」

「僕達の子供がしあはせになれると一緒に、あの黑いB子さんなんかも隨分しあはせになれるぞ。」

11

仁木達が玄關へ出ると、淺黑いB子も出て來た。
「もう行つちやふ？」
彼女は寂しさうな眼をして友達を見、彼等の兩親を見あげた。
「切角おなじみになつたんですのにね。」
細君は彼女の柔かな髮を撫ぜた。
「又いつか遊びませう。」
A坊はB子の手を握つた。彼女は默つてコックリをして、片手で肥つたB子の手を取つた。
「君にいい物あげやう。——ねえ、おかアさん。」
急に思ひついたやうに、A坊に母親の方へ駈け寄つて低い聲できいた。
「僕、蟹をあげていい？」
「あげたければ。」
彼はバスケットの蓋をひらいて、秘藏の山蟹を取り出して又B子の方へ行つた。
「これね、とてもおとなしい蟹なの。あとで遊ぶやうにあげませう。」
「いい？」
やや怖々(こはごは)B子は手を差し出した。
「ちよれ、ちつとも挾まないの。」
肥つたB子が保證した。

「どうか御あがり下さい。」

この時番頭が手をひろげて來た。

「さよなら。」

「ちやよなら。」

二人の子供は、親達と車へあがつた。背後の硝子窓から、紅い蟹を小さな手に持つた、泣き出しそうな顔つきをした友達の姿が映つた。

「あのねエ、一寸待つて下さい。」

九官鳥が高い聲を張りあげた。それを合圖に、自働車は爆音と白い煙の中に走り出した。

「いろんな人へ行く蟹だな。」

硝子を透し見て仁木は云つた。

「苺のお代りね。」

細君が云つた。

「けれど僕、あの蟹、心配だな。」

突然A坊が心配そうな顔つきをして叫び出した。

「氣をつけないと、死んぢやふかも知れないね。」

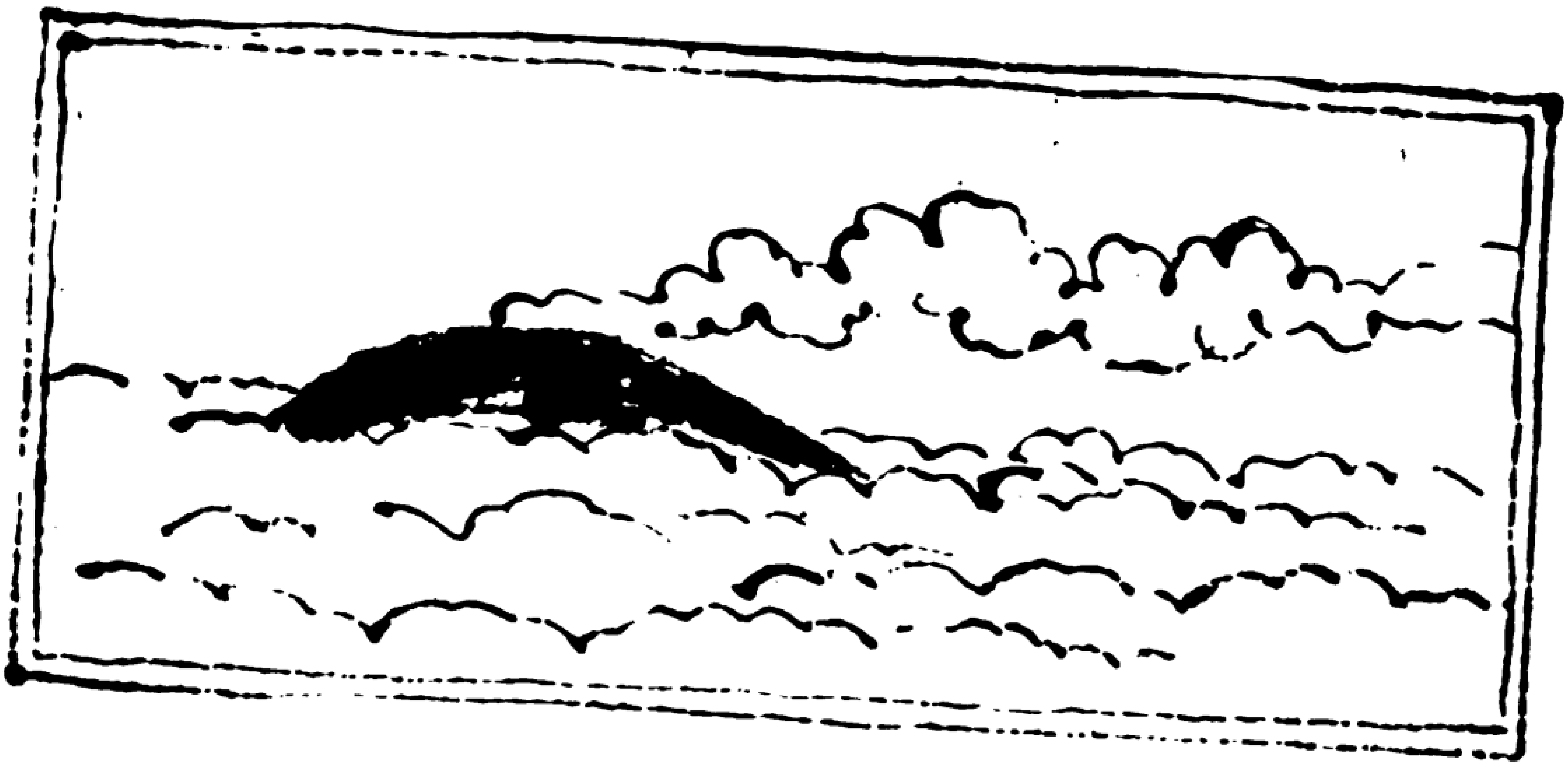
「そうぢやないの。——又あの惡いお父さん達に、B子ちやん取りあげられないかね、お父さん?」

「取りあげられるかも知れないな。——いつそ、B子ちやんを貰つて來た方がよかつたかも知れない。」

「そうちまちよ。」

肥つたB子が揺れながら叫んだ。

1927、7



白い蚊帳

中條百合子

なほ子は、従弟の部屋の手摺から、熱心に下の往來の大神樂を見物して居た。その大神樂は、朝早くから温泉町を流して居るのだが、坂の左右に並んだ温泉町は小さいから、三味線、鉦などの音が町の入口から聞えた。

今、彼等は坂のつき當りの土産屋の前で藝當をやつて居た。土産屋の前は自働車を廻せる程度の廣場なので足場がいいのだらう。大神樂は、永い間藝をした。朝から殆ど軒並に流して來たの故もう見物は尠い。土産屋の柱のところに、兒供を抱いた男が一人立つて居た。あとは子供連だ。その子供連も仲間同志で遊びながら、惰力的に彼等の周圍から去らずに居るといふだけであつた。間に、田舍萬歲の野卑な懸合話をしたり、頭を扇ではたき合つたりするが、愈々本氣で水藝にかゝると、たかみの見物をして居るなほ子まで氣合に引き入れられる程、巧に、眞面目にやつた。氣のない見物を當てにせず、藝當を自分でやつて樂しんで居るやうな風があ

つた。その男の黒紋付は、毎日埃を浴びて歩くので紺のところの色が變つて居る。寒國らしい長半纏の紺を染めて太鼓道具の朱線がちら／＼したり、太鼓叩きには紫色の着流し男が居たりするのが、荒涼とした温泉町だけに珍らしい色彩であつた。

なほ子は、すつかり道具を仕舞つた小車を引いて彼等が其處を立ち去るまで見て居た。

「あんなにやつて、いくら位貰つたのかしら………一圓ぐらゐ？」

詮吉は座敷の長火鉢の前に中腰になつたまゝ「さあ、この邊ぢや一圓は出すまい、よくて五十錢だらう」口を利きながら、彼は持つて居る半紙大の紙へ頻りに筆を動かした。

「なあに」

「――ふむ」

軈て

「どう？　一寸似て居るだらう」

彼が持つて來たのを見ると、それは大神樂に見とれて居たなほ子のスケッチであつた。横を向いて居る頬ぺたのところや、爪先に引かゝつたスリッパの尻尾が垂れ下つて居るところなど、なほ子は自分の感じをはつきり感じた。

「こんなに描けるの？　詮吉さん」

「偶然さ、君が餘り餘念なく見て居るんで一寸面白いなと思つたもんだから。――でも感じ出て居るでせう」

「うまいことよ、この位なら物になるかもしれないわ」

詮吉は、日本橋の方に商人暮しをして居るのだが、繪でも習ひたい、さういふ趣味の幾分かある若者なのであつた。

三階は、湯治客のすいて居る時なので空部屋が多い。靜かな廊下を、二人はスケッチをもつて、總子の居る方へ戻つた。

「長い大神樂だね」

「その代りこんな傑作が出來た」
「見ち呉れ、よう。ちやない？」
吉右衛門の河内山の辭をもぢつて、皆、スケッチをそつちのけに笑つた。
詮吉が散歩に出たいと云ふ。總子は風があるから厭だと云ふ。結局なほ子と詮吉とだけ出かけることになつた。

詮吉は輕さうなセルに着換へ、ステッキを下げて出て來た。
「この位風があれば殺生石も大丈夫だらう。一つ見て來よう」
「お總さん、見ずじまひになつちやうわ」
「いゝさ、我まゝ云つて來ないんだもの、來たけりや一人で來ればいゝ」
なほ子は先に立つて、先刻大神樂をやつて居た店の前から、細いだら〳〵坂を下つた。
「道、分つてるの」
「えゝ」
夏の準備に、あつちこつちで路普請や建て增しをして居る。その坂のところでも僅かな平地に日當り惡さうな三階建が立ちかゝつて居た。一雨で崩れさうなごろた石の石垣について曲り、道でないやうな土産屋の庇下を拔けると、一方は崖、一方に川の流れて居る處へ出た。川岸に數軒ひどい破屋があつて、一軒では往來から手の屆く板の間に黄色い泥のやうなもので拵へた恵比壽がいくつも乾してあつた。
「——ひどい路だな」

なほ子は默つて歩いた。彼女にとつてこの路は始めてゞはなかつた。數年前、今は別れた夫と此道を何度も通つた。庭の爲に祀つてある何かの小さい社に見覺へがあつた。

橋を一つ渡ると、道は左手に川を眺めて進んだ。ところどころ、大きな地崩れでやつと一人歩ける小道が、右手の石垣よりに遺されて居る、やはりごろた石の垣だ。歩きながら、なほ子はひとりでに二三度、その石垣の上の家の方へ視線を向けた。彼女が五日ばかり居た小林氏の役宅と云ふのは、確にその邊に在つたに違ひないのに、何處にも其らしい家のかげは見えなかつた。たゞ、どれが新しいとも分らない同じやうな破屋がその邊一帶に建てこみ、一軒の理髮店が、赤と藍との捻り分け棒を軒先に突き出して居る。當時の記憶は、なほ子にとつて快いものではなかつた。然し、さう數年のうちに全然忘れ切れる種類のものでもなかつた。それに反して四邊の樣子の變りやうの激しさが、なほ子に意外な、ぼんやり驚きの感情さへ與へた。見れば、川も、幅が半分ばかりになつて居る。

諄吉は、呑氣にステッキを振り振り

「荒れてるなあ、物凄いやうだ」

と、都會人らしく感歎した。

「そりや湯ヶ原のやうには行かなくてよ」

「え？うむ、そりや分つてるが…………硫黄の出るところは流石に違ふな」

「家らしいのは宿屋だけね」

此方面ばかりでなく、宿屋が並んだ表通りを一寸裏へ入ると、どこでも北海道の開墾地へ行つたやうな有様なのであつた。

彼等は、元湯共同浴場と立札のあるところへつき當つた。道が二筋に其處で岐れて居る。

「どつち？」

眺め廻し、なほ子は苦笑しつゝ

「さあ、分らなくなつちやつたわ」

と云つた。

「右ぢやないかしら」

彼等の先へ、二人連れの男がぶら〳〵行くのでなほ子はさう云つたのであつたが、少し行くと其方は行き止りであつた。

「おや〳〵、怪しい道案内だな。――誰か訊く人はないか――訊いて見よう」

「大丈夫よ、ぢやあ此方」

一つの共同風呂の窓が開いて居た。強い硫黄の香が漂ひ、歩きながら人氣ない幾つもの湯槽が見下せた。湯槽を仕切る板壁に澤山柄杓がかゝつて居た。●とか、中村、S、S、などと柄杓の底に墨で書いてある。

其處を過ぎると、人家のない全くの荒地であつた。右にも左にも丘陵の迫つた眞中が一面燒石、燒砂だ。一條細い道が踏跡にかためられて、その間を、彼方の山際まで絶え〳〵について居る。さら〳〵した白つぽい巖の破片に混つて硫黄が道傍で凝固して居た。烈しい力で地層を撫々搖られたやうに、平らな部分、土や草のあるところなど目の届く限り見えず、來た方を振りかへると、左右の丘陵の崩に、僅か數本の躑躅が遲い春の花をつけて居るばかりだ。森として居る。硫黄の香が益々強い。

自然の壓迫を受け、默つて足早に歩き乍ら、なほ子は悲しい歎ばしい感動を覺えた。此處さへも、なほ子が嘗て覺えて居る光景とはいつかすつかり異つて居た。道の工合も違ふ。大きな地辷りがあつたと見え、巖と泥とごたまぜに崩れ落ちて居る丘陵も違ふ。もつと奥の温泉への登り口が何處かその邊の篠原の間について居た筈だが、見當もつかない。――い

くら見ても見當のつかないのが悲しく歎はしく、なほ子は、度々その花を見ては遠い時代を偲んだ。遠い一生……

結びついたものと思つて居た自然が、斯うも新しいものとなつて眼前にある！

飛ぶものは雲ばかりなり石の上　芭蕉

石の碑が見えるところまで來ると、銈吉は眞白い手巾を出して鼻を覆ふた。

「こゝより、却つて來るまでの方が臭かつたわ」

「さう？……いや臭い臭い」

銈吉は一旦はなした手巾を又鼻におしつけた。

暫く、黒いごろりとした石を眺め、彼等は左手の丘陵へ登る路を歸途についた。或ところで一坪ほどの地面が大きな一本の躑躅ごと坂道へ崩れ込んで居た。根こぎにされたまゝ、七八尺あるその野生の躑躅は活々樺色の花をつけて居た。

眞先に銈吉が東京へ歸つた。なほ子も續て立つことになつたが、單調な山の中に半月も居て、同じやうな郊外の家へ歸るのは如何にも詰らなかつた。眞直に夜の東京の中心に戻り、燈火と人間と、明るく暗く錯綜に揉まれたかつた。弟でも誘ひ出し何處かで夕飯をたべるつもりで、なほ子は上野へ着くと兩親の家へ電話をかけた。

「お離れに居らつしやいますから一寸お待ち下さい」

「もし〳〵、こゝ自働電話だから早くしてね」

それでも、待つ時間が氣になる頃、耕一が出て來た。

「あゝ、暫く。——今日歸つたの？」

「今上野なの——貴方出て來る氣ない？」

暫く考へて居たが、耕一は

「僕今夜は家に居た方がいゝな」

と云つた。

「友達が二三人手傳ひに來て呉れることんなつてるから——え？製圖——これに阿母さん工合わるがつてるから、家へいらつしやいよ」

なほ子は、灯のつき始めた山下邊、池の端の景色などを坐つたタクシーの窓から、それでも都會らしく感じて眺めた。

植木屋が入つたと見え、駒込の家の玄關傍に、始めて見る下草の植込みが拵へてあつた。薄すり紫がかつた桃色の細かい花が、饑い葉の間に咲いて居る。それを見ながら、なほ子は呼鈴も押さず、暗い板の間へ通つて行つた。茶の間の戸を開けようとして居ると、

「アラ」

千世子が、おかつぱと制服の裾を膨らませ、二階から駈け降りて來た。

「お母様、工合がおわるいつて？」

「えゝ。お姉様いつ歸つてらしつたの」

「今かへつたの。——寢てらつしやるの」

千世子は、何だか當惑さうに合點した。そして、少女らしい様子で

「——疲れてるんだつて」

と云つた。なほ子は、母が下りて來るか、自分が二階へ行かうか、千世子をきかせにやつた。

「今起きたところだから、自分はなほ休みたいんですつて」

なほ子は、その間に風呂へ入つた。水道の湯が久しぶりで心持よく、生垣の彼方で活潑な子供の聲がしたり、こたより一寸近いところでピアノの音がして居たりするのが、愉快であつた。生活の泡立つて居る感じが、體の周圍でおふく立つ石鹸の感觸と纏に、なほ子は何度も何度も勢よく立つたまゝ湯を浴びた。

輕々した氣持で、なほ子は二階へ登つて行つた。

「いかゞ」

「ああ」

まさ子は、半分起き上つた床の上で、物憫さうに首を廻し、入つて來る娘を見た。

「どうもはつきりしないんで困つて居るのさ――溫泉はどうだつたい――よく來たね」

「いやに疲れた聲ね、どんななの？」

まさ子は、床の裾に腹這ひになつて居る千世子の方に目をやり

「何だかいろ〳〵たゝまつたんで惡かつたんだね」

と云つた。力なく腹のところを折りまげるやうな姿勢で

「食慾がちつともないんで疲れて」

と吐息をついた。

眩しくないやうに足許の台に載せたスタンドの明りで、なほ子は皿に盛られたまゝの煮た果物や赤酒のコップなどを見た。其等は少くとも午後からぢゆうそのまゝ其處に置かれて居た樣子であつた。なほ子は、女中を呼んで、其那ものを皆片づけさせた。

「始終そばに置いて見て居ちや猶食慾が出ないわ。――今日何あがつたの？」

「牛乳だといくらでも飲めるから、きのふは牛乳二合ばかり、今日は葛湯も少したべた」

まさ子は、大儀さうに小さい聲で

「あゝあゝ」

と云ひ、先づ肱をおろし、肩をつけ、横たはつた。

千世子が下で、疲れるんだつて、と云つた時、微妙な一種の表情があつたので、なほ子は、屢々ある不眠の結果だらうと思つて居た。まさ子は數年來糖尿病で、神經系統に種々故障があるのであつた。

「――ぢや今日だけ一寸臥て居らつしやるんぢやなかつたのね」

「國府津から歸ると惡いのさ――あとさき六日ばかりだね」

耕一や千世子が母の容體につき無頓着さうにして居るのが頼りない變な心持をなほ子に起させた。

「何だかすーすー寒いね、障子閉めとくれな」

まさ子は、小さい娘が居なくなると、細かく容體をなほ子に話した。なほ子はそれを聞かない前より不安になつた

「その事は一時的で癒つたつて、此那に弱つて居るのはいけないわ、第一食慾のないなんか。どうしてちやんとした人に診てお貰ひんならないの」

まさ子は、辯解するやうに

「診せたよ、だから――久保さんに」と云つた。

「更年期にあり勝のことだから、その方は何にも心配することはないんだよ。――疲勞だよ」

そのうちに、父の昌太郎も歸つて來た。

「どうですね、少しは何か食べられますか」
それを補へ、まさ子は半分冗談で攻めるやうに
「國府津へなんか來いと仰云るから惡いんですよ」
などと云つた。

なほ子は臺所へ出て行き、冷肉を拵へる程を注文させた。料理番の傍に立つてゐる女中に
「晩に上るもの、何か拵へた？」
と訊くと、
「いゝえ、何も致しませんでした。召上りたくないと仰云いましたから……………」
病人と、あとは小さい娘とだけで病床に居る母の境遇がなほ子の心に迫つた。
おそくなつて、野菜スープやサラドを運んで行つたが、まさ子は、悦び
「美味しさうだこと――御馳走になつて見ようか」
と云ふばかりで、ほんの一口飲み下した丈であつた。彼女は、なほ子を落膽させまいとして云つた。
「明日にでもなれば、きつと味が出るだらう」
父親と二人になつた時、なほ子は本氣になつて專門醫に見せることを勸めた。
「何でも糖尿病と更年期に押しつけて置いて、ほんとに手後れにでもなつたら大變よ」
昌太郎は
「うむ、うむ、いやその通りだ」

と、頷いた。が、その手術を決める決心はつかないらしかつた。なほ子は、祖父の癌であつたことからそれを氣にして居るのであつたが、まさ子は、其那疑ひを頭に置かないし、置いて居るとしても彼女は第一醫者に信用を置いて居なかつた。十三年ばかり前、癌だと云はれ、切開されさうになつた經驗があつた。その時、まさ子は其方面では大家である專門醫と議論し、頑張つて到頭切開させなかつた。それは後になつて見ると實際癌ではなかつた。幽門の潰瘍風のものであつたと見え、まさ子は殆ど醫者にかゝらず、忍耐と天然の力をたのみに癒した。自分の體は自分が一番よく知つて居る、そのやうに今度も云つた。

十時過、なほ子は耕一の仕事場にして居る離れに行つた。襯衣一枚になつて、亢奮が顔に迸つて居た。彼は出來上りかけて居る製作をなほ子に見せながら

「姉さん居て呉れると、どんなに心丈夫だか分らない——話んなりやしないんだから、間抜けばつかりで」

と云つた。傍の台の上に、耕一が製図して居る家の油土の模型が出來て居た。彼は

「電球見ないでね」

と注意して、二百燭をつけ、それを寫眞に撮つた。卒業製作なのであつた。

翌日、まさ子は床についたまゝで、矢張り殆ど食事が摂れなかつた。

「此那に長く恢復しないことは無いのに」自分でも怪しんだ。

「幽門の瘢痕は仕方がないもんださうだね、時々サーッと音がするやうだよ。——何だか感じがある」

母自身決して平氣で居るのではなく、却つて或意味では醫者を恐れて居るのが、なほ子に感じられた。なほ子が押して

診察をすゝめると、不快さうに理由を云ひ、軈て、全然違ふ話をいろ／＼始めた。

「斯うやつて寢て居ると、昔のことを頻りに思ひ出してね、お祖母さまがお在らしつたうちに、いろ／＼伺つて置かなかつたのが本當に殘念だよ。――御自分でも話して置きたさうだつたんだねえ、此頃、もう喋つて喋つて、私の方が閉口してしまひました。」

明治二十五六年頃住んで居た築地の家の洋館に、立派な洋書や螺鈿の大きな飾棚があつた。若い自分が從妹と、そこに祖母が隠して置いた氷砂糖を抓食べて叱られた。その洋書や飾棚が、向島へ引移る時、永井と云ふ惡執事にちよろまかされたが、その永井も數年後、何者かに淺草で殺された事など、まさ子は悠くり、樂しさうに話つた。向島時代は、なほ子も聞いた話が多かつた。それから、昌太郎が外國へ行つた前後の話。――母の生涯のこれまでの生活全幅が、くつきりなほ子の前に浮び上つて來た。

なほ子は母の老いたことを沁々感じ、さつき彼女自身、祖母について云つた口うらから、母が飽きず思ひ出話をするのが、水のやうに淋しかつた。

午後、復興局に働いて居る若者が見舞ひに來た。區劃整理で、寺の墓地を移轉するについて、柳生但馬守の墓を掘つたら、中には何もなかつたと云ふ話をした。

「へえ、奇體なことがあるね、どうしたんだらう」

まさ子は興味を示した顔つきで、その若者やなほ子を見た。刹那とき、眼に平常の母らしいかさばつた強い重い感じが現れた。が、なほ子はその間にも心痛の加るのを感じた。半分笑ひながら、

「このお婆ちやんは頑固でどうしてもお醫者がいやだつて仰云るのよ。土屋さん、一つすゝめて頂戴」

と、なほ子はその客に云つた。土屋が歸ると、まさ子は、横になりながら

「一つは精神的にも來て居るんだらう」

と云つた。

「この頃は生きて居る張り合ひがなくなつたやうな氣がする――何か期待するなんていふ氣持がちつとも起らなくなつてしまつた。極く冷やかな心持だねえ。悟つたつて云へば悟つたのかもしれないが……」

なほ子は思はずつよく

「悟りは冷やかなもんぢやあないことよ。あたゝかい筈よ」

そして、笑ひ出しながら云つた。

「けちなこと云ひ出すと、火をつけるぞ――」

「――何だい――」まさ子は「なんだ、飛んだ婆焼餅だね」

苦笑したが

「全くね、若い時分には、立派な家に據つて居る人を見ると、あゝ羨しい、自分もどうか彼那家に住みたいと思つたもんだが、此頃は、まあ一體此那家の後をどんな人が繼ぐのだらう、と思ふね、羨しくなんぞちつともない。却つて變な淋しい氣になる。――それに……此頃では父樣の力といふものも分つて來たし……これ以上の成功は望めないと思つて來たしね」默つて母の傍に自分も横はりつゝ、なほ子は心に感じてそれ等の言葉をきいた。母の心の内部に新しい轉機が來かけて居る。それが、どこかで自分の心とふれ合ふものらしいのをなほ子は感じた。

昌太郎が、北海道へ旅行しなければならなかつた。その留守の間、このやうなまさ子一人では心細いし、なほ子としては、どうしても一度信用ある醫者に診せないうちは氣がすまなかつた。三四日泊ることにし、一旦、郊外の家へ歸つた。

宵から降り出し、なほ子が十一時過て郊外電車に乘つた頃、本降りになつた。梅雨前らしいしと〳〵雨であつた。暗い

田舎道で揺れ乍ら電車が疾走する。その窓硝子へ雨がかかり、内部の電燈でちらちら見えた。なほ子は停留所へつく前に座席を立ち、注意して窓の外を覗いた。誰か迎へに来て居て呉れるであらうか。時間がおそかつたし、第一、約束もしてないから当には出来ず、然し、人通りない暗い町を、その元氣の足りない心持で一人行くのは閉口なのであつた。電車が止つた拍子に、待合所の隅でひよいと人の顔が動いた。大變小さい顔に見えた。がそれは總子であつた。なほ子はわざ〳〵出て居て呉れた總子の心持に、特別な思ひやりのあるのを感じ、一層嬉しかつた。總子は、不恰好な足駄の包や傘など一どきに抱へて立ち上り

「さ、これ—」

と云つた。

他の者はもう寝て居る。總子の部屋で茶をのみながら、なほ子は母の容態を話した。

「それで？—誰かに診せたの」

「まだ」

「そんなことつてあるものか」

總子は、大きな怒つたやうな聲を出した。

「貴女がついててそんな！」

「だからね、明日行つたら私自分で手筈するわ。もう親父さんはあてにしないで、ね」

目の前に母の顔を見てゐた間、心配は心配でも何か切迫したいものがあつたが、今總子と話して居ると、なほ子はこわさに似た不安を覚えた。親が老いたといふことが子にとつて持つ意味の大きさ、それがなほ子の心臓をさしたのであつた。—總子が煙をぱあつと散らせたから煙草をのんだ。そして、なほ子の顔を見て居る。なほ子も内心の感じに捕はれながら、自分を見て居る總子の顔を凝つと見て居たが、不意に彼女は口を少し開け、變に苦しげな恐怖に襲はれた表情をした。總

子の顔を見て居る眼に、問ひたげな色を現した。

「どうした？どうした？」

なほ子は、頭を振つて大丈夫と云ふ意味を示し、一寸經つてから

「何でもない……少々過敏になつて居るもんだから」

と云つて咳拂ひをした。言葉に出すのがいやでなほ子はさう云つたのであつたが、本當は譯があつた。總子の顔を見て居るうちに、なほ子は或夢を思ひ出した。それは、齒の拔け落ちる夢であつた。何かして居ると、上齒がみんな一時に生えて居る顎にずり拔けた。おどろき悲しみ、手で押へるがザク〳〵口一杯になつてどうしようもなく、その堅い齒がザクザクロ一杯ひろがつた時厭な、絶望的な感じが醒めて後まではつきり殘つた。同じ夢を一度ならず見た。なほ子は迷信家ではなかつたが、今突然その心持が甦つて來ると、神經の平靜が保てなかつたのであつた。

風呂を浴び、自分の部屋へ行くと、寢台の上に新らしい白い蚊帳が吊つてあつた。天井から吊るす丸い蚊帳であつた。爽やかさから慰安を感じ横はつたが、なほ子は容易に眠れなかつた。心を張りつめる不安を迎へ行くと、不安は暗の裡で無限に擴り、なほ子の心を蔽はす程強かつた。これは夢中な心配だ、夢中な心配だ。なほ子は心配で強ばり乍らさう思つた。生活態度について互の意見が違ひ衝突することが屢々あつた。それにも拘らず何と自分は自分の母を愛して居ることだらう。今となつて見ればその爲に却つて彼女も全力をつくし生きたことが理解され、愛されるのが必要なのはもう自分ではない母の希だといふことをなほ子は敬虔な心持で感じるのであつた。然し、子供の時から常に與へてであつた母、より强きものであつた母を、或時、弱きもの、全然自分の劬はるべきものとして發見するのは、なほ子にとつて異樣な感動であつた。理解しないことのあるのも當然だ。氣短かになつても關はない。なほ子はやはりその氣短かな母、理解せぬ母を母の生活の盛りの思ひ出の爲だけにでも愛すであらう。或時は怒つたり、或時は笑つたりしながら。——

なほ子は、新たな愛の自覺から、一層母を此世に於て離れ難き者に感じ涙をこぼした。



相馬の金さん

岡本綺堂

登場人物

徳川の御家人相馬金次郎。金次郎の弟半三郎。おなじく御家人石澤寅之助。伊勢屋千右衛門。伊勢屋の番頭長兵衛。おなじく若い者高八、久七。常磐津文字若。文字若の母おとく。稽古の娘およし。ほかに職人。長屋の女房、子供。料理茶屋の女中、料理番。青山の僧。上野の僧。農家の娘、子供。質屋の小僧。燈籠賣。町家の女房、娘、女中、若い者、小僧。車力。荷持の男。仲間。官軍の兵士など。

第一幕

（一）

江戸の末期。慶應三年、七月初旬の午後。

神田明神下の質屋、伊勢屋の店先。正面の上のかたは戸棚。まん中は奥への出入り口。下のかたの壁には質帳を澤山にかけてあり。店の上の方には土藏の白壁。下のかたには格子戸。店の外は忍び返しの附きたる板塀にて、木戸あり、用水桶あり。表は往來の體にて、町家つゞきと知るべし。

（店の帳場格子の中には番頭長兵衛が帳面を繰つてゐる。若い者富八は帳面を前にして十露盤を彈いてゐる。職人岩吉は店の上のかたに腰をかけて煙草をのんでゐる。下のかたには長屋の女房おくまが赤兒を脊負ひ、小さい女の兒を連れて腰をかけ、若い者久七を口說いてゐる。塀の外には小僧が水をまいてゐる。角兵衛獅子の太鼓の音きこゆ。）

おくま。ねえ、お前さん。後生だから、もう一度よく見て、百五十ばかり附けてお呉んなさいよ。（女の帶を突き付ける。）

久七。（帶をひろげて見る。）幾度見ても同じことで、四百と云つたら關の山で、その上は文久一つも附けられませんよ。

おくま。文久一つも附けられない。（呆れたやうに。）お前さんも若いくせに隨分邪慳な人だねえ。まあ、おとなしく云ふことを肯いてくださいよ。不斷の月とは違ふんですからさ。

久七。盆でも暮でも、こんなに耳の切れた帶で五百も六百も貸せるものですか。そりやおかみさんが無理ですよ。

おくま。なに、あたしが無理をいふものか。お前さんの方がよつぽど無理だよ。

久七。いゝえ、おかみさんが無理ですよ。

おくま。いゝえ、おまへの方が無理だ、無理だ。（泣聲になる。）女だと思つて馬鹿にするんだよ。

女の兒。おつかあ、もう歸らうよう。

おくま。どうして歸れるものか。今こゝに大事の用があるんだよ。

女の兒。歸らうよう。（泣く。）

おくま。えゝ、强情な餓鬼だねえ。（女の兒のあたまをぴしやりと撲つ。）

（女の兒はわつと泣き出す。背中の赤兒も火の付くやうに泣き出す。）

おくま。どいつもうるさいねえ。

（おくまは起つて赤兒をいぶり付ける。赤兒はいよ／＼泣く。女の兒も泣く。よき頃に水をまき終りて、小僧は木戸に入る。）

岩吉。いや、どうも大變だな。この暑いのにぎやあ／＼泣き立てられちやあ、そばに居る者までが逆上せあがつてしまふぜ。おい、久さん。なんとかして遣らねえか。

久七。だつて、お前さん。こんな帶で五百も六百も貸せるわけが無いぢやありませんか。

おくま。こんな帶といふけれども、このお正月に一分二朱で買つたんだよ。

久七。冗談云つちやあいけません、こんな帶が一分二朱で……。

おくま。二口目にはこんな帶、こんな帶と、あんまり馬鹿におしでないよ。

女の兒。（又泣く。）おつかあ、歸らうよう。

おくま。又泣きやあがる。（再び撲つ。）

長兵衞。（見かねて。）どうも困るな。（帳場から出る。）まあ、おかみさん。靜にしてください。これ、久七。おかみさんが折角あゝ云つて口說きなさるのだ。もう百も附けてあげるがよからう。

久七。ぢやあ、おかみさん。きつちり五百といふところで我慢してください。

おくま。（舌打ちして。）仕樣がないねえ。ぢやあ、まあ、それで我慢して歸りませうよ。

長兵衞。(帳場から緡の錢を持つて來る。)さあ、これが一本、ほかに百ありますよ。

(長兵衞は四百文の緡のほかに、廿文十五文などの錢を取りまぜて渡せば、おくまは數へて受取る。)

女の兒。歸らうよう。(泣く。)

おくま。あゝ、歸るよ、歸るよ。なんといふ泣蟲だらう。皆さん、どうもおやかましうございました。

(背中の赤兒も又泣く。おくまはそれをいぶりながら、女の兒をつれて下の方へ立去る。)

岩吉。やれ、やれ、これで世の中がおだやかになつた。

長兵衞。子供や赤ん坊や、色々の責め道具で嚇かされちやあ全くこつちが降參してしまひますよ。

岩吉。それぢやあ、おれもこれから責め道具を用意して來るかな。そこで、富さん。おいらの方はどうだね。

富八。岩さんの利分は二朱と六十四文になります。

岩吉。二朱と六十四文……。めつぽふ高いぜ。間違つてゐやあしねえかえ。

富八。二度も彈いてみたのですから大丈夫です。

岩吉。六十四文なんていふ端下は面倒だ。それ、二朱置いて行くぜ。

富八。あとは此次に頂きます。

岩吉。それはまあ其時のことだ。なにしろ利上げをしたのだから流しちやあいけねえよ。

長兵衞。わたしも承知してゐますから、決して流すやうなことは致しません。

久七。岩さんは景氣がいゝとみえますね。

岩吉。景氣が好ければ受けに來るが、泣きの淚で利上げをして、やう／＼流れを喰ひ止める始末だ。

長兵衞。濱へ仕事に行つて、大層儲けなすつたといふぢやありませんか。

岩吉。横濱へ行きやあ金でも湧いてゐるやうに云ふが、さて踏み出してみると思ひの外にも行かねえ。往き還りの路用を差引くと、江戸で稼ぐのも大した違ひはねえのさ。ぢやあ、番頭さん。頼んだぜ。
長兵衛。はい、はい。
（岩吉は下のかたへ去る。）
富八。あんなことを云つてゐるが、岩さんも横濱へ行つて随分かせいで來たさうだ。
長兵衛。稼ぐには稼いだらうが、あの人のことだから神奈川あたりでみんな吐出して來たらうよ。それでも利あげに來ただけが見つけものだ。
（長兵衛は笑ひながら帳場に戻る。下方より盆燈籠の荷をかつぎたる商人出づ。）
燈籠屋。燈籠や、燈籠……。（呼びながら向ふへ立去る。）
久七。（表をみる。）あゝ、燈籠を賣りに來た。お盆ももう目の前だな。
富八。盆前にしちやあ不思議なくらゐに商賣が暇だぜ。
久七。それもやつぱり不景氣のせゐだ。なにしろ世間がさう／＼しいからね。
長兵衛。世間のさう／＼しいのが何より困る。かういふ物騒な時節には、こゝらの家なぞは猶さら氣をつけなければならない。日が暮れたら大戸をしつかり卸して、商賣を休んでしまへ。
富八。このごろは斬取りや押込みが無暗に流行るといふから、まつたく險呑でならない。
久七。番頭さんのいふ通り、かういふときには質屋なんぞが一番先に眼をつけられるから氣味が惡いよ。
長兵衛。商賣がひまな上に、押込みや押借りにお見舞ひ申されては泣つ面に蜂だ。くれ／＼も用心しなければならないぜ。

二人。あい、あい。

（向ふより相馬金次郎、廿七八歳、道樂肌の御家人にて、風呂敷につゝみたる刀箱をかゝへて出づ。）

金次郎。（格子をあける。）どうだ、番公。べらぼうに暑いな。

（長兵衞等三人は金次郎の顏を見てうんざりする。金次郎はずつと這入りて店さきに腰をかける。）

富八。（よんどころなく。）これは相馬の旦那樣、いらつしやいまし。

金次郎。（笑ふ。）こゝの家で正直に相馬の旦那樣と云つてくれるのはお前ばかりだ。あとの奴等はみんな相馬の金さんと云つて、人を友達扱ひにしてゐやあがる。おい、番公。忌に他人らしく顏を背けるなよ。お友達の金さんが來たぢやあねえか。

長兵衞。（帳場を出る。）これは金さん。どうも嚴しい殘暑でございます。

金次郎。世のなかに連れて、陽氣もなんだか番狂はせになつて來やあがつた。六月は馬鹿に冷々して袷を着るやうな始末だつたが、七月になつてから殘暑が滅法界にひどくなつて、この二三日はまるで釜うでだ。おまへ達はよく無事に生きてゐるな。石川五右衞門よりよつぽど强いぞ。あゝ、暑い、あつい。（扇を使つてゐる。）

長兵衞。（奧にむかひて。）小僧や、お茶を持つて來な。

小僧。（奧にて。）あい、あい。

長兵衞。この暑いのにどこへお出かけでございました。

金次郎。おまへ達も知つてゐる通り、おれの先祖は相馬小次郎將門だから、月に一度はかならず神田明神へ參詣に來る。けふも明神へ參詣して、例のごとくに武運長久をお祈り申した上で、それからこつちへ出かけて來たのだ。

長兵衞。あなたの御先祖は將門樣といふとは豫てうけたはまつて居りますが、よく毎月かゝさずに御參詣なさいますね、

金次郎。先祖の將門は神に祭られてゐるが、この子孫の相馬の金さんは何故にかう貧乏神に[illegible]……きるので、先祖に對しても申譯のない次第だが、なんと云つても先祖は先祖だ。一生に一度ぐらゐはお參りをしておかなければ、人間の義理が濟むめえぢやねえか。(富八と久七を見かへる。)さうだ、さうだ。おれも將門をおもふと、いつでも[illegible]あがる。うそだと思ふならおれの家へ來て、系圖の一卷をしらべてみろ。

(奥より小僧は茶を汲んで出づ。)

小僧。お茶をおあがりなさいまし。

金次郎。(小僧に。)どうだ、此頃は少しは白雲が癒つたか。用がなければ表へ出て、ちつと水でもまけ。幾らか涼しくなるだらう。

小僧。水はもう撒きました。

金次郎。骨惜みをするなよ。もう一度、撒け、撒け。

小僧。あい、あい。(奥に入る。)

金次郎。ことしは本祭の筈だが、神田は景氣よく出來さうかえ。

富八。ことしは御神輿がわたるだけで、なんにも催しはないと云ふことでございます。

金次郎。本祭に山車も踊屋臺も出さねえのか。神田つ子も意氣地がねえな。

久七。御時節柄に遠慮申すのださうでございます。

長兵衞。御承知の通り、一昨年の本祭に山車や踊屋臺をひき出して、お叱りを受けましたので、ことしは一切遠慮といふことになりました。

金次郎。ちげえねえ。公方様上洛のお留守中にどんちやん騒ぎ立てたといふので、一昨年はひどく叱られたつけな。今年

も叱られる積りで威勢よく遣ればいゝのに……。それだから意氣地がねえといふのだ。いや、神田つ子ばかりぢやあねえ、一體に江戸つ子と云ふものゝ意氣地が無くなつた。なあ、番公。さうぢやねえか。

長兵衛。へえ。

金次郎。だが、おれはおめへは大好きだよ。

長兵衛。（烟にまかれて。）へえ。

金次郎。おめへの名は長兵衛といふぢやあねえか。長兵衛はいゝな。いかにも江戸つ子らしい名前だぜ。おれは實に嬉しくつてならねえ。

長兵衛。まことに有難うございますと申したいのですが、金さんにあんまり油をかけると、いつでもあとが怖うございますからな。

金次郎。なにも怖がることはねえ。長兵衛は長兵衛らしくすればいゝのだ。

長兵衛。いや、その長兵衛といふ名は親が附けましたので……。

金次郎。親が附けても公方様が附けても、長兵衛は長兵衛だ。そこで、番公。ちつと折入つて頼みがあるから、一番江戸つ子の氣前をみせて、長兵衛をきめて呉れねえか。

長兵衛。大方そんなことだらうと思ひました。

（長兵衛は他の二人と顔をみあはせて、いよ〳〵うんざりする。）

金次郎。（笑ひながら。）と云つて、別にむつかしいことを頼むわけでもねえ。貧乏の方ぢやあ金箔附きの金さんも、この盆前はどうにも斯うにも凌ぎが付かねえ。なにぶん義理のわるい借金があるので、うか〳〵してゐると御身分にもかゝはると云ふ一大事だ。くどいことは云はねえから、ぐつと一番呑み込んで、長兵衛をおたのみ申すよ。

長兵衞。（迷惑さうに。）申すまでもなく、あなたのお屋敷は青山でございますから、御近所にお馴染みの質屋も澤山ございませうに、兎角わたくし共の店へ來て、なにか御無理をおつしやるのは……。

金次郎。はゝ、野暮をいふなよ。近所で用が足りるくらゐなら、この暑いのに重い物をかゝへてわざ／＼こゝまで持出して來やあしねえ。近所の麻布や赤坂ではあんまり顏が賣れ過ぎて、金さんの睨みも利かなくなつたから、そこでおめへを口說きに來たのだ。いつもながら無理ばかり云つて濟まねえが、けふばかりは眞劍におれの話をきいて貰ひたいな。

長兵衞。では、まあ、折角でございますから、どんなお話か伺ふだけは伺つてみようぢやございませんか。

金次郎。さう來なければ長兵衞ぢやあねえ。（風呂敷をあけて箱を出す。）けふ持つて來たのはこの一品だ。

長兵衞。（のぞく。）お腰の物でございますか。

金次郎。むゝ、刀には相違ねえが、おれたちが腰にさしてゐるやうなガタ光ぢやあねえ。由來を話せば長くなるが、おれの家に先祖の將門から傳はつてゐる北辰丸といふ名刀は即ちこれだ。これは相馬の家の當主が家督を相續したときに、家例として中身を一度あらためてみる。併しわが物とは云ひながら、一代に二度とは見ないことに決まつてゐるので、おれも十年前に一度見たきりだ。さういふ因緣つきの寶物だから、今までどんなに困つたことがあつても、身に替へ、家にかへて大切にしまつて置いて、お前のところは勿論、どこの質屋の暖簾もまだ潜らせたことはなかつたが、今もいふ通り、今度といふ今度ばかりはどうにも仕樣のない瀨戸際にせりつめたので、思ひ切つて抱へ出して來たといふわけだ。そこを察して、たんとの無心ぢやあねえ。十兩ばかり用立てゝ呉れゝばいゝのだ。

長兵衞。あの、十兩でございますか。

金次郎。十兩でいゝのだ。ほかの品とは違つて、家重代の寶物だから、なんぼおれのやうな人間でも、これぱかりは決して流すやうなことはしねえ。そんなことをしたら相馬の家にも瑕が付くことだ。遲くも一月ばかりのうちには屹と受出

しに來るから、どうかそれまでの所を融通してくれ。それも大金ぢやあねえ、指一本でいゝのだ。これだ、これだ。(指をみせる。)

長兵衞。どう致しまして、指一本とおつしやるが、十兩と申せば大金でございます。どんなお品か、兎も角も拜見をいたした上で……。

(長兵衞は刀箱に手をかけようとするを、金次郎はあわてゝ遮る。)

金次郎。いや、いけねえ、いけねえ。むやみに箱を明けられちやあ大變だ。

長兵衞。なにが大變でございます。

金次郎。それには少し譯があるのだ。おれがこれほどに賴むのだから、中身を見ねえで此のまゝに受取つて貰ひたいな。

長兵衞。それはいよ／＼御無理といふもので……。手前共も商賣のことでございますから、お品を拜見いたした上ならば相當の御相談も致しますが、いくら大切な御質物でも、中身をなんにも拜見いたしませずに、たとひ一分でも御用立て申しますのは、質屋の法に缺けたことで、わたくし共が主人に叱られます。

金次郎。それはいかにも尤もだが、そこを偏にお願ひ申すのだ。まあ、たんにも云はずに受取つてくれ。

長兵衞。たとひ何とおつしやつても、品物をあらためずにお貸し申すことは……。

金次郎。どうしても出來ねえと云ふのか。

長兵衞。いくら金さんのお賴みでも、それは堅くお斷り申します。

金次郎。どうも困つたな。それだからおれが手を下げないばかりに賴むのだよ。

富八。もし、相馬の旦那樣。番頭が申すのに決して無理はございません。お品を拜見しないで御用立て申すなどと云ふのは、商賣の法に無いことでございます。

久七。さう云ふことは何から何までよく御承知でありながら、けふに限つてなぜそんな御無理をおつしやるのでございます。

金次郎。みんなにさう云はれると、まつたく困る。おれもまんざらの木念人でもねえから、無理は萬々知つてゐるのだが……。こいつはどうも困つたな。

（金次郎はかんがへてゐる。）

長兵衛。たゞ困る困るとおつしやつてゐないで、鳥渡あけて見せて下さるわけには參らないのでせうか。

金次郎。勿論見せればいゝのだが……。どうも困つたな。

長兵衛。わたしく共も商賣柄で、これまでにも方々のお屋敷様から御大切のお品をおあづかり申したこともございますが、どちら様でもみんな其のお品を一度は見せて下さるのに、あなたに限つてどうしても見せないと仰しやると、わたくしの方にも何だか疑ひが起ります。よもやそんな事もございますまいが、萬一その箱のなかに大切のお品が無いと致しますと……。

金次郎。馬鹿をいへ。なんぼおれでもそんな騙りのやうなことをするものか。かうなつたら見せて遣りたいのは山々だが、當主のおれでさへ一代に一度は見ないことになつてゐるのだからな。（又かんがへる。）併しさう云つてゐたら果しがねえ。いつそ思ひ切つて明けて見せるかな。（箱に手をかけようとして又躊躇する。）いや、いけねえ。どうも悪さうだ。

長兵衛。（笑ふ。）金さん。いつまでも焦らしてゐちやあいけません。あなたはいつでも駈引がうまいので、こつちが困つてしまひますよ。

金次郎。けふばかりは駈引も糸瓜もねえ、おれは本氣で云つてゐるのだが、おめへ達には呑み込めねえのかな。ちやあ仕方がねえ。ほかへ行つて頼んでみるとしようか。

（金次郎は荷を手早く風呂敷につゝんで引抱へ、二足ばかり行きかけて立ちどまる。）

金次郎。これから汗をふきながら、又方々をかけ摺りまはるのも難儀だ。やつぱりここの家へ荷をおろすより外はねえ。（引返して再び腰をかける。）おい、番公。一生に一度のお願ひだ。なんとか達引いてくれねえか。どうしても肯かれねえのかよ。

長兵衛。どうしても肯かないと云ふわけぢやあございませんが、幾度云つても同じことで、何分にも中身を拝見しませんでは……。

金次郎。これを素直に見せられるくらいなら、こんなに口を酸つぱくして頼みやしねえと云ふのに……。

長兵衛。でも、拝見しませんでは……。

金次郎。どうもお前も困業だな。

長兵衛。わたくしよりもあなたが無理でございますよ。

（ふたりは同じことを押合つてゐるうちに、下のかたより石澤寅之助、廿五六歳、これも道楽肌の御家人にて出で、内を覘きのぞいて用水桶のかげに隠れる。奥より伊勢屋の亭主千右衛門出づ。）

千右衛。これは金さん。お珍しいことでございます。あらましのお話は奥で伺ひましたが、これは番頭が申します通り、お品を拝見いたしませんでは、とても金子を御用立てるといふわけには参りません。併し折角お出でになりましたものを唯お帰し申すといふのも失礼でございますから、なんとか別に御相談の致し方はございますまいか。

金次郎。これ、御亭主。なんだか忌なことを云ふぢやあねえか。別に御相談の致し方といふのはどういふことだ。痩せても枯れても御家人の相馬金次郎だ。出来ない相談の無理を云つて、一分や二分の煙草銭をいたぶりに来たのぢやねえぜ。この通り、歴然とした質物を持参して金を借りようといふのだ。

千右衛。では、その歴然とした貨物を一應拜見させて頂きたいもので……。

金次郎。又か。(舌打ちして。)さつきから屡く云ふ通りのわけで、おれでさへも一代に二度とは見ない大事の寶物だ。まして相馬の家の血筋でない者がむやみに箱をあけてみると、刀は蛇になつてしまふといふいひ傳へになつてゐる。

長兵衛。刀が蛇になる……。本當でございますか。

金次郎。それは昔からの云ひ傳へで、ほんたうに蛇になるか、ならないか、おれも確かには知らねえ。併し他人には決して見せるな、他人が見れば蛇になるといふ堅い戒めがある以上は、めつたな事も出來ねえので、おれも實はさつきから迷つてゐたのだ。さあ、これだけの仔細を正直に打ち明けたらおめへの方でも疑ひを晴らして、この箱のまゝで預かつて呉れてもよからうぢやあねえか。

(金次郎は再び風呂敷をあけて、刀箱を亭主の前に出す。)

千右衛。(笑ふ。)人が見たら蛙になれとか云ふことは聞いて居りますが、人が見たら蛇になる……とは少々恐れ入りますね。わたくし共も多年この商賣をいたして居りますが、箱のそとから中身の見透しは出來ません。質物としておあづかり申す以上は、どうしても中身を拜見いたさなければなりません。後日に何かの間違ひがございますと、わたくし共ばかりでなく、あなたの御迷惑にも相成ります。兎もかくも念のために鳥渡覗かせて頂きませんでは……。(箱をひき寄せる。)

金次郎。いけねえな。おめえはどうしても見たいのかえ。

千右衛。拜見いたしませんでは、何分御相談が出來ません。

(千右衛門は箱に手をかけるを、金次郎はだまつて見てゐる。刀箱はけんどん蓋になつてゐるを、千右衛門は引きあけると、箱の中からは眞黒な蛇が出る。千右衛門もおどろいて箱を落せば、長兵衛、富八、久七もびつくりして騒ぐ。そのうちに蛇は這ひ出して椽の下に入る。)

富八。ほんとうに蛇が出た。

久七。蛇が出た。

（金次郎は店へ飛びあがりていきなりに千右衛門を蹴倒す。）

金次郎。それだから云はねえことぢやあねえ。こんなことになりやしねえかと思ふから、あれだけに譯を話したのだ。かうなつちやあ金を借りる、借りねえの論ぢやねえ。おれの家の寶物は云ひつたへの通りに蛇になつてしまつたぞ。

千右衛。どうも飛んだことで……。

金次郎。えゝ、貴様たちが好んで飛んだことを仕出來したのぢやねえか。たとひ質に置いたところで、無事に受け出せば濟むことだが。蛇になつてしまつてはもう取返しが付かねえ。さあ、亭主。家重代の刀を元の通りにして返してくれ。

千右衛。まことに恐れ入りましてございます。

金次郎。たゞ恐れ入つて濟むと思ふか。おれの刀をどうして呉れるのだよ。

（この時、表に窺ひゐたる石澤寅之助はわざと忙がはしく格子をあけて入る。）

寅之助。おゝ、相馬。こゝにゐたか。

金次郎。石澤か。なにしに來た。

寅之助。さつきお前の家へたづねて行くと、弟が頻りに心配してゐる。どうしたのだと聞いてみると、兄きが盆前の遣り繰りに困つて、家重代の北辰丸をかゝへ出して、明神下の質屋へ持ち込んだと云ふのだ。

金次郎。弟め、飛んだことをしやべりやあがつたな。

寅之助。それを聞いておれも驚いた。いかに融通に困るからと云つて、重代の寶を質入れするなどとは以ての外のことで、そんなことが世間へきこえると、おまへはかりか組中の外聞にもかゝはると思つたので、早速に金の都合をしこお

[illegible]

金太郎。まあ、さうか。

寅之助。（ふところから金包みを出す。）その金はこの通り都合してやつたから、借入はまあ止めにしろ。

（金太郎はだまつてゐる。）

寅之助。おまへだつて好んで質に置くわけでもあるまい。十両の金の都合さへ出来れば、それでいゝのだらう。さあ、これを受取つてくれ。（金を渡さうとする。）

金太郎。（力なげに拂ひのける。）折角だが、その金はもう要らねえ。

寅之助。なぜ要らない。

金太郎。なぜと云つて……。おれも途方に暮れてしまつた。（溜息をつく。）

寅之助。（不思議さうに。）それは一體どうしたのだ。

（金太郎は再び默つてゐる。）

寅之助。どうも可笑いな。（人々をみまはして。）こゝで何事か起つたのか。

（長兵衛等も默つてゐる。）

寅之助。そこに刀箱がほうり出してあるやうだ。なんだか變だな。おい、番頭。どうしたのだと云ふのに……。はつきり云へ。

長兵衛。實はそのお刀が紛失いたしましたので……。

寅之助。刀が紛失した……。

長兵衛。箱の蓋をあけますと、お刀が蛇になりまして……。

寅之助。刀が蛇になつた。（かんがへて。）誰が箱をあけたのだ。
千石衞。中身を一應拜見いたさうと存じて、わたくしが明けましたのでございます。
寅之助。相馬の家の北辰丸は、當主でも一代に一度しか見ることは出來ない。その血筋でない者がめつたに箱をあけると、刀は蛇になるといふ云ひ傳へがある。「おれもよもやと思つてゐたが、やつぱりそれが本當であつたのか。これ、金次郎。おまへは飛んでもないことをしたな。
金次郎。（再び嘆息する。）まつたく飛んでもない事をしてしまつた。先祖に對しても重々相濟まない。みんなおれが惡いからだ。
寅之助。そこで、お前はどうする。
金次郎。今さら誰を怨んでも仕方がない。家重代の寶物をうか〳〵持ち出して來たのが、おれの不覺だ。不斷からおれの身持が惡いので、先祖の罰が中つたのだらう。かうなつては、もう世間に顏向けも出來ない。相馬金次郎、百俵取りの小身でも武士の端くれだ。これからもう一度神田明神へ參詣して、身のあやまりを詫びた上で、鳥居の前で潔よく切腹する覺悟だ。
（長兵衞等は顏をみあはせる。）
寅之助。むゝ、これはさうなくては成らないところだ。家重代の寶をうしなつて、お前もおめ〳〵と生きてはゐられまい。先祖への申譯、世間への申譯に、尋常に切腹しろ。朋輩のよしみにおれが介錯してやるぞ。
金次郎。友達のよしみに介錯してくれるか。
寅之助。併し金次郎。おまへは今、百俵取りの小身でも武士の端くれだと云つたな。武士ならば武士らしく、當のかたきを仕留めた上で、お前も切腹するがいいではないか。

(人々は又おどろく。)

金次郎。成程さういふのも尤もだが、それも無益の殺生だ。元の起りはみんなおれが悪いのだから。何事も不運とあきらめて、おれ一人が自殺すればいいのだ。

寅之助。いや、お前がおとなしくあきらめても、おれが勘辨出來ない。先づ第一にこの亭主の首を取つて、これを明神の前に供へて、それから切腹するのが武士の法ではないか。

金次郎。その武士ももう腐つたのだ。

寅之助。えゝ、意氣地のない奴だ。さあ、おれが證人になつてやるから、立派に相手を成敗しろ。亭主は勿論だが、何奴も此奴もみんな係り合ひだ。(長兵衛等を睨みまわして。)そこらに轉がつてる青茄子野郎も、片つ端からばた〳〵斬つてしまへ。

(人々はいよ〳〵驚く。)

金次郎。まあ、さう云ふなよ。ここで五人や三人斬つてみた所で、おれの面目が立つといふわけでもない。却て恥の上塗だ。

寅之助。なにが恥の上塗りだ。町人のために身をほろぼし、家をつぶされて、ただ默つてゐられると思ふか。さあ、金次郎。刀をぬけ。えゝ、何をぐづ〳〵してゐるのだ。そんな腐甲斐ない根性だから、こんな大事も出來するのだ。さあ、早く抜け。早く斬れ。

千右衛。あ、もし、もし、暫くお待ち下さいまし。大切のお刀を紛失させましたのは、わたくし共が重々の不調法、なんともお詫の申上げ様もございません。併しこゝで相馬の旦那様が御切腹なされましては、却てお上に對して申譯のないことになりは致しますまいかと存じられますが……。

寅之助。えゝ、餘計なことをいふな。貴樣たちに武士のこゝろが判るか。第一、これが世間へきこえたら何うするのだ。

千右衛。世間へきこへるとお仰しやつても、これを知つてゐるのはあなた樣ばかり、なんとか御内分にして置いて頂く工夫はございますまいか。

寅之助。だまれ、默れ。さあ、金次郎。早く斬れ、斬つてしまへ。（じれる。）えゝ、齒がゆい奴だ。貴樣が斬らなければ、おれが斬つてやるぞ。さあ、さあ、亭主。そこへ直れ。

（寅之助は刀に手をかけて店へあがらうとするを、金次郎は支へる。）

金次郎。まあ、はやまるな。待つてくれ、待つてくれ。

（寅之助は肯かずに店へ押上らうとするを、長兵衛、富八、久七等も怖々ながらに支へる。）

（二）

青山、長者が丸。上のかたに寄せて、小さい古寺の門。左右は頽れかゝりたる練塀。門前に松の大樹。路ばたには秋草など茂りて、下のかたには田畑がつゞいて見ゆ。すべて今日の青山邊とは全く違ひて、江戸の場末の蕭條たる景色。寺内にて木魚の音。そこらにて蟬の聲もきこゆ。

（下のかたより農家の子供ふたり、一人は竿に附けたる袋を持ち、ひとりは黐竿を持ちて出で、蟬の聲をたづねながら松の下にあつまる。上のかたより若い僧ひとり出づ。）

子供一。坊さん。蟬が高いところに止まつてゐて、竿がとゞかないんだ。

子供二。後生だから捕つておくれよ。

僧。（迷惑さうに。）ほかの事と違つて、蟬捕りの手傳ひはどうも困る。誰かほかの人に頼むがよからう。（云ひ捨てゝ下のかたへ去る。）

子供一。意地の悪い坊主だなあ。

子供二。そんなことを云つてゐるうちに、蛇に逃げてしまつた。

子供一。仕方がない。ほかへ行かう、ほかへ行かう。

(二人は竿をかついで上のかたへ去る。入れちがひに農家の娘ひとりが手拭をかぶり、大きい風呂敷づつみを背負ひて出で、下の方へゆき過ぎる。向ふより相馬金次郎と石濱寅之助が話しながら出づ。)

金次郎。質屋の奴等も驚きやあがつたな。

寅之助。なにしろ民谷伊右衞門が二人づれで、辨天小僧を極めたのだから、奴等のおどろくのも無理はねえのさ。

金次郎。こつちの手違は向うでも大抵察してゐたらうが、あゝなつちやあ何うにも動きが取れねえ。おれに十兩、おめへにロどめの五兩、〆めて十五兩で目出たく納まりやあ、向うも仕合せといふものだ。相手が惡けりやあどんなことになるか判るものか。

寅之助。(笑ふ。)おれ達よりも惡い相手があるかな。

金次郎。廣い世間だもの、どんな奴がねえとも限らねえ。おれ達なんぞはまだ／＼善人の部だよ。

寅之助。その積りで、もう少し修業を積むかな。それにしても刀箱から蛇を出すとは考へたものだぜ。

金次郎。刀箱から蛇が出るのも不思議はねえ。灰吹からは大蛇が出るといふぢやあねえか。

寅之助。ちげえねえ。あはゝゝゝ。

金次郎。はゝゝゝ。

(ふたりは笑ひながら舞臺に來かゝると、寺の門内より常磐津の師匠文字若、廿歳ぐらゐ、寺まゐりに來りし姿にて、日傘を持ちて出づ。)

文字若。おや、お二人さん。お揃ひですね。

金次郎。やあ、赤坂の師匠。なんだつてこんな所をうろ付いてゐるのだ。晝日中、狐に化かされたわけでもあるめえ。

文字若。このお寺へ來たんですよ。

寅之助。この寺へ來た……。こゝにやあ吉三さんといふお小姓でもゐるのかえ。

文字若。冗談ちやあない、こゝはあたしの家のお寺なんですよ。お盆が來るから、ちよいとお參りに……。

寅之助。やれ、やれ、お若いのに御奇特のことだな。

（このあひだに金次郎は傍を向いて、紙入れから小判一枚を出す。）

金次郎。そりあ全く御奇特のことだ。常磐津の師匠の文字若さんが親の寺參りをしようとは思ひも付なかつた。御褒美をやるから手を出しねえ。

文字若。なにをお呉んなさるの。

（不安心らしく手を出せば、金次郎は小判をそつと握らせる。）

文字若。（びつくりして。）あら、小判ぢやありませんか。なんだか氣味が悪いねえ。

金次郎。氣味が悪いは御挨拶だ。それはおれと石澤の二人がお盆のおしるしだよ。

文字若。まあ。（再び小判をながめる。）これこそほんとうに狐に化かされてゐるんぢやないかしら。

寅之助。狐でも狸でも金をくれゝば有難えぢやあねえか。うつかりしてゐないで、禮をいへ、禮を云へ。

文字若。ほんたうに頂いてもいゝんですか。どうも有難うございます。金さん、この頃は忙がしいんですかえ。

金次郎。忙がしくもねえが、暇でもねえ。まあ、中ぶらりの所だ。近いうちに遊びに行くから、おつかあにも宜しく云つてくれ。

文字若。きつと来て下さいよ。おまへさんはこの頃、品川へ通つて行くといふぢやありませんか。

金次郎。うそをつけ。おれはそんな道楽者ぢやあねえ。

文字若。道楽を看板にかけてゐる癖に、随分勝手なことを云ふねえ。

金次郎。さういふお前こそ浮氣を看板にかけてゐるぢやあねえか。

文字若。あたしがいつ浮氣をしましたえ。

寅之助。おい、おい。往来なかで好加減にしろ。金さんひとりぢやねえ、傍には寅さんといふ立派なお武家様が附いてゐるのを知らねえか。失禮のないうちに早く行け、行け。

文字若。まつぴら御免なさい。どうも子供でございますから。（笑ふ。）それぢやあ寅さんもお近いうちに……。

寅之助。知らねえ、知らねえ。（わきを向く。）

金次郎。（笑ひながら。）なんでもいゝから早くお歸りよ。

文字若。（おなじく笑ひながら。）はい、はい。

（文字若は金次郎に眼で挨拶して、向うへ去る。）

寅之助。（笑ひながら。）おい。こゝらは晝間でもさびしい所だ。町家のあるところまで送つて遣つちやあどうだね。

金次郎。へん、それほど鈍くもねえ積りだ。

寅之助。自分は鈍くねえ積りでも……。

金次郎。えゝ、よしてくれ。男にかゝはらあ。

（ふたりは笑ひながら上のかたへ行きかゝれば、荷持の男ひとり、長い紺かんばんに木綿の帯をしめて出づ。）

男。（丁嚀に。）竹さん、お暑うございます。

金次郎。やあ、御苦勞。(かんがへて。)あしたはおれの當番だな。

男。左樣でございます。

金次郎。さうすると、いつもの通り、本多さんへ行つてな。毎々御無心ながら、明日もまた𧘕𧘔を拜借いたしますと頼んで置いてくれ。

男。かしこまりました。どなたも御免ください。(會釋して下のかたへ去る。)

寅之助。いつも〳〵人の物を借りるのも幅が利かねえ。𧘕𧘔なんぞは一つ拵へて置けばいゝぢやあねえか。

金次郎。おまへは感心に持つてゐるな。

寅之助。持つてゐるとも……。𧘕𧘔はおれたちの商賣道具だ。それがなけりやあ勤めが出來ねえ。

金次郎。なに、誰かのを借りて置けば濟むことだ。かうして懷ろに金を持つてゐても、どうも𧘕𧘔なんぞをこしらへる氣にやあなれねえ。

寅之助。いゝ心がけのお侍だ。拙者ほと〳〵感心いたしてござるか。あはゝゝゝ。

(下のかたより金次郎の弟半三郎、廿二歲、講武所風の髮、竹刀と劍術道具をかついで出づ。)

半三郎。兄さん。今お歸りでございますか。石澤さんも御一緒でどこへお出でになりました。

金次郎。なに、ちよいと其處まで行つて來たのよ。

寅之助。けふも講武所か。なか〳〵勉強だな。どうだ、此頃はよつぽど上達したか。

半三郎。まあ、どうにか人並みには働けさうでございます。

寅之助。人なみの働きが出來れば結構だ。(金次郎に。)若い者が汗水を垂らしてヤットゥの稽古をしてゐるのだ。お前の𧘕𧘔は兎も角も、弟には麻の羽織の一枚もこしらへて遣れよ。可哀さうぢやあねえか。

金次郎。まあ、そんなことは家へ歸つてからのことだ。さあ、早く歸つて、飲みながら一杯遣らうぜ。

寅之助。家で飲むのは詰まらねえぢやあねえか。

金次郎。いや、これは又あとの相談だ。どうでこゝまで引揚げて來たのだから、兎もかくも一度は家へ來いよ。

半三郎。(苦々しさうに。)又御酒でございますか。

金次郎。いくら飲んでも、けふはおまへの荷を剝ぐやうなことはしねえ。この通り、懷ろは大丈夫だ、大丈夫だ。

(金次郎は懷ろを叩いて、寅之助と共に笑ひながら行きかゝる。半三郎は困つた顏をしながら附いてゆく。)

——幕——

第二幕

(一)

第一幕の翌年、慶應四年四月なかばの夕刻。

赤坂、田町。若松といふ小料理屋の前。まん中には短い暖簾をかけたる入口、そのなかは沓脫ぎのところ。上のかたは板塀、そのなかに小庭のあるこころにて、見越しの松など見ゆ。入口にも柳の立木あり、下のかたは出窓にて、內には簾がおろしてあり、家の下のかたには、溜池を隔てゝ山王の山が若葉がくれに見ゆ。

(上のかたには色々の荷物を積みたる荷車を卸して、車力ひとりが休んでゐる。町家の若い者と小僧も一緒に休んでゐる。小僧は風呂敷を脊負ひて、灯の無い弓張提灯を持つてゐる。)

車力。これから中野まで行つた日にやあ、夜になつてしまひますぜ。

若い者。勿論、夜になるのは覺悟の前だ。

車力。この頃は日が暮れると物騒ですからね。

若い者。江戸のまん中にゐると猶物騒だ。ちつとも早く逃げる方が無事だよ。（下のかたを見かへる。）それにしても、おかみさん達は遅いことだな。（小僧に。）お前、引返して見て來い。

小僧。あい、あい。

（小僧は引返して行かうとする時、下のかたより町家の女房と娘は荷物をかゝへ、女中は風呂敷づつみを背負ひ、ぶら提灯を持ちて出づ。）

女房。お前さん達はよつぽど待つたかえ。

若い者。あんまり遅いので案じてゐました。

娘。なにしろこんな荷物をかゝへてゐるので、なか〱捗取らないのよ。

女中。中野まではまだ隨分遠いのでせうね。

女房。ちつとぐらゐ遠くても、まあ我慢して行つておくれよ。辻斬や押込みは毎晩のやうに流行るし、なん時どこで軍が始まるか判らないんだもの、江戸にうか〱してゐられるものかね。

車力。まつたく困つたものですよ。さあ、日の暮れないうちに早く出かけませう。

若い者。行きませう、行きませう。

（車力は車をひき出せば、若い者と小僧はあと押しをして上のかたへ去る。）

娘。暗くなると怖いわねえ。

女房。それだから早くおいでよ。

（女房、娘、女中も急いで車のあとを追つてゆく。それと入れ違ひに、上のかたより錦切れを附けたる隊長一人

が先に立ちて兵士七八人を引連れ、市中を見廻りの體にて出で來る。兵士は銃を佩つてゐる。隊長は下のかたに來りて、どつちへ行かうかと思案したるが、兵士をみかへりて向うへ行けと指圖し、そのまゝ向うへ立去る。

料理屋の暖簾をくゞりて、相馬金次郎が酒に醉つて出づ。金次郎は當時隱居の身の上なれば、武士ともみえぬ風俗、額に月代を生やして、唐棧の袷に半纏をかさね、何か文句を云つてゐるのを、女中がなだめながら送つて出づ。）

金次郎。えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。まともに勘定を拂へば大切なお客様だ。なんで無暗に追ひ出しやがるのだ。

女中。追ひ出すといふわけぢやございませんが、何分このごろは物騒でございますから、夜は商賣を休むことに致して居りますので……。

金次郎。だからよ。まだ本當に日が暮れねえぢやあねえか。

女中。それでも今頃から火を落すことに致して居りますので……。

金次郎。何をつべこべ云やあがるのだ。

（金次郎は女中の横つらを殴り倒す。暖簾のうちより文字若が折詰をさげて出づ。）

文字若。あれ、金さん。そんな亂暴なことをしちあ、いけないぢやあないか。

金次郎。えゝ、引込んでゐろ。此頃はむしやくしやしてならねえから、せめて自棄酒でも鱈腹のんで遣らうと思へば、もう日が暮れますの何のと云つて無暗に人を追ひ出しやがる。料理茶屋は夜が商賣だのに、何だつて日が暮れると休みやあがるのだ。

文字若。そんな理窟を云つたつて、かういふ御時節だから仕方がないぢやありませんか。

金次郎。その御時節が癪に障つてならねえ。こんな御時節に誰がしたのだ。田舎侍が泥草鞋を穿いてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、錦切れを嵩にきて野方圖もなく威張り散らしやあがるから、こんな不景氣な世の中にもなつて來るのだ。

文字若。(左右をみかへりながら。)往來でそんな大きい聲をして、人にきこえるといけないからさ。

金次郎。だれに聞えたつて構ふものか。おれは本當のことを云つてゐるのだ。

文字若。まあ、いゝと云ふのに……。(女中に。)姐さん、まことに濟みませんでしたね。どうぞ勘忍して遣つてくださいよ。

(文字若は女中にむかひて、こゝはわたしが引受けたと知らせれば、女中は會釋して内に入る。金次郎はだん〳〵に醉がまはりて、柳の木に倚りかゝる。)

文字若。さあ、おまへさん。早く行きませうよ。(空をみる。)日が暮れるの、暮れないのと押問答をしてゐるうちに、ほんとうに薄暗くなつて來たぢやありませんか。

金次郎。暗くなりやどうするのだ。化物でも出るといふのか。化物は江戸中一杯で、百鬼夜行どころか、このごろは夜も晝も見境へはありやしねえ。化物が怖くつて、一日でも生きてゐられるものか。ばか〳〵しい。

文字若。なんでもいゝからさ。まあ、兎もかくも家まで歸つてくださいよ。おつかさんが寂しがつて待つてゐるからさ。(折詰をみせる。)

金次郎。そんな物はどうでもいゝ。犬にでも遣つてしまへ。

文字若。だつて、勿體ないぢやありませんか。

金次郎。なに、勿體ねえことがあるものか。(内をみかへる。)こゝの家もこの頃は急に惡くしやあがつた。一つだつて碌に

食へる物はありやしねえ。そんな物をおつかあに遣るのは口よごしだ。犬にやれ、犬に遣れ。（折詰を取らうとする。）

文字若。あれ、いけないと云ふのに……。

金次郎。（無理に折詰を取る。）否なことを云ふな。犬に遣らなけりやあ、そこらの溝へでも捨てゝしまへ。（折詰を奪つて、よろ〳〵しながら下のかたを見る。）おゝ、來た、來た。はゝ、こりや捨てるより優しだ。

（下のかたより錦切れを附けたる兵士二人出づ。金次郎は進み出て、その前に突つ立つ。）

金次郎。もし、もし、錦切れの旦那。失禮ながらこれを獻上しませう。（折詰を二人の鼻の先へぶら付かせる。）

兵士甲。えゝ、無禮なことをするな。

金次郎。失禮は初めから斷つてゐるぢやあねえか。お前さん方に江戸の料理といふのは何ういふ物だか、一つ喰べさせて上げたいから獻上しようといふのだ。

兵士乙。貴樣はよほど醉つてゐるな。

兵士甲。醉つてゐるから免して置くのだ。重ねて無禮を働くと、助けて置かんぞ。

金次郎。なんで助けて置かねえのだ。物を遣つた上に殺されてたまるものか。かうなりや意地づくだ。さあ、邪が非でもこの料理を貰つてくれ。

文字若。（はら〳〵しながら。）もし、おまへさん。好加減におしなさいよ。（兵士に。）旦那樣、この通り醉つて居りますから、幾重にも御勘辨をねがひます。

（暖簾のうちより以前の女中と料理番らしい男ふたりが覗いてゐる。）

兵士乙。醉つてゐる者は介抱して、早く連れて歸れ。

文字若。はい、はい。

兵士甲。この時節に他愛なく醉つてゐるとは、町人とは云ひながら不心得な奴だな。
金次郎。（呶鳴る。）おらあ町人ちやあねえ。
文字若。（一生懸命に。）まあ、默つておいでなさいよ。
兵士乙。なに、町人でない。（金次郎を見て笑ふ。）丸腰で半纏をきて、いくら江戸でもそんな侍はあるまい。
金次郎。ところが、あるから不思議だ。貴樣達のやうな田舍者にはわかるめえ。
文字若。（泣聲になつて。）あれさ、およしと云ふのに……。
兵士甲。なにが田舍者だ。もう一度云つてみろ。
金次郎。田舍者だから田舍者だといふのよ。鎭守樣のお祭ちやあこんな旨いものは食へねえ。話の種に江戸のお料理を食つてみろと、おれが親切に云つて遣るのだ。さあ、遣るよ。貰つて行け。
（金次郎は折詰を突き付くれば、兵士は堪えかねて叩き落す。）
金次郎。えゝ、なにをするのだ。
（金次郎は詰め寄らうとするを、兵士は突き倒し、鐵扇にてその額を打つ。金次郎は飛び起きるを文字若は獅嚙み付いて押へる。暖簾のうちよりも男二人と女中が駈け出して、これも金次郎を抱きすくめる。）
兵士甲。はゝ、馬鹿な奴め。
兵士乙。江戸にはこんな奴が多いので困るな。
（兵士二人は笑ひながら上のかたへ立去る。金次郎は跳ね起きてそのあとを追はうとするを、人々はおさへ付けてゐる。）
男一。この節から錦切れなんぞに係り合ふと、飛んだ目に逢ひます。

男二。およしなさい、およしなさい。
文字若。それだから、云はないことぢやあない。あら、額から……。
（文字若は紙を出して、金次郎の額の血をふいてやる。金次郎もやうやく鎭まりて、紙にしみたる血の色をぢつと見る。）
女中。なにか血どめのお藥を持つてまゐりませうか。
金次郎。いゝよ、いゝよ。大したことはねえ。もうおとなしくするから、みんなあつちへ行つて呉んねえ。
文字若。たび／＼お騷がせ申して、お氣の毒ですねえ。
女中。ぢやあ、お靜かに……。
（女中と男共は内に入る。）
文字若。おまへさん。痛くはないかえ。
金次郎。なに、それほどに痛くもねえが……。（かんがへて。）おい、師匠。後生だから幾らか都合してくれねえか。
文字若。どのくらゐさ。
金次郎。さあ、一兩でも、二兩でも、三兩でも……。まあ、幾らでもいゝや。
文字若。此頃はどこの質屋も休み同樣だから、あんまり無理を肯いてもくれまいが、頭の物や他所行きを持ち込んだら、ちつとは融通してくれるかも知れない。さうして、そのお金をどうするの。
金次郎。どうするか、それはあとで云つて聞かせるから、その金の都合が出來たらすぐにおれの家へとゞけてくれ。
文字若。あたしの家へ一緒に來るんぢやあないの。
金次郎。むゝ、これから眞直に歸ることにするから、屹と頼むぜ。

文字者。なんだか可怪しいわねえ。なぜ眞直に家へ歸るの。

金次郎。まあ、兎も角もおれの云ふ通りにしてくれ。金の一件はなるたけ早いがいゝな。

文字者。（不審ながら。）あゝ、承知しました。お金の出來次第、すぐに屆けに行きますよ。

金次郎。早く行け、早く行け。

文字者。あいよ。

（文字者は足早に下のかたへ去る。それを見送りて、金次郎は上のかたへ行かうとする時、上のかたより仲間一人が酒に醉ひて出て、金次郎と摺れちがひてゆく。）

仲間。また降りさうになつて來たか。今までが公方樣のやうに泣き面をしてゐやあがる。あゝ、忌だ、忌だ。（唄ふ。）槍は錆びても名はさびぬ、昔ながらの落し指、ヨイ〳〵ヨイ〳〵、よいやさ。はゝゝゝ。

（仲間はよろけながら向うへ去る。金次郎は立ちどまりて耳をかたむけ、やがて足早に上のかたへ去る。）

二

青山、長者が丸。相馬金次郎の家。武士の屋敷とは名ばかりにて、殆ど空家かと思はれるほどに住み荒らしたる體。正面の床の間には一物もなく、壁の破れたのが見えるばかりといふ有樣。奥へ出入りの襖も無論に破れてゐる。他は推して知るべし。これでも下のかたには式臺附きの玄關あり。門は二本の丸太を立てたるばかりにて、左右には疎らなる竹垣が頽れかゝり、そこには卯の花が咲いてゐる。庭も荒れ果てて、上のかたには竹藪、ほかに樹木や雜草も繁つてゐる。家の外には田畑がつゞいて見ゆ。

（第一場と同じ日の宵。内には薄暗い行燈をともし、相馬半三郎は縁先で蚊いぶしを煽いでゐる。遠く題目太鼓

の浄。蛙の聲も聞ゆ。下の方より石澤寅之助は小倉の袴をはき、大小をさし、洗面用の古い巾を持つて出る。）

寅之助。（案内も無しに庭口へ通る。）やあ、蚊いぶしか。毎年のことだが、藪蚊には泣かされるな。

半三郎。今年は雨があつたので、取分けて早いやうです。

寅之助。（縁に腰をかける。）なにしろこゝらは寺と畑と竹藪に取りまかれてゐるのだから、蚊の棲家だか人間の棲家だか判つたものぢやあねえ。よくも先祖以來こんなところに住んでゐられたものだ。

半三郎。それでも先祖代々住み馴れた組屋敷だと思ふと、やつぱり離れる氣にはなれないものですね。

寅之助。離れたくないと云つても、どうで長くはゐられめえ。今度はちつと場所を撰んで、藪つ蚊や蛇の出ねえ村に住むことだ。

半三郎。長くはこゝにゐられますまいか。

寅之助。朝臣にでもなつたら格別だが、さうでなけりや遲かれ早かれ追つ拂ひを食ふだらう。安政の地震よりもどえらい大地震がゆり出して、德川の大家臺が一堪りも無しにぶつ潰されてしまつたのだから、その庇の下に住んでゐたおれ達が路頭に迷ふのは當り前さ。

半三郎。殘念なことですね。

寅之助。今さら愚痴を云つても始まらねえ。おたがひに今までは、たとひ小身でも百俵といふ先祖代々の祿が附いてゐたから、貧乏ながらも顎の干上る苦勞はなかつたが、もうこれからは浪人でうかうかしちやあゐられねえ。

半三郎。こつちの組には朝臣になつた人もあるさうですね。

寅之助。あるさうだどころぢやあねえ。半分ぐらゐは朝臣になつたやうだ。朝臣になれば家屋敷は勿論、家祿も今まで通りに呉れるさうだから、おとなしく降參して朝臣になるのが悧口かも知れねえが、それもあんまり意氣地がねえ。（上の方

を指さす。)現に隣の山口も朝臣になつたと云ふぢやあねえか。

牛三郎。(苦々しげに。)さうですか。隣にゐながら些とも知りませんでした。

寅之助。流石に世間の手前もあるから、なるべく内所にしてゐるのだらう。と云つて、われ〲のやうに、脱走も出來ず、朝臣にもならず、唯いつまでも恭順で小さくなつてゐるのでは、差當り食ふことが出來めえぢやあねえか。そこで少し相談に來たのだが、今夜も兄きは留守かえ。

牛三郎。ゆふべから出たぎりで歸つて來ないので、わたしも内々案じてゐるのですが……。

寅之助。兄きには赤坂の師匠が附いてゐるから、この御時節に悠々と、長火鉢の前にでも脂下つてゐるのだらう。まことに天下泰平のことだ。かうなると情婦のひとりも拵へて置かねえ奴は惨めだな。(少しかんがへる。)それぢやあ今夜も歸るかどうだか判らねえ。おい、牛さん。兄きの名代に、おめへ少し手傳つてくれねえか。

牛三郎。どんなお手傳ひを致すのです。

寅之助。さう眞面目に聞かれると返事に困るが……。實はこれだこれだ。

(寅之助は覆面をみせ、刀の柄を叩いてみせる。)

牛三郎。(首をかしげる。)それがどうしたと云ふのです。

寅之助。兄きとは大違ひで、ふだんから野暮堅え男だから、かういふ時には早わかりがしねえで困るな。先づかういふ風にして……。(覆面をして、腕捲りをしてみせる。)金のありさうな町人の家へ押込むのだ。

牛三郎。え、町人の家へ押込む……。強盗に這入るのですか。

寅之助。人の家へ押込むにやあ限らねえ。途中でも金のありさうな奴をみつけたら、取つ捉まへて嚇しつけるのよ。

牛三郎。(驚きと怒りを取りまぜて。)飛んでもないことを……。

寅之助。なにが死んでもねえ。斬取り強盗は武士の習と云ふぢやねえか。

牛三郎。いゝえ、いゝえ、斬取り強盗などは武士にあるまじきことです。まして此の御時節に斯様な不埒を働きましては、恭順の御趣意に背くではありませんか。

寅之助。いや、この御時節だから斬取り強盗もしなけりやあならねえ。今もいふ通り、家代々の祿に離れては、おたがひに食ふことが出來ねえぢやあねえか。さあ、悪いことは云はねえから、おれと一緒に來てくれ。さすがに面をむき出しぢやあ拙いから、手拭か風呂敷でおれのやうに覆面をするのだ。

牛三郎。(腹立たしげに。) そんなことは出來ません。

寅之助。出來ねえことがあるものか。軍用金を出せとか何とか、後味の藻詞はおれが好いやうに列べ立てるから、おめへは唯默つてだんびらを引つこ拔いて、おどしに振りまはして見せればいゝのだ。

(牛三郎はだまつてゐる。)

寅之助。うまく行けば一と晩に五十兩や百兩はなんでもねえ。それで當分は樂に暮すのよ。こんな洒落れたことはねえぢやあねえか。

牛三郎。なんでもお前さん一人で勝手にお遣りなさい。そんな仲間入りは眞平御免です。

寅之助。どうしても忌かえ。

牛三郎。知れ切つたことです。

寅之助。(舌打ちして。) どうも話せねえ男だな。ちやあ、又出直して來るとしようか。

(寅之助は下の方へ立去る。牛三郎は返事もせずに顔をそむけてゐたるが、やがて起つてあとを見送る。)

牛三郎。ほんたうに呆れた男だな。いくら兄さんだつて、まさかにそんな仲間入りはしないだらう。

（牛三郎は再び蚊いぶしを燻ぐ。蛙の聲、遠目太鼓の音、さびしく聞ゆ。向うより相馬金次郎は貧乏徳利をさげて足早に出づ。）

金次郎。（空をみる。）なんだかぼろついて來やあがつた。今年はどうも雨が多いな。

（云ひながら金次郎は内に入る。）

牛三郎。お歸りなさいまし。

金次郎。また蚊いぶしか。日が暮れると、毎晩それが一と仕事だつたが、もうこれで年明きだらう。

牛三郎。そこらで石澤さんに逢ひませんでしたか。

金次郎。いや、逢はなかつた。あいつにも四五日逢はねえが、どうしてゐるかな。

牛三郎。（兄の顏を見て。）おや、兄さんは顏をどうなすつた。

金次郎。（顏をおさへる。）錦切れの奴等がなぐりやがつた。

牛三郎。喧嘩でもなすつたのですか。

金次郎。喧嘩といふほどでもねえ、ちよいと戯つて遣つたのよ。おい、茶碗を持つて來てくれ。

牛三郎。はい、はい。

（牛三郎は奥に入りて、茶碗を盆に乗せて來る。）

金次郎。（手酌で一杯飲む。）そこで、牛三郎。今夜のうちに仕度をして、おれと一緒に行け。

牛三郎。え。では、あなたも石澤さんと同じやうに……。

金次郎。石澤がどうした。

牛三郎。兄さん。それぱかりはわたくしが堅く御意見申します。家代々の祿に離れて、たとひ浪々いたしましても…

…。

金次郎。なんだ、なんだ。なにを判らねえことを云やがるのだ。

半三郎。いゝえ、判らないことはありません。斬取り强盗は武士の習などとは飛んでもないことです。

金次郎。えゝ、おれの云ふことをよくも聞かねえで、何を云つてゐやあがるのだ。おれがいつ斬取り强盗をすると云つた。おれの云ふのはそんなことぢやねえ。おまへと一緒に上野へ行くのだ。

半三郎。上野へ……。(意外らしく兄の顔をみつめる。)あの彰義隊へ這入るのでございますか。

金次郎。さうだ。さうだ。

半三郎。兄さんはほんとうに上野へお出でになりますか。

金次郎。本當よ。なぜ不思議さうにおれの面をながめてゐるのだ。おれは醉つて云ふのぢやねえ、本氣で云つてゐるのだよ。

(金次郎は重ねて飲む。半三郎はかんがへてゐる。)

金次郎。上野へ行くのは忌かよ。

半三郎。いえ、行きたいのは山々ですが……。

金次郎。それだから一緒に行けといふのだ。

半三郎。さあ。(まだ考へてゐる。)

金次郎。(あざ笑ふ。)　命が惜しいか。

半三郎。(屹となつて)いえ、命が惜いなどとは思ひません。併し公方様は飽までも恭順の思召で、家來一統にも恭順を守るやうにと堅く申渡されて居ります。この場合みだりに立騷ぐものは、主人のからだに刃をあてるも同様だとも仰せられ

ました。

金次郎。(又飲む。) それがどうした。

牛三郎。われ〳〵家來の分として、善惡ともに御主君の仰せを守らなければなりません。御主君が戰へとおつしやれば、何時でも戰ひます。上野に栖籠れとおつしやれば、何時でも參ります。しかし御主君が恭順せよと仰せ出されてゐる場合に、われ〳〵が勝手に徒黨を組んで、上野のお山に栖籠るなどとは、甚だおだやかならぬ事と存じられます。兄さんは誰に誘はれて、俄に彰義隊へ這入ることになさいました。

金次郎。だれに誘はれたわけでもねえ、自分ひとりで思ひ立つたのだ。おまへは二言目には御主君御主君といふが、その御主君はどこにゐるのだよ。

牛三郎。あらためて申すまでもなく、一旦は上野の大樹院に御逼息あそばされましたが、當月十一日、更に水戸へ御立退きに相成りました。

金次郎。それ見ろ。おれたちの主人といふ公方樣は家來どもを置去りにして、自分ひとりで逃げて行つてしまつたぢやあねえか。そんな主人にいつまでも忠義立てをするのは馬鹿の骨頂だ。天下茶屋の芝居ぢやねえが、もう斯うなりや主でねえ、家來でねえ、一本立の安達元右衛門樣だ。恭順を守らうが守るめえが俺達の勝手次第で、だれの指圖を受けることもねえ筈だ。

牛三郎。でも、兄さん……。

金次郎。え、だまつて聞け。おれがこれから上野へ駈け込まうといふのは、主人の爲でもねえ、忠義のためでもねえ、この金さんの腹の蟲が納まらねえからだ。田舎侍が錦切れを嵩にきて、大手をふつてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、わが物顏にのさばり返つてゐる。それぢやあ江戸つ子が納まらねえ、第一にこの金さんが納まらねえ。べらぼう

め、鉛切れが何だ。鉛切れが怖くつて、五月人形をひやかしに行かれるか。おれは去年[illegible]田の質屋へ行つて、鉈を質にして十両まき上げて来た一件から、役向きの方もたうとう不首尾になつて、まだ若えくせに隠居を申付けられ、弟のおまへが家督を相続することになつた。隠居といへば隠れた身分だから、引込んで小さくなつてゐればいゝやうなものだが、江戸つ子の面を泥草鞋で踏みにじられちやあ、隠居のおれでも我慢は出来ねえ、相馬の金さんはチヤキ〳〵の江戸つ子だぞ。

半三郎。では、御主君の仰せに背いても、あなたは上野へ行くと仰しやるのですか。

金次郎。まだわからねえか。おれ達にはもう御主君なんていふものはねえといふのに……。江戸つ子のおれたちが田舎者を相手に喧嘩をする、唯それだけのことよ。

半三郎。それでは却て御主君に不忠となりはしますまいか。

金次郎。いつまで同じことを云つてゐやあがるのだ。（じれて怒鳴る。）忌なら止せ。勝手にしやがれ。江戸つ子の面汚しめ。

（金次郎は手酌でぐい〳〵飲んでゐる。半三郎は又かんがへてゐる。薄く雨の音。向うより常磐津文字若は雨傘を半開きにして足早に出づ。）

文字若。（内に入る。）たうとう降り出しましたね。

（金次郎はだまつて飲んでゐる。）

文字若。あら、みんなだんまりでどうかしたんですかえ。

金次郎。だれだ、誰だ。（透し視る。）おゝ、師匠か。大層早かつたな。

文字若。だつて、なるたけ早く届けてくれと云ふから、大急ぎで駈け付けて来ましたのさ。貞女といふのはまあこんなも

のさね。（笑ひながら縁に上る。）半さん。今晩は……。

金次郎。そんな奴に口をきくなよ。まあ、息つぎに一杯のめ。（茶碗をさす。）

文字若。これで飲むのかえ。

金次郎。亭主のいふことを背くのが貞女だ。飲め飲め。

文字若。いくら貞女でも茶碗ぢやあ遣切れない。小さいお猪口はないのかえ。

金次郎。いくぢのねえ女だな。おい、半三郎。猪口を持つて來い。

（半三郎は無言で奥へ入る。）

文字若。おまへさん。兄弟喧嘩でもしたんぢやあないかえ。あんなおとなしい人をいぢめるのはお止しなさいよ。

金次郎。あんな馬鹿野郎を相手に、喧嘩をする張合もねえや。（奥に向ひて。）やい、やい、早く持つて來い。何をぐづぐづしてゐやあがるのだ。

文字若。およしなさいよ。可哀さうぢやありませんか。（金次郎の額をみて。）おまへさん、額の傷はもう好いんですかえ。

金次郎。なに、もう何でもねえ。（額をなでる。）飛んだ仁木彈正だ。

（奥より半三郎は猪口を持つて出で、文字若の前に置く。）

文字若。どうも憚りさま。

金次郎。そこで早速だが、金の工面は出來たか。

文字若。御時節柄だから、どこでもなかなか無理をきいてくれないのさ。やうやうのことで二兩と一分、それでまあ我慢しておくんなさいよ。

金次郎。いや、大出來、大出來。それだけありあ大願成就だ。

よ。

文字若。それにしても、このお金を一體どうするのさ。この入り道を聞かないうちは、うつかり渡すことは出來ませんよ。

金次郎。こりや聞かねえでも話さなけりやあならねえ。さあ、注いでやるよ。

（文字若は猪口を取れば、金次郎は酌をしてやる。鐘の聲。）

金次郎。これが別れの杯だ。ぐつと飲んでくれ。

文字若。別れのさかづき……。（笑ひ出す。）あたしは手切れのお金を持つて來たんぢやありませんよ。

金次郎。いや、冗談ぢやあねえ。本當にわかれの杯だと思つてくれ。おれは今夜のうちに仕度をして、上野の彰義隊へ這入るのだ。

文字若。（びつくりして。）お前さん、本氣で云ふのかえ。

金次郎。むゝ、本氣だ、本氣だ。こんな自墮落な人間でも、相馬の金さんは江戸つ子だ。いつまで小さくなつて恭順してゐられるわけのものぢやあねえ。

文字若。彰義隊なんぞへ這入つて勝てるかしら。

金次郎。勝つか負けるか判らねえが、先づ十に九つはむづかしいな。

文字若。そんな危ないところへ飛び込むことは無いぢやありませんか。誰から御褒美をくれるわけでも無し、負ければ死に損、こんな詰らないことはないと思つてゐるのに、お前さんもその仲間入りをする氣かえ。

金次郎。そりやあお前のいふ通り、いくら働いたところで誰から褒美をくれると云ふわけでも無し、負ければ死に損、こんな割に合はねえ話はねえ。それは萬々わかつてゐるが、おれの性分でもう我慢が出來ねえから、今さら未練らしく止めてくれるな。おめへに都合して貰つた二兩一分の金で、質でも受け出して身拵へをして、上野の山へ楯籠るのだ。

文字若。半さんも一緒ですかえ。

(金次郎はだまつてゐる。)

文字若。(向き直る。) もし、半さん。おまへさんも一緒に行くんでせうね。

(半三郎もだまつて考へてゐる。)

文字若。ぢやあ、おまへさんは行かないんですかえ。ねえ、半さん。はつきりと返事をして下さいよ。兄さんと違つて、お前さんは不斷から講武所で勉强して、劍術が大變によく出來ると云ふのに、そのお前さんが小さくなつてゐて、兄さんが彰義隊へ行くんぢやあ、まるであべこべぢやありませんか。

半三郎。(顏を上げる。) まつたくあべこべかも知れません。ふだんは武士の道を說いて、兄の放蕩を意見してゐたわたしが、この場合に引込んでゐて、兄が彰義隊の仲間入りをする……。どつちが好いのか、惡いのか、わたくしにも判らなくなつて來ました。

金次郎。おい、師匠。そんな奴にはかまはねえで、早く金を渡してくれ。このなりぢやあ軍は出來ねえ。第一に幅が利かねえから、すぐに質屋へかけ付けて、色々の物をうけ出して來るのだ。昔ならば忍びの緖を切つて、兜に名香を焚かうといふ所だ。

文字若。どうしてもお前さんは行くのかえ。

金次郎。だれが何と云つても、もういけねえ。さあ、早く金をくれと云ふのに……。

文字若。(仕方なしに金を出す。) かうと知つたら、お金の工面なんぞして來るんぢやあなかつたねえ。

金次郎。(紙につゝみし金をあけて見る。) むゝ、二兩と一分……。ありがてえ、ありがてえ。これで金さんの死花が咲くといふものだ。

文字若。あゝ、こんな貞女にやあなりたくないねえ。（にっこりとする。）

金次郎。お前、泣くのか。

文字若。涙も出るぢやありませんか。（眼をふいて。）ぢやあ、もう、あたしも覺悟しましたから、一生のお別れに、思ひ切つて大きいもので飲ませて下さいよ。

金次郎。ぢやあ、これを進らう。（茶碗を出す。）

文字若。ちよつと待つて……。

（文字若は起つて、行燈をそばへ持ち來り、かんざしで燈心をかき立てる。）

文字若。おまへさん、よく顏をみせて下さいよ。

金次郎。えゝ、芝居のやうなことを云ふなよ。飛んだ二の切だ。

（金次郎は茶碗を文字若にわたして、酌をしてやる。遠く雨の音、蛙の聲。文字若は飲み終りて金次郎に茶碗を戻し、酌をしてやる。）

金次郎。（酒をのみながら。）おつかあを大事にしろよ。

文字若。おまへさんが彰義隊へ這入るなんて、まるで夢のやうな話だから、阿母さんもさぞびつくりするだらうねえ。

金次郎。（茶碗を下に置いて。）さあ、夜の更けねえうちに、早く質屋を叩き起して來なけりやあならねえ。（起ちあがる。）

半三郎。（俄に進み出る。）兄さん。わたしも一緒にお連れ下さい。

金次郎。おれは質屋へ行くのだよ。

半三郎。その質屋へ一緒にまゐつて、わたしの物も少し受出して頂きたいのです。

金次郎。この野郎、蟲の好いことをいふな。貴様の物なんぞを受けて遣るやうな金ぢやあねえ。

半三郎。いえ。貴屋ばかりではありません。上野へも一緒にまゐります。

文字若。おまへさんも彰義隊へ這入るのかえ。

半三郎。もう斯うなつたら理屈を云つてはゐられません。わたしも兄さんに附いて行つて、死ぬときには一緒に死にます。

金次郎。む〻。判つた、わかつた、(文字若をみかへりて笑ふ。)おい、師匠。這奴もやつぱり江戸つ子だ。

文字若。ほんたうに頼もしいねえ。(半三郎のそばに摺りよる。)おまへさん、なるたけ兄さんのそばに附いてゐて、世話をして遣つてくださいよ。

半三郎。それは確に引受けました。

金次郎。ぢやあ、行かう。(縁を降りかゝる。)

文字若。(縁に出て空をみる。)まだ少し降つてゐるやうだ。そこにあたしの傘がありますよ。

金次郎。これほどのことはあるめえ。

文字若。まあ、持つておいでなさいよ。(傘を把つて渡す。)

(金次郎は傘をうけ取り、半三郎もそのあとに附いて出ようとする時、下のかたより石澤寅之助再び出づ)

寅之助。(出逢ひがしらに。)おい。兄弟揃つてどこへ行く。

金次郎。やあ、い〻所へ來た。(寅之助の腕をつかむ。)おい、おれ達と一緒に行かねえか。

寅之助。どこへ行くのだ。

金次郎。これから仕度をして、上野へ駈け込むのよ」

寅之助、上野へ駈け込む……。

金次郎。彰義隊よ。

寅之助。（意外らしく。）むゝ、彰義隊か。そいつは少し考へなけりやあならねえ。

金次郎。おれの歸るまでに考へて置いてくれ。

（金次郎はつかみし手を放し、傘をさして下のかたへ行きかゝる。寅之助は不思議さうにあとを見送る。文字若も縁に立つて見送る。雨の音、蛙の聲。）

——幕——

第三幕

（一）

おなじく五月十五日の朝。

赤坂、新町。常磐津文字若の家。正面の上のかたに緣喜棚、その下は地袋。まん中には奥へ出入りの設戸二枚。つゞいて茶箪笥、それに三味線がかけてあり。上のかたは竹窓、下の方は格子戸にて御神燈がかけてあり。表は町家つゞきにて、隣の家の横手がみえる。雨の音きこゆ。

（内には文字若の母おとくが稽古の娘およしと、稽古用の本箱を挾んで向ひ合つてゐる。おとくは三味線を前に置き、およしは彈き語りにて小夜衣千太郎の道行を唄つてゐる。）

およし。（唄ふ。）——濕るゝ裳(もすそ)の露ならで、こゝろ置く身は雨空に、みだれて渡る雁さへも、もし追手かと驚かれ、ふるふ足もと音を忍ぶ、秋の蛙の聲かれて、山川の水のあさき縁、死ぬる覺悟も頼ゆゑに、あゆみ兼ねてぞ立ちやすらひ——

(この淨瑠璃のうちに、下のかたより文字若は湯歸りの體にて、手拭や糠袋などを持ち、傘をさして足早に出づ。)

文字若。(あわたゞしく内に入る。)阿母さん、大變だよ。

おとく。なんだねえ、さう／＼しい。おまへの留守におよつちやんが來たから、小夜衣千太郎を浚はせてゐるんだよ。

文字若。小夜衣千太郎どころぢやない。阿母さん、お聽きよ。上野でいよ／＼軍が始まるとさ。

おとく。上野で……。いよ／＼軍が始まるのかえ。

文字若。官軍の方ぢやあ夜の明けないうちから繰り出して、下谷と本郷から攻めるんだとさ。酒屋の松さんが見て來たといふので、そこらでもみんなが騷いでゐるのよ。

おとく。成程そりやあ大變だ。それぢやあお稽古どころぢやない。およつちやんも早くお歸りなさいよ。

およし。ぢやあ、御めんなさい。左様なら。

(およしは三味線を片附けて、早々に歸つてゆく。)

おとく。(表をみる。)上野あたりの軍なら、まさかにこゝらが何うなると云ふこともあるまいけれど、さあと云つちやあ間に合はないから、今のうちに些と荷ごしらへでもして置かうかねえ。

(文字若はだまつて考へてゐる。おとくは引返して文字若のそばに來る。)

おとく。(小聲で。)ねえ、お前。金さんが彰義隊に這入つてゐるなんて云ふことを、誰にも話しやあしまいね。

文字若。そんなことを誰にいふものかね。

おとく。若しもそれが官軍の耳にでも這入ると、あたし達もどんな係り合ひになるかも知れないから、内所にして置かないといけないよ。

文字若。おつかさん。濟まないけれど、清涼湯を煎じて頂戴な。(額をおさへる。)

おとく。また頭痛がするのかえ。そんなときに朝湯に這入らなければいゝのにさ。今すぐに煎じてあげるよ。

(おとくは奥に入る。文字者は額をおさへて俯向いてゐる。雨の音。小銃の音遠く聞ゆ。)

文字若。(額をあげる。)あ、始まつたよ。

(文字若は俄に起つて門口に出る。小銃の音。下のかたより近所の若い者三人。あるひは菅笠をかぶり、或は頭から桐油をかぶり、跣足又は草鞋ばきにて走り出で、向うへ行きかゝる。)

文字若。(呼ぶ。)ちよいと、鐵砲の音がきこえるやうですねえ。

若者甲。むゝ、戰爭だ、戰爭だ。

若者乙。どうせ上野までは行かれまいが、行かれるところまで行つてみる積りさ。

文字若。一緒に連れて行つてくれないかねえ。

若者丙。冗談云つちやあいけねえ。女なんぞにうつかり行かれるものか。

若者甲。おまけにこんなに雨が降るぢやあねえか。歸つて來て話して聞かせるよ。

若者乙。さあ、行かう、行かう。

(三人は向うへ走り去る。雨の音いよ〳〵強くなる。)

文字若。(空をみる。)あゝ、あひにくに雨が強くなつて來たねえ。

(向うより石澤寅之助は町人の姿、頬かむり、尻端折り、はだしにて、番傘をさして駈け出で、あとを見かへりながら格子の前に來る。)

寅之助。師匠。よく降るな。

文字若。おゝ、石澤さんですか。

(寅之助は頬かむりを取り、からだや足を拭きながら内に入る。文字若も引返して入る。)

文字若。いくさが始まつたさうですね。

寅之助。到頭ぽん／＼撃ち出したやうだ。(表をみかへる。)おい、師匠。ちよつと奥を貸してくれ。誰が來ても、おれはゐないと云ふのだぜ、いゝかえ。

(云ひすてゝ寅之助は早々に奥に入る。文字若は不安らしく見送る。雨の音、小銃の音。向うより市中見廻りの兵士二人出で、あたりを見まはしながら格子をあける。)

兵士甲。これ、これ。

文字若。はい、はい。(出る。)

兵士甲。今この家へ町人風の男が入り込みはしなかつたか。

文字若。いゝえ。

兵士乙。本當に來なかつたか。

文字若。だれも参りません。

兵士甲。(御神燈をみて。)おまへは遊藝の師匠か。

文字若。はい。常磐津の師匠をいたして居ります。

兵士乙。(甲と顔をみあはせる。)それではほかを探してみようか。

(兵士二人はそのまゝ下のかたへ立去る。文字若は門口から見送る。奥より寅之助は文字若の着物を羽織りて窺ひ出づ。)

寅之助。師匠、これだ。（片手で拜む眞似をする。）助かつた、助かつた。

文字若。あなた、どうしたんですよ。

寅之助。此頃のどさくさ紛れに、ちつと荒つぽい仕事を遣つたので、市中見まはりの奴等に眼を附けられて、油斷をしちやあゐられなくなつた。

文字若。ちやあ、何か惡いことでもしたんですかえ。

寅之助。むゝ。あんまり好い事もしなかつたのよ。町人の店を四五軒あらして、往來の奴を五六人おどかしたが、一昨日の晩は新町（しんまち）の酒屋へ這入つて、亭主と番頭を斬つたので、それから詮議が急にきびしくなつて來たらしい。もう斯うなつちやあ仕方がねえ、いつそ上野へでも駈け込まうかと思つてゐると、到頭いくさが始まつてしまつた。

文字若。ねえ、石澤さん。金さんの兄弟は今頃どうしてゐるでせうねえ。

寅之助。まさかに逃げも隱れもしめえ。今ごろは一生懸命に働いてゐるだらうよ。

文字若。さうでせうねえ。（又起つて表をみる。）金さんは劍術は出來ないんでせう。

寅之助。そりやあ侍のことだから、刀の持ち樣ぐらゐは知つてゐるが、あの通りの人間だから勿論上手の方ぢやあねえ。

文字若。劍術なんぞは下手でも構はない、おれは江戸つ子の魂で鬪ふのだと云つてゐましたが、いくら江戸つ子でも劍術が下手ぢやあ駄目でせうねえ。

寅之助。この節の戰ひは鐵砲といふものもあるから、劍術の出來るばかりが能でもねえが……。その鐵砲の打ち方もよくは知るめえな。

文字若。あなたは劍術が出來るんでせう。

寅之助。おれも出來る方ぢやあねえ。まあ金公に些と優しぐらゐのところだ。

文字若。ちつとぐらゐ優しでも、かういふ時には大變に力になるでせう。(考へながら寅之助のそばに戻る。)ねえ、石澤さん。あなた、後生ですからあたしを連れて行つてくださいな。

寅之助。連れて行つてくれ。(文字若の顔をちつと見る。)よもや上野へ行く積りぢやあるめえな。

文字若。いゝえ、上野へ行くんですよ。さつきから見物に行く人があるぢやありませんか。

寅之助。物ずきの奴は出かけるやうだが、男は格別、女の行かれる場所ぢやあねえ。芝居の立廻りとは譯が違つて、眞劍勝負の斬合ひだ。おまけに鐵砲は飛んで來る。どんな傍杖を食はねえとも限らねえ。

文字若。そりやあ、あたしだつて知つてゐますけれど、なんだか行つて見たくつてならないんですよ。

寅之助。そんなにも行つて見てえか。情があるな。

文字若。情の有る無しは別として、どうもちつとしてゐられないやうな氣がするんですよ。

寅之助。行つたところで、逢へやあしめえぜ。

文字若。大かた逢へないだらうとは思つてゐますけれど、なんだか其近所まで行つてみたいんですよ。

寅之助。おれも體の置き場に困つちやあゐるが……。(かんがへる。)軍をみかけて飛び込むのは、ちつと氣がねえな。

文字若。あなたは男のくせに弱いのねえ。

(奥よりおとくは藥茶碗を盆にのせて出づ。)

おとく。さあ、お藥が出來たよ。

文字若。どうも有難う。(茶碗をうけ取りて飲む。)

おとく。(寅之助に。)どうもおさう／＼しいことでございますね。

(寅之助はだまつて考へてゐる。小銃の音又きこゆ。)

おとく。（門口に出る。）鐵砲の音がだん〳〵烈しくなるやうですね。こゝらは大丈夫でせうか。

寅之助。こゝらは大丈夫だらうが……。（これも起つて表をのぞく。）おゝ降る、降る。雨のふる方が彰義隊には都合がよからう。この軍が夜まで續くと、面白いことになるかも知れねえな。

おとく。どうして面白くなるのでございます。

寅之助。暗くなればどんな彌次馬が飛び出さねえとも限らねえ。さうなると、寄手もちつと難儀だらう。

おとく。さうでせうかねえ。

寅之助。（俄に下のかたを見る。）あ、又來やあがつた。おい、おつかあ。おれのゐる事をしやべつちやあいけねえぜ。

（寅之助は再び奥に隠れる。おとくはきよと〳〵してゐる。下のかたより以前の兵士二人が先に立ち、あとより更に二人附添ひて出づ。）

兵士甲。どうもこゝらへ逃げ込んだらしいが……。

兵士乙。もう一度、こゝの家を詮議してみようか。

兵士甲。遊藝の師匠のうちに隠れてゐることもあるまい。はて、どこへ行つたかな。

（四人はあたりを見まはしながら向うへ立去る。おとくと文字若は内より覗つてゐる。）

おとく。ねえ、あの人たちは石澤さんを探してゐるんぢやあないかね。

文字若。あれ、靜かにおしなさいよ。

（奥より寅之助は葭戸をほそ目にあけて覗ふ。）

文字若。（小聲で。）もう大丈夫ですよ。（あつちへ行つてしまつたと手眞似で知らせる。）

寅之助。（出る。）これぢやいよ〳〵油斷は出來ねえ。おれも逃げ道を考へなければならねえな。

寅之助は不安らしく表をのぞく。雨の音にまじりて小銃の音いよ〱烈しく聞ゆ。これにて幕をおろし、すぐに再び幕をあげる。）

（二）

おなじ日の午後。雨降りしきる。

根岸、御行の松のほとり。上のかたに不動堂、それにつゞいて御行の松の大樹、その幹には注連を張る。上のかたには上野の森近く、青葉がくれに火の手があがりて見ゆ。

（上野の僧二人と小坊主一人、あるひは荷物を抱へ、或は經卷を抱へて、素足に草鞋をはき、笠をかぶりて出づ。）

僧一。どう辛抱しようにも、あの火の粉ではとても堪らぬ。

僧二。吉祥閣が焼かれたので、それからそれへと火になつてしまつた。

小坊主。これからどこへ行くのでございます。

僧一。どこへ行くといふ的もないが、兎もかくも北の方角へ立退くとしやう。

僧二。われ〱は出家ぢや。誰に逢つても咎められることはあるまい。

僧一。（空を見る。）あひにくに強く降ることぢやなあ。

（三人は急いで下のかたへ立去る。雨の音、小銃の音。上のかたより相馬半三郎はうしろ鉢卷、筒袖に撃劍の胴をつけて陣羽織をかさね、小袴、脚袢、草鞋にて、錦切れの兵士二人と拔刀にて鬪ひながら出づ。半三郎は奮鬪し、兵士等は下のかたへ引いてゆくを、半三郎は追つてゆく。上のかたより相馬金次郎は手負の體にて散らし髮、麻のかたびらに小袴、脚袢、草鞋にて大小をさし、櫻の枝を杖にして出づ。小銃の音つゞけて聞ゆ。金次郎は杖に縋りて

あゆみ來り、半三郎のあとを見送りながら、不動堂の前に來てたゝずむ。下のかたより半三郎は引返して出る。）

半三郎。兄さん、歩かれませんか。

金次郎。どうも意氣地がねえ。

（半三郎は金次郎を介抱して、堂の緣に腰をかけさせる。）

金次郎。半三郎。おれはもういけねえよ。

半三郎。氣の弱いことを云つてはいけません。大丈夫です、大丈夫です。

金次郎。氣休めをいふな。なにしろ肩と股とへ二發も彈を食らつたのだから遣り切れねえ。

半三郎。なに、一發や二發の彈に擊たれても、急所さへ除けてゐれば大丈夫です。氣を落してはいけません。わたしが手を引いても負つてもお連れ申します。

金次郎。今の奴等はどうした。

半三郎。ひとりは斬り倒しましたが、一人は逃がしてしまひました。

金次郎。相手は二人、お前はひとり、加勢をして遣らうにも、おれはこの通りだ。どうなることかと案じてゐたら、ひとりを斬り倒して、ひとりを追拂つてしまつたか。おまへはやつぱり强いな。彰義隊もおまへのやうな人間ばかりだつたら、もう少し持ち堪えたかも知れねえ。

半三郎。なにしろ敵は大勢ですから、殘念ながら何うにもなりません。せめて夜まで持ち堪へられたら、加勢が出て來るかも知れなかつたのですが……。（上のかたを見る。）兄さん、あの通り燃えてゐます。

金次郎。敵の奴め、むやみに大砲なんぞを擊ちやあがつて、卑怯な奴等だ。

半三郎。火の粉と烟をかぶらなければ、もう少し防げたのですが……。まつたく殘念です。

金次郎。ほんたうだ。手前たちの方が大勢の上に、燒蟹のやうな目に逢はせやあがる。(罵る。)それで勝つたつて何の手柄になるものか。馬鹿野郎め。

半三郎。併しこんな所にぐづ／＼してはゐられません。早く行きませう。

金次郎。こゝはどこだ。

半三郎。こゝは根岸……。御行の松です。

金次郎。なるほど御行の松か。(松をみる。)眼が眩んでゐるとみえて、どこだか見當が付かなかつた。(考へる。)それぢやあ丁度いゝ。おれはこゝで腹を切るから、おまへは早く逃げてしまへ。

半三郎。腹を切る……。それは飛んでもないことです。逃げられるだけ一緒に逃げませう。上野が負けても、力を落すことはありません。越後から出羽奥州はみんな徳川方ですから、そこらまで落ちて行つてもう一度戰ひませう。

金次郎。それだからお前は早く落ちろといふのだ。(苦しい息をつく。)おれはもういけねえ。この松の下で腹を切るから介錯してくれ。

半三郎。そんな弱いことではいけません。さあ、行きませう。おいでなさい、

(半三郎は介抱して連れて行かうとするを、金次郎は拂ひ退ける。)

金次郎。いや、いけねえ。權現樣は逃げるが勝だと教へたさうだが、逃げられねえものを逃げたつて仕樣がねえ。江戸つ子は思切りが肝腎だ。おれはもう歩かれねえ、逃げられねえ、さあ、ここですつぱりと遣つてくれ。

(金次郎は大小を取りて傍に置き、肌をくつろげると胸から腹へかけて經文をまいてゐる。)

半三郎。(困つて。)もし、兄さん。死ぬのはいつでも死なれますから、もう少し我慢して行つてください。

金次郎。いやだ、いやだ。ぐづ／＼してゐて敵にでも生捕られてみろ。どんな目に逢ふか判るものか。

半三郎。いえ、わたしが附いてゐるから大丈夫です。

金次郎。いくらお前が附いても、敵が大勢なら仕様があるめえ。これ、半三郎。今さら未練らしいことを云はねえで、素直におれのいふことを肯け。(脇指に手をかける。)

半三郎。まあ、兄さん……。(脇指に取付く。)

金次郎。この野郎。強情に邪魔をすると承知しねえぞ。(無理に半三郎を突き放し、樫の枝をふりあげて無暗に打つ。)もう遣切りれねえといふのに、判らねえか。いつまでおれを苦ませて置くのだ。

半三郎。(決心して枝にすがる。)では、もう仕方がありません。こゝで立派に切腹をなさいまし。わたしが御介錯をいたします。

金次郎。さうか。(うなづきながら縁にぐつたりとなるを、半三郎は介抱する。)なあ、半三郎。おれも御行の松の下で腹を切りやあ立派なものだ。

半三郎。(涙ぐんで。)左様でございます。

金次郎。(肌をくつろげる。)みんなの真似をして、そこらにあるお經をまき付けて來たが、かういふ時の役に立つた。これを取つてくれ。

(半三郎は手傳ひて、金次郎の腹にまき付けたる經文をほどく。雨の音、小銃の音。向うより石澤寅之助は米俵をかぶり、文字若は赤合羽をきて手拭をかぶり、竹の子笠をかざして走り出づ。)

寅之助。もうこゝらより先へは行かれさうもねえ。山はあの通り燃えてゐるぜ。

文字若。もう行かれませんかねえ。

(二人はうろ／＼しながら上のかたへ行きかかりて、文字若は不圖みかへる。)

文字若。あら、金さんが……。金さん、金さん。

寅之助。やあ、居た、居た。

（二人はよろこんで駈けよる。）

金次郎。おゝ、師匠と石澤……。どうして來たのだ。

文字若。あんまり心配だから、いくさの様子を見に來たんですよ。

半三郎。よくこゝらまで來られましたね。

寅之助。半分は夢中で、どこをどう廻つて來たか自分にもわからねえが、なにしろこゝでめぐり合つたのは有難てえ。師匠、折角出て來た甲斐があつたぜ。

文字若。ほんとうに無事でようござんしたねえ。

金次郎。なに、無事なものか。おれはもう定九郎だ。

文字若。定九郎……。

金次郎。二つ玉を食らつて半死半生だよ。

半三郎。兄はもう歩かれないから、どうしてもここで腹を切るといふのです。

文字若。腹を切る……。まあ、どうしたらよからうね。

寅之助。むゝ。（顔をしかめながら訊く。）もういけねえか。

金次郎。いけねえ、いけねえ。神田の質屋を嚇かした時とは譯が違つて、今度こそは本當に切腹だ。

寅之助。どうしても切腹か。（半三郎に。）おめへは死ぬのぢやあるめえな。

半三郎。わたしは兄の死體を片附けて、これから會津か越後へ脫走する積りです、

寅之助。おれも江戸にゃあゐられねえ體になつてしまつたから、これぢゃお前と一緒に行かうか。
金次郎。みんな行け、行け。信濃でも越後でも構はねえ。どこへでも行つて、おれの代りに威勢よく遣つてくれ。
文字若。おまへさんも一緒に行けばいいぢゃありませんか。
金次郎。それが行かれねえのだから、仕方がねえ。試合に負けた奴ぢゃあるめえし、いつまでじたばたしてゐられるものか。相馬の金さんはもうこれでおさらばだ。（脇指をぬいて經文をまきつける。）おい、師匠。今までのよしみだ。今年の新盆にはお迎ひ火を焚いてくれ。
文字若。情ないことになつたねえ。（泣く。）
半三郎。石澤さん。兄はわたしに介錯しろといふのですが、丁度あなたがお出になりましたから……。
寅之助。おれに介錯をしろといふのか。（少し躊躇して。）まあ、仕方がねえ。これも友達の役だ。（金次郎の刀を取る。）
金次郎。おめへが介錯してくれるか。おれは腹の切り様が下手だらうから、そつちで手際好くぽんと遣つてくれ。
寅之助。手際好くは些つとむづかしいが、まあ一世一代の積りで遣つてみようよ。
金次郎。おれも一世一代だ。しつかり頼むぜ。
（金次郎は脇指を腹に突き立てる。寅之助は刀をぬいてうしろへ廻る。半三郎と文字若は手をあはせる。雨の音、小銃の音。）

――幕――

婦人

女學生と活動寫眞の問題と

□キネマ熱にかゝつた女學生……立花高四郎
□餘裕・悦びのない生活……豊島與志雄
□婦人雜誌の墮落と孰れぞ……大島正徳
□驚く程のことでもないが……宮田修

■家庭生活と時間豫算…秋山
■牛乳に關する智識…下條
■東都名物料理種明し
■午睡はしたがよい…齋藤
■夜尿性に關する母の注意…高田

■夏の化粧と浴衣の趣味…ミスユタカ
■洋樂講座…野村光一
■女の手紙…小島政二郎
■不正牛乳問題と主婦の注文…小汀利得
■澤田正二郎論…仲木貞一

■男性の眼を惹く化粧美……十八名家

■潰崩社會の一樣相…千葉龜雄
■自由なき結婚…萩原朔太郎
■家庭の慘劇について…安部磯雄
■今月の問題…吉野作造
■議政壇上の異彩…古莊國雄

吾子の遊友達

□友達に就ての悲哀…藤森成吉
□自我人聯盟の原型…新居格
□童心の保護…大泉黒石
□わが家の仲間…柳原燁子
□同級生本位…福田正夫
□感情的な干渉…小川未明

八月

眞夏ユート

…石川欣一
…山本拙郎
…森律子
…鈴木文史郎
…大澤豊子
…人見絹枝

■長篇 夜曲ホ長調……久米正雄
■戯曲 蒲生氏郷の妻……島村民藏
■長篇 去年の雪今いづこ……佐藤春夫

◆定價七拾錢◆
中央公論（振替東京三十四番）

公論

號

ピアの
……奥むめお
……吉田謙吉
……藤間静枝
……早見君子

■短篇 白鳥……下村千秋
■長篇 愚人の唄……正宗白鳥

子供の暑中休暇利用法

□山も不可・海も不可……堀江歸一
□自由に遊ばせたい……巖谷小波
□子供達ばかりの避暑……岸邊福雄
□夏休は子供本位に……高安やす子
□農村見學……倉橋惣三
□子らの夏休み……平塚雷鳥
□自由放任主義……千葉龜雄

■支那妻妾異聞錄……長永義正
■樋口一葉私論……山田邦子

■花占ひの頁（質問歡迎）……河井醉茗

■納涼臺夜話
□奥様と猿……清見陸郎
□奇術考案業……長谷川伸
□外泊證明書……池谷信三郎

■（心臓問答）夏季衛生……堀内彌二郎
■記憶力鈍き兒の指導法……久保良英
■主婦の家庭權を高唱す……帆足理一郎
■黒い繪具……原阿佐緒

雷を怖がる話

□高山で逢つた雷……田山花袋
□蒲團被つて蚊帳の中……鰭崎英明
□かみなりの思出……水島爾保布
□豫感……北川千代
□二重蚊帳……生田葵

公論社 送料二錢

定價		
	定價	送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

每月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和二年七月十八日印刷
昭和二年八月一日發行　（禁轉載）

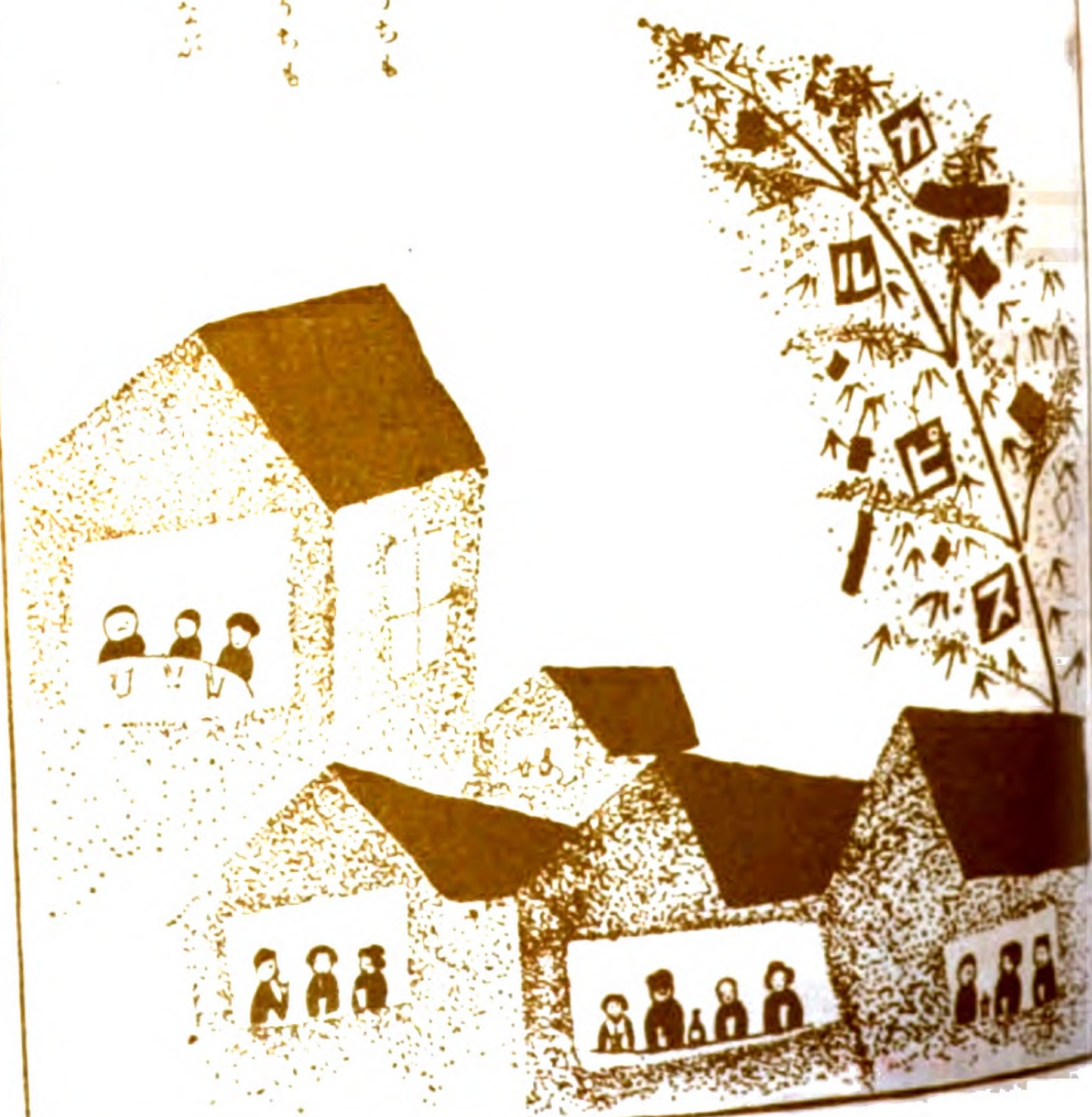
編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番

清涼美味滋強飲料

カルピス

七夕さまは
カルピス黨
わたしのおうちも
カルピス黨
花ちゃんおうちも
カルピス黨
そしてみんなが
幸福だ



GHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

